
薔薇のマリア
I.夢追い女王は永遠に眠れ
十文字青
Ao Jyumonji
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
角川スニーカー文庫


A BRAVE HEART OF
RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own
lives worth loving, protecting, and respecting.
薔薇のマリア
I.夢追い女王は永遠に眠れ


サンランド無統治王国首都エルデン
アンダーグラウンドD9
〝喪神街オレストロ〟
無色透明で非常に硬く、靴の踵で擦っても傷一つつかないこの階段は、何でできているのだろう。魔導王時代に流行したクライスト式建築特有の、壮麗だがどこか生物的でグロテスクな形状の手すりも材質は同じだ。
階段の幅は約十メーテルもあり、すでに五十段は下りてきた。これで半ばといったところか。長い階段だ。
ここには偽魂がいない。従って、偽魂が発する光もない。
それでも、十分な明るさが確保されているのは、手すりの中に何らかの光源が組みこまれているからだ。例の透きとおったものを幾重にも重ねた壁も同様で、ところどころに光が生まれては消え、消えては生まれる——



扉がひとりでに開きはじめた。奇妙な開き方だった。中央あたりから割れた扉が、左右の壁に少しずつ呑みこまれてゆく。かなりゆっくりした速度で、開くごとに扉の向こう側から洩れ出てくるものがあった。

音だ。

それは管弦楽器、打楽器による、鳥肌が立つほどに美しい旋律と和音と律動だった。

「……交響曲第六百十三番ハ短調、悲命、か」

トマトクンの独白は、音の洪水に半ばかき消された——

薔薇のマリア

Ⅰ．夢追い女王は永遠とわに眠れ

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE I

—Farewell, the Witch Queen—

by

Ao Jyumonji

First published 2004 in Japan

by

Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

A BRAVE HEART OF RED ROSE I

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE I

MAIN CHARACTERS



Yurika Snow-white
ユリカ

ZOO所属の医術士。



Katari
カタリ

ZOOのメンバー。



Mariarose
マリアローズ

主人公。《侵入者(クラッカー)》。



Pimpernel
ピンパーネル

ZOOのメンバー。



Safinia
サフィニア

ZOO所属の魔術士。



Tomatokun
トマトクン

クランZOOのリーダー。

and the others

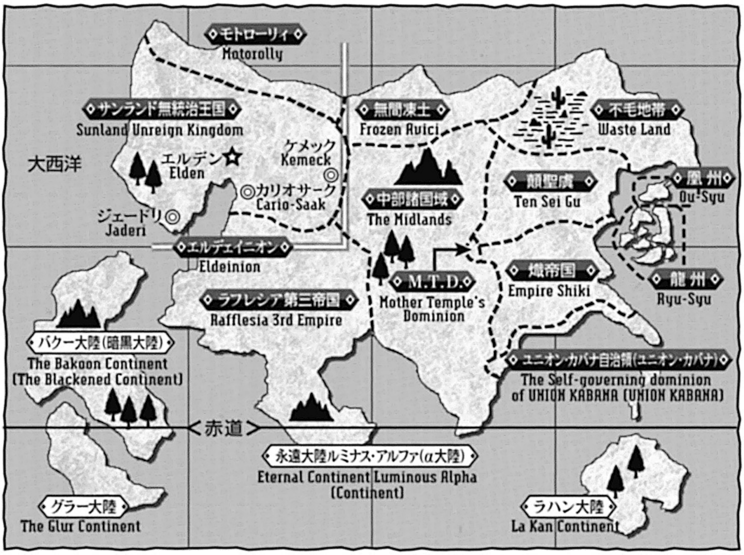
Molly Lips モリー・リップス

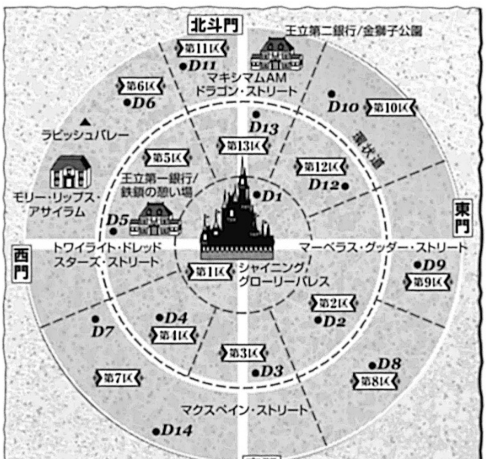
Korona コロナ

Lilly りりぃ

“Spectra Queen” Lady Ling Lay “死霊女王”レディ・麟霊

The World of "A BRAVE HEART OF RED ROSE"





Elden:the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作 On Graphics

illustration：*BUNBUN*
design work ：*design CREST*

Omenage 897 9th revolution 2nd day

サンランド無統治王国首都エルデン第九区
〝クァラナド歓楽街〟

chapter.1

薔薇と蛆虫と成敗と誤爆

降り注ぐ陽ひ射ざしに、色とりどりの毒々しい虚きよ飾しよくを剝はぎとられた夜の蝶ちようは無残だ。

サンランド無統治王国首都エルデン第九区──人呼んで、クァラナド歓楽街。

この街の隙すき間まを埋うめるように建ち並ぶ不ふ揃ぞろいな建物は、たいして手入れもされず、たいがい老ろう朽きゆう化している。路地裏で残飯を漁あさり、塵じん芥かいと垢あかにまみれて眠ねむる者どものさもしさといったらない。日が落ちれば、むせ返るような情欲と金と酒の匂においに満たされ、極ごく彩さい色しきのネオンと男女で溢あふれるすべての通りが、今はただ薄うす汚ぎたなく、狭せま苦くるしいだけだ。何もかもがみじめに見える。

男はとある建物の屋上からそんな街並みを眼下に見下ろし、一輪の真っ赤な薔薇を指先で弄もてあそんでいた。

地上約十五メーテル。

この程度の高さでは、地上の汚お濁じよくから自由にはなれない。這はい上がってきて、男の足をとらえ、引きずり下ろそうとする。国中から、いや、大陸中からこの街に集つどってきた人間どもが吐はき出し、堆たい積せきして、腐ふ敗はいした汚濁が。

在りし日の漂ひよう泊はくの詩人ドラガン・ペンブローケンが、こんなことを言ったという。

サンランド無統治王国は吹ふき溜だまりである。

クァラナド歓楽街はその中の掃はき溜めである。

美しい旅情詩と、斬ざん新しんでエロティックな叙じよ情じよう事詩を多く残したペンブローケンにしては月並みな表現だが、実際、永遠エターナル大陸コンチネントルミナス・アルファ──通つう称しようαアルフア大陸北西部の大半を領有するこのサンランド無統治王国には、法がない。秩ちつ序じよもない。盗ぬすむも、奪うばうも、殺すも、自由だ。しかし、盗む者、奪う者、殺す者はまた、盗まれる者、奪われる者、殺される者にいつ転じるかもしれない。

本来、民たみを保護し、その代価として薄っぺらな尊敬と絶大なる権力をえるはずの王は、サンランド建国を宣言して以来、まった

く方針を変えていない。

　すなわち、君臨すれども、統治せず。支配すれども、関知せず。

　キング・グッダー。

　円形都市首都エルデンの中心、シャイニング・グローリー・パレスの玉座に腰こしをうずめる、代々同じ名を持つ我らが王は、いったい何を思うのか。

　いずれにせよ、その昔、異界の扉とびらが無数に存在し、異界生物フリークスどもが跳ちよう梁りよう跋ばつ扈こしていたことから混沌とエルデ恐怖の巷エイニオンと呼ばれ、今もそう呼ばれつづけるこの土地は、犯罪者の巣そう窟くつだ。逃とう亡ぼう者の終着点でもある。性的倒とう錯さく者の楽園だともいう。道徳、倫りん理りの対岸に真理を求める魔ま術じゆつ士しの桃とう源げん郷きようであって、傷負い人を癒いやす医術士や、死者に蘇そ生せいという名の神の恵めぐみを与あたえる僧そう侶りよの最前線でもある。

　そして何より、α大陸中で最大量の金が動く場所だ。

　ありとあらゆる人間の欲を溶とかしあわせて、物体化させた金が。

　よく言われる。

　身分もなく、家いえ柄がらも、コネもなく、他ほかによるべきものもない、それでもまだ金が欲しいのなら、サンランドへ、エルデンへ行け。

　吹き溜まりの掃き溜めは、こうした中で生まれた。

　もっとも、実のところ、汚けがらわしいクァラナド歓楽街など、男の薄青い瞳ひとみには単なる背景としてしか映っていない。

「会うべきか、会わざるべきか……」

　それは何十回どころか、何百回と男が繰くり返してきた自問だ。

　答えはいつも同じだった。

　会わない方がいい。様々な事情を考こう慮りよすれば、結局、そ

の答えしか出てこない。わかっている。そんなことは、男自身が一番よくわかっていた。

　しかしながら、この薔薇を見よ。ふくよかでやわらかな赤い花弁。奇き跡せき的に生み出された神秘的な形状。美しい。だが、薔薇には刺とげがある。それでも、触ふれれば傷つくと承知していながらも、手を伸のばさずにはいられない。そう——

「それが、キミだ」

　男は薔薇の香かおりを胸一いつ杯ぱいに吸いこんだ。目がくらむほどに、甘い。何という甘さだろう。これは人を魅み了りようする、いや、魅み惑わくする魔ま性しようのかぐわしさだ。

　男は黒衣に包んだ体を自らの腕うでてかき抱いだいて、せつなげに目を伏ふせた。

「けれど……ああ、やはり……キミの前に姿を見せることはできない。何という運命だろうネ。こうして遠くからキミを眺ながめていることしかできない、まさかそんな日が来るなんて……」

　男が視線を落とした先に、建物の群れを縫ぬうように走る細い道があった。欲望の対象を買い漁る者と、それを売りさばく者とでごった返す夜と違ちがい、昼間は静かなものだ。時折、一部の二十四時間営業している酒場や売春宿から男女の嬌きよう声せいが洩もれ出ても、街をにぎわすほどではない。

　そのひとけの少ない道を、すっと背筋を伸ばし、真しん紅くの頭とう髪はつを揺ゆらして歩く者がいる。

　暗紅色ワインレッドと橙だいだいと黒を配したアンリミテッドＩＣＥのボディスーツを身にまとい、外がい套とうを着け、qVp の背負い袋ふくろを背にし、腰に細身の剣けんを吊つっている格好は、いわゆる侵入者クラツカーのものだ。

　だが、侵入者クラツカーといえば、ここエルデンの地下に広がるアンダーグラウンドへ分け入り、そこに巣くう異界生物フリークスどもから金目のものを強ごう奪だつする、かなり乱暴な仕事だ。紅玉ルヴイーを溶かして作ったような髪かみの持ち主は、軽装とはいえ装備こそ調ととのっているが、ずいぶん体つきが華きや奢しやで、そんな荒あら事ごとが似合うような容姿はしていない。

　ただ、一見、作り物めいてさえ見える繊せん細さいな骨格と肉付きや、芸術的な目鼻立ち、薄うす桃もも色いろのふっくらした唇くちびるの印象が、ある一つの要素のせいで一変していた。

　目だ。

　その嘘うそみたいにきれいなオレンジ色の瞳に宿る鮮せん烈れつで強い輝かがやきが、外見そのものが持つ鑑かん賞しよう物としての美を、躍やく動どうする生命の美に変えている。それでいて、どこか脆もろさやはかなさを内包しているように見え、あやういのだ。

　守りたい、と男は思う。

　守らなければ、と。

「しかし、キミのもとへ飛んでゆくための我が翼つばさはすでにもがれ、キミに届ける愛の歌をうたうべき喉のどは、我が胸の奥を焦こがす灼しやく熱ねつに焼かれた。ああ、何て──」

　男は絶句して頭を振ふり、まなじりに浮うかんだ涙なみだのひとかけらを指先ですくった。

　しばらくして、空を見上げ、笑えみを浮かべる。痛々しくも、会心の笑顔を。

　もし、今、男を見物する者がいれば、一人芝しば居いでも演じているのかと思うだろう。が、演技をしているつもりなど、男には毛頭ない。まあ、要するに、そういう性格なのだ。

「せめて、この花を捧ささげよう。キミの名にも冠かんされている花だヨ」

　男は優ゆう雅がな動作で一輪の真っ赤な薔薇を投げた。

「──花言葉は愛情、情熱、あるいは、熱烈な恋こい」

　放物線を描えがいて、薔薇が落下してゆく。

　ゆっくりと、だが、正確に。

　百万言を費ついやしても語りつくせぬ熱情をのせて、想おもい人

の足あし許もとへと――

　薔薇ばらが落ちた。

「……ん？」

　身をかがめて赤い薔薇を拾い上げた瞬しゅん間かん、ある不ふ吉きつな予測がマリアローズの脳のう裏りをよぎった。すぐさま頭上を振り仰あおいだが、建物の窓にも、屋上にも、人ひと影かげらしきものは見あたらない。

　薔薇。真っ赤な薔薇の花。こんなものをマリアローズの爪つま先さき三十サンチに狙ねらって投げつけてくる者がいるとしたら、心当たりは一人しかいないのだが。以前は事あるごとに現れて、うざったいことこの上なかったその男は、最近、とんと姿を見せない。

　むろん、いいことだ。

　そいつに何度か命を救われたことは事実だが、別に助けてくださいとマリアローズが頼たのんだわけではない。見返りに何かくれてやるなんて冗じよう談だんではない。

　しかも、あの馬ま糞ぐそ野や郎ろうが求めているのは、よりにもよって、マリアローズとの利害を超ちよう越えつした心情的精神的強固な結びつきというやつらしいのだ。

「そういう趣しゅ味みはないっての」

　ともあれ、この薔薇をどうしてくれよう。嫌いやなことを思い出させてくれたし、踏ふみ潰つぶしてしまいたくもあるが、花に罪はない。仕方ないから、背負い袋の脇わきに差してみた。べつだん深い意味はなく、どんな感じに見えるのかと、その場でくるりと一回転してみた。



　その場面を誰だれかに目もく撃げきされるなんて、思いもしなかった。

　迂う闊かつだった。

「花のオトメってか。ゲヘヘヘ」

　連中は、マリアローズが行きすぎた建物から出てきたところらしい。景気のいいことに、朝十時前まで飲んでいやがったのか。赤ら顔をして、悪趣味な輩やからが好んで身に着けるＶヴイン＋テイジ＋Ｄデビルのボンデージファッションに身を包んだ、やたらとごつい男が、全部で三人。

「見ろよ、スゲェ上玉だ」

「朝飯代わりにいただいちまうか、グフフ」

　三人とも、はだけた胸や衣服をまくり上げた腕などに《Ｓ》と《ｍ》、《Ｃ》を組み合わせて意い匠しよう化した刺青いれずみがある。いや──違う。あれは刺青ではない。焼印だ。そのため、三人が誇ほこらしげにさらしている《ＳｍＣ》は、寸分違たがわず同じ形をしている。

　余計なものを見てしまった。あの胸むな糞くそその悪い焼印さえ目に入らなければ、阿あ呆ほうに構っていても時間の無む駄だだし、鼻であしらうだけですませてやったかもしれないのに。

「──きみたちに一度だけチャンスをやる」

　マリアローズは三人を睨にらみつけて一息で言った。

「今、僕に向かって言ったことを、即そく座ざに訂てい正せいして謝罪して慰い謝しや料りようを置いて即刻立ち去るっていうなら、しょうがないから許してやらないこともない。さもないと、目め障ざわりすぎて吐はき気がするその薄うす気味悪いうすらぼけた特大不細工なあべこべ顔を、ちょっとは見られるように整形手術する手間を省いてやる。ああ、この言い回しだと、その出来の悪いポンコツ頭じゃ理解できないかな？　噛かみ砕くだいて言うよ。殺す」

「ハッ、テエセエ？　殺すだア？」

　三人のうち、一番大おお柄がらでスキンヘッドの男がわざとらしく腹を抱かかえて笑った。あやしい発音からして、訂正の方はどうやら言葉自体、知らないらしい。頭のネジが五、六本抜ぬけたような顔を裏切らず、物を知らないやつだ。

「かァわいいじゃねエか。そういうゴテンバも悪くねエ。よく俺のオヤジィが教えてくれたもんだぜ。いやがァる女をムリクリ押さえてぶちこむ。こいつがブレイブな男にとって一番ファニーだっての

は、歴史がショオメイしてるってなア。ヒストリィがよオ！　ヒッヒッヒッ」

「どんなオヤジだよ……」

　マリアローズは呆あきれ果てて顔をしかめながら、金属製の籠こ手てを着けた右手に左手を添そえ、スキンヘッドの顔面に向けて突つき出した。が、スキンヘッドは三メーテルほど離はなれたところにいる。当然、届かない。手そのものは。

　ところが、金属の接せつ触しよく音と摩ま擦さつ音が混ざったような音が小さく響ひびいたかと思うと、スキンヘッドの眉み間けんに太い針といった感じの物体が突き立った。

「オ？」

　スキンヘッドは寄り目でその物体を見つめた。しばらくして、何だこれ。たぶん、そう言おうとしたのだろうが、その疑問が彼の口から発せられることはなかった。代わりに洩もれ出たのは、「ごべぼ」とか「ぐげご」とか、表記するとしたらそうしたたぐいの奇き声せいだった。

　仲間が呆ぼう然ぜんと見守る中、スキンヘッドが白目を剝むいて全身を痙けい攣れんさせ、後ろ向きに倒たおれた。

「さあ—」

　マリアローズはすかさず残る二人のうち一人、隙歯スキツパの男に右籠手の照準を合わせた。左手の人差し指と親指は、それぞれ右籠手の両脇にあるスイッチに添えている。こいつを両方押せば、籠手の手首内側に備えつけた装置から、即そつ効こう性神経毒Ｐ９ドウター＋を仕込んだ矢が発射される仕組みだ。矢が細いぶん、発射機構のポテンシャルに見あうような威い力りよくはなく、射程距きよ離りもかなり短いが、三メーテルであればまず当たる。

「次はどっちが食らいたい？　それとも、もう遅おそすぎるけど、やっぱり僕に謝る？　そいつもどこかに連れて行って休ませておけば、たぶんそのうち目は覚めるよ。運が悪いと死んじゃうかもしれないけどね」

「て、てめえ……」

　隙歯スキツパは後あと退じさりながら腰こしに下げた広ひろ刃はの剣に手を伸のばした。

「と、飛び道具たあ、女のくせに、卑ひ怯きような……」

　三人で一人を取り囲み、どうにかしようとしていた下げ郎ろうが、卑怯？　どこからそういう言葉が出てくるのだろう。いっそ不思議なくらいだが、それより何より、マリアローズの堪かん忍にん袋ぶくろの緒おをすっぱり断ち切ったのは、別の単語だった。

「──僕は！」

　マリアローズは問答無用で籠手から矢を発射させた。隙歯スキツパはとっさに身をよじってよけようとしたものの、酔よっているせいか、もともとウスノロなのか。「ぴゃ」という意味不明の短い叫さけびを上げ、右頬ほおのあたりに命中した矢を慌あわてて引き抜いたが、もう遅い。Ｐ９ドウター＋は極ごく微び量りようで効果を現す。隙歯スキツパが動いていられるのは、あと数秒だろう。

　それまでのわずかな時間も、マリアローズは無駄にしなかった。

「卑怯でも──」

　腰に吊つった剣けんを鞘さやから抜きつつ、残る一人との距離を二歩でゼロにする。やたらと鼻がでかい男だ。その自じ慢まんの、かどうかは知らないけれども、醜しゆう悪あくなまでに目立つ鼻めがけて、すくい上げるように細身の剣を一いつ閃せんさせた。

　見事にこそげ落ちた。

　間かん髪はつを入れず、痛がるよりむしろ呆あつ気けにとられている男の右手を狙ねらった。指だ。きれいに切り落としてやった。人差し指から小指まで、四本。

「女でもない！」

　最後に、体を反転させて男の股こ間かんに後ろ蹴げりを見み舞まい、飛び退のいて剣を血ち振ぶるいした。

　ざっと剣身に目を走らせると、さすがは魔ま導どう王時代の秘宝、焼バきーつニくンしグ刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟──ではないのだが、まず業わざ物ものといってもいい剣、偽劫火。人間

の指の骨を切断したくらいでは、刃こぼれ一つしていない。

「ふん……ま、ホントはたまに卑怯な手も使うけどね」

　マリアローズは剣にこびりついた血ち脂あぶらを襤褸ぼろ切れでぬぐい、鞘に収めた。

　さて、つける薬もなさそうなこの糞くそ虫むしどもをどうするべきか。実は、ちょっとした因いん縁ねんもあって、《ＳｍＣ》印を馬ば鹿か丸出しで見せびらかすやつなんか、息の根を止めてしまった方がいいのではないかとも思う。ただ、刺青ではなく焼印である以上、こいつらは雑魚ざこにすぎない。

　ＳｍＣ□□正式名めい称しよう、加サデイ虐ステイ的ツク・殺戮マーダーズ・愛好会クラブ。

「超最低ＳＵＣＫ」

　マリアローズは吐はき捨てるように呟つぶやいて、悶もん絶ぜつあるいは痙攣している男たちにちらりと目をやった。

　この頃ごろ、ＳｍＣは首都エルデンのチンピラどもを次々と傘さん下かに入れ、どんどん勢力を拡大している。その際、用いられるのが《ＳｍＣ》の焼印だ。ＳｍＣへの加盟を望む者は、忠誠の証あかしとして体の一部に焼印を押されるのだという。

　つまり、この焼印さえあればＳｍＣに襲おそわれずにすむというわけで、性しよう根ねの腐くさった間抜けどもが、今、こぞって焼印を求めているらしい。

　また、焼印を押すときにはやはり熱いし、痛い。それで、俺は焼印に耐たえたんだ凄すごいだろ、という感じで、誇らしげに見せて歩く阿呆も多い。

　言ってみれば、脳が膿うんだクソ野郎モウフオどもの間では一種のトレンドなのだ。

　この無統治王国にあっても、悪逆非道の代名詞として恐おそれられる、ＳｍＣ。

　その名のもとで虎とらの威いを借る狐きつねよろしく、いい気になって暴れ回る蛆うじ虫むしども──

「僕の知ったことじゃないけどさ」

　蛆をいくら叩たたき殺しても、糞に卵を産みつける蠅はえを根絶しないと、あとからあとからわいてくるだけだろう。この街も住みにくくなってゆきそうだ。まあ、もともと、α大陸広しといえど、エルデンほど安全や安心や快適さを確保するのに苦労する街も、そうはないのだが。

　だって、これは結構昔の話だが、北のモトローリィで失しつ脚きゃくした残ク忍ラ公ンと・そくのリーユ族ー郎エ党ルにエルデンが制圧され、市民が情け容よう赦しゃなく虐ぎゃく殺さつされた時代さえ過去にはあるのだ。十年近くにも及およんだ残ク忍ラ公ンと・そくのリーユ族ー郎エ党ルによる支配により、血と悲鳴と怨えん嗟さの巷ちまたと化したエルデンでは、一説によると万単位の市民が無残に殺害されたというから、まったく恐ろしい。

　しかも、この国のお偉えらい王様は、それでも「君臨すれども統治せず」の原則を曲げなかった。

　結局、長い苦く闘とうの末に残ク忍ラ公ンと・そくのリーユ族ー郎エ党ルを討うち破ったのは、残忍公一派の血けつ縁えんを基き盤ばんとする固い結束に対たい抗こうするため、市民の有志が結成した復讐者クラン・たちのアヴエン血盟ジヤーズだった。

　この事件がきっかけになって、赤の他人同士で血族同然の絆きずなを結ぶクランというやつがエルデンで流行し、徐じよ々じよにサンランド全土で一いつ般ぱん化していったわけだが──確かに、この国、特にエルデンで、よるべきものもなく一人きりで生きてゆくのは楽ではない。

　というより、そうとう過か酷こくだ。

　マリアローズ自身、とあるクランに身を置くようになるまでの二年半ほどは、単独で侵入者クラツカー稼か業ぎようを営んでいたので、そのつらさは身にしみてわかっている。

　ただ、ＳｍＣのように、相そう互ご扶ふ助じよというよりは、むしろ効率よく悪事を働くために徒党を組む輩やからも多い。困った話だが、悪事の概がい念ねんも曖あい昧まいなこの国では、誰だれかのやっていることが気に食わないのなら、実力でねじ伏ふせるか、無視するか。あとはせいぜい、偶ぐう然ぜんの事故や天災とい

う名の天てん罰ばつを期待するくらいしかない。

　俗ぞくに、残忍公ザ・クリユーエルアザエル・ノーウェンダルクにエルデンが支配された期間を「血の時代ブラッデイ・エイジ」と呼んだりするらしいけれども、似たようなことにならなければいいが──

「けど、こんなのがいくら集まってもねえ……」

　マリアローズは肩かたをすくめて焼印の三馬鹿に背を向けようとした。その寸前だった。

　気配を感じた。後ろに誰かいる。かなり近い。まさか、三馬鹿の仲間か。何にしても、息をひそめて人に接近するやつに、まともな目的があるとは思えない。

　思考は一いつ瞬しゆんだった。あとは体が自然に動いた。

　振ふり向きざまに、左の軸じく足あしは残し、右足を踏ふみこませて腰こしを逆に回転させつつ、偽にせ劫火を抜く。最近、剣けん聖せいヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟の弟で子しを自じ称しようするバーニング・バラッドの著作『剣の技法』から仕入れた居合いの技わざだ。居合いは本来、反りがある手頃な長さの刀剣で生きる技だが、筋力はないものの柔じゆう軟なん性が人一倍のマリアローズは、腰と手首の可動範はん囲いが広いので、直刀の偽劫火でも何とか使える。

　しかも、偽劫火はかなり軽い。我ながら、なかなか鋭するどい抜き打ちだったと思う。

　が、これで決まると自うぬ惚ぼれたりはしなかった。それに、居合いは初しよ太刀だちを外されると、大きな隙ができる。その弱点を補うには、すかさず前に出るか、退くか。

　マリアローズは前に出る方を選んだ。

「──らあっ！」

　相手は居合いをさけるため、向かって左側に体を捌さばいていた。

　至近距きよ離りだ。ここは剣を戻もどすよりも先に、軸にしてい

た左足の踵かかとで相手の右みぎ膝ひざを破は壊かいしてやる。マリアローズはとっさの判断でそう決め、そのとおりにした。

　若じやつ干かんエラが張り気味で、目がやや離れた相手の顔を認にん識しきしたのはそのときだった。

「がうぐっ」

「あ」

　マリアローズの目の前で右膝を抱かかえてうずくまったのは、顔見知りの男だった。

　というか、同じクランに所属している。どちらかといえば、仲間だ。

　どちらともいわなくても、一応、仲間ということになる。

「えーと」

　マリアローズは頭を掻かきながら、何かうまい言い訳はないかと考えた。しかし、言い訳する必要がどこにある？　ない。これっぽっちもありはしない。あるはずがない。

　マリアローズはＺＯＯズーという妙みような名のクランで一いつ緒しよのカタリを指差した。

「きみが悪い！　うん。こっそり人の背後に忍しのびよってきたら、こうなっても文句は言えないよ。僕はちっとも悪くない。きみのせいで、きみが痛い思いをしたわけだから、自じ業ごう自得以外の何ものでもないね」

「い、いっづうぅぅ……」

　ケメック地方の方言によく似たキングダム・イズルハ訛なまりのカタリは、マリアローズに反論もせず、ただただ呻うめいている。

　どうやら、よほどいい具合に蹴りが入ったらしい。

Omenage 897 9th revolution 2nd day

サンランド無統治王国首都エルデン第九区
〝クァラナド歓楽街〟

chapter.2

出入口で待ち合わせ

「だから──」

　第九区の小こ汚ぎたなく狭せま苦くるしい道を歩きながら、マリアローズは大きなため息をついてみせた。

「痛かったろうね、かわいそうにってさっきから何回も慰なぐさめてやってるだろ？」

「せやから、さっきから言うとるやろが！　何が悲しうてお前じぶんに慰められなあかんのや！」

　隣となりで怒ど鳴なるカタリの唾つばが飛んできそうだったから、マリアローズは眉まゆをひそめて少し距離を空けた。

「何でって。きみが痛そうにしてたからじゃないか」

「痛うしたんは誰だれやと思っとる」

「きみ自身のせいでしょ」

「アホさらせ。わしの膝、蹴け壊こわしたんは、マリアローズ、お前じぶんやろが！」

「蹴られるようなことをしたきみが悪いんだよ」

「それは何べんも謝ったやろ。わしはちいとばかし驚おどろかせたろと思うただけで──」

「で、何？　きみも謝ったから、僕にも謝れって？」

　マリアローズは立ち止まって左手を腰こしにあて、右手で真しん紅くの髪かみをかき上げた。

「ねえ、カタリ──いや、半魚人」

「言い直すなや！　それに、言い直すなら普ふ通つう、逆やろが！」

「そお？」

　カタリの顔は魚に似ている。といっても、魚そのものというわけではなく、魚の特とく徴ちようを完かん璧ぺきなまでに備えているわけではないのだが、とにかくやけに魚っぽいのだ。

　はっきりいって、両腰に下げた二本の変形斧おのイノイチ、ロノニーはともかくとしても、近ちか頃ごろエルデンで流行はやっているＤＳ□ドラッグスター・ＴＹＱＮタイクンの小洒落じやれた防具は、その魚顔に全然似合わない。

　少なくとも、マリアローズはそう思う。

「うーん……カタリより半魚人の方が、きみの存在を的確に表現してる名前だと思うけど」

「ほっとけ」

「わかった」

　マリアローズはカタリに背を向けて歩きはじめた。その肩をカタリにつかまれた。

「ほっとくなや！」

「どっちだよ」

「最初のほっとけはそういう意味で言ったんやない。つまりやな、そのう……」

「あー、わかったわかった。きみに説明させると無む駄だに長くなりそうだから、もういいよ。で、さっき言おうとしたことだけどね」

　マリアローズは思わせぶりにカタリの目を見つめてから、ふっと顔をそむけた。

「やっぱやめとく。忘れて」

「気になるがな！」

「ずっと気にしてろ、ばーか！」

　マリアローズが舌を出してみせると、カタリは歯は軋ぎしりしながら自分の顔を両手で挟はさんだ。

「た、頼たのむ、教えてくれ！　気になってしゃあない、今晩、眠ねむられへん……！」

「一生寝ねないで考えつづければいいんだ」

「そんなこと言わんと！　お願いや！　これ、このとおり──」

　と、手をあわせて頭を下げたカタリの腰に、赤いラインが一本入った白い棒で後ろからーいち撃げきを食らわせた者がいた。

「いだっ」

「話が弾はじゆんでいるところ、悪いけど」

　見たところ、彼女は子供だ。

　年の頃は十歳か、十一歳か。髪の毛はくすみのないきらめくばかりのブロンドで、灰色がかった青い瞳ひとみと唇くちびるには、純度の高い宝石のような透すきとおった艶つやがある。頬ほおは健康的なラインを描えがいているが、顎あごはほっそりしていて、処女雪のように白い肌はだが素す晴ばらしく美しい。

　かなりの美少女だが、彼女が赤いラインの入った純白の女性用ナース医術士帽・キヤツプや女性用ナース医術士服・ユニを着用しているのは、一見、冗じよう談だんとしか思えない。

　人の傷や病を癒いやす医術式という特とく殊しゆな技術を習得するためには、師弟関係に基づく十数年の長い修業が必要だという。医術式を修め、師に医術士として認められた者のみが、医術士の装しよう束ぞくを身にまとうことを許される。常識的には、彼女のような子供が医術士だなんてありえない。

　彼女がその見かけどおり、子供であれば。

　実は、違ちがう。

　さっきこの近くで合流し、カタリの膝を医術式で治ち療りようしてくれた、クラン・ＺＯＯの仲間、ユリカ・白雪スノーホワイト──

　二十三歳。

「いい加減にして、しょろしょろ行かないと。みんな待っているわよ」

　ちなみに、舌足らずだ。

なぜ、十歳相当の体なのに、実じつ年ねん齢れいは二十三歳なのか。何かわけがありそうだが、マリアローズがＺＯＯに入って二巡じゅん月げつ余り、尋たずねようと思ったことはあれど、訊きく機会がなかった。その必要があれば、たぶんいつかユリカの方から教えてくれるだろうと今は思っている。

「あ、ホントだ」

マリアローズはベルトの小物入れから取り出した小型の時計を見た。

「もう十時すぎちゃってるし。カタリが変な言いがかりつけてくるから」

「わし一人のせいかい……まあええわ。それより、さっき言いかけたこと教えてえな」

「しつこいな。忘れたよ、もう」

「そんな殺せつ生しようなーでっ」

ぐずぐずしているカタリの尻しりを、またユリカの棍こんが叩たたいた。カタリという男は武具や装そう飾しよく具、家具や魔ま術じゆつ具等々、特に古くて珍めずらしい品に目がない一種のマニアで、何か一つのことにかかずらうと、とことんまで執しゆう着ちやくしたがる傾けい向こうがある。それが重要な事こと柄がらや貴重な物品なら構わないが、今みたいにくだらないことが対象だと、かなり迷めい惑わくだ。

ユリカは普ふ段だん、無む闇やみに乱暴を働くような女性では誓ちかってないけれども、こう見えてカタリより年上だし、しっかりしているので、そのあたりの手た綱づなはきっちり締しめてくれる。何かにつけて脱だつ線せんしがちなカタリは、おそらくユリカにとって弟みたいな存在なのだろう。

まあ、見た目でいえば、弟というより、お兄ちゃんだろうが。

いや、あの魚顔とこの絶世の美少女では、どう考えても赤の他人か。

「行くわよ」

「……わ、わかったがな」

　こうしてマリアローズたち三人は、お天てん道と様さまに照らし出された薄うす汚ぎたないクァラナド歓かん楽らく街をさらに五分ばかり歩いた。

　目指す場所は、十三の街区に区分けされた円形都市エルデンの東部に位置する第九区のど真ん中から、少し南に下ったあたりにある。

　その三十メーテル四方一帯には、第九区の他ほかの地域のような建物はない。話によると、昔はあったらしいが、それを作るために取り壊こわされたのだという。

　端たん的てきに形容すれば、それは長方形の穴だ。

　もっとも、この穴は垂直に掘ほられてはいない。二十五メーテルほどの緩ゆるやかな下り坂をなし、その先に高さ五メーテル、幅はば十メーテルほどの横穴がある。坂を挟む両側の壁かべや横穴の周囲には、無数の魔術的な紋もん様ようや魔法円、魔法陣じんなどが刻印され、焼きつけられ、描かれているが、果たしてそれらが役に立っているのかどうか。たぶん、気休め程度の意味しかないだろう。

　そんなものがなくても、どうせその先に住まう異界の住人どもは、エルデンの地じ盤ばんの下にある九頭竜レガシオス・大骨格ノ・インの上へは出てこられないのだ。

　首都エルデンは、その昔、混沌とエルデ恐怖の巷エイニオンと呼ばれ、恐おそれられたこの地の中ちゆう枢すう──数多くの異界の扉とびらが集中していた大穴メガボロスの上に、物理的な蓋として建設された。

　そして、歴代のキング・グッダーは、九頭竜レガシオス・大骨格ノ・インを触しよく媒ばいに魔術的な蓋として〝古代九頭竜の呪のろい〟を施ほどこし、片時も途と切ぎれさせることなく現在まで維い持じしつづけている。

　かつて世界を分割統治した、偉い大だいなる魔導王たちの時代が終しゆう焉えんに向かいつつあった頃ころ、黄昏たそがれの魔導王の一人、初代キング・グッダーが、誰も足を踏み入れなかったこの

地を制圧してエルデンを完成させ、ついにサンランド無統治王国の成立を宣言してから、およそ九百年。

　封ふう印いんされた大穴メガボロスへ、最初に入りこもうとした者が誰かはわからない。

　ただ、おそらく複数だったはずだ。それも大人数だったろう。そうでなければ、地面を掘り進み、九頭竜レガシオス・大骨格ノ・インの隙すき間まを見つけ出して、大穴メガボロスへ至るなどという作業は不可能だ。

　しかし、封印が解かれた異界生物フリークスどもの棲すみ家かを、あらためてアンダーグラウンドと名づけた者の名は、本名ではないものの、広く知られている。

　イディオット・デイモン。

　間ま抜ぬけな悪あく魔ま、という意味の通り名とは裏腹に、初めて大規模で計画的なアンダーグラウンドの探たん索さくを行ったこの男は、きわめて緻ち密みつな頭脳を持ち、しかも強大な力を有していたという。

　また、彼は当時、五つあった出入口をエルデンの街区と対応させ、それぞれから侵しん入にゅうしたアンダーグラウンド内のエリアを大まかに区分した。たとえば、第一区の出入口から入ったあたりをＤ（ディヴィジョン）１、第二区ならばＤ２としたわけだ。

　さらに、一部の地図を作成して製本、販はん売ばいするなどの事業も行い、以後、侵入者クラッカーが爆ばく発はつ的に増えた。一説によると、侵入者クラッカーという名前をつけたのも、彼だとされている。

　そんな侵入者クラッカーの生みの親であり、草分け的存在でもあったイディオット・デイモンが、自らの業績に相応ふさわしくアンダーグラウンド内で消息を絶ってから、約四百年──

　人間のやっていることはたいして変わっていない。

　マリアローズたち三人は、Ｄ９出入口へ続く坂道の前で別の二人と落ちあった。

　二人ともクラン・ＺＯＯに所属している仲間だ。

「まいど！　ちいとばかし遅おそくなってもうたな。すまん、すまん。おう、サフィニア、何やけったいなくらい顔色が悪いな。まあ、いつものことか」

「……は、はい……すみません……」

　威い勢せいのいいカタリの挨あい拶さつに応じたサフィニアは、本当にどうしようもなく顔色が悪すぎる。長くてまっすぐな銀ぎん髪ぱつと翡ひ翠すい色の瞳は、見る者をうっとりさせるくらいきれいなのに、瀕ひん死しの病人のごとき肌の色と不景気な表情のせいで、全部ぶち壊しだ。か細い声にも元気がなく、聞いているこっちまで意気消しよう沈ちんしてくる。

　実は、手に持つ水晶様材クリスタリンの杖つえや、白と銀色を基調として各所に緑色を鏤ちりばめたローブは、過度に華はなやかではないものの、品質はよさそうでそれなりに人目を引くデザインなのだが。

　サフィニアが身にまとうと、何もかもが真っ黒い喪も服ふくよりも陰いん気きくさく見える。

「……わたしのせいで……朝から、気分を害してしまい……本当に……」

「い、いや、そんなことはないで」

　カタリはたいがいにおいて自ポ己ジ肯テ定イ的ヴで、常に太陽の方を向いて咲さく向日葵ひまわりみたいな性格だから、そんなサフィニアが若じやつ干かん苦手らしい。そのカタリと何かにつけ始終言い争いをしているマリアローズにしてみれば、できる限りサフィニアの味方をしてやりたくなる。

「こんな失礼で無神経なやつの言葉なんて、気にすることないよ、サフィニア。だいたい、こいつ、脳が思いっきりつるっつるで、女の子に対する口のきき方ってものをまるで知らないんだ。デリカシーがないんだよ。学習能力もゼロ。だから、この間も鉄てつ鎖さの憩いこい場で声をかけた女の子にふられて、あんまりしつこくするもんだから、ほっぺたに平手打ちなんか食らってさ。ざまあないね」

「な、何でそないなこと知っとるんや」

　カタリは胸に手をあてて動どう揺ようしまくっている。いい気味だ。

「たまたま見かけたんだよ。魚顔だし、声がでかいから、きみって変に目立つんだよね」

「ぐう……」

　そう唸うなったところをみると、ぐうの音くらいはまだ出るということか。さらに追い討うちをかけてとどめを刺さしてやってもよかったのだが、マリアローズは不意に珍しい声を聞いて、思いとどまった。

「……く、く、く、く……」

　抑おさえつけ、押し殺したようなサフィニアの笑い声だ。サフィニアが声を上げて笑う姿なんて、今まで何度見ただろう。ひょっとしたら初めてかもしれない。

　それにしても、まるで怨おん敵てきを呪のろい殺そうとして、まんまと成功したかのような──

　何だか、邪じや悪あくな響ひびきだ。

　マリアローズは背筋が寒くなった。サフィニアは資質に恵めぐまれた魔術士だが、嬉き々きとして他人を呪じゆ殺さつするような女の子では決してない。そうではないのだけれども、本人の意思に拘かかわらずまとわりついている一種のオーラが、近づく者をとらえて、息苦しくさせ、凍こおりつかせる。

　サフィニアの師し匠しようにあたる閃せん光こうの魔女マチルダは、「一億人に一人の凶きよう星せいのもとに生まれた娘むすめ」と彼女を評したらしいが、笑い声を耳にした者すら震ふるえ上がらせるのも、あるいはその凶運のせいか。

　──まさか、ね。

　マリアローズは軽く首を振ふって悪お寒かんを振り払はらった。ちょうどサフィニアの隣となりにいた痩そう身しんの男と目があったので、何となく微笑ほほえんだら、相手もわずかに口くち許もとと目許を緩めてみせた。

　だが、髪かみの毛と目が砂色で、同じ色の動きやすそうな異国風の衣ころもに身を包み、雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを腰に吊つっただけの彼は、一言も発しようとしない。

　ピンパーネルは、α大陸の南東にあるラハン大陸出身なので、共通語が得意ではないのだ。そうでなくとも多弁な方ではなく、余計なことは喋しゃべらない性質タチらしい。

　まったく、四六時中無む駄だ口ばかり叩いているカタリには見習って欲しいものだが、これはこれで間がとりづらいというか、時に微笑みの両すくみ状態に陥おちいり、何とも妙みような具合になる。

「ええと──あ、そうだ」

　マリアローズは気まずくなる前に話のきっかけを見つけ、両手を打ちあわせた。

「来てるのは二人だけ？」

「イイえ」

　砂さ漠ばくに吹ふく風のように乾かわいた声で短く否定したピンパーネルは、衣きぬ擦ずれの音も立てずに後ろを振り返った。マリアローズは啞あ然ぜんとした。坂道の途と中ちゆう、アンダーグラウンドと地上とを結ぶ横穴の五メーテルほど手前に、敷しき物ものを広げてくつろぐ男の姿を発見したからだ。

　しかも、敷物の上には弁当やら飲み物やらが並べられていて、男はのんびりそれらをつついている。他ほかでもない、異界生物フリークスどもがたむろするアンダーグラウンドの出入口前で、だ。これを場ば違ちがいといわずして何といおう。



ちなみに、男のいでたちは一言で表すと派は手でだ。その上に「ド」をつけてもいい。人によっては、かなり悪あく趣しゅ味みだという感想すら抱いだくかもしれない。

何せ、手許に置いた装そう飾しよく過か剰じような大剣はまだしも、オレンジ色の炎模様フアイヤーパターンで端はし々ばしや脇わ

きが飾かざられた濃のう紺こん色の奇き抜ばつな全身鎧よろいを身にまとい、表地が濃紺で裏地が赤の外がい套とうを羽織っているのだから、これはもうそうとうひどい。

　それでいて、男の浅黒い肌はだや力強い眉まゆ、意志の強そうな唇くちびるはいかにも精せい悍かんそうで、なおかつ品もあり、黄玉めいた色の瞳ひとみが何ともいえない奥深い光をたたえている。

　まあ、美男子というより、男前だ。素材としては、しごくまっとうどころか、背も高いし胸も厚いし肩かた幅はばも広いしで、普ふ通つうの格好をしていれば女たちが放っておかないだろう。

　あくまで、普通の格好をしていれば、だが。

　むろん、すぐそばを行き交かう見知らぬ侵入者クラッカーたちの視線も気にせず、のんきにオニギリなんか頬ほお張ばっていられる精神性メンタリテイもどうかと思う。

「お、うまそうやな。そういえばわし、朝飯食っとらへんねん」

　ついでに、涎よだれを垂らしながらそう言って、猛もう然ぜんと走り出し、靴くつを脱ぬいで、敷物に上がりこみ、弁当に食らいついた半魚人は派手男と同じ穴の狢むじなだ。

　そのあとについていって、敷物の前で足を止めたマリアローズたちも、残念ながら、隣の穴くらいの狢だった。

　派手男を含ふくめて六人全員、同じクランだし。

「む？」

　派手男は敷物の上にあぐらをかいたまま、マリアローズたちを振り返った。

「どうした。お前たちも座れよ」

「いや、座れって言われても……」

　座ってどうするのか。マリアローズはカタリと違い、ちゃんと朝食はすませてきたし、何より、そういう問題でもないような気がする。

「だいたい、誰だれだよ。こんなもの、わざわざ用意したの」

「あ、あの……それは……」

　サフィニアがおそるおそるといった感じで手を挙げた。

「わたしが……」

「う──そ、そっか」

　マリアローズも派手男が敷物と手作り弁当を持参したとは思わなかったが、まさかサフィニアとは。マリアローズがクラン・ＺＯＯに加盟してから二巡じゅん月げつ余、サフィニアが料理をするなんて初めて聞いた。

「よろしければ……マリアさんも、召めし上がってみてください……お口にあうかどうか、わかりませんが……」

「え、僕も？」

「……あ……すみません……迷めい惑わく、でしたよね……わたしの作ったお料理なんて……」

「い、いや、そんなことないよ？　迷惑だなんて、そんなわけないってば。ははは」

　マリアローズはやむをえずブーツを脱いで敷物に上がり、正座した。空腹ではないが、何も入らないほど満腹なわけでもないし、無む闇やみにサフィニアを傷つけたくはない。それに、彩いろどり豊かでなかなか美味おいしそうなサフィニア手製の弁当を前にすると、一口二口つまんでみてもいいかなという気にもさせられた。むろん、通りがかる侵入者クラツカーたちの目は気になって仕方ないが。

「でも、ずいぶん色々あるね。ハンバーグ、ソーセージ、鶏とりの唐から揚あげ、卵焼き。このあたりはお弁当の定番だとしても、アスパラのベーコン巻き、ホウレンソウの胡ご麻ま和あえ、ピーマンのマリネ、ナスの生しよう姜が焼きとか、野菜もたくさん使ってあって、栄養のバランスもとれてそう」

「サしやフィニアは結構、上手なのよ。しょの……わたしよりはじゅっと」

マリアローズの隣に座ったユリカが、手て際ぎわよくいくつかの料理を取り皿に取り分けてくれた。その口振りから察するに、どうやらユリカは料理が得意ではないらしい。ユリカは腕うでのいい医術士だし、お茶を淹いれるのが上手だし、面めん倒どう見もよく、器用そうなイメージがあったので、マリアローズにしてみると少し意外だった。

もっとも、それ以上に予想外だったのは、サフィニアの料理が絶品だったことだ。

「うわ……これって、もしかしてプロ並みじゃない？」

「そ、そんなことは……」

サフィニアは敷物の端っこで恐きよう縮しゆくしている。

「……見よう見真似まねで、覚えただけで……たいしたことはありません……」

「全然たいしたことあると思うけど。ねえ、って、半魚人に訊きくだけ無む駄だか。魚なのに餓うえた野や獣じゆうみたいにがっついてるし」

「がえがはがなやへん（誰が魚やねん）！」

「あー、食べながら喋るな。汚きたないだろ。何か飛ばしてるし。勿もつ体たいない。殴なぐるよ？」

マリアローズが拳こぶしを振り上げると、カタリは一いつ瞬しゆん、不満げに魚顔を歪ゆがめてから、再び食事に没ぼつ頭とうした。

だが、もし腹が空いていたら、マリアローズだってカタリみたいに貪むさぼり食っていたかもしれない。ピンパーネルも、表情こそ変えないものの、主に野菜系のおかずを次から次へと咀そ嚼しやくして胃に送りこんでいる。それくらいサフィニアの弁当は味がよかった。ユリカはいまいち食が進まないようだが、それは味ではなく、彼女の空腹具合と気持ちの問題だろう。

「はぁ……どうしてこんなに美味しいのかしら。同じような材じやい料りようを使ちゆかって、似たような手順で作ちゆくっても同じ味のものができないなんて、不思議だわ。どこかでちょっと失敗も

しているのかもしれないけど、しょうはいっても……」

　どうやら、サフィニアに料理の腕前で負けていることが、かなり悔くやしいようだ。実はひそかにエプロンを着けて練習したりしているのか。ユリカは基本的に真ま面じ目めだから、ありえない話ではない。

「それにしても、ね──」

　マリアローズは小声でぶつぶつ呟つぶやいているユリカを横目に、卵焼きを味わってみた。これでも舌は肥えているつもりだが、文句のつけようがない。単純な料理なだけに、絶ぜつ妙みような焼き加減と卵の甘さをうまく引き立てるほどよい塩味がいっそう際立っている。

「うん。おいしい。ホント、サフィニアにこんな特技があるなんて知らなかったよ。びっくりしちゃった」

「……と、特技、なんて、そんな……」

「いや、特技といってもいいと思うぞ」

　派は手で男が唐揚げを丸まる呑のみして満足げに一つうなずいてから、サフィニアに顔を向けた。

「うまい飯を作るのは一つの才能だ。自じ慢まんじゃないが、俺なんてカレーしか作れん。何を作ってもなぜかカレーになっちまうんだ」

「それも一つの才能だと思うけどね……」

　マリアローズは呆あきれ半分でそう言いながら、サフィニアがローブのフードを目ま深ぶかにかぶり、真っ赤になった顔を隠かくそうとしていることに気づいていた。

　派手男に褒ほめられたのが、そんなに嬉うれしいのか。嬉しいのだろう。きっとサフィニアは、彼に食べてもらうためにこの弁当を一生懸けん命めいこしらえたに違ちがいないのだ。心をこめて。

　そうか。案外、それが一番の調味料なのかも──などと勝手に納なっ得とくしつつ、取り分けてもらったぶんをマリアローズが食べ終える頃ころには、弁当はすっかり片づいてしまっていた。

「──で」

　食後のバスク茶を一気飲みした派手男が、大きく息を吐はき出した。

「腹一いつ杯ぱいになったのはいいが、何でこんな場所で飯を食う羽目になったんだ？」

「何でって」

　言うまでもなく、サフィニアが弁当を作ってこなければ、こんなことにはならなかったはずだ。けれども、彼の態度を見ていると、根本的に状じよう況きようを理解していないように思える。

「あのさ、ちょっと確かく認にんしておきたいんだけど──と、その前に、おい、そこの半魚人、休んでないで後片づけ手伝え」

「ぐひっ」

　マリアローズは、生意気にも寝ねそべって腹をさすっていたカタリの頭頂部を蹴け飛とばし、かき集めた取り皿や食器をサフィニアに渡わたしてから、派手男に向き直った。

「それで、確認だけど、今日の目的が何かわかってる？」

「目的だと？」

　派手男は空を仰あおぎ、顎あごを撫なでながら首をひねった。

「うむ」

「やっぱり……」

　マリアローズはため息をついた。おそらく、このまま長考させておいても埒らちは明かないだろう。時間の無駄なので、さっさと答えを教えてやることにした。

「劫ごう火かでしょ？」

「おお、そうだったな」

　派手男は一度、得心がいったようにうなずいたが、すぐに眉をひそめた。

「で、何でまたＤ９ここなんだ」

「わしの調査で、このＤ９喪そう神しん街オレストロ深層にいるはずの〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟りん霊れいが、本物の劫火を持っとる可能性が高いっちゅうことがわかったからやろ」

　カタリの簡潔な説明に、派手男はいたく感かん銘めいを受けたらしい。腕うで組ぐみをして低く唸うなった。

「なるほどな。そういうことか」

「いや、それって昨日も言ったよ？」

　だが、マリアローズのツッコミで動じるような男ではない。むしろ、不思議そうにしている。

「そうだったか？」

「またちゃんと聞いてなかったの」

「そんなことはないと思うが」

「だったら、何で覚えてないんだよ」

「俺に訊かれてもな」

「きみのことなんだから、きみに訊くのは当たり前だろ」

「言われてみれば、それもそうか。たぶん、眠ねむかったか、あまり興味がなかったんだろう」

「よくそれで約束覚えてたね……」

「うむ」

　派手男は真ま面じ目めくさった表情を崩くずして、いきなりヒヒヒと下げ卑びた笑い方をした。

　それは彼の顔立ちや悠ゆう然ぜんとした雰ふん囲い気きに全然そぐわない、おかしな癖くせの一つだ。

「実はサフィニアが迎むかえにきてくれてな。それまではすっかり

忘れてたんだ」

「……昨日の様子では……おそらく……覚えてらっしゃらないと思いまして……」

　サフィニアの予想は見事に的中したらしい。うつむいたサフィニアの頬ほおが上気しているのは、派手男の寝起き姿でも思い出しているのか。不幸と不運を一身に背負っているかのようなサフィニアも、年ねん齢れいはマリアローズとさして変わらないわけで、女の子らしく胸に秘めた想おもいの一つや二つあるということだ。秘ひめているとはいっても、見え見えではあるのだが。

「まあ、サフィニアのおかげで一応、来たからいいけどね……」

　しかし、それはそれとしても、こういう際に話を適当にまとめて音頭をとる役目が、なぜマリアローズ担当なのか。

　ＺＯＯに加盟してから二巡月余りしか経たっていないマリアローズは、むろんクランの中心でも何でもない。まだ会ったことのないメンバーさえいる新参者だ。平時だけとはいえ、そのマリアローズが船頭役を務めることが多いのは、肝かん心じんのリーダーがこの男だからだろう。

「む？　何だ」

　派手男がマリアローズの視線に気づいてこちらを向いた。

「俺の顔に何かついてるか」

「いや、そうじゃなくて……」

　マリアローズは頭を振ふった。自分以外の、たとえばカタリがまとめ役をしている場面を想像して、ぞっとしたのだ。寡か黙もくなピンパーネルや、引っこみ思案のサフィニアにもとうてい無理そうだし、ユリカはきっちりしているが、皆みなを引っ張ってゆくタイプではない。

　結局、適材適所、なるべくしてこうなった。そういうことなのか。

「別に何でもないよ。とにかく全員揃そろったんだから、さっさと行こ」

「そうだな」

「隊列はいつもと同じでいいよね」

「いいんじゃないか」

「じゃ、最さい後こう尾びがピンパーネル、サフィニアが真ん中で、その右にユリカ、左にカタリ、前は僕と──」

　マリアローズはそれが男の本名だとは信じていない。そう思い、そのことについて幾いく度どか問い質ただしたが、男はいつもはぐらかすばかりで、まともに答えなかった。

　ただ、一度だけ、こんなことを言った。たとえ俺がどんな名だろうと、俺は俺だ、と。

　それはおそらく、男が他ほかの名を持つことを示し唆さする言葉だった。けれども、偽ぎ名めいを名乗るなら名乗るで、もう少し何とかならなかったのか。

　マリアローズは軽い頭痛をこらえて、動物園ＺＯＯの園長マスターである男の名を呼んだ。

「トマトクンってことで」

Omenage 897 9th revolution 2nd day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD9

〝喪神街オレストロ〟

chapter.3

悪夢GO!GO!

アンダーグラウンドＤ９に立ち入った者がまず目を引かれるのは、天てん井じよう近辺を浮ふ遊ゆうして周囲を不ふ吉きつに照らす、無数の青白い光のかたまりだろう。

初めてその光を見た者は、あるものを思い浮うかべるかもしれない。

魂たましい。

主に脳によって形成される精神と他の諸器官とを結びつけ、同一性を与あたえる役割を果たしているという、人間にとって欠くべからざる魂アニマは、目に見える形がない。

だが、存在していることは確かなようだ。その証しよう拠こに、仮に医術士が死者の肉体を生きていた頃の状態まで治ち癒ゆさせても、決して生き返ることはない。一方、寺院の僧そう侶りよどもは、蘇そ生せい式と呼ばれる秘ひ匿とくされた技術で肉体と魂とを修復し、死者を蘇よみがえらすことができる。

まあ、損傷がいちじるしい死体、特に脳が損そん壊かいしている場合や、死後、時間が経過しすぎている場合は、蘇生式も無力だというが。

いずれにしても、魂はある。しかし、見ることはできない。

その不可視の魂を人々が頭の中にイメージしたり、絵に描かいたりすると、たいがい光のかたまりか白い煙けむり、あるいは靄もや状の物体になるのは、少々不思議な偶ぐう然ぜんの一いつ致ちだ。

そして、Ｄ９の天井近くに満ち、たまにそこらを飛び回っている青白い光のかたまりが、そうした想像上の魂の姿と似ているのもまた、偶然なのだろうか。

そのあたりは識者の間でも意見が分かれるらしいが、この青白い光のかたまりの性質については、それなりに研究が進んでいる。神話だか伝承だかからとった名前もつけられている。

「何かさ、第三層に降りてからずっと思ってたんだけど……偽魂の数、減ってない？」

マリアローズは天井を見上げて首を傾かしげた。

「第一層とか第二層より、ちょっと暗いよね。全体的に」

「言われてみれば、せやな」

　振り返って答えたのは、途と中ちゆうから道案内のため、隊列の先頭に立っているカタリだ。

「まあ、ごみごみしとるっちゅうのもあるやろうけど、わざわざ第三層まで来るやつは少ないはずやし、そうなると偽ぎ魂こんにとっても、獲え物ものがおらへんっちゅうことになるからな。おそらく、そのせいやないか」

　アンダーグラウンドには、多種多様な異界生物フリークスがいる。その一種と考えられている偽魂は、魂を失った生物の肉体を見つけると、これに浸しん透とうして、擬ぎ似じ的再生と呼ばれる一連の反応を起こす。

　ただ、偽魂による擬似的再生は、僧侶どもの蘇生式による蘇生とは違う。それどころか、偽魂に取り憑かれたものは、生前の記き憶おくの大半を活用できない。知性もほぼ失われ、歪ゆがんだ本能を支えにアンダーグラウンドをうろつく半死者ハーフデッドと化してしまう。

　Ｄ９、喪神街オレストロ。

　この何とも奇き妙みようで雑然としたエリアは、半死者ハーフデッドどもが崩れかけた思い出を頼たよりに、アンダーグラウンド内のがらくたをかき集めて作った悲しき追憶の街だ。

　まあ、中にいると、悲しいなどという高こう尚しようような情じよう緒ちよにひたっている余よ裕ゆうはまずないが。

　なぜかといえば、まず、半死者ハーフデッドの状態を維い持じできなくなり、偽魂にすら見放された本物の死体がそこら中に転がっている。普ふ通つう、生き物の死体は、アンダーグラウンド全域に棲せい息そくしている大脂羽蟲ゴッキーが骨まできれいに食ってしまうのだが、ここではそれも追いつかない。何せ、死体が多すぎるのだ。挙句、大脂羽蟲ゴッキーに食われかけた死体がここにもあそこにもという、かなりぞっとしない光景がここの名物になっている。

　また、臭におい もきついから、汎大陸ＰＣ医術士会ＭＡ認にん可

か済み錬金士Ａ組合Ｇ製の嗅きゆう覚かく麻ま痺ひ薬を常時服用する必要がある。別の対策としては、エルデＥェイニオンＭ機術士匠合Ｕ製の防毒面ガスマスクを用いる手もあるが、こちらは高価だし、視界が狭せばめられるし、息苦しいので、あまりおすすめできない。

　それでも、喪神街オレストロが侵入者クラツカーたちの間で根強い人気を誇ほこっているのは、ここであるものが入手できるからだ。

　その物体──アリステルは、擬似的再生の過程で、元生き物の体組織が変質して生じるらしい。見た目は二、三ミル程度の青い結けつ晶しよう体といった感じで、半死者ハーフデツドの心臓や脳に含ふくまれていることが多く、錬金士Ａ組合Ｇに大量の需じゆ要ようがあり、常時高値で買い取ってもらえる。

　だが、マリアローズたちクラン・ＺＯＯの六人は、そんなものが欲しいわけではない。アリステルが目当てなら、第三層まで降りる必要はないのだ。

　何しろ、第一層や第二層までは、がらくたの山がところどころにあるだけで、基本的に見晴らしがいい。遠くからでも異界生物フリークスやら人間やらの半死者ハーフデツドが見つけやすく、要するに狩かりやすい。そのぶん、同業者間の競争は激しく、諍いさかいも絶えないのだが、誰だれも彼もが欲に目がくらんでいるわけだから、お互たがい様だろう。

　ところが、第三層となると、様相は一変する。

　がらくたが積み上げられてできた建物や高い塀へいなどが乱立して、喪神街、まさしくその名に相応ふさわしい景色が第三層には広がっているのだ。

　そこには、何の意味もない袋ふくろ小路や、嫌いやがらせとしか思えない崩くずれかけた橋、足をかけるとたちまち壊こわれる階段らしきものなど、理解不能な悪路が無数にある。当然、道に迷いやすく、地図を作るのも困難で、記憶もしにくい。また、思いがけない場所に半死者ハーフデツドがひそんでいることもあれば、とんでもない数の半死者ハーフデツドにいきなり出くわすこともある。

　アリステルで金を稼かせぎたい者にしてみれば、これは非常に不

都合だ。

　早い話が、危険すぎる。蘇生式もタダではない━どころか、高層寺院の糞くそ坊ぼう主ずどもはかなりがめついので、死後、生き返ることができたとしても、確実に損をする。もちろん、一人で死ねば、偽魂に取り憑つかれてめでたく半死者ハーフデツドの仲間入りだし、何人かで徒党を組んでいても、全ぜん滅めつするかもしれない。全滅をまぬがれたとしても、仲間が死体を回収してくれるという保証はどこにもない。

　以上のような理由で、喪神街第三層に足を踏ふみ入れる者は稀まれだという。

　それではなぜ、マリアローズがここにいるのかというと、以下の理由による。

　目指すは、喪神街オレストロ深層。深層とは第六層にあたるらしく、そのどこかに半死者ハーフデツドと成り果てたかつての魔ま導どう王、〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟霊がいるという。

　マリアローズたちの目的である、本物の焼バきーつニくンしグ刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟は、どうも彼女が持っているようだ。

　何だか、やたらと推量ばかりで、現実味が薄うすいのだが。

「……今度はホントなんだろうね」

　マリアローズが視線にこめた微び量りようの殺気に気づいたのか、振り向いたカタリが「ほえ」という表情でまばたきをした。とぼけたふりなんかして、半魚人め。

　実のところ、劫火を求めてアンダーグラウンドへ潜もぐるのは、これが初めてではないのだ。マリアローズがＺＯＯに加盟したのも、何と三億ダラー相当の価値があるという魔導王時代の秘宝、劫火を求めて、Ｄ１の閉へい鎖さ魔ま宮きゆうへ一いつ緒しよに行く、という話につられたのがきっかけだった。

　で、失敗した。

　そのとき、本物の劫火の代わりに手に入れたのが偽劫火だ。こち

らは魔導王時代の品とはいえ、ただ良質で軽い細身の剣けんにすぎない。カタリ曰いわく、無む銘めいなので、品質に見あった値段はつかないというから、売らずに自分で使っているわけだ。

　あれから、カタリは数多くの文ぶん献けんをあたったり、証言を集めたりなど、劫火の真のありかについて、ずいぶん調べ回っていたらしい。調査の間、挙がった候補は二つや三つではなく、今回、一つに絞しぼりこむのにはそうとう苦労したとのことだ。

　ただ、忘れてはならない。前回もカタリは似たような手順を踏んで、あたりをつけたのだという。否いや、確信すら抱いだいていた模様だ。そして、見事に外した。

　果たして、カタリは愚おろかにも同じあやまちを繰くり返すのか。あるいは、二の轍てつを踏まない賢けん明めいさがカタリにあるのか。一いつ介かいの半魚人に、賢明さ、か──

「期待するのが間ま違ちがってるような気も……」

「マリアローズ、さっきからお前じぶん、何をぶつぶつ言うとるんや」

「ん」

　マリアローズはカタリの魚顔を一いち瞥べつして肩かたをすくめた。

「いや、教えてもわかんないと思うし。魚語じゃなくて、人間の言葉だから」

「今、わしが話しとるんは人間の言葉やないか。そうやなかったら、そもそも会話が成立しとらんはずやろ」

「あれ、ホントだ。おかしいな。あ、そっか、きみってば人間の血が半分流れてるんだもんね。それで、かろうじて人間の言葉だけはわかるんだっけ」

「ダァホ。わしの体に流れとるんは、ことごとく全部、正真正銘、人間様の血ィや。その証しよう拠こに、見てみい、この血色のよさを！　わしの血は見事に赤いっちゅうねん」

「だから？」

「だから、て。せやから、それこそわしが完全無欠の人間やっちゅう証明やないか。血ィが赤すぎるくらい真っ赤っかなんやで！」

「は？　どうしてそれが証明になるわけ？」

　マリアローズはカタリを買いかぶっていたのかもしれない。よもやここまで間ま抜ぬけだったとは。カタリの馬ば鹿かさ加減を理解していたのは、結局、ユリカだけだったようだ。

「何を勘かん違いしているのか知らないけど、お魚しやかなの血も赤いわよ」

「なっ──」

　カタリは一いつ瞬しゆん、声を失って立ちつくしたが、すぐに腰こしに手をあてて胸を反らしてみせた。

「し、知っとるがな。そんなん、常識やん？」

　けれども、魚顔は引きつっているし、声も震ふるえている。足を止めてカタリを注視していたＺＯＯの面々は、それぞれに白け気味の呆あきれ顔だ。とりわけトマトクンは、ある意味、もっとも厳しい対応をとった。

「行くか」

「そうだね。そろそろ第四層かな？」

　無視だ。マリアローズも、むろんトマトクンに同調した。ユリカとサフィニアも再び歩き出したトマトクンに従い、ただ一人、カタリのそばに残ったのはピンパーネルだけだった。

　もっとも、半べそをかいているカタリに、ピンパーネルが無表情で告げた言葉は、微び妙みような線であまり慰なぐさめになっていなかった。

「人間ノ血も赤・デス」

「……せやな……」

　そうはいっても、立ち直りが早いのも半魚人の特性だ。カタリは間もなく全力疾しつ走そうで隊列に追いついてきて、また先頭に

立った。道順を決めつつ、鼻歌など歌っているくらいだから、もうすっかり持ち直したのか。意識的に切り替かえているのならたいしたものだが、少し前の出来事を忘れてしまっているだけだとしたら、脳の機能に何か欠けつ陥かんがあるとしか思えない。

　ともあれ、それからマリアローズたちは、さらに十分ばかり第三層を地虫のように這はいずり回り、数体の半死者ハーフデッドを排はい除じょした末に、がらくた製の高い壁かべに挟はさまれた大きめの通路に入った。

　通路はしばらく進んだところで、左に折れている。

　カタリは曲がり角の手前で立ち止まり、皆みなを振ふり返った。

「この先が第四層へ通じとる坂道や」

「ここまではわりと楽だったね」

　マリアローズは曲がり角に近づいて、そこから慎しん重ちようにそっと顔を出した。

　見ると、確かに幅はば約六メーテルの通路が三十メーテルほど続き、突つき当たりの岩がん壁ぺきに坂道が半円状の口を開けている。坂道の前にはかなりの数の半死者ハーフデッドがうろついていて、簡単には通してもらえなさそうだ。

「──ま、いつまでも楽はさせてもらえない、か」

「ここまでかて、わしがしっかり下調べしとらんかったら、散々苦労しとったはずやで」

　カタリが偉えらそうに腕うで組ぐみをしてみせた。

「まあ、第四層より下は、足を踏み入れて帰ってきよったモンとて少ないっちゅう話や。おかげで資料も少のうて、それぞれが矛む盾じゆんしとったり、ちぐはぐやったり、てんでんばらばらやさかい、正味の話、レディ・麟霊がおるっちゅう話以外は、何がホンマなんかようわからん。せやけど、第三層までは地図やら何やら仰ぎょう山さん出てきよってな。そうして集めた情報は、わしのクリーム色の脳細さい胞ぼうにみいんなインプットされとる」

「で、あそこはどうするつもりなのさ」

「何も難しいことあらへん」

　その言葉を聞いた瞬間、悪い予感がしなかったといったら、嘘うそになる。

　眉み間けんに深い縦皺じわを刻んだマリアローズの目の前で、カタリは雄おゝおしく拳こぶしを振り上げた。

「突とつッ！　撃げきッ！　あるのみ、やッ！」

「あのね……」

「いやいや、皆まで言わんでええ。わしが何も考えとらんのやないかと心配なんやろ。けどな、今日に限っては無問題ノープロブレムや。多くの証言と記録が、二十から三十の半死者ハーフデツドをさっさと片づければあの坂道に突入できる、と、こう、ばっちりはっきり示しとる。そして、わしらの戦力をもってすれば、あれくらい楽勝のはずや。なあ、トマトクンもそう思うやろ？」

「うむ」

　トマトクンは軽くうなずいたものの、肯こう定ていとも否定ともつかない態度だった。マリアローズも若じやつ干かん気になっていたのだけれども、喪そう神しん街に入ってから、トマトクンはどうも上の空というか、何か考え事でもしているような様子なのだ。

　だが、トマトクンの生返事を都合よく解かい釈しやくしたらしいカタリは、腰に吊つった二挺ちようの斧おの、イノイチとロノニーを抜いてくるりと回した。

「ちゅうわけで、用意はええな？　ええんやな？　ええんかい！　ほな、行きまっせえ！」

「あ！　こら、待て、半魚人……！」

　マリアローズの制止はあと一歩、及およばなかった。カタリはまたたく間に曲がり角の向こうへ消えた。

　まったく、独断専行の魚野や郎ろうめ。あんな馬鹿者など放ほうっておきたくもあるが、さすがにこのまま一人で行かせるわけにもゆかない。仕方なくマリアローズが駆かけ出すと、つられたようにトマトクンもついてきて、そうなると半ば条件反射的に他ほかの

面々も従い、結果的にカタリの望んだとおりの展開になった。

「――くそ、何で！」

　きっと、こうなってしまった原因はいくつかあるだろうが、それらを数え上げるのは後回しだ。今はもう、目前に迫せまった戦せん闘とうに集中するより他にない。そう理解はしていても、足を動かしながら抜いた偽劫火の柄つかを握にぎる手には、必要以上に力が入った。

　だいたい、性格的に、マリアローズはこういうやり方が一番許せないのだ。

　力任せでは、十の力はどうやっても十の力にしかならない。そこで頭を使い、十の力を二十にも三十にも増ぞう幅ふくさせる。あるいは、十未満の力でうまくすませるのが人間の知ち恵えではないか。

　まあ、半魚人に人間並みの知恵を求めても無む駄だだろうし、そんな場合でもない。

　坂道目指して突っ走っていったカタリが、マリアローズの約十メーテル前方で、急に百八十度方向転てん換かんした。

　坂道の前にたむろしていた灰色の肌はだを持つ半死亜あ人じんボーグやら、半死下等蜥蜴とかげ人やら、何やら、半死者ハーフデッドどもの群れが一いっ斉せいにカタリめがけて突進してきた――それだけなら、当然、カタリも予想していただろうが、そいつらを押しのけて坂道の奥から猛もう然ぜんと進み出てきた全長五メーテルほどの半死者ハーフデッドについては、おそらく想定外だったのだろう。

「下等竜りゅう……？」

「――どぅわっ！」

　思わず立ち止まったマリアローズの足あし許もとに、カタリがつんのめって転がりこんできた。背中の大剣を抜いたトマトクンも、マリアローズの隣となりで足を止めている。さしものトマトクンも、手足のない巨きよ大だいな蚯蚓みみずに似た下等竜の半死者ハーフデッドに驚おどろいているのか。

いや、そうではなかった。トマトクンは黄玉の瞳ひとみで半死下等竜をしっかりと見み据すえ、何かを待っているようだ。マリアローズもすぐに察した。サフィニアが呪じゆ文もんの詠えい唱しようを始めたのは、それから間もなくだった。

「ＭｅｌｇＺｅｌｇＲｅｖＮａｖ遠炎近火ＫｒｅｙＢｒｅｙ動乱砲危黄回廻ＪｅｎＲｅｎＤ」

サフィニアが口ずさんだのは、現在、α大陸全土で公用語として広く用いられている共通語コモンタングではなく、上ハイ古ロ高メ位オ語ンだった。さらに詳くわしくいえば、ＬＥＰ（下層エレメンタルプレーン）に住む要素精霊に呼びかけ、協力を要よう請せいするために使われる上ハイ古ロ高メ位オ語ンの一系統だ。

もっとも、呼んだだけで、はいわかりましたと来てくれるお人好よし（？）の要素精霊はいない。前提条件として、特殊なチヤネ精神集中リングの間にＬＥＰとの精神連結を確立する必要があるし、彼らを引きよせるための餌えさも不可欠だ。たとえば、今、サフィニアが空に円を描えがくようにばらまいた文観輝石のかけらがそれにあたる。

また、術者の資質も重要で、気位の高い要素精霊を従わせるには、それなりの力を有していなければならない。

サフィニアはそれらをすべて満たした。

あっという間だった。ＬＥＰから呼び出された炎えん霊れいＺｉｇは、文観輝石のかけらを一瞬で食らいつくした。

とはいえ、要素精霊には質量がない。大きさもない。この世界の尺度でいえば、存在してさえいない。ただ、彼らにはそれぞれ固有の現象を引き起こすエネルギーだけがある。従って、よりこの世界に即した表現を試みれば、次のような言い方になるかもしれない。

すなわち、Ｚｉｇは文観輝石のかけらをエネルギーへと変換し、これをもって術者の要請に応じた。

術者たるサフィニアの要請は、以下のとおりだった。

視線の先にいる半死下等竜を燃やす。その全身を焼きつくす。

Ｚｉｇはやすやすと一仕事終えてＬＥＰへ帰っていった。実際、

人間たちに炎霊と称しようされるＺｉｇにとっては、それくらい朝飯前なのだ。

　ただし、これで終わったわけではない。

　マリアローズはＺｉｇの炎ほのおに包まれてのたうち回る半死下等竜の手前、七、八メーテルの地点までゆっくりと前進した。右やや前には大たい剣けんを担かつぐように構えたトマトクンがいて、その向こうには雌し雄ゆう一いつ対つい二本の短剣をぶら下げたピンパーネルがいる。サフィニアはようやく態勢を立て直したカタリとユリカに両りよう脇わきを固められ、次なる魔ま術じゆつを準備しているはずだ。

「来るぞ」

　トマトクンに言われるまでもない。燃え盛さかる半死下等竜の脇を通って、半死亜人ボーグや半死下等蜥蜴人どもの群れがこちらへ向かってきているのは、見ればわかる。

　だが、まだだ。動くのはまだ早い。

　マリアローズは先に飛び出したピンパーネルと違ちがって、脇目も振ふらず半死者ハーフデッドの群れに挑いどみかかっていったりはしなかった。しないというよりも、できないのだ。マリアローズは自分の能力をわきまえているし、日々、思い知らされる限界の中で、どうやって勝利に貢こう献けんするか。その試行錯さく誤ごが、ＺＯＯに加盟してからの二巡じゆん月げつ余りだったといっても過言ではない。

　こうして自ら見み出いだしたマリアローズの役目は、トマトクンにカバーしてもらいつつ、敵を攪かく乱らんすること。余力があれば、無理をしない範はん囲いで敵の戦力を削けずること。また、決して慌あわてず焦あせらず、戦せん闘とう区域内外の様子に絶えず気を配って、何かあればトマトクンに知らせるか、自分で対処すること。

　すでにピンパーネルは、半死者ハーフデッドの先頭集団に襲おそいかかっていた。

　防具といえるようなものを一いつ切さい身につけていないピンパーネルは、目にもとまらぬ速さで雌雄一対の短剣を縦横無む尽じ

んに振り回し、思うままに敵を斬きり刻んでいる。半死者ハーフデッドどもの中には、刀剣や槍やりで武装した者もいるが、ピンパーネルにはかすりもしない。

　おそらく、敵が人間の集団であれば、その尋じん常じようならざる効率的かつアクロバティックで超ちよう高速な短剣捌さばきに恐おそれをなして、総そう崩くずれになっていただろう。

　けれども、あいにく半死者ハーフデッドは、そこまで明めい瞭りような生の感情を持つ相手ではない。それに、いくらピンパーネルでも、幅はば六メーテルの通路を封ふう鎖さするなんて、物理的に不可能だ。単純に数が多いこともあり、ピンパーネルの殺さつ戮りく圏けんをすり抜けてくる半死者ハーフデッドが少なからずいた。

　そいつらがどんどん近づいてくる。

　数は六、いや、七か。

　トマトクンの腰こしがぐっと沈しずみ、姿勢が前まえ屈かがみになった。トマトクン愛用の装そう飾しよく過か剰じよう気味な大剣は、琥こ珀はく色の剣身が波打っている実用的とは思いがたい造りだが、とてつもない威い力りよくを秘ひめている。一目見ただけで、誰だれでもそう感じる。実際、ひどく斬れるし、きわめて頑がん丈じようで、刃はこぼれしたところなど見たこともない。

　きっと魔導王時代の秘宝か、それ以上の品に違いないが、名も由来も不ふ詳しよう。トマトクン自身は知っているようだが、何か事情があるようで教えてくれない。

　その稀まれなる大剣で半死者ハーフデッドどもを蹴け散ちらすべく、前に出ようとしたトマトクンが、突とつ然ぜん、猫ねこ科の獣けものみたいに鼻の頭に皺しわをよせて後ろを振り返った。

　いったいどうしたのか。敵はすぐそばに迫せまっているのに。マリアローズはトマトクンにあわせて迎げい撃げきに出ようとしていたから、瞬しゆん間かん、迷った。というより、困った。

「──人間の匂においだ」

　だが、トマトクンにそう言われて、自分が何をするべきかわからないほど鈍にぶくはない。たぶん、本当に匂いを嗅かいでいるわけではなく、勘かんみたいなものだと思うのだけれども、トマトクン

に備わっている独特の嗅きゆう覚かくはかなり信しん頼らいできる。

　マリアローズは、半死者ハーフデツドどもを潰つぶしにかかったトマトクンと入れ代わりに、後方へと視線を転じた。舌打ちしたい気分だった。侵入者クラツカーが滅めつ多たに足を踏ふみ入れないこの喪神街第三層で、マリアローズたち以外の人間が近くにいる、ということは──

「ユリカ、サフィニアを！　カタリ……！」

　マリアローズは叫さけびながら回れ右をして走り、すぐにサフィニアとユリカの後ろへ出た。カタリがちゃんとついてきているかなんて、わざわざ確かめたりしない。まあ、大だい丈じよう夫ぶだろうと思う。大丈夫でなければ困る。ついてきていなかったら、あとで焼き半魚人にしてくれる。

　果たして、トマトクンの嗅覚は正しかった。

　左右に積み上げられたがらくた製の壁かべの上に、複数の人間が身をひそめている。しかも、身なりや動作からして、連中は半死者ハーフデツドではない。れっきとした、生きた人間だ。

　頭数は右に五人以上、左にもほぼ同数。全員、防毒面ガスマスクらしきものをかぶっていて、顔はわからない。そうはいっても、何かよからぬ企たくらみでもなければ、あんな場所でマリアローズたちの動向をうかがったりはしないだろう。

　さらに、マリアローズが動いたのを見て、連中が反応した。もう決定的だ。おそらく最近、巷ちまたで流行している急襲レイド略奪者ルーターだろう。その手口は、身なりのいい侵入者クラツカーに狙ねらいを定め、主に標的が異界生物フリークスと交戦しているとき、どさくさにまぎれてこれに襲いかかり、両方を一挙にしとめて何もかもを強ごう奪だつする。いわば火事場泥どろ棒ぼう的な強ごう盗とう殺人だ。

　これは、でも、結構まずい。

　連中のうち何人かが弩いしゆみを構えようとしている。残りは壁から滑すべり降りる態勢だ。彼ひ我がの距きよ離りは約十五メーテル。それなりの弩であれば、板金を貫つらぬき通すことも十分可能

なはずだ。

「ええい、もう……！」

　こうなると、マリアローズがとりうる選せん択たく肢しは多くない。迷う余地もなく、猶ゆう予よもないので、即そく実行に移した。ベルトの脇に並ぶ小さなホルダーのカバーを外し、その中から左手で小こ瓶びんを抜ぬきとりざまに投とう擲てきしたのだ。

　すかさず腰を落として偽にせ劫ごう火かを鞘さやに収めると、十二、三メーテル先の地面に落ちて割れた小瓶が、轟ごう音おんを立てて爆ばく発はつした。

　けれども、冷静に見れば、実はたいした規模の爆発ではない。直撃を食らえばさすがにただではすまないはずだが、防毒面ガスマスク集団は直接的な被ひ害がいをこうむっていないだろう。せいぜい爆風と閃せん光こうで視界を遮さえぎられて、行動を抑よく制せいされただけに違いない。一発目の目的はそこにあったのだから、それで十分だ。

「カタリ、次で突入！」

　マリアローズはそう怒ど鳴なりつつ、左右の手でそれぞれ二本ずつの小瓶を抜きとった。カタリの返事は待たず、体を弓のようにしならせて反動をつけ、投げた。狙うは左右にそびえるがらくたの壁だ。身長一・六メーテル足らず、筋力も標準以下のマリアローズだが、非力な体を制せい御ぎょすることにかけては自信がある。外さなかった。

　一瞬の間のあと、爆音とともに複数の悲鳴が聞こえた。

　再び偽劫火を抜いて走り出したマリアローズの横には、イノイチとロノニーを持ったカタリがぴったりとついてきている。

「こそこそ他人様のケツうかがいおって、おんどれら！　皆みな殺ごろしや！」

　芝しば居いがかったカタリの恫どう喝かつは、防毒面ガスマスク集団を追い払はらうことを意図してのものだろう。これが功を奏したのかどうか。爆発の前に壁から降りて無事だったやつも、すっかり浮うき足立って逃にげ腰になっている。あと一押し──のはずだったのだが。

「マリア、カタリ……！」

　突然、ユリカが鋭するどく叫んだ。やけに切せつ迫ぱくした声こわ音ねだった。もちろん、ユリカも状じよう況きようは把は握あくしているはずだし、意味もなくそんな声でマリアローズとカタリを呼んだりはしないだろう。つまり、何かよほどまずい事態が起こったということか。

「──くっ！」

　やむをえない。マリアローズは足を止めて振り返った。

　愕がく然ぜんとした。

　後ろで防毒面ガスマスク集団たちが喚わめきながら逃げてゆく気配がしたのは、おそらく同じものを見たせいだろう。連中を臆おく病びよう者とそしるのは簡単だが、マリアローズも彼らの判断はあながち間ま違ちがっていないと思う。

「な、な、何ちゅう……」

　カタリは手の甲こうで冷や汗あせをぬぐっている。

「まさか、こないなモンがおるなんてな」

「てゆうか、何だよ、あれ……」

　本当ならば、マリアローズとカタリは、それと交戦しようとしているトマトクンやピンパーネルを即座に援えん護ごしにゆくべきだろう。

　だが、何の心構えもなく、いきなりあんなものを目にしたら、誰だれだって呆あつ気けにとられる。躊ちゆう躇ちよせず真正面から挑いどみかかってゆくトマトクンたちが、むしろ異常なのだ。正気の沙さ汰たではない。トマトクンたちがまともじゃないなんて、とうにわかっていたことではあるが。

　それは──

　どうやって第三層と第四層を結ぶ坂道から出てこられたのか不思議なくらい、でかかった。

　下等竜りゆうも人間に比べれば大きいが、それにはまったく及およばない。

　実際、さっきまで猛もう火かに包まれてのたうち回っていた哀あわれな半死下等竜は、それに踏ふみ潰つぶされてもう動かなくなっている。ついでに、他ほかの半死者ハーフデッドどもも、ほとんどが押しのけられたり半死下等竜と同じ運命をたどったりして、無力化されてしまっていた。

　それには鱗うろこがある。

　首が長くて、後こう肢しで巨きよ体たいを支え、前肢は腕うでのように使うことができるようだ。

　頭部は顎あごが張り出していて、恐おそろしげな牙きばを持ち、黄色く濁にごった両りよう眼めに知的な輝かがやきはない。

　つい生きているのではないかと訝いぶかりたくなるが、やはり死後、偽ぎ魂こんに取り憑つかれたのだろう。よく見ると、体のいたるところに大小様々な傷があって、腐ふ肉にくを好む大脂羽蟲ゴツキーが群がっている。何ておぞましい。

「竜、やな……純血直系ピユアリニアルの、この大きさやったら、これでも幼竜、か……」

　カタリは生なま唾つばを飲み下して、「よっしゃ」と低く自分に気合いを入れた。

「行くで、マリアローズ！」

「う、うん」

　うなずきながらも、正直、気乗りしなかった。あんなやつを相手に、自分に何かできるのか。

　しかし、トマトクンはやつに接近して後肢に大たい剣けんを叩たたきつけたところだし、ピンパーネルなど身軽にやつの巨体を駆かけ上がり、たぶん頭部を目指している。彼らだけに戦わせておいて、指をくわえて見ているわけにもゆかない。

　では、何を──と考えようとしたとき、見上げた半死幼竜の頭に異物がまたがっていることに気づいた。

　いや、異物というよりも、あれはおそらく人間だろう。だが、かなり妙みようだ。偽魂に取り憑かれた人間の半死者ハーフデッドが、幼竜の半死者ハーフデッドを馬みたいに使うなんて、聞いたことがない。

　あれではまるで、魔ま導どう王時代に実在したという、竜を乗じよう騎きとして魔導王に仕え、戦場では千人力の働きをした竜騎士ドラグーンのようではないか。半死者ハーフデッドにそんな器用な真似まねができるのか。しかも、あの半死者ハーフデッド、黒っぽいフード付きのローブなど着て、あの身み振ぶり手振りは──

「魔術……？」

　まだ信じられなかったが、第六感は危険を告げていた。理性と直感のどちらを信用すべきか。迷っている暇ひまはない。マリアローズは駆け出したカタリの背中を斜ななめ右方向へ思いきり蹴け飛とばし、そのあとで左へ飛んだ。ローブの半死者ハーフデッドが魔術を完成させたのは、まさにその瞬しゅん間かんだった。

　最初に四方から風が吹ふいた。

　次に炎ほのおが生まれた。

　炎は風にあおられて巻き上げられ、たちまちのうちに火か炎えん旋せん風ぷうと化した。

　幸いだったのは、その火炎旋風がさして大きくなかったことだ。

　それでも、マリアローズとカタリは危なかった。あのままよけなければ、ぎりぎり火炎旋風の端はじっこに引っかかって、黒くろ焦こげになった上、空中に舞まい上げられていただろう。

　マリアローズは安あん堵どしつつ身を起こしたものの、不意に氷でできた死神の手で心臓を鷲わしづかみにされたような感覚を味わった。そうだ、サフィニアとユリカは？

　二人はちょうど、火炎旋風が発生したあたりにいた。もし、二人が魔術の兆ちよう候こうを感じとっていなかったとしたら──いいや、そんなことはない、あるはずがない。強く否定しながらも、不安をぬぐえないまま周囲に視線を巡めぐらせると、いた。少し離はなれた場所で、地面に絡からまって倒たおれている。ユリカもサフィニアも、何とか無事のようだ。

「よかった……けど」

　全然よくない。

　何だ、この緊きん迫ぱくしまくったやばい状況は？　予想していなかったことが立てつづけに起こるおかげで、少しでもミスをすれば即そく死しするような、危機に次ぐ危機。深層を目指しているというのに、第四層の手前でこんなに手こずっていてどうする？

「半魚人め」

　帰ってきた者さえ少ないということで、第四層以降の情報がとぼしいのはやむをえないとしても、この時点でここまで話が違うとなると、それこそ話が違う。

「あとでしっかり追つい及きゅうしてやる」

　が、それも目の前の難問をどうにかしてからのことだ。

　マリアローズはとりあえず、サフィニアとユリカのもとへ駆けよった。すでにトマトクンもいったん後退して、こちらへ向かっている。カタリもマリアローズにやや遅おくれてやってきた。ピンパーネルだけは、半死幼竜の首を伝って何とかローブの半死者ハーフデッドに接近しようとしているが、敵もそれを察しているようだ。半死幼竜がさかんに首を振って、ピンパーネルを振り落とそうとしている。いずれにせよ、かんばしい状況ではない。

「逃げよう」

　マリアローズは近づいてきたトマトクンに開口一番、そう進言した。

「これ以上、頑がん張ばって、どうにかなったとしても、ここでこんなに消しよう耗もうしちゃったら意味がないよ」

「うむ」

　トマトクンの決断は早かった。すでにマリアローズと同じことを考えていたのかもしれない。

「ピンプ、戻もどれ！　カタリとユリカはサフィニアを守りつつ撤てつ退たい、マリアと俺はピンプが来てから下がる。いいな」

「ま、待ってえな！」

　すかさずカタリが異議を唱えようとしたが、トマトクンは許さなかった。

「二度も言わせるな。行け」

「……了りよう解かい」

　こういうときのトマトクンは独裁者になる。逆らっても無む駄だだということはカタリもよくわかっているので、ユリカとともにサフィニアの脇わきについて渋しぶ々しぶ後退しようとした。

　ところが、そのサフィニアが急に足を止めてしまった。

「術が、来ます……大きい……精神攻撃マインドハックで、妨ぼう害がいを……」

「何だと」

　トマトクンが目を剝むいてローブの半死者ハーフデッドを見上げた。マリアローズもそれにならうと、確かにローブの半死者ハーフデッドは魔術の準備動作に入っている。どんな術かは見当もつかないが、キング・グッダー以外では唯ゆい一いつ、かつての魔導王に匹ひつ敵てきする魔力を持つという閃せん光こうの魔女マチルダの弟で子し、サフィニアの言葉を疑う理由はない。トマトクンも同意見のようだ。

「わかった。急げ、サフィニア。退くのはそれからに──」

「あ……」

「どうした」

「す……すみません……」

　サフィニアは下を向いて縮みこむように体を震ふるわせた。

「……もう、間に合いません……」

「な──」

　マリアローズは一瞬、トマトクンが動どう揺ようする珍めずらし

い場面を見られるかと思った。別にそれくらい余よ裕ゆうがあったというわけではない。きっと瞬間的に狼ろう狽ばいしすぎて、危機感やまともな判断力が少々減退してしまっていたのだろう。

　結局、トマトクンは冷静さを失わなかった。

「みんな、散れ！　的を分散させて──」

「いいえ……それは……」

「どうしてだ」

「……あれは……」

　サフィニアがそこまで言ったとき、ピンパーネルがマリアローズたちに合流して、ローブの半死者ハーフデッドは魔術を完成させた。

「召しよう喚かん魔ま術じゆつです……」

　その昔、恐怖のドレッド操り手スターと呼ばれた魔術士たちが生み出し、改良を加え、発展させていった魔術は、現在のように系統立てて分類されてはいなかったという。

　それは、しかし、現代魔術の方がすぐれていることを意味するわけではない。むしろ、逆だ。真に偉い大だいなる魔術の多くは忘れ去られ、失われてしまった。

　けれども、今もなお、世界を恐きよう怖ふで支配した頃ころの面おも影かげを残す魔術がいくらかある。

　そのうちの一つが、孫弟子持ちの魔導師マジスタでさえ使いこなせる者は少ないという、召喚魔術。

　異界とこの世界とを物理的に接続し、異界生物フリークスどもを召喚して使し役えきする、大いなる技わざだ。

「だけど、何で半死者ハーフデッド風情ふぜいが──」

　マリアローズはもう嫌いや気けが差してきた。どさくさに紛まぎれてローブの半死者ハーフデッドが投じていたのだろう。そこらに散乱する黄色と緑色が入り混じった小石が、乾かわいた音を立てて

弾はじけたかと思うと、時空の裂さけ目が出現した。

　五、六――全部で七、か。

　サフィニアが呻うめくように言った。

「七亡陣じん……乾いた国の……餓うえた土の亡もう者じやが来ます……」

「聞いた覚えがあるな」

　トマトクンがサフィニアをちらりと見て眉まゆ根ねをよせた。

「やばそうだ。やっぱり逃にげるぞ」

「……ご、ごめんなさい……わたしが、判断を……」

　今にも泣き出しそうなサフィニアの手を、ユリカが握にぎって引っ張った。

「反はん省しえいはあとにしましょう。しゃあ、早く」

「は、はい……」

「俺とピンプがしんがりをやる」

　トマトクンが大たい剣けんを構えて半死幼よう竜りゆうに向き直り、雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を両手に持ったピンパーネルがその右斜ななめ前についた。

「いいな。あとは全員、第二層までまっすぐ退け。状じよう況きよう次し第だいでは地上まで逃げろ」

　マリアローズは無言でうなずいて、先に走りはじめたユリカとサフィニアについてゆこうとした。踵きびすを返しかけたマリアローズの視界に、二本の斧おのを強く握り締しめ、うつむいて立ちすくむカタリの姿が入らなければ、そのままそうしただろう。

「カタリ！　何やってるんだよ！」

「わしは……」

　絞しぼり出すようなカタリの声を聞いて、すぐにぴんときた。柄

がらにもなく、カタリは色々と考えこんで、落ちこんでいるらしい。その内容についてもおおよそ見当はつくが、うじうじするなら時と場所を選んで欲しいものだ。だいたい、そういうタイプではないだろうに。

「わしは、じゃないだろ、この──」

　マリアローズはカタリの尻しりを容よう赦しゃなく蹴けり上げた。

「腐くされ半魚！」

「いづっ！」

　跳とび上がったカタリの腕を、マリアローズは強引につかんだ。

「もう今からきみは半魚人を通り越こして半魚だ！　次はただの魚！　その次は腐れ魚！　そうなりたくなかったら、急げ、この液状化脳！」

「お、思いっきし蹴るなや！　人のケツを何やと思っとる！　痔じになるがな！」

「知るか！　勝手になっちゃえ、僕のケツじゃない！」

「当たり前や！　どっからどう見てもこのケツはわしのモンや、わしのケツのことやさかい、わしが言うとるんじゃ、ボケ！」

「あーケツケツケツケツうるさい」

「アホ、ケツは重要やねんぞ、ケツがなかったらなあ──って」

　と、カタリがマリアローズの手を引き剝はがし、振ふり返りながらイノイチとロノニーを何かに叩たたきつけた。トマトクンの声が聞こえた。お前たち、いい加減にしろ、とか何とか。複数形ということはマリアローズも含ふくまれている模様で、まったくもって心外だが、その件についてはやはりあとで話をつけることにした方がよさそうだ。

　乾いた国の餓えた土の亡者。

　長たらしくてかなわないので、土の亡者と呼ぶことにするが、そ

いつは人間と似て非なるものだった。どう非なるものであるかというと、おそらく世界で一番醜みにくい人間でも、土の亡者よりはマシだろう。つまり、見る者に吐はき気を催もよおさせるほど、醜しゅう悪あくきわまりなかった。

　土の亡者は羞しゅう恥ち心しんがないらしく全ぜん裸らで、肌はだは黄土色をしており、顔は溶とけたように崩くずれている。それよりおぞましいのが、全身のいたるところに空いた無数の小さな穴だ。しかも、それらが絶えず不気味に開閉し、白はく濁だくした粘ねん液えきをにじませているとなると、これはもうたまらない。

　挙句の果てに、カタリが斧で斬きって作った傷から流れ出る血液らしきものは、透とう明めいで中にぐにょぐにょぷにぷにした紫むらさき色いろの物体が浮ういている、という──そこまで人間の生理的嫌けん悪お感を煽あおり立てて、いったい何が目的なのか。嫌がらせか。そうではないとしたら、どうしてそんな姿をしているか、誰だれかどうか納なっ得とくのいく説明をして欲しい。

　ある意味、最悪の敵だ。凄すさまじくやりあいたくない。できれば、見たくもない。ありえない立ち方をしているこの鳥肌をどうすればいい。

「……ぐ、グロすぎだ、この……！」

　マリアローズは、いったん飛び下がってから再びカタリに襲おそいかかろうとした土の亡者に、右籠こ手ての矢を浴びせた。土の亡者はこれっぽっちも怯ひるまなかったが、カタリもどうにかこれを迎むかえ撃うってさらに斧の二連撃を浴びせ、相手がまた距きょ離りをとったところで短く叫さけんだ。

「──今や！」

「言われなくても……！」

　当然、マリアローズもそのつもりだった。トマトクンとピンパーネルでさえ、早くも土の亡者どもを持て余し、後退しようとしているのだ。カタリが手傷を負わせた土の亡者を見れば、彼らがそうせざるをえない理由もわかる。

　土の亡者にカタリがつけた傷は、穴から出る粘液の作用によって、見る見るうちに塞ふさがりつつあった。最初の傷など、もう

すっかりない。もっと驚おどろいたことに、トマトクンの大剣で胴どう体たいを真っ二つにされた土の亡者すら、まるで痛みなど感じないかのように動き回っている。

竜騎士ドラグーン気どりのローブの半死者ハーフデッドは、半死幼竜の上で何を思っているのか。

わからないが、たぶん、マリアローズたちを嘲あざ笑わらっているに違ちがいない。

やつは遊んでいる。

その証しよう拠こに、ローブの半死者ハーフデッドとその乗じよう騎きである半死幼竜は、第四層へ通じる坂道の前から動いていない。来られるものなら、来てみるがいい。通ってみせよ。マリアローズたちに向かってそう言っているかのようだ。

先行したユリカとサフィニアを追いかけながら、マリアローズは歯は嚙がみしていた。

「くそっ……！」

たとえいかなる理由があろうと、相手が誰だろうと、何だろうと、馬ば鹿かにされるのは我が慢まんならない。屈くつ辱じよくというやつは本当に厄やつ介かいなものだ。消そうとしても簡単には消えず、忘れた頃ころにまたふと思い出して、胸むな糞くそが悪くなる。

──あいつはいつか必ずぶち殺す。

マリアローズは復ふく讐しゆうを心に誓ちかったが、その前にいくつかの試練を乗り越える必要がありそうだった。

土の亡もう者じやどもが追いすがってくる。少しでも足を休めれば追いつかれてしまいそうだ。こいつら、どこまでついてくる気だ。どこまで逃にげればいいのだ。まさか、地上までか。地上まで何メーテルあると思っているのだ。

もちろん、地上までたどり着くまでの間に、別の半死者ハーフデッドと出くわす可能性もある。そいつらが襲いかかってきたとしても、いちいち相手なんかしていられない。そんな余裕はないので、全部引き連れて走りつづけなければならない。さらに、他の侵入者

クラツカーと行き会ったりしたら、これまた大変だ。死にたくなかったら、彼らにも逃げてもらうしかない。地上までただひたすら駆かけつづける以外、どうしようもない。

　ああ、何て素す敵てきな話だろう。

　たぶん、土の亡者や半死者ハーフデツドだけでなく、他ほかの侵入者クラツカーたち大勢をも巻きこんでの、ちっとも楽しくなんかなくて、物もの凄すごく苦しい死の持久走大会、か。

　──悪夢だ。

Omenage 897 9th revolution 2nd day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区
〝モリー・リップス・アサイラム〟

chapter.4

酔狂

「──それで喧けん嘩かして、怪け我がをしたままここに来たわけね」

　闇やみの向こうから艶つやのある女の声が聞こえてきた。低い唸うなりのような音がかすかにして、固定された体がゆっくりと縦方向に回転してゆくのがわかる。

「まあ……ね。だって、頭にもくるよ。あの魚野や郎ろう、散々調べたけどあんなやつがいる話は聞いたことがないとか、言い訳ばっかりでさ」

「彼は皆みんなに謝らなかったの」

「ん、いや、謝ったことは謝ったんだけど……」

　マリアローズは金属とも陶とう器きともいえない材質でできた、面のようなものを頭部にかぶせられている。面は視界を完全に遮さえぎっているので、目をつぶらずとも何も見えない。白い被ひ術じゅつ衣を着た体が横たえられている台は、革かわ張りで冷たく、手足と腰こしのあたりが器具で拘こう束そくされ、身動きがとれないようになっている。

「謝れば何でも許されるってものじゃないでしょ。だいたい、あいつらって、ちょっと仲間に甘すぎるっていうか──や、もちろん、時と場合によってはシビアな部分もあるけど、結果オーライでさ。喉のど元もとすぎれば熱さ忘れるってやつ。何とかなったんだから、まあもういいよ、みたいなノリなんだよね。前々から、僕はそこに疑問があってさ」

「君、わりと細かいのね」

「そうなのかな。まあ、大おお雑ざつ把ぱすぎるのは確かにどうかと思うよ。あいつら、僕と違って色んな面で無理がきくもんだから、やることなすこと結構、適当だったりするんだよね。でも、それでとばっちりを受けるのはこっちだし。幸いまだ死んではないけどさ。あの調子だと、いつ最悪のケースが起こらないとも限らないよ。それで、もし頭でもかち割られて死んじゃったら、二度と生き返れないかもしれないわけでしょ」

「確かに、医術式にも、ナマグサ坊ぼう主ずどもの蘇そ生せい式にも、限界というものがあるわね」

「まったく、命がいくつあっても足りないって」

「でも、怪我の方はたいしたことないわよ」

　女の声が合図だったかのように、体が地面と水平になって面を外された。たちまち傾かたむきかけた太陽の光が雪崩なだれこんできて、妖よう艶えんという言葉を絵に描かいたような黒くろ髪かみの豪華系ゴージャス美女の顔が目の前に像を結んだ。

　純白の女性用ナース医術士服・ユニを着ていても、豊満な肉体から匂においで立つような色いろ香かは隠かくしようがない。

　いや、むしろ、その衣い装しようがよりいっそう彼女の魅み力りよくを引き立てているのか。

　自じ称しよう二十四歳。数百名の精神障害者や孤こ児じを保護し、適正以下の料金で機術士製作の医い療りよう機器と医術式による治療を行う施し設せつ、モリー・リップス・アサイラム──通称アサイラムの創設者にして代表者、モリー・リップスといえば、エルデンではちょっとした有名人だ。

「切り傷は右目の横と左手親指の二箇か所しよだけで、あとは打だ撲ぼくと捻ねん挫ざね。この程度なら、わざわざお金を払はらって医術式なんか受けなくても、唾つばをつけておけば治ってしまうわ」

「あ、そんなもの？」

　マリアローズはまだ診しん療りよう台に縛しばりつけられたままだ。こうしてすぐそばに立つモリーに見下ろされていると、何だか自分がご馳ち走そうにでもなったような気がしてくる。そういえば、侵入者クラツカー稼か業ぎようを始めて間もない頃ころ、評判を聞いてアサイラムを訪おとずれ、初めてモリーに手当てしてもらったときも同じことを思った。

　あれ以来、いったい何度、モリーに医術式を施ほどこしてもらっただろう。

　とてもではないが、多すぎて数えきれない。

　ただ、ＺＯＯに加盟してからは、ユリカがいるので、こんなことでもない限り、アサイラムで治療を受ける必要はなくなった。おか

げで、以前のように頻ひん繁ぱんにモリーと顔をあわせる機会はない。最近では、たまにアサイラムに立ちより、モリーの昼休みに付き合って一いつ緒しよにご飯を食べる程度だ。

「うーん……でも、まあ、せっかく来たんだし」

「そうね。だったら、こういうのはどうかしら。医術式よりいい治療法があるの。しかも、これは何とタダ」

　モリーが豊かな胸を持ち上げるように腕うで組ぐみをして、舌なめずりした。

　噂うわさによると、十年以上前にアサイラムができてから現在までの間に、モリーは千人斬りを達成したともいう。この超ダイナ肉マイ感トバ的デイー女医術士が何を考えているのか。嫌いやな予感はしたが、一応、訊きいてみることにした。

「どんな治療法？」

「すぐれものよ。何しろ、自然治ち癒ゆ力を高めるだけでなく、快感も同時にえられる。こんなに素す晴ばらしい治療法は他ほかにないわ」

「で、何をするわけ」

「舐なめ舐めするの」

　モリーはマリアローズの肩かたに指を這はわせながら目を細め、熱い吐と息いきを洩もらした。

「唾をつけておけば治ると言ったでしょう。けれど、自分で自分を舐めてもあまり楽しくないはずだし、舐めづらいところだってあるかもしれない。そこで、わたしの出番よ。わたしが傷だけでなく、全身を丹たん念ねんに舐め回して、ついでに君の埋うもれた性感帯を見つけ出してあげる」

「……相変わらず、忙いそがしくて欲求不満みたいだね」

「ええ。そうよ。そのとおり。悪い？　だから、後生よ。少しでもわたしを哀あわれと思うなら、おとなしく舐められなさい」

「頼たのむから普ふ通つうに治して」

　マリアローズが冷静に、だが、本気で懇こん願がんすると、モリーは舌打ちをして肩をすくめた。

「人を欲情させておいてお預け食らわせやがるなんて、そんな高等技術、どこで覚えたのかしら。初めて来たときは、そんなにプレイ上手じゃなかったはずだけれど」

「いや、プレイとかじゃないから。欲情させたつもりもないし」

「意識せずにわたしの性欲に火を点つけてプレイを遂すい行こうするなんて、本物ね」

「是ぜ非ひ、偽にせ物ものでありたいんだけど……」

「ふふ」

　モリーはお遊びに飽あきたのか、微び笑しようを浮うかべてマリアローズの胸に右手をあて、目を閉じた。

　内視系エンドスコープスと施術系オペレーションズに大別される医術式は、魔ま導どう王時代の終しゆう焉えんとともに一度は歴史の襞ひだに埋もれた古き魔術の一種だ。というか、実は現在、機術や錬れん金きん術じゆつ、医術式と称され、魔術と区別されている技術は、もとをたどればすべて魔術に収束するのだという。

　それゆえ、魔力として定義される内なる力を用いる点では、医術式も魔術と変わらない。

　ただ、基本的な医術式は呪じゆ文もんの詠えい唱しようを必要とせず、施術中は字じ面づらどおりの手当てをしているだけの格好となる。被術者は体の中をいじくり回されているような感覚に襲おそわれるので、慣れていてもかなり嫌なものだが、おそらくエルデン一有名な医術士であるモリーの腕は確かだ。しかも、きわめて迅じん速そくで、あっという間に終わってしまう。ユリカもなかなか上手な医術士だと思うが、残念ながらモリーにはかなわない。

　モリーの医術式はものの十秒ほどで完かん了りようした。

「ありがと。さて、と……」

　両手両足と腰の器具から解放されたマリアローズは、診療台から降り、診療室の隅すみにあるパーテーションで仕切られた更こう衣

いスペースに入った。着き替がえる前にあらためてボディスーツを見てみると、ついている傷は確かにすべて軟性金属エラスチカメタルのコーティングで止まっている。一つたりとも高耐Ｈ久性Ｄ複合Ｃ繊維Ｆの層には達していない。

　さすがは先進的な素材と製法、それに機能的なデザインで名高い、アンリミテッドＩＣＥのボディスーツといったところか。以前、使っていたハイ・アットＣの皮革製上下と比べて、性能は段だん違ちがいだ。そのぶん、値段の方も十倍以上したわけだけれども、それだけの価値はあると思っていいだろう。

　まあ、マリアローズも、クランに加盟する前は、防具に金をかけるなんて馬ば鹿からしいと考えていたものだが。

　体格が貧弱だから、どうせ頑がん丈じようなな鎧よろいなんて重くて着られないし、死ぬときは死ぬし、とか。どこか投げ遣やりで、いい加減な部分も結構あり、振ふり返るといかに自分の非力さに甘えていたのか思い知らされる。

　自分に言い訳をして、全力をつくすことから逃にげていたのだ。

　孤こ高こうを気どり、自分の殻からに閉じこもって、逃げていることにさえ気づかなかった。

　でも、今は違う──のだろうか。やはり、多少変わったかもしれない。具体的にどこがどう変わったと自覚しているわけではないが、あの頃の自分と今の自分が出会ったら、きっと二人とも「きみは僕じゃない」と言うだろう。

　そんなことを考えながら着替えをし、荷物を持って診しん療りよう室に戻もどると、モリーは窓まど際ぎわに設しつらえられた机に向かって何やら事務仕事をしていた。馬鹿なやりとりをしていると忘れてしまいそうになるが、モリーはこのアサイラムの代表者で、超ちようがつくほど多た忙ぼうの身だ。モリーにしか処理できない仕事が山のようにあるのだろう。

　それでも、モリーは最初に偶ぐう然ぜん、大おお怪け我がを負ったマリアローズの治療を担当してから、以後、決して他の医術士に任せようとしない。

　モリーは配慮してくれているのだ。

　医術士には守秘義務があって、被術者のプライバシーはみだりに他言しない旨むねの戒かい律りつがあるらしいが、誰だれもが掟おきてに忠実なわけではない。それに、公言せずとも、その医術士には知られてしまうかもしれない──できれば、知られたくないことを。

　だったら、モリーに知られるのはどうかといえば、なぜだかこれが全然平気だった。

　多少口が悪くて、エロいし、忙しいと何日も風ふ呂ろに入らなかったりするが、モリーにはすべてをやわらかく包みこんで守ってくれるような懐ふところの深さがある。

　モリーがアサイラムの孤児たちに母と慕したわれているのも、そのせいだろう。

「じゃあ、モリー」

「ええ」

　モリーは顔を上げて、ゆっくりと首を回した。

「名前が呼ばれるはずだから、待合室で待っていなさい」

「うん」

　マリアローズがうなずいて背を向けかけたとき、モリーの顔に疲つかれたような微笑が浮かんだ。

「人は──」

「え？」

「人は、変わってゆくものね」

「……いきなり、どうしたの？」

　マリアローズが訝いぶかって眉まゆをひそめると、モリーはかすかに首を振り、机に頬ほお杖づえをついた。

「何でもないわ。ただ……そう、肩かた肘ひじを張って一人で無理をしていた君も、本気でぶつかりあえる相手を見つけたのね。いい

ことだと思うわ。人は一人で生きてゆけるほど、強くできてはいないから」

「そう、かな……うん、そうかも」

　だけど──と、マリアローズは思った。それはそうなのかもしれないが、では、モリーはどうなのだろう。モリーを支え、寂さびしいときに慰なぐさめて、苦しいときに助けてあげられる人はいるのか。

　聞くところによると、アサイラム創設時、モリーのかたわらにいた数名の男女は、すでに一人も残っていないという。現在のアサイラムには、モリーの手足となる部下はいても、同格どころかナンバー２さえいない。もし今、モリーに何かあれば、アサイラムはまず間違いなく瓦が解かいしてしまうだろう。



　泣き言など決して言わない人だが、モリーもつらいのかもしれない。

　そうはいっても、マリアローズに何ができる？　モリーにしてあげられることなんてあるのか。何を、どうやって？　だいたい、モリーは求めているのか。マリアローズごときにどうかしてもらいた

いなんて、あのモリーが思うものか。

　マリアローズが下した唇くちびるを噛かんで突つっ立っていると、モリーは椅い子すを回転させて窓の外へ目を向けた。

「またいらっしゃい」

「あ……うん、また──」

　マリアローズは診療室のドアをくぐる前に、もう一度、モリーの様子をうかがった。

　夕ゆう陽ひに照らされたモリーは、気のせいか、何だかいつもより小さくて、頼たよりなげに見えた。

「また、来るよ」

　そう告げてドアを閉めるとき、妙みような具合に胸が痛んだ。情けないというか、悔くやしさらしきものが頭をよぎって、どういう人間だったらモリーの力になったり元気づけてあげられるだろうかと思った。

　意外に、トマトクンとか。あの男、変人ではあるのだが、ああ見えて結構、物知りだったりして、強さの方は折り紙つきだし、頼りにはなる。決断力もあって、悪あく趣しゅ味みな格好は別としても顔は悪くなく、モリーの審しん美び眼がんにも──

「……って、何、考えてんだろ、僕」

　マリアローズは深々とため息をつき、その向こうにモリーがいる診療室のドアを見つめた。

　いずれにしても、余計なお世話に違ちがいない。モリーはマリアローズごときに心配されるほど落ちぶれていないはずだし、自分の頭の蠅はえを追えという言葉もある。「本気でぶつかりあえる相手を見つけた」のはいいが、本気でカタリと口論した結果、いつの間にかマリアローズが一方的に罵ののしる形になり、収拾がつかなくなって飛び出してきたのだ。

　はっきりいって、少々気まずい。明日もＺＯＯのアジトに顔を出すとして、カタリに会ったらどうすればいいのか。

　経験的に、何事もなかったかのような態度でいればいいのだと、わかってはいる。

　仮に、何かの弾はずみでまた言い争いになったとしても、そのときはそのときだ。それくらい日常茶さ飯はん事じだし、わざわざ気に病やんでいても仕方ない。自分は結局、そうするだろうとも思う。

　だが、それにも多少の努力は必要だ。正直、ちょっとだけ気が重くもある。

「だからって、自分の言いたいこと我が慢まんするのもね……」

　我慢できる性しよう分ぶんでもないし。

　まあ、何とかなるか、と待合室へ向かおうとしたときだった。

　いきなり横合いから何かがぶつかってきた。猛もう烈れつな勢いだった。そいつは豪ごう快かいにマリアローズを巻きこんで、盛大にすっ転んだ。

「──あ、あわわわ、ご、ごごごめんなさいいぃぃ……！」

「う……」

　しかも、マリアローズがクッションになってやった形で、理り不ふ尽じんなことにそいつの方がダメージが少なそうだ。さらに、黒っぽいローブを着て、同じ色の三角帽ぼうをかぶり、背中に大きな剣けんを背負っているという妙ないでたちのそいつを、マリアローズは知っていた。

　自然ではありえない、何らかの薬物による副作用の産物と思おぼしき、水すい彩さい絵の具を塗ぬったような紫むらさき色いろの髪かみの毛と目。ちんまりして薄うすっぺらい体つき。

　見間違えようがない。マリアローズが知る限り、そんなやつはこの地上におそらく一人しかいないはずだ。二巡じゆん月げつ余り前、鶏にわとりくさいアンダーグラウンドＤ５のメリクル第二迷宮で初めて会ったときから、このちんちくりんは印象も服装も変わっていない。

「いっつぅ……何できみがこんなとこにいるんだよ、コロナ……て

ゆうか、どいて」

「はうっ！　こ、これはマリアさん！　お、お元気でしたでしょうか。コロ、あ、わたしはちょっと元気じゃないです」

　どうやら、出会い頭がしらで他人ひと様さまに迷めい惑わくをかけるのは、このコロナという魔ま術じゆつもろくに使えない魔術士の習性らしい。

　マリアローズはコロナと初対面の際にも、いきなりとんでもない目に遭あって死にかけた。いや、あれは明らかにコロナが引き起こした人じん為い的な事故だったので、殺されかけたと言った方が正しいだろう。侵入者クラツカーをやっていれば、他人のせいで危険にさらされることなど日常茶飯事だとはいえ、コロナの場合は度がすぎていた。何せ、侵入者クラツカーなら心得ていなければならないはずの禁忌タブーを軽々と破るわ、それで異界生物フリークスの大群を呼びよせるわ、挙句、マリアローズを巻きこんで大怪我をさせておきながら、結果的にコロナ自身はほぼ無傷で切きり抜ぬけてしまったのだ。

　そんなろくでもないやつを、今となってはたいして恨うらみもせず、知人の末席として遇ぐうしてやっているなんて、我ながら物ものの凄すごい心の広さにびっくりする。

　ただ、当然、何事にも限度というものがある。

「こんな体勢でのんびり挨あい拶さつするやつがあるか！　早くどけってば！」

「し、失礼しました！　━っと……」

　コロナはすぐに起き上がろうとした。ところが、途と中ちゆうで全身の力が抜けてしまったかのように、再びマリアローズに覆おおいかぶさってきた。

　まったく、何をやっているのだか。マリアローズは無理やりコロナを引き剝はがしてしまおうとも思ったが、どうも様子がおかしい。見れば、コロナはやけに赤い顔をしていて、目は潤うるんでおり、息も荒あらいではないか。

「きみ、もしかして━」

　コロナの額に手をあててみると、やはり熱い。というか、熱すぎる。よくもこれでダッシュ禁止のアサイラムの廊ろう下かを元気に走り回っていたものだ。

「風邪かぜでもひいてるの？　だったら、走ったりしちゃダメだろ。何やってるんだよ、ばか」

「あ、うう……えと、その、ですね、こ、これには深い事情がありまして……」

「事情？」

　マリアローズは首を傾かしげながら、コロナをゆっくりと脇わきにどけてから立ち上がった。

「事情だか何だか知らないけど、ここはぎゃあぎゃあ騒さわいでいい場所じゃないんだ。病人とか怪け我が人とか、いっぱいいるんだからさ。いくらきみが常識知らずのお子様いんちき魔術士でも、それくらい──」

　と、分別顔でコロナに説教をたれていたら、廊下の向こうから若い男の声が響ひびいてきた。

「コロナ……！　てめえ、こんなとこにいやがったのか！　おい、そこのあんた！」

「へ？」

　声のした方へ目をやると、そこまで全力疾しつ走そうしてきたらしい男が、立ち止まってマリアローズを指差した。

「あ！」

「あ」

　見覚えのある男だ。髪の毛は黒く、東方系の顔立ちをしているのに、目は銀色だから少々珍めずらしい感じがする。剣けん士し風の装よそおいだが、初対面のときと比べれば、見違えるほど垢あか抜けた。いつも保護者面づらでコロナにくっついていて、名前は確か、レニィとかいったか。年ねん齢れいはマリアローズと同じか少し下くらいで、やたらと皮肉っぽく、不ふ機き嫌げんそうな顔つきが妙に印象的だ。

　そのレニィが眉をつり上げて怒ど鳴なった。

「こら、コロナ！　てめえ、逃げるんじゃねえ！　おい、そこのあんた、マリアローズ！　コロナのやつをつかまえろ！」

「何で僕が──」

　命令されなくてはならないのか。マリアローズは腹を立てながらも、一応、コロナがいた場所へ視線を向けると、いない。周囲を見回して捜してみたら、コロナは何と廊下の窓を開けてそこから中庭に飛び出したあとだった。

　もとから小さいコロナの背中が、よりいっそう小さく、遠くなってゆく。

「結構、元気そうだね……」

「畜生シツト！」

　レニィも手近な窓を引き開け、窓まど枠わくに足をかけた。そのままコロナを追っていっただけなら、呆あきれるだけですんだはずなのだが、どうもこのレニィという男、余計な一言を言い足してわざわざ恨みを買わないと気がすまない性質タチらしい。

「あの馬ば鹿かめ、注射が嫌いやだってだけで、ちょこまかちょこまかと逃にげ回りやがって！　だいたい、あんたが鈍どんくさいからまた逃がしちまったんだ！　せっかくあの馬鹿をひっつかまえるチャンスだったってのに、クソが……！」

「ど、鈍くさいって──」

　たいして知った仲でもないのに、そんな言い草があるだろうか。

　しかし、マリアローズが抗こう議ぎしようとしたときにはもう、レニィは中庭に出てしまっていた。マリアローズにしてみれば、憤ふん懣まんやるかたないといった感じだが、文句を言うためだけに連中を追いかけるのも阿あ呆ほらしい。

「まったく……注射が嫌で？　子供じゃないんだから──って、ちっこいし、子供みたいなもんか。だけど、あのレニィってやつも、何がよくてコロナの世話なんて焼いてるんだか……」

　きっと特とく殊しゆな趣しゆ味みの持ち主なのだろう。それは人それぞれだし、好きにすればいい。が、この全開にされた窓は、いったい誰だれが閉めると思っているのだ。

　いや、別に、マリアローズはアサイラムの関係者ではないので、放ほうっておけばいいのだけれども、見て見ぬふりをするのは何だか寝ね覚ざめが悪い。昔から部屋はきっちり整理整せい頓とんしないと落ち着かない性格で、最初は全部閉まっていた窓が中ちゆう途と半はん端ぱに一部、開いているとなると、どうしてもそのままにはしておけなかった。

　やむをえず、マリアローズはまずコロナが開けた窓を閉め、それからレニィが開けやがった窓の方へと足を向けた。

　待合室のある方向から歩いてくるのがやつだということは、二つめの窓を閉め終える前に気づいていた。

「まいど」

　マリアローズから三メーテルの位置で立ち止まり、しばらく迷った挙句、かけてきた声がそれだった。

　まあ、マリアローズも黙だまって待っていたわけで、返事をしないのも大人げないだろう。

「何だよ、魚」

「とうとうただの魚に降格したんかい……」

　カタリは渋しぶい顔をして、何事か言おうと口をぱくぱくさせた。それこそ、魚が水中で餌えさを食べているみたいだ。そんなことを考えていると、マリアローズはおかしくなって、思わず吹ふき出してしまった。

「なっ、何でいきなし笑いよるんや！」

「だ、だってさ、あんまりにもきみが魚に似てるもんだから」

「どこがやねん！　前から思うとったけど、ホンマのとこ、言うほど似とらんやろが。せっかくこっちから折れたろうと、わざわざ出向いたっちゅうのにやな」

「そのわりには、何だか態度がでかいじゃないか」

「笑うからや！　そないにされたら、下手に出る気もいっぺんに失うせるわ！」

「心が狭せまいね」

　マリアローズは肩かたをすくめてみせてから、一つため息をついた。

「──で、今日の失敗について、きみなりに反省はしたわけ？」

「おう。目一いつ杯ぱいしたで」

　カタリはなぜか自じ慢まんげに反り返らせた胸を拳こぶしで叩たたいた。

「そこで、や。その反省を生かして、明日、もっかい喪そう神しん街へゴーッ！　ちゅうわけや！」

「どうしてそうなるんだよ……」

　マリアローズは開いた口が塞ふさがらなかった。

　カタリはいつも、古い文ぶん献けんやら何やらを漁あさって一生懸けん命めいに調べ事をするものの、緻ち密みつに徹てつしきれない性格が祟たたっているのだろう。調査にはどこか穴があり、結論は強引、行動は最終的に行き当たりばったりで、マニアックな執しゆう念ねんだけが空回りしている。毎度毎度それに振ふり回されるマリアローズを含ふくめたＺＯＯの面々こそ、いい面つらの皮だ。

「第一、反省を生かすとかって簡単に言うけど、どうやって生かすのさ。きみのその魚並みの脳で、だよ？　本当に、何か考えてる？　まさか、失敗したままじゃ悔くやしいからとか、またそれだけの理由で言ってるわけじゃないよね？」

「アホぬかせ。ちゃあんと考えとるがな。たとえばやな、ほれ、第四層以降の情報が錯さく綜そうしとって、何がどうなっとるんかようわからんっちゅう件があったやろ。あれについては、一つの仮説を立てたんや」

「どんな仮説だよ」

「つまり──」

　カタリはとっておきの秘密でも明かすように、マリアローズに魚顔を近づけて声をひそめた。

「全部とは言わんまでも、たいがいの情報が実は嘘うそなんかやない。ホンマなんや。それがどういう意味かっちゅうと、喪神街の第四層以降は日々変化しとる。作り替かえられとるわけや」

「ふうん？」

　それは、だが、カタリが言い出したにしては、一考の余地がある仮説だと思った。

　何せ、召しよう喚かん魔ま術じゆつまで使いこなしてしまう、あのローブの半死者ハーフデツドみたいなやつがいるのだ。何ものかが喪神街内部の構造を意図的に変化させていたとしても、驚おどろくには値あたいしない。そもそも、アンダーグラウンドはもとから今の姿だったわけではなく、異界生物フリークスたちによって作られてできたのだから、それほど突とつ飛ぴな仮説ではないと考えることもできる。

　ただ、もしそれが正しいとするなら、だ。

「うーん……でも、それって、少しだけ残ってる記録なんかも全然あてにならなくて、深層まで行くのはとてつもなく大変だってことじゃないの？」

「否定はせえへん──が」

　カタリは重々しく首を縦に振ったかと思うと、突然、離はなれ気味の両目をかっと見開いて両の拳を握にぎり締しめた。

「それでこそ！　それでこそ、や！　稀少物レア・収集家ハンター・魂だましいが燃えに燃えるっちゅうもんや！　考えてもみい。わしらが求めとるんは、その筋では誰でも知っとるあの劫ごう火かやで。世界にたった一振りしかない、三億ダラー以上の価値があるお宝をゲットするためには、それ相応の艱かん難なん辛しん苦くっちゅうもんがあるはずや！　ええ、そうは思わんか、マァァリアロォォーズッ！」

「う、ちょっと説得力あるかも……」

　マリアローズは一いつ瞬しゅん、納なつ得とくしかけて、すぐに正気を取り戻もどした。というより、実際はツッコミ前のお約束みたいなものにすぎなかったわけだが。

「──って、あるか！　ばか者！」

「あげしっ」

　カタリはマリアローズに後頭部を叩かれ、飛び出しかけた目玉を眼がん窩かに押し戻す仕草をしたあと、今度は泣き落としにかかった。

「そんな冷たいこと言わんといてえな、マリアローズ。お願いや。な、ええやろ。ええと言うてくれや。頼たのむわ。な、明日、喪神街に。みんな、一いつ緒しよに来てくれるて言うとるんやで」

「ええいもう、気持ち悪い、くっつくな！」

　マリアローズは足にすがりついてくる半泣きのカタリを押しのけ、蹴けったくりながら考えた。

　別に、あらためて三億ダラーに惹ひかれたわけではない。焼バきーつニくンしグ刺しレイ貫く剣ピア〝劫火〟はその名のとおり刺し突とつ剣けんで、ＺＯＯの面子メンツの中では他に使う者がいないため、入手した際はマリアローズがもらえることになっている。確かに、その魅み力りよくには抗こうしがたい。そんなことは最初からわかっている。もとより、劫火が欲しくてＺＯＯの面々と一緒にアンダーグラウンドへ潜もぐったのが、すべての始まりだったのだ。

　そうではなくて、気になったのは、マリアローズ以外の連中が明日も喪神街へ行くことを呑のんだ、というくだりだった。あんな目に遭あったというのに、まったくもって、何て酔すい狂きような。

　だが、過去の経けい緯いを思うと、笑い飛ばすことはできない。

　彼らが酔狂でなければ、今いま頃ごろ、どうなっていたか。

　きっと、どうにもなっていなかった。

　マリアローズがトマトクンと巡めぐり会うことはなかっただろうし、当然、ＺＯＯにも加盟していなかったはずだ。カタリとも、ユ

リカとも、サフィニアとも、ピンパーネルとも知りあう機会はなかった。もしどこかで会っても、すれ違ちがうだけで終わっただろう。マリアローズは単独の侵入者クラツカーとして、地味で寂さびしい──そう、一人寂しく暮らしているか、どこかでしくじって、これもまた一人寂しく死んでいたはずだ。

「……ふう」

　お互たがい様、というやつか。

　まあ、劫火は当然、喉のどから手が出るほど欲しいわけだし、あのローブの半死者ハーフデツドにやられっ放しというのも、精神衛生上よくない。マリアローズはカタリを蹴りまくっていた足を止め、真しん紅くの頭とう髪はつをかき混ぜるように指で梳すいた。

「とりあえず、ここの治ち療りよう費、代わりに払はらって。もともと、きみの杜ず撰さんな計画のせいで怪け我がしたんだし。明日のことは、そのあとで考えてやらないこともない、かな」

Omenage 897 9th revolution 2nd day

サンランド無統治王国首都エルデン第六区

〝モリー・リップス・アサイラム〟

chapter.4+

お注射

　十五歳にしては発育不全で平面的な体が、震ふるえるというより小刻みに振しん動どうしている。

　あまり力を入れると壊こわれてしまいそうなその薄うすい肩かたを、レニィが後ろから押さえつけていた。

「いいか、もう逃にげようなんて考えるなよ」

「……で、ですが……」

　三角帽ぼうを脱ぬいだコロナの目には、注射器に何やら液体を注入して準備を整えている中年の男性医術士が、死神のようにでも見えているらしい。

「お注射だけはコロ、あ、わたし、昔からとてつもなく苦手でして」

「苦手も糞くそも関係あるか。恨うらむなら、馬ば鹿か高い熱出しやがった自分自身を恨め。だいたい、お前、自分が何度あるかわかってるのか。四十度六分だぞ。放ほうっといたら、ただでさえ出来のよくねえその頭が、もっとぱーになっちまうかもしれねえんだ。それなのに、走り回ったりしやがって。少しは考えろ」

「ご、ごめんなさい……で、でも」

　顔だけ振り向かせたコロナの両目には、涙なみだがたまっていた。

「幼少のみぎりより、本当に、とっても、お注射だけは嫌きらいで……どうしても我が慢まんしないといけないでしょうか。何か他に方法は……」

「俺に訊きくな。専門家に尋たずねろ。で、どうっすか、そのあたり」

　レニィに水を向けられた気弱そうな医術士は、いっそう弱りきった様子で後ろ頭を掻かいた。

「悪いけど、この症しよう状じようだと注射が一番だね。医術式は万能じゃない。特に解熱や鎮ちん痛つうなどについては、医術式を用いるよりお薬の方がよく効くんだ」

「だとさ。わかったら、もう諦あきらめろ」

　レニィがにべもなく言うと、コロナは口をへの字に曲げて、これ以上ないくらい情けない表情をした。

「わうう……」

「そんな顔したって、ダメなものはダメだ」

「はっ！　そ、そうです、いつかお師し匠しよう様が、何事も最後まで諦めてはいけない、と……」

「たぶん、こういうときにはお師匠様も別のことを言うんじゃねえか。人生、諦めが肝かん心じん、諦めは心の養生ってな」

「そのようなことは、決して」

「いい加減にしろ。ああ、もういいんで、ちゃっちゃとやっちゃってください」

　レニィにそう告げられた医術士は、一つうなずいて、コロナのローブの袖そでをまくり上げようとした。

「さあ、すぐにすむから──」

「へ、変態！　ここに変態さんがおられます！　コロナ、剝むかれてしまいますっ！」

　暴れるコロナをおとなしくさせるのはレニィの役目だ。何しろ、コロナは魔ま術じゆつもろくに使えない魔術士でやせっぽちだが、妙みような火事場の馬鹿力があったりする。体格のよくない四十年配の医術士一人では、どうにもなるまい。

「こら、動くな！　殴なぐるぞ、てめえ！」

「ぼ、暴力反対です！　いやっ、やめて、あんっ」

「変な声出すんじゃねえ、気持ち悪いだろうが！」

「おーかーさーれーるー……！」

「てめえみたいなガキ、誰だれが犯おかすかよ！」

　コロナは一いつ般ぱん常識もろくすっぽ身につけていないくせに、くだらない下世話なことだけはよく知っている。何でも、兄弟子に、といっても女だが、やたらとそういう話を好むやつがいて、その影えい響きようで色々と覚えてしまったらしい。

「痛ッ、嚙かみやがったな、この馬鹿！」

「だって、レニィさんが見境なくコロナを襲おそおうとするからでしょや！」

「俺はそこまで見境なくねえ。これでも女の好みにはうるさい方なんだ。てめえなんざ願い下げだ！」



「ひ、ひどいです、コロナも女の子ですのにっ」

「うっせえ。だいたい、何でまたてめえは注射なんかが怖こわいんだ。あんなもの、最初、ちくっとするだけでたいして痛くもねえだろうが！」

「そ、それは……」

　コロナは医術士が手に持つ注射器を一いち瞥べつしてから、怖おぞ気けをふるったように顔をそむけた。

「さ、先っぽの、とんがっている部分がどうにも耐たえがたく……あれがコロナの皮ひ膚ふを突つき破り、血管に侵しん入にゅうして、謎なぞの液体が体の中に流しこまれるだなんて、もう、見ているだけで……なんまんだぶなんまんだぶ……」

「あ？」

　レニィは首をひねりながらも、この隙すきを逃のがさずコロナを後ろから羽は交がい締じめにした。コロナはまた抵てい抗こうしようとしたが、その前にレニィが一つ解決策を提示した。

「何だ。針が怖いっていうなら、見なきゃいいじゃねえか。痛さは別に平気なんだろ」

「ふえ……？」

　コロナは意表を突かれたように目をしばたたいた。

「え、あ、はい、痛いのは修業などでわりと慣れていますし、さほど」

「だったら、目をつぶってりゃいいだけだ」

「うう……ですが、怖いもの見たさといいますか、思わず見てしまうんですよ」

「だあぁ、糞が」

　いちいち面めん倒どうなやつだ。レニィは仕方なく自分の手でコロナの目を覆おおってやった。

「──これならいいだろ」

「あ……ええと、その……」

　コロナはこくりと顎あごを引くようにうなずき、ようやく医術士に向けて右みぎ腕うでを差し出した。

「はい……それでは、お願いします」

「ったく……」

　たかが注射一本のために、どれだけの時間を費ついやしたことか。

　レニィはだいぶコロナのペースに慣れてきたからまだいいが、生き真ま面じ目めそうな医術士などは、憔しよう悴すいしきっていてやや気の毒だ。そういえば、さっき廊ろう下かで会ったあの男か女かよくわからない赤毛にも、どさくさに紛まぎれて暴言を吐はいたような覚えがある。まあ、あのマリアローズという男女については、第一印象が最悪だったこともあって、あまり良心が咎とがめたりはしないが。

「それじゃ、少しだけちくっとするよ」

　コロナの袖をまくって消毒を終えた医術士がそう言った瞬しゆん間かん、コロナの全身が硬こう直ちよくするのがわかった。

　レニィが少しだけ手と腕に力をこめると、コロナがか細い声を洩もらした。

「……い、痛く……しないでください……」

「ばっ、おかしなこと言うんじゃねえ！」

「ほ？　コロナ、何かおかしなことを？」

「いや……別に」

「変なレニィさんです」

「てめえに言われたかねえよ……」

「あの、そろそろ本当に注射させてもらえませんか……」

Omenage 897 9th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD9
〝喪神街オレストロ〟

chapter.5

雪辱罠

　アンダーグラウンドに入ったときから、周囲に気を配って妙な連中が近くにいないことは確かく認にんずみだった。予断は一いつ切さい許されないということで、何が出てきても対処できそうな作戦も立てた。第三層までは力をセーブして、サフィニアには一度も魔術を使わせなかったし、マリアローズも偽にせ劫ごう火かのみで切り抜ぬけた。

　だが、準備は万全、とはいいきれない。第四層以降がどうなっているのかは結局、不明で、臨機応変に対応してゆくしかなさそうだからだ。

　もっとも、現在のように地図が出回ったり伝聞が広まったりする前は、アンダーグラウンドのどこに潜もぐってもそんな状態だったに違ちがいない。当時と比べれば、先人が流した血と汗あせの量のぶんだけ、今の侵入者クラッカーは楽をしている。最近では未み踏とう部分への探たん索さくもほとんど進んでいないというし、いわば親の事業を引き継ついで維い持じしているのみの状態なわけだ。

「そこでわしらが深層に到とう達たつして、あのレディ・麟霊から劫火を奪うばってみい」

　今朝、Ｄ９の出入口前でカタリが力説したところによると、こうなるらしい。

「これは快挙やで！　何せ、ここ数年、魔ま導どう王時代の名の知れとる秘宝もとんと発見されとらん。喪そう神しん街深層にいたっては、十年以上前に入りこんだ者がおるっちゅう記録が最後で、それ以降は第四層までの話がちらほらといったところや。そんな停てい滞たい気味の侵入者クラッカー業界にわしらが新風を吹ふきこむことになって、これを機にＺＯＯの知名度もグンッ！　と、アーップッ！」

　別に知名度なんてどうでもいいような気もするが、以前、トマトクンが木札を持って勧かん誘ゆう活動をしていたこともあるくらいなので、このクランにも一応、拡大志向はあるようだ。

　ただ、肝心の園長マスターの格好がアレだし、他ほかの面子メンツにしても、半魚人だったり、不幸娘むすめだったり、元殺し屋
だったり、とてつもなくかわいらしいとはいえ、若作りしすぎの二十三歳だったりで、どうにも敷しき居いが高い。人数も少ないし、ＺＯＯがあまり知る者とていない地味なクランであることは間違い

ないだろう。

　しかし、もしそのマイナーなクランが深層にたどり着いて、実質、喪神街を制せい覇はしたとなれば、確かにこれは大ニュースだ。

　ついでに、そのクランがつい先日、土の亡もう者じやや半死者ハーフデツドを引き連れてＤ９出入口まで逃とう走そうし、多数の侵入者クラツカーに大小様々な被ひ害がいを与あたえたことも同時に広まり、大顰ひん蹙しゆくを買うかもしれない。

　楽観的で能天気なカタリや、鷹おう揚ようというか適当なトマトクンは、その点について全然考こう慮りよしていないようだが。

「──ここまで来たら、やるしかない、か……」

　焼バきーつニくンしグ刺しレイ貫く剣ピア〝劫火〟のこともあるし。というか、それがそもそもの目的であって。

　そんなわけで、マリアローズは喪神街オレストロ第三層の一角に身をひそめていた。

　もちろん、トマトクンたちＺＯＯの面々も一いつ緒しよだ。この場所の少し先が曲がり角になっていて、がらくた製の壁かべに挟はさまれた幅はば六メーテルほどの道を約三十メーテル進めば、第四層へと通じる坂道がある。

　昨日は、カタリのせいでここから全員が一緒くたに坂道へ向かう羽目になり、しくじった。カタリが言っていたとおり、二十か三十の半死者ハーフデツドを蹴け散ちらせばいいだけなら、それでも何とか突とつ破ぱできてしまっていたはずだ。しかし、情報が錯さく綜そうしている時点で、きな臭くささを感じとってもっと慎しん重ちようを期すべきだった。

　そこで、二度目となる今日だ。

　カタリが提案した作戦は、俗ぞくに引き狩りプルハンテイングといい、集団で行動する侵入者クラツカーの間ではそう珍めずらしくないやり方だった。

　簡単にいうと、引き役プラーと呼ばれる役割の者が、敵の注意を引いて自分を追わせる。引き役プラーはそのまま味方が待ち構える

場所まで敵をおびきよせて、皆みなでこれを一挙に殲せん滅めつする。

　ただ、基本的にこのやり方は、あまり頭が回らない生き物にしか通用しない。引き役プラーの動きを不ふ審しんに思い、これを囮おとりだと見破ってしまうくらい相手が賢かしこければ、何の意味もないからだ。

　が、多くの半死者ハーフデッドが、ある程度の大きさを持つ生き物の接近に反応し、半ば自動的に敵対行動をとる事実はよく知られている。半死者ハーフデッド同士で意思の疎そ通つうを図はかることもまずなく、連れん携けいは薄うすいようだ。昨日はそれらの習性なんかまるで無視していたが、そのあたりを利用して引き役プラーがうまく立ち回れば、相手の出方をうかがいやすくなるし、何より戦力を分断できるだろう。

　それに、あの半死幼よう竜りゅうに乗ったローブの半死者ハーフデッドが出てくるとしても、その前に他の雑魚ざこどもを片づけておくことができれば、ずいぶん戦いやすくなる。

　で、問題の引き役プラーには、カタリが立候補した。

「大だい丈じよう夫ぶかな……」

　マリアローズが不安をあらわに眉まゆをひそめると、カタリは勇んで自分の胸を叩たたいてみせた。

「任せとき。わしが引き役プラーっちゅうのがどんなモンか、しっかり見せてやるさかい」

「経験はあるわけ？」

「当たり前やがな」

　そう答えながらも、カタリの表情がかすかに曇くもった。

　マリアローズがあやしんで首をひねると、本人に代わってユリカがその理由を教えてくれた。

「いちゅだったかしら。結構、前のことだけど、あのときはたくしゃん敵を引きしゅぎて、慌あわてている間に追いちゅかれて死んだわね」

「ぐ……」

　言葉につまるカタリに、ユリカが冷たく追い討うちをかけた。

「死にマニア」

「いぎっ」

「みんな、大変だったのよ。死んだあなたを守りながら、敵をしとめて、死体をトマトクンの家まで運んで──」

　ちなみに、ＺＯＯにはトワニングという名の専属の坊ぼう主ずがいて、トマトクンの家に居い候そうろうしており、何とそこには彼専用の祭さい壇だんまである。一般的に、蘇そ生せい式には馬ば鹿かでかい祭壇と十名以上の坊主が必要だとされるが、トワニングはすべてを一人で行ってしまうのだという。

　仲間内では髭の愛あい称しようで呼ばれているトワニングは、どうも凄すごい男のようだ。

　ただ、侵入者クラッカーごっこには興味を示さず、こういった機会にはまず滅めつ多たに現れない。元ジェードリの大海王神に仕える僧そう正じようだったが、たった一人で悪漢数十人を殺害して破門された経歴を考えれば、かなり腕は立つはずだけれども、髭ひげ曰いわく「無益な殺せつ生しようは好まぬ」ということらしい。

　マリアローズは髭の世話になるつもりはないが、聞いたところによると、カタリは今までかなりの回数、蘇生式を受けているようだ。

　それで、死にマニア──ユリカが口にした言葉は、死んでも死んでも懲こりず、挙句の果てに蘇生式が成功しやすいよう、うまく死ぬ方法さえ身につけた愚おろか者に冠かんされる称号だ。

「わたしたちがどれだけ苦労したか、あなた、本当にわかっているの？」

「せ、せやけどな、わしもあの頃ころのままやないし……」

「とにかく、わたしはカタリが引き役プラーをやるのには絶じえつ対たいに反対よ」

ユリカにここまで言われてしまえば、カタリとしても強弁できまい。

結局、トマトクンがピンパーネルを指名して、これに異論を唱える者はいなかった。というより、この役目に誰だれが適任かといえば、どう考えても人間離ばなれして身軽なピンパーネルが第一候補となる。トマトクンの判断はこれ以上ないくらい妥だ当とうだろう。

こうして、いよいよ引き狩りプルハンテイングの用意が整った。

引き役プラーはピンパーネル。ピンパーネルにおびき出された敵を待ち受ける五人の隊形は、トマトクンが先頭中央、その左にマリアローズがつき、右がカタリ、その後ろにサフィニアとユリカが控ひかえる。雑魚の半死者ハーフデツドはなるべくサフィニアの魔ま術じゆつなしで倒たおし、おそらく出てくるであろう半死幼竜に乗ったローブの半死者ハーフデツドに備えて、心身両面の余力を残しておくのが肝きもだ。

むろん、ローブの半死者ハーフデツド対策もすでに練っている。

それについてはサフィニア次し第だいだが、一億人に一人の凶きよう運うんを生まれ持ちながらも、閃せん光こうの魔女マチルダに才能を見込まれて拾われた彼女の力量を疑う者など、ＺＯＯの中にはいない。

何より、昨日はさほど乗り気ではなかったトマトクンが、少しやる気を出してきたようだ。

「━よし」

一挙手一投足が周囲に影えい響きようを与えてやまない。たまにそういう種類の人間が世の中にはいて、トマトクンは確実にそのうちの一人だった。

トマトクンがやると言うのなら、できるだろう。大丈夫と言うのならば、平気に違ちがいない。

根こん拠きよはない。その表情や態度、一つ一つの言葉にそう信じさせる力がある。

「今度は突破するぞ。ピンプ、行け」

「はイ」

　乾かわいた声で短く答えたピンパーネルは、砂色の頭とう髪はつと衣ころもをひるがえして一いち陣じんの風となった。

　速い。

　疾風はやてのように、という言い方があるけれども、ピンパーネルに限っていえば、その表現もさして誇こ張ちようではない。

　その走力を含ふくめた抜ばつ群ぐんの身体能力は、ラハン大陸で暗殺専門の人間兵器アッサシンとして育てられた結果、培つちかわれたものだという。

　だが、その運命を自分の意志で捨てたピンパーネルは、今、新たな使命を自らに課していた。

　十日間以上何も食わず、歩いてたどり着いたエルデンで行き倒れていた際、拾ってくれたトマトクンに対する恩義。それに報むくいるための忠誠。彼の忠実で凶暴な猟りよう犬けんとして敵を狩かること。もちろん、主あるじの命令とあらば、彼が生理的にもっとも好む殺さつ戮りくさえも我が慢まんし、求められるがままに働いてみせる。

　マリアローズはカタリと一緒にピンパーネルが曲がっていった角に身をよせ、顔の半分だけ出して向こうをうかがった。

　引き役プラーとしてのピンパーネルは、文句のつけようがなかった。入口の手前十メーテルほどの地点で立ち止まって、一番外側でうろうろしていた人間の半死者ハーフデツドどもが気づくのを待ち、連中の速度にあわせてこちらへ引いてくる手並みなどは、冷静さといい、見み極きわめのよさといい、なかなか真似まねできるものではない。

「何か、きみが失敗した理由、わかるような気がするね」

　マリアローズは横目でカタリを見た。

「性格的に向かないと思うよ。きみって、はったりとこけおどしと混乱と無む秩ちつ序じよと魚肉でできてるような半魚人でしょ」

「いつの間にやら、魚から半魚人に昇しよう格かくしたんやな」

「その程度で喜ぶなんて、志が低いよ？」

「喜んどらんわ！」

「ほら、ばか言ってないで、配置に戻もどろ」

「かああっ……」

　カタリはだいぶ悔くやしそうだが、そろそろピンパーネルが敵の第一陣を引き連れて戻ってくる。本当に馬鹿なことをやっている場合ではないので、二人ともトマトクンのいる位置まで下がり、そのときがやってくるのを待った。

　すぐだった。角から姿を現し、こちらへ走ってくるピンパーネルについてきたのは、人間の半死者ハーフデッドが七人。そのうち三人は、昨日の防毒面ガスマスク集団だ。

「ピンプ、そのまま二人殺やれ！　マリアとカタリは一人ずつ、残りは俺が殺る！」

　こういうときのトマトクンの号令は、呆あきれるほど正確に状じよう況きようを把は握あくしていて、無む駄だがない。実際、ピンパーネルが振ふり返れば即そく座ざにしとめられる位置に、二人の半死者ハーフデッドがいた。マリアローズとカタリは両りよう翼よくに出て一人ずつを相手にし、正面に突とつ出しゆつしてきた三人をトマトクンが大たい剣けんの一振りか二振りでぶった斬ぎれば、それで終わりだった。

　純じゆん粋すいな白兵戦は得意ではないマリアローズがやや手こずったものの、それでもピンパーネルが角まで戻ってきてから、わずか十五秒ほど。

「次だ」

　間を置かず、トマトクンに再び命じられたピンパーネルは、敵の第二陣として半死下等蜥蜴とかげ人三匹びきと、同じく半死亜あ人じんボーグが三匹、鶏にわとりに似た半死メリクル四匹を引いてきた。

　今度は若じやつ干かん多い。トマトクンもさっきのように一いつ瞬しゆんで片をつけようとはしなかった。その代わり、ピンパーネルと入れ違いに自分が前に出て大剣を一閃させ、半死下等蜥蜴人一

匹と半死メリクル二匹を屠ほふって一挙に頭数を減らした。

「かかれ！」

　言いながら、トマトクンはさらに二匹を一刀両断している。ピンパーネルも雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣で二匹斬り刻み、カタリは投げたイノイチで一匹の頭を割って、ロノニーでもう一匹の首を斬り飛ばした。マリアローズはまた手間取ったが、黒豆のような目が結構かわいいわりに手強い半死亜人ボーグを、負傷せずに偽にせ劫ごう火かだけでしとめたのだから、まあ上出来だろう。

　今回は二十秒あまり。かなりいい調子だ。

　しかも、いまだマリアローズさえ呼吸を乱していない。消しよう耗もうはゼロに近く、今のところ、ユリカとサフィニアはただ見ているだけなので、余力も十分残している。

「これで十七、か」

　トマトクンはここでいったん皆みなに小休止を告げ、自ら角のところへ向かった。自分の目で様子を確かめておきたいのだろう。マリアローズは疲ひ労ろうもなく、手持ち無ぶ沙さ汰ただったので、トマトクンのあとを追った。

「どう？」

「うむ」

　トマトクンは非常に長身で、マリアローズは標準より背が低い。そのせいで、二人が直立したまま角から出した顔は、ぶつかることなく縦に二つ並ぶ形となる。

　自分の体格に劣れつ等とう感があるマリアローズとしては、正直、トマトクンを見上げるたびに腹が立つのだけれども、こればかりは仕方ない。どうせ身長はもう伸のびないだろうし、なぜかきわめて筋肉のつきにくい体質だ。それに、はっきりいってこの顔に筋肉質マツチヨな体は似合わない。

　マリアローズだって、自分の顔が他人にどう見えるかくらい知っているのだ。そのせいで嫌いやな目にたくさん遭あってきたが、本音をいえば、この顔がそこまで嫌きらいなわけではない。少なくとも、二目と見られないくらい不細工な面よりは数千倍マシだと思

う。

　ただ、自分のことながら、不思議ではあった。すでにこの世を去り、記き憶おくの中だけで生きている両親の顔は、二人ともマリアローズにまったく似ていないのだ。

　まあ、似ていないのは、顔だけではないのだが。

「どうした」

　トマトクンが怪け訝げんそうに片方の眉まゆをつり上げた。

　マリアローズは軽く首を振ってみせる。

「いや、何でも」

「そうか。それならいいが――まだ雑魚ざこがいるな。八、いや、九か。奥にでかいのもいる。また下等竜りゆうだ。昨日のやつはここからは見えん」

「下等竜、か……でもさ、何でこんなに色んな半死者ハーフデツドがいるんだろ。喪そう神しん街以外で偽ぎ魂こんを見かけることなんて、ほとんどないでしょ」

「おそらく、第四層以降で他ほかのエリアと繋つながっているんじゃないか」

「あ、なるほど。そうじゃないと、竜なんかがここにいるはずないものね。そういえば、第九区と第二区は隣りん接せつしてるから、当然、Ｄ９のこことＤ２にある竜の寝ね床どこも隣となりあってるんだ」

「まあ、実はそれより気になってることが、他にあるんだがな」

「気になってること……？　何？」

「俺が知る限り」

　トマトクンは胡う散さん臭くさげに坂道の入口あたりを見やった。

「偽魂は異界生物じゃない」

「え？　それって──」

　どういうことだろう。マリアローズが首を傾かしげていると、トマトクンが低く呟つぶやいた。

「レディ・麟霊、か」

「まさか」

　このトマトクンという男、こんな小さなクランの頭に納まっているわりには、馬ば鹿からしいほど腕うでが立つし、妙みように顔が広かったりする。というか、広すぎだ。以前、トマトクン自身が語ったところによると、数百年前から剣けん聖せいと呼ばれつづけている伝説的な人物、ヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟も知りあいだという。

「──でも、いくら何でもレディ・麟霊と知りあいなわけないよね。モータルレッドは異常に長生きしてるみたいだけど、死亡説は流れたことがないし、魔ま導どう王っていったら九百年とかそれくらい前の人なわけで……」

　嘘うそか本当か知らないが、魔術士の中には齢よわい三百歳を自じ称しようする者さえいる。サフィニアの師し匠しよう、閃せん光こうの魔女マチルダもすでに二百数十年生きていて、これは数々の証しよう拠こからどうやら事実らしい。また、魔導王時代の終末期に生存していた黄昏たそがれの魔導王たちの中には、行方ゆくえをくらましたまま死亡が確かく認にんされていない者もいるという。

「うーん……けど、ねえ？」

「何がだ」

「いや、だから、きみが『レディ・麟霊、か』とか、思わせぶりなこと言うもんだからさ。偽魂は異界生物フリークスじゃないとか。だいたい、何でそんなことがわかるんだよ」

「何でだろうな」

「訊きいてるのはこっちなんだけど」

「どうしてそんな七しち面めん倒どうくさいことを訊くんだ」

「きみが気になるようなことを言うからだろ！」

「あまり気にしなくていいぞ」

「気になることがあるって言ったのはきみでしょ……」

「そうだったか？」

　トマトクンはきょとんとしている。本当に自分の前言を忘れてしまっているのか、それとも、ただとぼけているだけか。どちらにしても、こうなってしまえば話を続けても無駄だ。マリアローズが諦あきらめて他の連中がいる場所まで戻るべく踵きびすを返すと、トマトクンもついてきた。

「しかし、マリア、お前──」

「え？」

「いや、ずいぶんタフになったと思ってな」

「そうかな……」

　まあ、自分では意識していないが、こんなやつらに付き合っていれば、知らぬ間に色々な面で逞たくましくなってもおかしくない。むしろ、逞しくならないと、やってゆけないといった方が正しいか。

「──一人でちまちま侵入者クラツカーやってるより、楽にたくさん稼かせげると思ってクランに入ったはずなんだけどね……」

「前より稼げてないのか」

「や、そんなことはないよ。たまに赤字のときもあるけど、一人の頃ころと比べれば単価が高いっていうか、儲もうかるときは大きいしね。だから、前みたいに毎日、潜もぐってないわりには、貯金はいい感じで増えてるかな。ただ、それと同時に危ない橋を渡わたる機会も増えたからさ」

「だが、赤信号、みんなで渡れば怖こわくない、という言葉もあるだろう」

「は？　あかしんごう？　何それ」

　トマトクンはたまに意味不明のことを言う。しかも、トマトクン自身がその謎なぞさ加減を自覚していないようなので、始末におえない。

「赤信号といったら、止まれだ。青は進めで、黄色は急いで突つっこめだな。うん？　ちょっと違ちがうか」

「全然わかんないんですけど」

「ふむ。まあ、多少やばくても、お前一人でいるわけじゃないんだ。何とかなるだろう」

「何とか、ねえ……」

　根底にそういう思想があるものだから、結果的に危ない橋を渡らざるをえない羽目に陥おちいっているような気がするのだが。

　結局、トマトクンたちにしてみれば、まだぎりぎりのところまで追いつめられてはおらず、本気を出さなければならないほどのシチュエーションではない、ということなのだろう。

　そのせいで、いつか足あし許もとをすくわれるのではないかというマリアローズの不安は的中し、昨日は大失敗した。それで少しは考え方をあらためるかと思いきや、トマトクンのこの発言だ。まったく、度しがたい。

「……いっぺん死なないとわかんないのかね」

　ただ、何度死んでもわからないやつもいるわけで。

　その死にマニアの半魚人が、戻ってきたトマトクンとマリアローズに、ぎらぎらした眼まな差ざしを向けた。

「ほな、再開しよか。邪じや魔まモンをぱっぱとやっつけて、いざ、深層へッ！　やッ！」

「そうだな──ピンプ」

　トマトクンに呼ばれると、ピンパーネルは忠実な猟りよう犬けんのように主人の命令を待つ態勢になった。

「見える範はん囲いだと、下等竜りゆうも含ふくめて雑魚ざこがあ

と十いる。そいつらを全部引いてこい。ただ、どうもそろそろ昨日のやつが出てきそうな匂においがする。もしやつが出てきたら、お前はとりあえず全速で戻れ。手て筈はずどおり、サフィニアが精神攻撃マインドハックをかけられる距きょ離りまで全員で接近して、やつの魔術を封ふうじる」

「ワかりまシタ」

　ピンパーネルはそう答えるが早いか、角の向こうへ消えた。カタリ一人だけが様子をうかがうため、角のところに張りつき、マリアローズを含めた残りの四人は定位置についた。

　おそらく、トマトクンの言葉のせいだろう。皆みな、やつが来るという予感を抱いだいているようで、一種独特な緊きん迫ぱく感に包まれた時間の流れは、やけに緩ゆるやかだった。

　こういうとき、マリアローズは頭の中で数をかぞえる。一定の間かん隔かくで時を刻むことによって、時間がまっとうに経過していることを実感できるし、気持ちも落ち着くのだ。また、見知らぬ道では一定の歩ほ幅はばで歩数をかぞえながら歩く癖くせもあって、これが侵入者クラッカーをやる上で意外と役に立った。いつの間に、そんな癖が身についたのか。

　たぶん、ずっと前だ。

　心を殺さなければ、耐たえがたかった日々。

　右も左もわからず、迷いながら遠くを目指した、あの頃。

　──十五。

　十六。十七。

　十八。

「ビンゴや」

　カタリがごくりと生なま唾つばを飲みこむ音さえ聞こえたような気がした。

「奥から出てきよった。昨日と同じ、幼竜に乗っとる……やつやで」

「行くぞ」

　トマトクンの号令は簡潔で誤解しようがなかった。総員、駆かけ出したトマトクンに続き、角を曲がったところで、命令に従い戻もどってきたピンパーネルと合流した。

　あとは、サフィニアが精神攻撃マインドハックを試みることのできる距離、約十五メーテルまで接近すべく突とつ進しんするのみだ。坂道はおよそ三十メーテル先だから、ちょうどその半分あたりが目安となる。問題のローブの半死者ハーフデッドが乗った半死幼竜は、入口あたりから動かない。半死下等竜を含めた雑魚どもは、こちらへ向かってくる。

「でかいのは俺が殺やる……！」

　前を行くトマトクンがそう叫さけんで、大たい剣けんの柄つかに右手をかけた。ということは、サフィニアを除いた他ほかの面子メンツで残りを片づけねばならない。その雑魚どもと衝しよう突とつしたのは、通路を十メーテルほど進んだ地点でのことだった。

　雑魚どもの先頭は、三匹びきの半死蜥蜴とかげ人だった。蜥蜴人はＤ13下層のダーナムレーンに集住していて、上層のテトルアープを根城にしている下等蜥蜴人の上位種にあたる。人間のそれと比ひ較かくしても、さほど見み劣おとりしない高度な独自の文明を持ち、個体としての身体能力は、むしろ標準的な人間を上回るともいう。当然、偽魂に支配されても、決して与くみしやすくはない相手だ。

　トマトクンは、だが、躊躇ためらわずにそいつらの間を駆け抜ぬけた。

　そして、跳とんだ。

　そのまま前方宙返りしながら抜いた大剣を、全体重と回転の勢いをのせて半死下等竜の頭部に叩たたきつけ、斬きるというより破は壊かいした。

　凄すごい──が、はっきりいって、でたらめだ。剣聖ヴァン・ヴラドＸＬ〝モータルレッド〟直系を自負する正統派剣けん闘とう術の信しん奉ぽう者が今の場面を見ていたら、顔を真っ赤にして怒おこったかもしれない。

　もっとも、トマトクンの型破りで派は手でな剣技がもたらした結果については、彼らも認めざるをえないだろう。現実に、トマトクンは半死下等竜の頭部を一いち撃げきで破は砕さいし、戦闘不能に陥らせたのだ。さらに、それでマリアローズたちの士気を鼓こ舞ぶし、流れを引きよせた。

　大剣のたった一ひと振ふりで、だ。

　むちゃくちゃで無む駄だが多いように見えても、意外と効率重視で、決定的な仕事をする。

　トマトクン。

　その名前と格好と性格がもう少しマシだったら、理想的な統率者リーダーたりうるのだが。

「そんなに厳しい要求じゃないと思うんだけど──な！」

　マリアローズは右籠こ手てから矢を放ち、対たい峙じした半死蜥蜴人の左目に命中させた。剣で倒たおす自信がないわけではない。生身ならともかく、偽魂に支配されている半死蜥蜴人は動きが鈍にぶいから、延々時間をかけさえすれば、マリアローズの腕うででも何とかなるだろう。

　しかし、ゆっくり相手をしてやりたいのは山々だが、今は急いでいる。

　矢に仕込まれた神経毒Ｐ９ドウター＋が、全身に亘わたる痙けい攣れんを誘ゆう発はつするまで、数秒。個体差はあるものの、半死蜥蜴人であればだいたい六、七秒か。見れば、ピンパーネルとカタリもそれぞれ一匹ずつしとめ、半死下等竜を粉砕したトマトクンに従ってさらに前進しつつ、左右の雑魚どもを蹴け散ちらしている。

　これで距離は稼かせいだ。サフィニアはもう、あの半死幼竜に乗ったローブの半死者ハーフデッドを精神攻撃マインドハックの射程にとらえられるに違ちがいない。

　だが、振り向いて確かく認にんする必要はない。マリアローズにはマリアローズのやるべきことがあり、サフィニアにはサフィニアの果たす役割がある。もちろん、全員が一つもミスを犯おかさず、すべてがうまくゆくとは限らない。そんなことは誰だれも保証してくれないが、いちいち仲間を疑って不安がっていたら、集団戦パー

テイーなんかとてもやっていられない。

　だから、信じるのだ。というか、信じざるをえない。

　そうはいっても、気がつけば、他人を信じるという作業を無意識のうちにこなしている自分がいて、マリアローズは何だか妙みような気分になることがある。それに慣れてきている自分が、何だか自分ではないような。サンランド無統治王国、この法も秩ちつ序じょも道徳もない国で、血の繋つながりもない赤の他人を信じる、か。

　お笑いぐさだが、どういうわけか、これが結構、悪くない。そんなふうに思ってしまうほど、ＺＯＯが自分の一部になりつつあると感じる。

　いつの間にか、彼らと一いつ緒しょにいるのが当たり前となり、彼らの力をあてにすることに慣れてしまっていた。

　たった二巡じゅん月げつと少しで。

「食らえっての……！」

　マリアローズは右籠手の矢でもう一匹、雑魚を戦闘不能にした。雑魚はこれで最後だ。あとは問題のやつを残すのみで、トマトクンは右にピンパーネル、左にカタリを従え、マリアローズよりも四、五メーテル先行して突とつ貫かんの構えだ。

　そして、その標的であるローブの半死者ハーフデッドは、半死幼よう竜りゅうの頭上で右手を前に突つき出した体勢のまま、微び動どうだにしていなかった。

　青白い光として目視できるほどの膨ぼう大だいな魔ま力りょくが、体内に集中せず、拡散し、空転して、その全身を取り巻いている。

　間違いない。効いている。サフィニアの作り出した攻性スパク意識体チユラが、魔術の深しん淵えんを知る者しか感知しえない無意識層共有集積領域を通って、やつを攻こう撃げきしているのだ。

　おそらく、やつは今いま頃ごろ、防衛フオー意識体デユラを繰くり出したり、心理防ぼう壁へきを閉じたりで、防戦に必死だろう。しかし、どうやら形勢はサフィニアに有利のようだ。空転するやつの魔力は収まる気配がない。ということは、当然、やつの魔術を警

けい戒かいする必要もないわけで、こうなってしまえばしめたものだ。

「──殺るぞ！」

　そう叫ぶとともに、まずトマトクンが半死幼竜の懐ふところに飛びこんで、その腹部に深々と大剣を突き立てた。

　続けざまにカタリが両手の斧おのを振りかぶって体ごと突っこんでいったとき、勝負は半ば決していたのかもしれない。

「ピンプ、来いや……！」

　言われるまでもない、という感じで、ピンパーネルはカタリの肩かたを踏ふみ台にし、跳ちよう躍やくした。

　いや、飛んだ。

　真上に。

　実際には、半死幼竜の鱗うろこを何度も蹴って勢いをつけているのだが、それがよく見えないくらいの速度で地面とほぼ垂直に上じよう昇しようし、空中で一回転してから降り立った先は、半死幼竜の頭上だった。

　ピンパーネルは、人の形をした相手には無類の強さを誇ほこる。何せ、人を殺すべくして生み育てられ、呼吸をするように人を殺してきた男だ。普ふ段だんは人一倍物静かだが、トマトクンに殺せと命じられたときの砂色の目は、見る者を凍こおりつかせる狂きよう喜きで彩いろどられる。

　そして、殺ばらす。

　右手の刺し突とつ斬ざん撃げき両用短たん剣けん、雄おすのグレアデ、まっすぐ伸のびた頑がん丈じようそうな剣身は約三十五サンチ。

　左手の斬撃兼けん解体用短剣、雌めすのリレッザ、鋭するどく湾わん曲きよくした剣身はおよそ四十サンチ。

　それぞれ形状と役割の異なる雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を操あやつって、皮を剝はぎ、肉を斬きり裂さき、神経と血管を切断

し、骨を断ち切る。決して立ってはいられないように、完かん膚ぷなきまで、戦せん闘とう能力のみならず生存能力をも奪うばい去るのだ。惨ざん殺さつという言葉すら物足りないほど、徹てつ底てい的に破は壊かいしつくすのが、ピンパーネルにとって最高級の殺し方プレゼントらしい。

　ピンパーネルはそれを実行した。

　サフィニアの精神攻撃マインドハツクに攻せめ立てられていたローブの半死者ハーフデツドは、一方的な贈おくり物の受けとりを拒きよ否ひする間も与あたえられず、ピンパーネルに斬り刻まれた。雄のグレアデと雌のリレッザは、完かん璧ぺきなコンビネーションでローブの半死者ハーフデツドをみるみるうちに解体し、無数の肉片に変えた。

　ただ、これですべてが終わったわけではない。まだ半死幼竜がいる。

　そうはいっても、ここまできてしまえばこちらの思う壺つぼだ。終着点までの道順はもうほとんど決まっていて、その準備もだいたい整っていた。

「ピンパーネル、どいて……！」

　マリアローズが半死幼竜の頭部を狙ねらって投げつけたのは、ベルトのホルダーから抜きとった小こ瓶びんだった。

　小瓶の中身は、ハーレム・ゴードンという無色透とう明めいの液体だ。空気に触ふれただけで爆ばく発はつし炎ほのおを発する、マリアローズ手製のいわば爆薬液で、材料費は一本につき約三千ダラーもかかる。エルデンにおける成人一人の食費が、一巡月あたり最低三万ダラー程度といわれているから、ハーレム・ゴードン一本でおよそ三日分の食い物が消えるわけだ。

　これを、たかが飯三日分、とあなどるなかれ。

　エルデンの周辺はとりわけ治安が悪いので、のんきに農業を営んでいられる環かん境きようではない。海も近いとはいえず、すぐ北に山はあるが、そこからとれる山の幸など、エルデンの人口を考えれば微々たるものだ。さらに、悪名高きエルデンと各地との間で物品を輸送するには、主に護衛の面で非常にコストがかさむ。こうし

た事情により、エルデンでは物価、特に食しよく料りよう品の値段が馬ば鹿か高い。αアルフア大陸にある他ほかの大都市と比較しても、実に三倍以上だという。

　従って、少なくともマリアローズの金銭感覚では、三千ダラーは高い。昨日、防毒面ガスマスク集団に対して盛大にお見み舞まいしてやったあとも、実はかなり腹が立った。

　しかし、使うべきときは心得ているつもりだし、必要とあらば躊躇ためらわず、惜おしまずに使う。

　今がまさしくそのときだった。

　個人的に爆弾と呼び慣ならわしているハーレム・ゴードンの小瓶が、半死幼竜の顎あごあたりに命中して割れ、閃せん光こうと爆音を発しつつ炎を上げた。そのときにはもう、着地したピンパーネルも、得物を引き抜ぬいたトマトクンとカタリも、身み悶もだえて大暴れする半死幼竜から離はなれていた。

　もっとも、彼らはただ単に逃にげたのではない。虎こ視し眈たん々たんと機会をうかがっていた。その機会は間もなく訪おとずれた。頭頂部の高さが五メーテルを超こえる半死幼竜が、炎と煙けむりに包まれた頭を闇やみ雲くもに振り回しはじめたのだ。あるいは、火を消そうとでもしているのか。

　立てつづけに右の壁かべへ、左の壁へと叩たたきつけられた半死幼竜の頭が、次いで、床ゆかへ—

　半死幼竜が首をもたげていれば、いかに大剣を操る長身のトマトクンといえども、届かない。

　だが、その瞬しゆん間かんは違ちがった。

　裂れつ帛ぱくの気合いを発し、矢のごとく飛び出したトマトクンが繰り出した大剣の一ひと振ふりは、怒り狂くるう荒あら神がみの鉄てつ槌ついのごとく半死幼竜の頸けい部ぶ側面を直撃して、斬るというより破は砕さいした。鱗と肉をごっそり飛び散らせ、太い頸骨を叩き壊こわした。

　頸部断面のすべてを十とするなら、七から八までを破壊された半死幼竜の首は、首としての機能を完全に失ったといっていいだろう。機能だけでなく、その外見も同様だ。かろうじて頭をぶら下げ

るだけのものを、誰だれも首とは呼びはしない。それはどこから見てもかつての首であり、今はもはや首ではなかった。

　そして、たいていの場合、このような痛撃を受けた生き物は、生き物としての体てい裁さいを保っていられなくなる。たとえ偽ぎ魂こんに支配されていようと、それは変わらない。しかも、トマトクンはすかさず脳天にもう一撃、豪ごう快かいに振り下ろした大剣を食らわせた。これがとどめになった。

　滅めつ多たなことでは傷つかない半死幼竜の頭骨が割れ、露ろ出しゆつした脳から青くきらめく何か小さなものが無数に飛び出した。

　アリステル。

　半死者ハーフデッドの体内において、擬ぎ似じ的再生の過程で生じる結けつ晶しよう状の物体だ。結構、高値で売れるが、一ミルか二ミルの粒つぶをかき集めて、一グラハムあたり五百ダラーとかそのあたりだし、それ専門にやらないと儲もうかるものではない。だから、金目の物には目がないマリアローズもあまり気にしていなかったのだが、今回は別だった。

　マリアローズは猛もう速度で半死幼竜をしとめたトマトクンに駆かけより、少し背せ伸のびをしてその頬ほおに指を這はわせた。

「む？　何だ、いきなり」

　トマトクンは訝いぶかしそうに片方の眉まゆを上げたが、あまり動かないで欲しい。何しろ、壊れ物なのだ。

「じっとしてて」

「ああ。だが……」

「いいから」

　マリアローズは、トマトクンの右頬にこびりついた半死幼竜の血肉を、慎しん重ちように指でつまんだ。目的のブツはその中に紛まぎれていた。逆の掌てのひらに移して、そっと血肉を指先でどけてゆきながら確かめると、やはり大きい。驚おどろくばかりだ。こんなに大きいものは見たことがない。

「ほら、見てよ、これ。一サンチくらいもあるアリステルなんて」

「ふむ」

　トマトクンは大剣の腹で肩かたを叩きつつ、頭を掻かいた。

「まあ、高く売れそうではあるな」

「でしょ？　やっぱりそう思う？　思うよね？」

　マリアローズは、そのアリステルを天てん井じようの偽魂が発する青白い光に透すかしてみた。汚よごれは完全には除去できていないが、アリステルは脆もろいので、下手に力を加えればあっさりと砕くだけてしまう。これ以上の作業は、地上に戻もどってからにした方がいいだろう。

　とりあえず、このアリステルは布にでも包んでしまっておくとして、それより、だ。

「探せばまだあるかも。そうだ。探さなくちゃ。カタリ、手伝って！　てゆうか、手伝え！　ユリカは誰か怪け我がとかしてたら治してあげてね。他の手が空いてる人はアリステル探し！　大きいやつね。小さいのはいいから！」

「お、おう、おっきいやつやな……」

　唯ゆい一いつ、カタリだけがすぐさまマリアローズの命令に従おうとして、途と中ちゆうでやめた。それも、ただやめるだけでなく、あろうことかマリアローズの後ろ頭を平手で叩いた。

「──って、ダァホ！　何でわしらがそないなモン探さなあかんのや！」

「あだっ！　この、何するんだ──」

　マリアローズも即そく座ざに逆ぎやく襲しゆうに転じて、カタリの股こ間かんを容よう赦しやなく蹴けり上げた。

「よ！　半魚人！」

「はうぐっ」

「ふん。思い知ったか。だいたい、僕はきみみたいにただ力任せに斧おのを振り回してるだけじゃないから、色々と経費がかかるんだ。昨日だって、爆ばく弾だんを使いすぎて大損だよ。お金は空から降ってくるわけでも、地面から生えてくるわけでもないし、少しずつでも稼かせがないと、なくなっていく一方なんだからさ」

「ふっ……ぐふぅ……」

「……爪つま先さき入ったかな？」

　少々やりすぎたか。股間を両手で押さえて地べたを転げ回るカタリを見て、マリアローズは反省しかけたが、考えてみればあんなものをよけられないカタリが迂う闊かつすぎるのだ。

　まあ、カタリに言わせれば「いちいちツッコミよけとったら、コミニュケーションが成立せんやろ。ホンマの男なら、ツッコミはがっちり受け止めたって、さらにボケ倒たおす。コレや。コレが男の心意気っちゅうもんやで」といったところかもしれないが、あくまでそれはケメックやキングダム・イズルハなど、特とく殊しゅな地域での常識だ。

　とはいっても、彼らのボケ＆ツッコミ文化は、独特の訛なまりで笑いを売る大道芸人や、よく喋しゃべる商しよう魂こん逞たくましいケメック商人たちによってα大陸全土に広められ、かなり浸しん透とうしてはいるのだけれども、この際は知ったことか。マリアローズの危険な攻こう撃げきをツッコミと解かい釈しゃくしたのだとしたら、それはもう危機意識の薄うすさだし、攻撃だと知っても回かい避ひできなかったのなら、やはり隙すきがあったということだ。

　いずれにせよ、カタリのせいで、カタリが悪いのだが、不意にトマトクンがマリアローズの頭を上から鷲わしづかみにした。

「──痛……くはないけど、何だよ、突とつ然ぜん」

　トマトクンは手を放し、ヒヒヒと似合わない下げ卑びた笑い声を立てた。

「元気なのはいいが、先は長いんだ。くだらんことで余計な時間をかけるのはどうかと思うぞ。別の敵がよってこないとも限らんしな。それにお前、矢を撃うっただろう。そんなことをやる前に予備

の矢をつがえておいた方がいいんじゃないか。あれは結構、手間がかかるんだろう」

「それは……」

　トマトクンの言ったことは正論ではあった。

　マリアローズは幼少期と単独侵入者クラッカー時代に貧びん乏ぼう生活を送ったもので、金となると、我を忘れるわけではないが、つい最優先にしてしまいたくなる。今は以前よりだいぶ懐ふところ具合に余よ裕ゆうがあるのに、それでもその癖くせは抜ぬけない。自分で自分のことをこうは言いたくないのだけれども、はっきりいって、ケチなのだ。いつの間にか、そうなってしまっていた。

　ここサンランド無統治王国の大半でも、ケチ・吝嗇けち・せこい・せせこましいはあまり印象がよろしくない。そうした性質が倹けん約やく精神として美徳と見なされるのは、それこそケメックやキングダム・イズルハ、その近くのゴーズ三国など、ごくごく限られた地域においてのみだろう。

　マリアローズはそうした場所の生まれではないから、自分で自分をケチだと思うのはまだ我が慢まんできても、他人にケチだと言われると結構、腹が立つ。好きでケチになったわけではないし。

　そうかといって、いい金になりそうな大おお粒つぶのアリステルを、トマトクンみたいに「くだらんこと」「そんなこと」と簡単に割り切ることは、どうしてもできない。

　だが、今はこれから深層を目指そうという大事なときだ。かなり大事な武器の一つである矢の補ほ充じゅうもせず、アリステルにかまけていたのは確かに手落ちだった。

「──わかったよ。やることはやる。それでいいでしょ」

「ああ。まあ、お前が矢を補充してる間くらいは」

　トマトクンは屈かがみこんで床から何かを拾い上げた。

「俺が大きめのアリステルを探しておいてやるさ。他ほかにすることもないしな」

「……いっぱい時間かけよっと」

「何か言ったか？」

「ううん。言ってない」

「そうか。お、しまった。潰つぶれたか？　うむ。ずいぶん壊こわれやすいな」

　どうやら、あまり過か剰じような期待はできない模様だし、うまく丸めこまれてしまったような気もするが、さして不ふ愉ゆ快かいではなかった。意識してやっているのかどうかは不明だけれども、そのあたりはトマトクンの人徳だろう。いい加減だとか、適当だとか、面めん倒どうくさがりだとか、物忘れが激しいとか、時にツッコミ殺しだとか、色々と欠点はあるものの、トマトクンには人の上に立つ者として必要な何かがあるのだ。

　実際、このＺＯＯというクランは、トマトクンを核かくにしてまとまっている。トマトクンがいなければ、おそらく知りあうことすらなかった者たちの集団だ。トマトクンは以前、マリアローズに言ったことがある。「俺は縁えんってやつを大事にすることにしてる」と。あるいは、トマトクンのそういう考え方や態度こそが、皆みなを結びつけ、ここに集つどわせているのかもしれない。

「よし、と」

　そうこうしているうちに、マリアローズは右籠こ手てに予備の矢をつがえ直し、カタリも下腹部の激痛から復帰した。その間にトマトクンが見つけたアリステルは三粒。どれも一サンチを超こえていて、一つは二サンチ近くあった。これはかなり嬉うれしかった。

　カタリにも言ったように、マリアローズは費用のかさむ戦い方をしている。籠手の矢にしても、手製の神経毒を仕込んである上、かなり華きや奢しやで破損しやすいから、回収しても半分は破は棄きせざるをえない。高価な触しよく媒ばいやら秘薬やらを常時、携けい帯たいして消費する魔ま術じゆつ士には及およばないとしても、傷いたんだ武具をたまに修しゆう繕ぜんする以外は、飯代くらいしかかからない連中とは違ちがうのだ。

　しかも、トマトクンやカタリ、ピンパーネルが使っている武器は、いずれも逸いつ品ぴん揃ぞろいだから滅めつ多たなことでは傷まない。そもそも、彼らはマリアローズよりずっと金を持っているわけで。

　その部分では、彼らにマリアローズの気持ちはわからないだろう。カタリなどは、キングダム・イズルハ出身だから理解してくれてもよさそうなものだが、あいにくやつは半魚人だし、育ちと気質のせいで金銭感覚がおかしい。たとえ博打ばくちで全財産を失っても、明日があるさとヘラヘラ笑っていられるようなタイプだ。

　いいのだ。別にわかってもらおうとも思わない。どうせケチだし。

　ケチで悪いか。悪くない。全然。

「とにかく、これで経費はまかなえるし、安心して深層を目指せるよ。うん」

「そないにでっかいアリステル売り払はろうたら、経費どころか大黒字やろ」

　カタリはまだ股間のあたりを気にしている。そんなに強く蹴けっただろうか。蹴ったかもしれない。そのあたりの加減がマリアローズにはよくわからない。

「うるさいな。昨日の分も補ほ塡てんしないといけないんだよ。あ、それでもまだプラスだとか、細かいこと言わないでね。行き当たりばったりで普ふ段だんは金かね勘かん定じようも大おお雑ざつ把ぱなくせに、こういうときだけ細かいのって、かなりうざい。だから女の子に嫌きらわれるんだよ」

「余計なお世話やがな」

「余計？　こっちは親切心で言ってやってるのに。他人の気持ちがわからないってのも最悪だね。人の忠告を聞き入れない変な頑がん固こさもマイナスだな。うわ。こうして考えると、プラスの要素が全然ないよ。負ふ債さいの上に負債を積み重ねて逆方向に疾しつ走そうしつづけるマイナス人生、か。ね、カタリ、いや、半魚人、生きてててつらくない？」

「ワレ、そこまでわしをおとしめて楽しいんか？」

「あんまり。だから、そろそろ行こ。劫ごう火かが僕らを待ってるよ」

「うむ。そうだな」

　トマトクンが皆を見回してから、第四層へ通じる坂道の入口へ目をやった。

　その眼まな差ざしが、何だかやけに厳しい。眉み間けんにも浅い縦皺じわが刻まれている。持ち前の独特な嗅きゆう覚かくで、何かを嗅かぎとっているのか。すぐに全員がトマトクンの様子に気づいて、多少緩ゆるみかけていた空気が張りつめたものに変わった。

「……どうかしたの？」

　一同の疑問を代表する形でマリアローズが訊きくと、トマトクンはわずかに首を振ふった。

「うむ。何が、というわけじゃないんだが」

「何？」

「どうもおかしな感じがする。用心しろ」

　トマトクンはそれだけ言うと、坂道の方へ足を進めた。その足どりも平素よりやや慎しん重ちようだ。トマトクンに続いたマリアローズも、どんな異変にも慌あわてず騒さわがず対処できるよう、気を引き締しめ直した。マリアローズの次はユリカとサフィニアが寄り添そうようにして歩き、カタリがその右斜ななめ前方に位置して、最さい後こう尾びにピンパーネルがつく。カタリがサフィニアの真横にはおらず、縦一列に近いものの、ほぼいつもどおりの隊列だ。

　入口のところまで来ると、高さ約五メーテル、幅はばも五メーテルほどの半円形をしたトンネル状の坂道は、地中奥深くまで続いていそうな印象さえ受けた。

　暗いからだ。光源となる偽ぎ魂こんがこの中にはいないらしい。このままでは、何も見えない。

「……煌フアン……」

　サフィニアが、最短の呪じゆ文もんとミラ石によってＬＥＰから光の要素精霊Ｌｕｉを呼び出し、手に持つ水晶様材クリスタリンの杖つえの先に宿らせた。

　これで照明は確保できたが、緩やかに下っている坂道の果ては、

やはり見通せない。もともと、喪そう神しん街オレストロは一層ずつにかなりの高さがあり、それぞれを繋つなぐ坂道も結構長いのだけれども、第三層まではここまでではなかった。第一、この坂道にはなぜ偽魂がいないのか。

　妙みようだ。

　坂道に足を踏ふみ入れ、進むごとに強まってゆく不快感や不安は、だが、決定的なものにはならない。まるで喉のどに痰たんが絡からんでいるかのような嫌いやらしい感覚だ。トマトクンが今ひとつ煮にえきらない言い方をしたのは、こういうわけだったのか。

　ただ、間違いなく、何かぼんやりした悪意のようなものを感じる。それなのに、ここはあまりにも静かすぎる。足音、呼吸音、金属の触ふれあう音、衣きぬ擦ずれの音、坂道内に反はん響きようしたそれらが、マリアローズの聴ちよう覚かくを刺し激げきする音のすべてだ。

　何だか落ち着かない。そんなふうに感じているのはマリアローズだけだろうか。そうも思ったが、ちらりと振り返ってみたら、ユリカも愛らしく眉まゆをひそめて左右に視線を巡めぐらせている。やはり同じなのだ。

　さりとて、感じているその何かは、明確な疑ぎ惑わくや恐きよう怖ふを引き起こすまでには至らない。

　頭の端はしの方がちりちりする。

　マリアローズはわずかに平常心を乱している自分に気づいた。それがわずかだとしても、かすかな綻ほころびが大きな決けつ壊かいに結びついて、取り返しのつかないことになる場合だってある。

「ねえ──」

　だから、あえて漠ばく然ぜんとした不安と疑問を声にしようとした。

　トマトクンが急に立ち止まって、天てん井じようを振り仰あおいだのはそのときだ。そこに何かあるのか。サフィニアが遅おくれずに反応して杖を高く掲かかげ、その何かをＬｕｉの光で照らし出した。

　そいつは天井にへばりついていた。

　というか、重力を無視するように、天井にしゃがんでいた。

　一応、人間に似た姿をしているけれども、人間なのだろうか。

　そいつは布のようなもので全身をぐるぐる巻きにしている。頭全体を包む兜かぶとをかぶっているせいで、顔は確かく認にんできない。その兜が異様な形で、口の部分には穴が空いているものの、目さえも完全に塞ふさがれている。あれでは何も見えないだろう。

「……ムサド……？」

　トマトクンがそう呟つぶやくと、ムサドと呼ばれたそいつは、天井の一番高いところに把とつ手てのついた棒状の物体を差しこんで右に回した。

　いったい、何をやっているのか？　あれは何だ？　そもそも、やつは何ものなのか？

　そんなことを悠ゆう長ちように考えている場合ではなかった。考えている余よ裕ゆうなどなかった。

　重々しい音を立てて、床ゆかが動いている。

　正確にいえば、奥に向かって左側へ傾かたむいてゆきつつあった。

　それもかなりの速さだ。落ちる。このままでは、滑すべり落ちてしまう。落ちて、どこへ？　わからないが、とにかく、ここの床にはあらかじめそういう仕し掛かけが施ほどこしてあったということだろう。誰だれが？　半死者ハーフデツドが？　こんな大がかりな罠わなを作ったというのか？　そんなこと、できるはずがない、とは断言できない。召しよう喚かん魔ま術じゆつを使うやつさえいたのだ。

　ただ、幸いなことに、傾いてゆきつつあるのはこの坂道の床全体ではない。ごく一部だ。十メーテルとか、十五メーテルとか、その程度の範はん囲いにすぎない。

　とっさにそれを見てとったマリアローズは、まず坂道の右側へ駆かけよろうとした。

　それから、第三層側へ戻もどるか、第四層側へ進むか。どちらにしても、何とか落ちずにすみそうだ――でも、皆は？　そう思って振り返ったところまでは、意識的な動作だった。

　もう四十度くらいまで傾いた坂道の中ほどで、転んでいるサフィニアとユリカの姿が目に飛びこんできた。転んでいるというか、床にしがみついているのか。

　そのとき、マリアローズは何を考えたのだろう。助けようとした？　たぶん、そうだ。けれども、駆け戻ってサフィニアとユリカに手を差し伸のべたところで、何になる？　確かに、サフィニアの杖がマリアローズの指に触れはした。かろうじて、つかむこともできた。

「――くうっ……！」

　そのまま引っ張ろうとしたが、サフィニアとユリカは抱だきあう格好になっていたし、いかに二人とも体重の軽い方だとはいえ、とうてい無理だった。

　また、もし引っ張ることができたとしても、何の意味もなかっただろう。

　何しろ、体感的な床の傾けい斜しやはもう絶ぜつ壁ぺきと大差ない。

　それがどういうことかといえば、簡単だ。

　マリアローズは滑かつ落らくした。

　嘘うそだと思いたかったが、嘘ではなさそうだった。

　マリアローズは確実に落下していた。それでいて、わりと冷静な自分が意外だった。これで死ぬなんて、信じていないのか。もしくは、信じられないのか。

　死んでもおかしくない状じよう況きようだということは、むろん理解している。

　まいったな、とか、やばいな、とか、そういった思いが脳のう裏りをよぎりもした。

　だが、次の瞬しゅん間かん、この期ごに及およんでマリアローズの頭に浮うかんだのは、どうにかしないと、ということだった。どうにか、だって？

　何を？　どうやって？

　──ああ。

　マリアローズは自分がしっかりと握にぎっている杖の先に、サフィニアとユリカがいることを思い出した。

　それにしても、まだ落ちている。

　いったい、どこまで落ちるのだろう……。

Omenage 897 9th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD9
〝喪神街オレストロ〟

chapter.6

喪神街の長い一日

1

　カタリは天井のムサドとやらに気をとられていた。もっと詳くわしくいえば、ムサドの頭部を覆おおっている異形の兜と、体中に巻きつけている布みたいなものに目を奪うばわれていた。

　書物か何かだと思うが、どこかでそれらの図か記述を見た覚えがある。すぐには何を意味するのか思い出せなかったものの、ムサドという言葉も記き憶おくの中にあった。

　一瞬とはいえ、そんなことを考えていたからか。

　床が動きはじめたとき、カタリは思った以上に狼ろう狽ばいしてしまった。まあ、こんなことが起こるなんて想像もしていなかったので、思った以上も糞くそもないが、昔、故郷で一度だけ経験した大おお地じ震しんの恐おそろしい記憶が瞬間的に蘇よみがえったせいもある。見る間に傾斜してゆく床から、カタリはとにかく必死で逃のがれようとした。その途と中ちゅう、仲間たちのことが頭をよぎったけれども、すでに床は危険な勾こう配ばいを示していた。どうしようもなかった。

　何とか這はうようにして第四層側の平らな床に到とう達たつすると、あたりが暗い。ということは、サフィニアが落ちたのか。

　カタリはぎりりと奥歯を嚙かみ、床が直角まで傾いてできた穴の縁ふちから身を乗り出した。

「サフィニアァァァァ……！」

　返事はない。ただ、サフィニアの杖つえにともっていたＬｕｉの光が見えた。どんどん遠ざかってゆく白い光に、サフィニアだけでなく、ユリカとマリアローズの姿が小さく照らし出されていたように思えた。しかし、すぐにそれは闇やみに吞のみこまれてしまった。

　下の方で、何か低い地鳴りのような音がする。よくわからないが、閉じる音か。

　いずれにしても、真っ暗のままではどうしようもない。カタリは腰こしの後ろに下げた物入れから小型の携けい帯たい照明器具を出して、灯あかりをつけた。ぎょっとした。

　トマトクンが穴に飛び降りようとしている。

　ちょっとやそっとのことでは動じない男のはずだが、そうとう焦あせっているようだ。

「や、やめえや！」

　カタリがその腰あたりに飛びつくと、トマトクンは肉食獣じゆうが吼ほえるように声を荒あらげた。

「どけ……！」

　カタリを振りほどく力も凄すさまじい。いったんトマトクンにはねのけられたカタリは、すぐにもう一度組みついた。

「──あかん！　放したらどうするつもりや！　こっから落ちるっちゅうんか！　そんなん自殺行こう為いやで、死ぬつもりか！」

「死ぬだと？」

　一瞬、トマトクンの黄玉色の瞳ひとみが異様な輝かがやきを帯びた。その目で睨にらまれた途と端たん、カタリは総毛立ち、とてつもなく恐ろしくなって、悲鳴さえ洩もらしそうになったが、どうにかこらえた。

　だいたい、ありえない。カタリはこう思ったのだ。殺される、と。

　トマトクンに殺されるだなんて、そんなことがあってたまるか。

「そ、そうや。見てみい。深い穴やないか。死んでまうがな」

「この俺が？　死ぬだと……？」

　トマトクンの瞳から殺気はすでに失うせていた。

「じゃあ、何か」

　だが、その口調には攻こう撃げき的な皮肉や凶きよう暴ぼう性と

いった、普ふ段だんのトマトクンとはあまり縁えんのない成分が多く混入している。

「そこから落ちた三人は、もう死んじまってる。だから、無む駄だだ。つまり、お前はそう言ってるのか。お前が言いたいのはそういうことか、カタリ」

「あ、えや、その……」

「どうなんだ。答えろ。お前は本当にそう思ってるのか」

「そ、そうは思っとらへんけど」

「だったら、どう思ってるんだ」

「どう、て──」

　まさか、しどろもどろになったカタリに、助け船を出したわけではないだろうが。

　再びあの音がした。直角まで傾かたむいた床ゆかがもとに戻もどりはじめたのだ。

　ふと見上げると、天てん井じようのムサドが把とつ手てのついた棒状の物体を今度は左に回している。それ以前に、あいつはまだいたのかという話だが、トマトクンとカタリはこの有様だし、ピンパーネルは穴を挟はさんで第三層側に逃れていた。いくらピンパーネルでも、十五メーテルほどある穴を跳とび越こえるのは不可能だろう。

　もっとも、その穴が塞ふさがってしまえば話は別だ。

　ピンパーネルは雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんを抜ぬいて、まだ完全にはもとに戻りきっていない床の上を駆けた。天井の高さは約五メーテル。かなり高いが、ピンパーネルなら壁かべを足がかりにしてムサドに一太刀たち浴びせるくらいの芸当はできそうだ。ムサドも迫せまりくるピンパーネルに脅きよう威いを感じたのか、把手のついた棒を天井から引き抜いてさっさと逃にげ出した。

　天井を走ってゆくムサドは、ピンパーネルほどではないにしろ、かなり足が速い。

　ピンパーネルは追おうとして躊躇ためらい、主人のご意向をうかがうようにトマトクンを見た。

「……いい」

　トマトクンは平らに戻った床へ目を落とし、ため息混じりに首を横に振ふった。

「追うな。これ以上、ばらけるのは面おも白しろくない」

「はイ」

　ピンパーネルの表情はいつもと変わらない。ただ、この元アッサシンはもともと気持ちを表すのがあまり得意ではなく、上手でもないから、普段どおりでいるしかないのかもしれない。

「あ、あのな、わしは……」

　一方、自分でいうのも何だが、感情表現が豊かなカタリは、ピンパーネルのように平然としてはいられなかった。怒いかりを押し殺しかねたように床を蹴けりつけるトマトクンを正視することさえできない。後こう悔かいもあった。ここから落ちたら、死ぬ。実際、不用意な発言だった。

「トマトクン、わしは、そういうつもりで言ったわけやのうて……」

　もちろん、カタリにも言い分はある。あのとき、三人が落ちた穴の奥から閉まる音が聞こえた。慌あわてていて何を喋しやべるべきか考えているゆとりはなく、とにかくトマトクンを止めることしか頭になかったのでくどくど説明しなかったが、仮にトマトクンが落ちたとしても、三人と同じ場所にたどり着けたかどうか。おそらく、無理だったろう。

　かといって、今さら弁解がましくそんなことを言うのにも抵てい抗こうがある。

　カタリはうなだれてむなしく言葉を繋つないだ。

「ホンマに、ちゃうんや。そうやない。わしは……」

「ああ」

　トマトクンは握り固めた右拳こぶしをどこかに振り下ろそうとして、途中でやめた。

「わかってる。お前は動どう揺ようしてただけだ。俺もな。すまなかった」

「あ、謝らんといてくれや。それより、これから──」

　どうするもこうするもない。こんな形で仲間とはぐれ、その安否が不明なのだから、確かめるしかない。いや、違ちがう。助けに行くのだ。

　当然、トマトクンもカタリと同じことを考えているだろう。

　トマトクンはまず天井を振り仰あおいで、ムサドが把手のついた棒を差しこんだあたりに視線を注いだ。よく見ると、そこには確かにくぼみのようなものがあるが、あれをどうこうしてまた床を傾け、できた穴から飛び降りるという手段はやはり現実的ではない。だいたい高すぎて手が届かないし、あの把手のついた棒状の物体が他ほかのもので代用可能だという保証もないのだ。

　そうなると、残された方法は一つしかない。

　トマトクンは第四層の方へ顔を向けた。

「あの深さだとあいつらは深層まで落ちたはずだ。何とかして、あいつらと合流するぞ」

「せやな……無事やったらええんやが」

「あっちにはユリカがいる。落下で負傷しても、医術式で治ち療りようは可能だ。問題は、下にどういう敵がどれくらいいて、あいつらがうまく切り抜けられるか、だが」

「ユリカとサフィニア、それから、マリアローズ……決してバランスがとれとる組み合わせやないからな……」

　一応、三人のうち二人、ユリカとマリアローズが接近戦に対応できるものの、両方ともいわゆる盾役タンクには向いていない。鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術独自の極限クライマツクス九手棍ナインポールを自在に使いこなすユリカにしても、攪かく乱らん戦が得意なマリアローズにしても、瞬しゅん発ぱつ力りよくはあるが、持久

力に欠けるからだ。

　ということは、サフィニアが特殊なチヤネ精神集中リングや詠えい唱しようのために必要とする時間を確保しにくい。ユリカとマリアローズの二人で片づけられる敵ならともかく、そうでなければ、サフィニアを守ることさえ覚おぼ束つかないだろう。

「まあ」

　トマトクンはやっと落ち着いてきたらしく、若じやつ干かん険のとれた顔つきになった。

「バランスという意味では、こっちもそれほどよくはないがな」

「わしらは三人とも肉にく弾だん専門やさかい、ユリカがおらんのが余計、痛いで。下手に怪け我がでもしてもうたら──」

「お前の場合、怪我よりむしろ、いきなり死んじまいそうで怖こわいんだ」

「ナンボわしかて、こないな状じよう況きようで簡単に死ぬような真似まねはせえへんわい」

「そう願いたいな」

「任しとき」

　カタリは無理をして胸を叩たたいてみせたけれども、正直、自信がなかった。

　トマトクン、ピンパーネルという手て練だれが一いつ緒しよとはいえ、三人。たった三人だけで、ほとんど右も左もわからない喪そう神しん街オレストロ第四層、そして第五層、深層まで行こうというのだ。

　しかも、アンダーグラウンドの深部を探たん索さくするときには、必ず行動をともにすべきだとされている医術士なしで、だ。カタリがいうのも何だが、はっきりいって無む謀ぼうではないのか。

　いや、トマトクンとピンパーネルはいい。もとより、殺しても死なないような男たちだ。

　けれども、カタリは殺せば当たり前に死ぬ。カタリは彼らのように人間離ばなれしていない。色々あって十三歳のときに国を出て以来、それなりに波乱に満ちた人生を送ってきたつもりだし、並みの侵入者クラツカーには負けない糞くそ度胸や技量はあると自負しているが、あくまで平均より上というだけだ。カタリは自分が特別ではないと知っている。

　二人の足を引っ張ってしまうかもしれない。むろん、死体は最悪の足手まといだ。

　こんなことを考えるのは初めてだが、そもそも、自分がいる意味はあるのか。トマトクンとピンパーネルだけなら、話はずっと簡単なのではないか。自分は邪じや魔まなのではないか。

　昨日のことが思い出される。

　土の亡もう者じやからの退たい却きやく戦でしんがりを張ったトマトクンは、相棒にピンパーネルを選んだ。

　よく考えれば、いつもそうだ。トマトクンはピンパーネルを信しん頼らいしている。

　では、カタリのことは……？

「どうかしたのか」

　トマトクンに声をかけられて、カタリは顔を上げた。知らぬ間にうつむいていたようだ。

「あー……あれや、ほれ、色々考えとってん。知らん場所やさかい」

「うむ。俺もピンパーネルも、ごちゃごちゃと面めん倒どうなのは得意じゃないからな。どうやって深層まで行くのかは、お前任せになる。頼たのむぞ」

「もちろんや。そのくらいせな、わしの立場もな……」

「立場？」

　トマトクンが片方の眉まゆをつり上げた。いつもは人の話をちゃんと聞いているのかどうかもあやしいのに、こういうときに限って

聞き流してくれないのは、どういうわけだろう。

　いずれにせよ、下手にでたらめを並べてごまかせば、かえってドツボに嵌はまりかねない。

　カタリは強引に話を切り上げた。

「ほな、行こか。ぐずぐずしとられへんやろ」

　トマトクンはまだ訝いぶかしそうにしていたが、先に進みはじめたカタリを止めて問い質ただすことまではしなかった。それに、実際、急がなければならなかった。深層にたどり着くまで、どれくらい時間がかかるか見当もつかないけれども、理論的には早く合流すればするほど、三人が無事でいる可能性は高いのだ。

　むろん、本当に合流できるのか、という不安はある。

　だが、ユリカとサフィニアはもちろん、マリアローズもあれでなかなかしぶとくて、一ひと筋すじ縄なわではゆかない男だ。まあ、とうてい男には思えない容姿だが、ああ見えて根こん性じようもあるし、開き直ると強いタイプでもある。そう簡単にアンダーグラウンドの露つゆと消えたりはしないだろう。

　だから、カタリが今、考えなければならないことは、ただ一つ。

　できるだけ時間をかけずに深層へ到とう達たつする。そのための方策だ。

　しかし、方策といっても――実のところ、カタリも物事を小難しく考えるのは性分にあわない。アンダーグラウンドにおけるカタリの常じよう套とう手段は、方向感覚や距きよ離り感や直感に頼たよるやり方だ。要するに、そのへんを適当に歩き回っているうちに、何となく全体の構造やら広さやら現在地点やらがわかってきて、たぶんあれはあっち方面にあるだろうとか、それはこっちだろうとか、だいたい予想がつくようになるわけだ。

　今まではそういうやり方でも問題はなかった。時間制限もなかったし、記き憶おく力に自信のあるカタリは、一度通った場所はまず忘れない。他の者が同じことをするよりは何倍も早く、頭の中に周辺一帯の地図を完成させることができた。

　ただ、それでいいのか。この緊きん急きゆう時にそんな悠ゆう長

ちようなやり方をしていて、本当にいいのか。

　そうはいっても、他にいい方法など思いつかない。また、こんなときだからこそ、やり慣れた方法を貫つらぬき通すべきだという気もする。

　ともあれ、この三人なら、やれ隊列だやれ作戦だとややこしく考えなくてもいい。行く手に立ち塞ふさがる敵がいれば、力押しで叩き潰つぶすか、一目散に逃にげるか。実に簡単な二者択たく一いつで、その点では気が楽だ。そうだ。自分は勘かんを研とぎ澄すましてひたすら深層を目指せばいい──と思っていたのだが、やがて坂道の出口が見えてくると、カタリの中にある疑念が生まれた。

　それは、世界はそれほど単純にできてはいないのではないか、という疑いだ。

　出口まで来て、偽ぎ魂こんの光が射さす第四層に入った頃ころには、その疑ぎ惑わくは確信に変わっていた。

　一番こうあって欲しくなかったパターンだ。第三層までとはまったく様子が異なり、第四層はしっかりした石造りの壁かべ、床ゆか、天てん井じようで隙すきなく固められた通路が入り組んでできているらしい。つまり、一いつ般ぱん的に迷宮といって誰だれもが思い浮うかべるような構造だ。

　しかも、通路はいきなり正面、右、左に分ぶん岐きしている。

　それぞれの通路はその先で曲がっていたり、別の通路と交差しているようで、これはもう紛まぎれもなく迷宮だ。

「さて、どっちへ行くか」

　トマトクンが低くそう言って、三方向に延のびた通路を順々に見た。その視線が左の通路に注がれて、止まっている。見れば、左の通路だけが他ほかと比べて明らかに大きい。正面と右の通路はほぼ同じ、というか、たぶんまったく同じ大きさだと思われる。

　とりあえず、左か？

　──いや。

「右や」

迷ったときは箸はしを持つ方の手、だ。箸とは、食べ物を挟はさみとる二本の細い棒のことで、龍りゅう州しゅうからα大陸東部、そしてカタリの故国キングダム・イズルハでも用いられている。最近ではエルデンにも東部料理の店がちらほらできて、箸もよく見かけるようになった。

ちなみに、「迷ったとき云うん々ぬん」はカタリのオリジナルではない。昔、カタリの教育係だったジャン・モーロウというオッサンがよく口にしていた言葉だ。

この博識だがそうとう偏へん屈くつなオッサンは、カタリ専属の文武指南役であり、ある意味、親代わりでもあった。何しろ、乳ち飲のみ子ご時代を除けば、幼少期のカタリがまともに接した人間はあのオッサンだけだったのだ。実の両親も、形式上の父親も、半分だけ血の繋つながった兄姉も、カタリにとっては口をきいたこともない遠い存在だった。

だからといって、カタリがジャン・モーロウを慕したっていたかといえば、そんなことはない。ごく幼い頃は多少そういった面もあっただろうが、あのオッサンが敬愛に値あたいしない男だということにはすぐに気づいた。

とにかく、何かにつけて小言が多いし、偉えらそうに蘊うん蓄ちくばかり垂れてうざったいし、機き嫌げんが悪いと八つ当たりしてくるし、酒が飲みたくなれば昼間から飲むしで──挙句、あのオッサンはまだ傷つきやすい純真な子供だったカタリに、何もかも本当のことを教えたのだ。

なぜ、カタリがとある巨きょ大だいな建物の奥まった一角に幽ゆう閉へいされ、親にも会ってもらえず、一日中仮面をかぶせられたまま、日々を送らなければならなかったのか。

その事情について語って聞かせながら、ジャン・モーロウは薄うす笑わらいを浮かべてさえいた。それがまた、素す晴ばらしく憎にくたらしい顔つきで、カタリにはまるでやつがすべての元げん凶きょうのように思えた。できれば知りたくなかったと思った。「知りとうなかったと思うとるんか」とやつに図星を指され、うなずいたら、さらに嘲あざ笑わらわれた。

「どのみちいつかわかることや。どうせなら早い方がええやろが。ええか、よく覚えとけ。ワレは所しよ詮せん、溝どぶ穴あなに産み

落とされた糞くそ鼠ねずみや。それを知らんで人間様を気どってみい。ええ恥はじさらしやで。まあ、親が恥知らずで子が恥さらしっちゅうたら、似合いの親子かもしらんけどな」

　まったく、若くして俊しゅんオさいの名をほしいままにし、名家の出でもあるジャン・モーロウだが、カタリの教育係などという閑かん職しよくに回されたのも道理だった。自信家で、傲ごう岸がん不ふ遜そんで、他人を侮あなどり、平然と傷つけ、しかも実際、切れ者なのだ。これで恨うらみを買わないはずがない。

　カタリも、あのオッサンのことなんか大だい嫌きらいだ。

　それなのに、どういうわけか、やつの説教が、胡う散さん臭くさい格言が、くだらない、どうでもよさそうな一言一言が、いまだにカタリの中に染しみついている。

　迷ったときは箸を持つ方の手、か。

　どう考えても、妄ぼう言げんのたぐいだ。物知りなくせに、時折、いい加減なことを言ったり、大法ぼ螺らを吹ふいたりする。あのオッサンにはそういうところがあった。すべてを理り詰づめに考えようとはするな。理り屈くつでは計れないことも世の中にはある。案外、そこに真実が転がっていたりする。よくカタリにそんなことを言ったジャン・モーロウは──まだ故国で健在のはずだが。

　いずれにせよ、こういうときこそ普ふ段だんどおり行動するべきだ。確証がないのであれば、まずは右。今までカタリはそうしてきたし、これからもそうするだろう。

　トマトクンも反対はしなかった。

「お前に任せると言ったのは俺だ。お前が右と思うなら、右でいい」

「決まりやな」

　カタリはうなずいて、もう一度、あたりを見回した。

「──それにしても……どういうこっちゃ、これは。半死者ハーフデッドがこないなモン造ったっちゅうんかい」

「さあな」

　トマトクンは顎あごを撫なでながら、モトローリィの名石工が丹たん誠せいこめて積み上げたかのような石いし壁かべに目をやった。

「ただ、これはさっき、マリアにも言ったんだが、気になっていることがあってな」

「何やねん」

「偽魂のことだ」

「偽魂がどないしたん」

「あれは、異界生物フリークスじゃないぞ」

「何やて……？」

　いきなりそんなことを言われても、カタリにしてみれば混乱するばかりだった。

　偽魂が異界生物フリークスではない？　初めて聞く話だ。しかし、学識豊かなジャン・モーロウとはまた違ちがった方面で、どういうわけか色々なことを知っているトマトクンが言い出したことだ。単なる思いつきではなく、何がしかの根こん拠きよもあるのだろう。

　それに、今の言葉を聞いて、カタリも「なるほど」と納なつ得とくできる部分があった。確かに、他の異界生物フリークスと比べて、偽魂はどこか変だ。どこがどうとうまく説明はできないけれども、あれを生物と呼ぶことに違い和わ感かんがある。ある種の不自然さがぬぐい去れない。

　そこで、偽魂が異界生物フリークスではないと仮定すると、カタリの頭の中で何かが何かに繋がりそうになるのだが、惜おしいところで繋がらない。出かかったくしゃみが引っこんでしまったかのように、もどかしい。どうにかしてくしゃみを出してしまいたくもあるが、今はそんなことをやっている状じよう況きようでもないだろう。

「ま、詮せん索さくやら謎なぞ解ときやらは後回しや。あいつらと合流してからでええやろ」

「そうだな。先を急ごう。カタリは先導してくれ。ピンプはカタリの脇わきにつけ。俺は後ろを固める」

　トマトクンに命じられたピンパーネルが、足音も立てずカタリの右横に位置どった。カタリが横目で見たピンパーネルの砂色の瞳ひとみには、相変わらず何の感情も浮かんでいない。こういうとき、その尋じん常じようならざる落ち着きようは頼たのもしい限りだが、同時に──少しばかり、憎らしくもある。なぜ、そこまで冷静でいられるのだろう。あのトマトクンでさえ、取り乱しかけたというのに。

　結局、違うからか。

　アッサシン。

　遠く離はなれたラハン大陸で、命じられたまま殺すだけの道具として生み育てられた男は、やはり普通の人間とは別の生き物なのか。

　実際、性能も段違いだ。ラハン大陸の実状を知らなくても、ピンパーネルを見ていると、アッサシンがどういう存在かよくわかる。殺しのために必要なものを備えるべく教育され、鍛きたえられ、不要なものを削そぎ落とされて、できあがる。そう。不要なものを。

　感情を。

　──いや。

　何を馬ば鹿かな。ピンパーネルはアッサシンを辞やめて、逃にげてきたのだ。その理由について、詳くわしいことは聞いていない。だが、ただの気まぐれではないだろう。何しろ、ピンパーネルはラハン大陸からα大陸まで泳いで渡わたったという。それから、歩いてエルデンにたどり着くまで、全部で一年半かかったらしい。一年半、だ。

　よほどの理由があったに違いないのだ。そして、よほどの理由を抱かかえているという事実こそが、ピンパーネルがちゃんと人間らしい感情を持っていることの証しよう拠こに違いない。

「よっしゃ。ほんなら、行きまっせ」

　カタリは雑念を振ふり払はらい、右の通路へ足を進めた。くだら

ないことを考えるのはよそう。きっと、そうした余計な事こと柄がらが脳のう裏りをよぎるのも、この状況のせいに違いない。この状況から脱だつすることができれば、全部よくなるはずだ。何もかもうまくゆく。もとどおりになる。

　だから、そのために今は集中しなければならない。

　ユリカ。サフィニア。マリアローズ。三人の無事をひたすら信じて。

2

　──あったかい。

　そう感じ、思ったことで、自分が目覚めたのだと知った。

　だが、あたたかいだけでなく、何だかやわらかくて、気持ちいい。このまま、まだ眠ねむっていたいほどだ。起きるべきだと薄うすうすわかっているのだけれども、わかりたくない。ずっとこういうことはなかったから、ちょっとくらい、という気持ちもある。

　──疲つかれてたんだ。

　ああ。本当に疲れていた。

　一人で歩いていたから。下を向いて。歩ほ幅はばを揃そろえて、歩数をかぞえて。自分がどれだけ進んだか確かく認にんして。たまに前を向いて。方角を確かめて。戻もどって。進んで。

　あてもなく歩いた。渇かわいていた。餓うえていた。街にたどり着いた。そこは自分の居場所ではなかった。一人になった。いや。一人だった。いつでも、いつまでも一人だった。また歩いた。下を向いて。たまに前を向いて。懐なつかしいエルデン。何もかも失った街。すべてをそこで取り戻そうと思った。やり直そう。一人で。自分の力で。

　でも、疲れてしまった。

自分の体が、自分のものではないかのように重かった。うまく動いてくれなかった。前に進めなかった。けれども、間ま違ちがいなくそれは自分の体だった。

肉体は枷かせでしかない。それでも引きずってゆくしかない。切り離せないから。

苦しかった。寒かった。心が冷えていった。何だか、どうでもよかった。認めたくなかった。認めてしまえば、身動きがとれなくなる。胸が、痛い。痛いよ。とても、すごく、痛い。

ところが、いつの間にか痛みは消えていた。それとも、慣れてしまったのか。

痛みに慣れるなんて、ろくなことではない気がするけれど。

──違う。

そうじゃない。

僕はもう一人じゃない。

きみがいる。きみたちがいる。仲間。友だち。呼び方なんて何でもいい。僕はもう一人じゃない。そうだよね？

これは夢なんかじゃ、ない──

「……ん……」

ゆっくりと瞼まぶたを押し上げようと努力した。その労苦は報むくわれたようだ。視界が開けるに従って、光が射さしこんでくる。次し第だいに、見えるようになってきた。くすみのない金きん髪ぱつ。雪のように白い肌はだ。青い瞳。赤いラインが入った純白の女性用ナース医術士帽・キャップ。年の頃ころは十歳くらい。

もっとも、実じつ年ねん齢れいは見た目を完全に裏切っているが。

「……ユリカ」

「目が覚しやめたのね」

　ユリカはひっそりと微笑ほほえんでマリアローズの頭を撫でた。そのとき、気づいた。ユリカの顔はマリアローズから見て逆向きではない。ということは、頭の下にあるやわらかい物体は間違いなく人体の一部だと思われるのだが、体勢的にユリカのものではないことになる。誰だれだ？

　視線を上の方向にずらすと、翡ひ翠すい色の瞳と目があった。

　長くまっすぐな銀髪が青白い光を吸いこむように反射していて、とてもきれいだ。

　深く息を吸うと、魔ま術じゆつのための様々な触しよく媒ばいや秘薬をまぜこぜにした、何ともいえない、だが、どちらかといえば甘くていい匂においがした。

　サフィニアに膝ひざ枕まくらをしてもらっているなんて、妙みような気分だ。

　──不幸になったりして。

　それは言わずに、その代わり、二人に礼を言っておくことにした。どうやら、ユリカには医術式を施ほどこしてもらい、サフィニアにもこのとおり、膝を貸してもらっていたようなので。

「何か、まだ状況がよくわかんないけど……ありがと」

　ユリカは黙だまって首を振り、サフィニアはおっかなびっくりという感じでマリアローズの頰ほおに指先をそっと触ふれさせた。

　その薄い色の唇くちびるがかすかに震ふるえ、視線がそらされる。

　サフィニアは常に何かに怯おびえているように見える。実際、恐おそれているのだろう。自分の生まれつき背負わされた一億人に一人という凶きよう運うんが、誰かを傷つけてしまわないか、傷つけているのではないか、傷つけたのではないかと、いつも。

「……いいえ……こちらこそ、お礼を言わなければ……わたしはマリアさんのおかげで……」

「僕の？」

　何かしたっけ。

　心身両面に受けた打だ撃げきと衝しよう撃げきのせいだろうか。思い返そうとするまで、本当に忘れていた。

「──ああ、そっか、僕……サフィニアの杖つえをつかんで……それで、自分も落ちて」

「それだけでは……落下の際も、庇かばって……」

「うーん……ま、それは、ね」

　サフィニアは、今にも泣き出しそうな表情をしている。こういうのはどうも苦手だ。マリアローズは急に恥はずかしくなってきて、どうしていいかわからなくなったが、内心の動どう揺ようを悟さとられないように極力ゆっくりと体を起こした。

「とっさのことだったし。たまたまそうなっただけでさ。うん。半分偶ぐう然ぜんみたいなものだから、気にしなくていいと思うよ」

「……はい……」

「ええと、それで、ここは──」

　マリアローズは頭を掻かきながら、あたりを見回した。

　まず目に入ったのは、すぐそばにうずたかく積まれた茶色っぽい物体の山だ。その正体に思いあたって度ど肝ぎもを抜ぬかれたが、おそらくマリアローズが命拾いしたのは、この物体のおかげだろう。気を失う前、その中に突つっこんだような覚えが朧おぼろ気げにある。

　ただ、かなり高いものの、この空間には天てん井じようがちゃんとある。あの天井も、坂道の床ゆかのように開閉式にでもなっているのか。そのあたりはよくわからないが、とにかくマリアローズたちが上からあそこに落ちてきたことは間違いない。

　人間も含ふくめた、様々な生き物の骨の山に。

　体中が何だか粉っぽいのは、そのせいだった。

　それにしても、どれくらい落ちたのか。落下の最中はやたらと長

く感じられたが、人の感覚なんてあてにならない。異常な状態のときはなおさらだ。

　ともあれ、見たままの印象だと、ここは喪そう神しん街オレストロ第三層まではずいぶん雰ふん囲い気きが違う。共通点は、偽ぎ魂こんの群れが天井付近に垂れこめていることくらいか。もし、その偽魂の姿がなければ、ここが喪神街だとさえ思わなかったかもしれない。

　喪神街にしては、しっかりしすぎているのだ。

　壁かべも、天井も、床も、光を反射しない、表面が磨みがき抜かれた何らかの素材でできている。マリアローズたちのいる場所こそ広場のように開けているが、そこから延びる通路の幅はばや高さはあくまで均一だ。飾かざり気は一いつ切さいないものの、ここまで整然としている造りは、アンダーグラウンドの中でも珍めずらしい。壁にも、床にも、継つぎ目らしきものが見あたらないなど、ある種の不自然さすら感じるくらいだ。

　それはたとえば、第一区のシャイニング・グローリー・パレスや、ＫＧ秘宝美術館、王立中央文書館などといった、サンランド建国時に建設された建物の印象にどこか似ている。

　疑わしい。人間とは限定せずとも、これを誰かが、何かが作ったというのか。とうてい信じられない。そんなことは不可能ではないのか。ありえないのではないか。

　マリアローズは不意にトマトクンの言葉を思い出した。

『偽魂は異界生物じゃない』

『レディー・麟霊、か』

　だが、それが何を意味するのか、さっぱりわからない。現時点でわかっているのは、マリアローズとユリカとサフィニアの三人が、トマトクン、カタリ、ピンパーネルと離ればなれになって、ここにいるということだけだ。そのここについても、第三層より下だという以外、はっきりした手がかりはないのだから、まあ、早い話、ほとんど何もわからないわけだ。

「ユリカ」

マリアローズは一つ息をついた。気を抜くと、心が下を向きそうになる。けれども、何とか斜ななめ下くらいにキープしておくべきだろう。完全に下を向いてしまえば、一歩も前に進めなくなる。どちらかというと諦あきらめは悪い方なので、そんな自分は許せない。

「僕、どれくらい気を失ってたの」

「しょうね」

ユリカが可愛かわいらしい指を下唇にあてた。女性用ナース医術士帽・キヤツプや女性用ナース医術士服・ユニが多少汚よごれたくらいでは、彼女の可か憐れんさにはいささかの曇くもりもない。

「落ちた時間、しょれにわたしが自分の施しえ術じゆちゆを終えるまでの時間もはっきりしないから、正しえい確かくにはわからないけれど、一時間くらいじゃないかしら」

「そう」

「負傷の程度は、サしやフィニアが一番軽くて、わたしがその次ちゆぎ。マリア、あなたが一番重傷だったのよ。失神していたから、頭も打ったんじゃないかと心配したけど、脳震しん盪とうくらいでしゅんだみたいで、よかったわ」

「うん。助かったよ。こんな言い方はどうかと思うけど──」

言いかけて、確かにどうかと思ったが、正直な気持ちではあった。

「ユリカが一いつ緒しよに落ちてくれてて。そうじゃなかったら」

「しょうね。不幸中の幸しやいわいだったかもしれないわね」

「……うぅ……」

と、サフィニアが低く呻うめいた。ユリカが口にした不幸という単語のせいだろう。サフィニアの前で、不幸とか不運といったたぐいの言葉は禁句なのだ。もちろんそのことを承知しているユリカは、自分の口に手をあてて上うわ目め遣づかいでサフィニアを見た。

「あ、ごめんなしゃい、サしやフィニア。わたしったら、ちゅい──」

「い……いいえ……わたしの方こそ、いちいち……こんなことではだめですよね。わかってはいるのですが……」

「本当に、あなたのしぇいではないから」

「……でも、そうでしょうか……」

　サフィニアはマリアローズとユリカを申し訳なさそうにーいち瞥べつしてから、恨うらめしそうに人差し指で床に何やら書きはじめた。

「皆みなさん……わたしのせいではないと、仰おつしやってくれます……ですが、実際にわたしが見ているところで、誰かが怪け我がをしたり、亡なくなられたり……そんなことが何度もあって……ありすぎて……」

「だ、だけど、それはほら、偶ぐう然ぜんってこともあるし」

　マリアローズはサフィニアを慰なぐさめるつもりで言ったのだが、偶然という言葉がいかに陳ちん腐ぷか、すぐに思い知らされることになる。

「わたしの、両親は……わたしの目の前で……」

　サフィニアは数秒、躊躇ためらったあと、人差し指を止めて握にぎり拳こぶしを作った。

「流星に……打たれて、死んだのです……」

「は？」

　りゅうせい。リュウセイって？　マリアローズはーいつ瞬しゅん、何のことかわからなかった。

「……流星って、あの、落ちてくる星──流れ星のこと……？」

「はい……正確にいえば、隕いん石せきです……」

「えーと」

どうコメントしていいものやら。隣となりを見ると、困こん惑わく顔のユリカと目があった。

「隕石、ね……」

「しかも、父と母は……それぞれ、別々の日に、別々の場所で……わたしと一緒にいたとき、隕石の直ちよく撃げきを……」

「そ、そう」

「確率でいえば……犬から猫ねこが生まれるより、低いと……つまり、ありえない事象だと、お姉様は仰っておられました……」

「お姉様？」

本来、話の要点はそちらではなく、犬から猫が云うん々ぬんという箇か所しよのはずだが、おそらくマリアローズは無意識のうちに現実逃とう避ひしようと試みたのだろう。いや、むしろ、犬から猫が生まれるよりは、お姉様に関する話題の方が遥はるかに現実的ではなかろうか。

サフィニアは小さく息をついて、血の気の薄い頰を少しだけ歪ゆがめた。

「わたしの……師し匠しようのことです」

「師匠って、あのマチルダ？」

「ええ……弟で子しにご自分のことをお姉様と、そう呼ばせるのが……あの方の流りゆう儀ぎで……」

二百歳をゆうに越こえるという人物が、お姉様とは。

ずいぶん変わった流儀もあったものだが、機械装置武具などの製作に特化した機術士、あるいは薬品や自然界にない物質の生成に血道を上げる錬れん金きん士、または癒いやしの技わざを極きわめんとする医術士と比べて、その源流に近い場所にいる魔ま術じゆつ士は、元来人間の社会通念から逸いつ脱だつした存在だ。

それも当たり前で、魔術士の究極的な目標は、生命を超ちよう越えつし、時空を意のままに操あやつることであり、そのための知識と力を我がものにすることだといわれている。志向からして、普ふ

通つうの人間であることをよしとせず、別の何かになろうとしている連中なのだ。

　よって、常識的な魔術士などいるはずがない。閃せん光こうの魔女の二つ名を大陸中に轟とどろかせているマチルダともなれば、その非常識さも群を抜いているのだろう。

　それにしても、お姉様、か。

　まあ、生命を超越せんと企たくらむ魔術士は、延命のための長生術、若返りのための回春術の研究を長年に亘わたって重ねてきた。その到とう達たつ点に不死性イモータリテイの獲かく得とくがあるわけだが、かの魔導王たちですら、不老不死の肉体は手に入れられなかったという。それでも、見た目をごまかすくらいなら、力のある魔術士にとっては朝飯前だろう。

　果たして、マチルダは何歳くらいに見えるのか。お姉様と呼ばせるくらいなので、さぞかし若作りなのだろうが。

　マリアローズの現実逃避をよそに、サフィニアは聞いているだけで気が滅め入いってくるような話を続ける。

「──相次いで父と母を亡くし……孤こ児じとなったわたしが、お姉様に拾っていただくまでも、お世話になっていた叔父おじの家が、有史以来初めての……鉄てつ砲ぽう水みずで流されたり……そのあと、預かっていただいた孤児院は、落らく雷らいで火災に……全焼して大勢の子供が……お姉様のところへ連れていかれてからは、兄弟子が二人、弟弟子が一人、たまたまわたしと一緒にいたときに、大怪我や、命までも……」

「…………」

　詳くわしく聞いたのは初めてだが、確かに壮そう絶ぜつだ。ここまでゆくと、何か偶然以外の要素が関係していると考えたくなる。というか、不幸な偶然がここまで重なったという事実だけで、サフィニアの凶きよう運うんを証明するには事足りるだろう。

「……わたしの真マ名ナは……」

　声を失っているマリアローズとユリカに、サフィニアが死に瀕ひんした重病人のような微び笑しようを浮うかべてみせた。

「アーデット・ヨリコ・ジューテンベール永久幸運イクス＝ザナス、というのです。画数も、文字の意味も、すべて……わたしの凶運を打ち消すために、お姉様が選んでつけてくださいました……今、持っているこの杖つえにも……お姉様が念入りに呪じゅ式しきを施ほどこして……お姉様は毎日、わたしに〝古代孔く雀じやく竜りゆうの呪のろい〟を……本来、国家規模の厄やく払ばらいに用いられる、古き術です……でも、何もかも無む為いに終わり、とうとう……」

さしものマチルダも匙さじを投げた、というわけか。

サフィニアはずっとためこんできたものをいったん吐はき出したら、もう止まらなくなってしまったようだ。

「……お姉様が仰おつしやるには、いつか、わたしとお姉様の魔力が相そう克こくして……大陸規模の破は滅めつが訪おとずれかねない、と。わたしを放ほう逐ちくしたのは……もしかしたら、お姉様の、最後の……思いやりだったのかもしれません。ですが、わたしは……遠く東へ向かうよう、お姉様に言いつけられたのにも拘かかわらず……七天占せん星せい術じゆつの禁を破って自らを占うらない、西へ……エルデンに入り、炎ほのおをまといし聖なる断罪の剣けんを振ふるう破天万象七星の一に会うため……その星のもとにいれば、わたしの凶運は祓はらわれる、と……」

「破天万象七星の一、か」

よくわからないけれども、炎をまといし聖なる断罪の剣を振るう、というところから察するに、それはトマトクンを指しているのだろう。

つまり、サフィニアがやむにやまれず自分を占った結果、凶運から逃のがれるにはトマトクンの近くにいるしかない、と出た。で、そうした。すると、以前のような不運不幸の叩たたき売り状態からは、どうにか脱だつすることができた。めでたし、めでたし──とはゆかないと、サフィニアは言いたいのだった。

「今……ここには……彼がいません……」

サフィニアはただでさえ青白い顔を、さらに青ざめさせている。

「……わたしは、恐おそろしいのです……マリアさん、ユリカ、わ

たしは……あなたがたを……」

「馬ば鹿かね」

　ユリカがサフィニアの肩かたに手を置いて微笑んだ。サフィニアはびくりと体を震ふるわせたが、身を引こうとはしなかった。

「トマトクンがいないのなんて、今回が初めてじゃないわ。冷れい静しえいになって思い出してみなしゃい、サしやフィニア。あなたとわたしの二人で鉄てつ鎖しやの憩いこい場をぶらちゅいたことだって、一度や二度じゃないでしょう。カタリとピンパーネルとあなたの三人で、よくアンダーグラウンドに潜もぐっていたじゃない。けど、別べちゆに何も起こらなかった」

「……で、でも……カタリさんが……」

「カタリは死にマニアなだけ。あなたのしぇいじゃないわ」

「確かに」

　マリアローズが力強くユリカに同意してみせると、サフィニアはやっと少しだけ安あん堵どしたようだった。

　もっとも、サフィニアのせいではないにしろ、決して楽観できる状じよう況きようではないことは事実だ。それどころか、これで悲観的にならないほど楽天的な人生観の持ち主なら、人っ子一人どころか虫一匹ぴきいないという獄の獄でも明るく楽しく人生を送れるに違いない。

　思えば、骨の山があるこの開けた場所で、今までのんびりくつろいでいられたことの方が不思議なくらいだった。いや、必ずしもくつろいでいたわけではないけれども、傷の手当てのみならず、昔話までしていたわけだから、同じことだろう。

　マリアローズの予想では、ここは何らかの目的があって作られた空間だと思われる。たとえば、墓場とか。単なるゴミ捨て場かもしれないが、どちらにしても、骨が自分で歩いてここまでくるわけはないから、誰だれか、あるいは何かが運んできたはずだ。

　ということは、その何ものかが、定期的ないし適時ここを訪れる。

　マリアローズたちがその何ものかに出くわしていないのは、それこそ運とか巡めぐりあわせの問題だろう。その意味では、サフィニアの凶運はまだ決定的な事態を引き起こしてはいない。むしろ、微び妙みようにツイているとさえ言えるかもしれない。

　だが、ここにとどまって、そのなけなしの幸運にすがりつづけるのが正しい選せん択たくかどうか。

「──とにかく」



マリアローズは親指の先を軽く噛かみながら、ユリカとサフィニアを順々に見た。

「決めないといけないね。これからどうするか」

「しょうね……」

　ユリカは唇くちびるに指をあて、目線を斜ななめ下に向けて考えこむ仕草をしたが、なかなか意見が出てこない。サフィニアも目を伏ふせて黙だまりこんだままだ。二人とも、視線の先が床ゆかに落ちているのがちょっと気になる。人間、考えたくないことを無理に考えたり、答えたくない問いにぶつかったりすると、だいたい下を向くものだ。

　そこで、マリアローズはあまり気づきたくもないことに気づいてしまった。

「ね、もしかして、ユリカもサフィニアも──」

　しかし、十分ありうる。振り返ってみると、マリアローズはこの二人が戦せん闘とうで大活かつ躍やくする場面には数多く接してきたが、それ以外ではどうだったか？　どこをどう進むとか、こうしたらいいとか、こうするべきだとか、口を出してきたことがあっただろうか？

　ない。たぶん、一度たりともなかった。

「アンダーグラウンドとか、あまり得意じゃなかったりする？」

「実じちゆをいうと」

　ユリカはサフィニアをちらりと見てから、神しん妙みような面おも持もちでマリアローズの前に正座した。

「ＺＯＯじゆーに入るまでは、侵入者クラツカーの真似まね事しゃえしたことがなかったわ。アンダーグラウンドに潜るようになったのは、カタリがうちに入ってからだし……わたしはあくまで、誘しやしよわれたからちゅいてきていただけで、本当は……道を覚えたりしゅるのも苦手だし」

「……み、右に同じです……」

「あ、やっぱり？」

　要するに、この先、戦闘以外の実務的な面については、ユリカやサフィニアに頼たよらず、マリアローズが決めなくてはならないということだ。

　おそらく、彼女らの知識は、異界生物フリークスといかに戦うか

にほぼ限定されているのだろう。それで十分だったのだ。さして興味もないのに、仲間を手助けするため、お付きあいでアンダーグラウンドへ潜る身にとっては、それ以外のことを考える必要などなかったというわけだ。

「で、でもね」

　ユリカが慌あわてたように言い足した。

「ひとちゅだけ。これだけははっきり言えるわ。トマトクンはわたしたちを捜しやがしに来る。必じゅ来る。だから、わたしたちは、トマトクンが来るまで生き延びていないといけない。しょれが最しやい優ゆう先しえんだと思うの」

「生き延びる、か……うん。そうだね。それは僕もそうだと思う」

　とはいえ、いったいどれくらいの間、生き延びなければならないのか。

　マリアローズも、トマトクンが自分たちを見捨てるとは思わない。だが、こちらが三人だから、あちらは三人。トマトクン、カタリ、ピンパーネルと、一人混じっている変なのは措おいておくとしても、それぞれ剛ごうの者ものとはいえ、基本的に全員接近戦しかできない。その点は何とかカバーできたとしても、ただ定められた道をまっすぐ追ってくるわけではないのだ。

　彼らがここまでたどり着くには、時間がかかるだろう。たぶん、十分や二十分ではきかない。一時間や二時間でも足りない。もっと長い時間が。

　そして、もし彼らが同じ階層まで来たとしても、うまく出会えるかどうか。

　マリアローズはこめかみを中指で叩きつつ考えた。とりあえず、実現可能か否いなかを除外し、さらにトマトクンたちが間ま違ちがいなくここを目指していると仮定して、彼らと合流するためにとりうる最善の方法は？

　トマトクンたちは、下ってくるわけだから──そう、こちらから見れば、上り口。そこで待っていれば、トマトクンたちと合流できるだろう。

ただし、そのためには、マリアローズたちが先に上り口へ到とう達たつしていなければならない。また、当然のことながら、上り口を見つけなければならない。上り口まで無事、たどり着かねばならない。

できるのか？　わからない。なぜ、わからない？　どんな敵が、どこに、どのくらいいるのか。情報が皆かい無むだからだ。

ユリカとサフィニアに見守られながら、マリアローズの中で選択肢しが絞しぼられてきた。

一つは、この場所、仮に骨置き場と名づけるとして、ここから動かず、トマトクンたちをひたすらじっと待つ。

もう一つは、何とか上り口へ向かってみる。

あるいは、ひとまず骨置き場をベースにして、情報を収集しつつ安全を確保しながら、トマトクンを待つという手もあるかもしれない。この場合、待つのに都合がいい場所を見つけたら、次々と移動してゆくことになるだろう。

ひとまず、劫ごう火かのことは忘れざるをえなかった。残念ながら、それどころではない。マリアローズが考えるべきことは、この三つの選択肢から一つを選ぶ。たった一つを。しくじれば、ただではすまない。おそらく、死ぬような目に遭あう。というよりも、死ぬ。

三つのうちから、一つ――が、その三つにしても、それぞれ穴がありそうだ。

たとえば、一つめだと、骨置き場から動かないのは、やはりまずいのではないか。

見み渡わたせば、骨置き場からは五本もの通路が延びている。マリアローズたちは三人しかいないので、すべての通路を常時、見張りつづけることはできない。これはかなり不安だ。骨の山の中に埋うもれて隠かくれているという手もあるが、気分的にかなり嫌いやだし、トマトクンたちがここまで来てくれる保証も当然ない。

また、二つめについていえば、上り口が一つとは限らない。確かに、第四層までは階層ごとに一つしか坂道がなかったけれども、それ以降も同じだとどうして言える？　実際、アンダーグラウンドの

中で階層構造を持つエリアでは、複数の階段、もしくは坂道で各階層が繋つながっているケースなんていくらでもあるのだ。

　そうすると、三つめが無難ということになりそうだが、動き回っている間にトマトクンたちとすれ違ってしまうかもしれない。移動すれば、そのたびに環かん境きようが変化するわけだから、何かあった場合の対処が難しくもなる。

　ざっと考えただけでも、このとおり欠点だらけだ。かといって、他ほかに何かよさそうな方法が思いつくわけでもない。時もすぎてゆく。決めなければ。

「──移動しよう」

　決断してしまうと、結局、それしかないという感じがした。

「トマトクンたちが来てくれるのを待つにしろ、ここは場所がよくない。上に行けるようなところを見つけられれば一番いいけど、そこまでいかなくても、死角になってるとか、もうちょっと条件のいい場所を探した方がいいと思う」

「わかったわ」

　ユリカがほっとしたようにうなずいた。

　サフィニアはわずかに顎あごを引いてそっと息をつき、かなりぎこちないというか、引きつってはいるものの、重苦しさがないぶん、さっきよりはましな笑え顔がおを見せた。

「……こういう言い方は、どうかと思いますが……」

「え？」

「マリアさんが、いてくれて……助かりました、本当に。わたしとユリカだけでは、どうしていいか……」

「はは……そ、そうかもね」

　乾かわいた笑い声になってしまったけれども、サフィニアの言うとおりかもしれない。もし、マリアローズが一いつ緒しよに落ちていなければ、今いま頃ごろ、サフィニアとユリカはここで途と方ほうに暮れていただろう。何というか、それも非常に無残な話なの

で、結果的にはマリアローズの行こう為いも無む駄だではなかったのかもしれない。まだ結果は出ていないわけだが。

　そう、重要なのは結果だ。

　終わりよければすべてよし、という言葉もあることだし、この危地もうまく切り抜ぬけてしまえば、何もかも笑ってすませられる。それどころか、いい話のネタにさえなるだろう。

「ネタなんていらないけどさ……」

　マリアローズは小声で呟つぶやきながら、背負い袋ぶくろの中から方眼紙の束を紐ひもで綴つづったものと、鉛えん筆ぴつ、それに白いチョークを取り出した。方眼紙と鉛筆は地図作りに、チョークは一定間かん隔かくで壁かべに印をつけて距きょ離りを測るのと、何かあって逃にげる際、目印にするために使う。とにかく、まずはこの骨置き場を一枚目の方眼紙の中央あたりに書き入れて、全部はそれからだ。

「ま、こういうのは慣れてるしね」

　以前は、一人でアンダーグラウンドを探たん索さくして地図を作り、一人きりで獲え物ものを狩かっていた。

　たいして儲もうかっていたわけではない。華はな々ばなしい武勇譚たんに恵めぐまれもしなかった。それでも、自分の食い扶ぶ持ち分は稼かせいでいたし、わずかながら貯金もしていた。侵入者クラッカーとしての基本を一通りちゃんと押さえて、慎しん重ちように慎重を期して事を運べば、意外と何とかなってしまうものなのだ。

　何のことはない。ＺＯＯの仲間たちに頼るようになったせいで、最近、ややなおざりになっていたそれらの作業を、怠おこたらずにやればいいだけのことではないか。

　そうだ。昔とった杵きね柄づかというほど、月日も経たっていない。もともと、頭をひねって思い出す必要もない、体に染しみついた技術だ。大だい丈じよう夫ぶだ。やれる。問題ない。

　そう思いたい。いや。そう思う。たぶん……。

3

一方、カタリは悪戦苦く闘とうしていた。内心、逆ギレしかけてさえいた。

──せやから、言うたやんか。アホか。何べん言うたったらわかるんや。こういうかっちりした迷宮タイプの場所はホンマに得意やないねん。自じ慢まんやないけど、ここに似とるメリクル迷宮は一回こっきりしか行っとらん。何もかもけったいな灰色のセルマイトでできとる亜あ人じんボーグの地中砦とりでアヴァシーも、よう行かんかった。もちろん、ごっつうお宝が眠ねむっとるっちゅう情報でもあれば、話はちゃうで？　当たり前や。そういう事情なら、稀少物レア・収集家ハンターの名にかけてどないな場所でもえり好みはせえへん。そらそうやがな。けどな……。

これまで、苦手なエリアをできる限りさけようとしてきたことは否いなめない。

やはり、こう、変化があって、目印になるものがたくさんあり、一つ一つの手がかりを総合すれば、奥行きや広がりや全体的なイメージがわかる。カタリにはそういった場所が向いているのだ。そんなことだから、マリアローズあたりに、雑だとかいい加減だとか半魚人だとか魚並みだとか言われるのかもしれないが。

ただ、何度か同じ道を通ったり、確実に位置がわかる場所まで戻もどったりしているうちに、見えてきたこともいくつかある。

まず、この第四層には二種類の通路があり、一つは幅はばが狭せまくて、もう一つは広い。

この幅が狭い方を小通路とし、広い方を大通路とするなら、大通路は一本のみで、坂道を下りたところから左側に向かって延びている。まっすぐ正面へ延びている通路と、右側に延びている通路、大通路から枝分かれしている通路は、すべて小通路のようだ。

大通路は幅が五メーテル以上、高さも五メーテル近くあるのに比べて、小通路は幅三メーテル、高さ三メーテル程度しかない。

ここに一つの事実が横たわっている。

それは、あのローブの半死者ハーフデッドが乗った半死幼よう竜りゆうは小通路を通り抜けられない、ということだ。

まあ、それだけで大通路を竜専用と考えるのは早計だろうが、半死幼竜が大通路の先からやってきたことは間ま違ちがいない。

その先に何があるのか。単に、竜たちの棲すみ家かである竜の巣穴に繋つながっているだけか。あるいは、別の場所か。行ってみないとわからないけれども、とりあえず、これが一点。

二点めは、カタリが立てた仮説に関係している。いや、関係しているどころか、仮説が真相に近いことを裏付ける証しよう拠ことといってもいい。

この第四層は未完成なのだ。床ゆかやら壁やら天てん井じようが剝むき出しの岩がん盤ばんで、そこを多数の半死者ハーフデッドが削けずったり磨みがいたりしている光景が、いたる場所で見受けられる。しかも、奇き妙みようなことに、そうした建設作業中の半死者ハーフデッドは、カタリたちが近づいても敵対行動をとらない。まるで、自分のやるべき仕事をきちんと心得ているかのようだ。

カタリはこれらの半死者ハーフデッドを作業員ワーカーと呼ぶことにしたが、彼らの存在は、ローブの半死者ハーフデッドとともに、一いつ般ぱん的に理解されている半死者ハーフデッドを超ちよう越えつしていた。というよりも、ただ今まで人間たちが半死者ハーフデッドのことをよく知らなかっただけなのか？

トマトクンは言った。偽ぎ魂こんは異界生物フリークスではない、と。

そのことも含ふくめて、喪そう神しん街オレストロはやはり何か変だ。

もともと、カタリが劫火のことを調べていて喪神街に行き着いたのは、膨ぼう大だいな量の秘宝を所蔵していたという〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟霊の所蔵品目録に目を通したのがきっかけだった。

この所蔵品目録の原本は「万ばん霊れい生いけ贄にえの書」と題された一冊の分厚い書物で、複雑に暗号化された上ハイ古ロ高メ位オ語ンで記述されているため、一般人には読めない。カタリが王立

中央文書館の閲えつ覧らん室でページを繰くっていたのは、研究者が共通語に訳したものだ。

　その中に、気になる項こう目もくがあった。

　ＤＣ１４３Ｃをその身にまとい空を溶とかし天を衝つく刀とう剣けん状の武器。

　前にも似たような記述法を見たことがあるので、すぐにぴんときた。ＤＣ１４３Ｃとは、魔ま導どう王時代にしばしば用いられた十六進数を使って色味を表す方法で、深しん紅く色のことだ。深い紅をその身にまとい、空を溶かし、天を衝く、刀剣状の武器。さらに、地じ獄ごくの伯爵アドンド・ルクスから寄き贈ぞうとあり、地獄の侯爵ラデオンメリカイン・ザック製作と記き載さいされていたのが決定的だった。

　焼バきーつニくンしグ刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟。

　人を嫌けん悪おし、地獄の悪あく魔まどもを友とした双そう生せい児じ魔導王ニオ・キオが、メリカイン・ザックに作らせた姉妹剣の片割れで、もう一ひと振ふりは凍フてロつーかズせン刺しレイ貫く剣ピア〝凍とう甚じん〟。

　凍甚はずいぶん前にＤ１で発見されていて、カタリもその所有者に頼たのみこみ、手にとらせてもらったことがある。これがもう、とてつもなく美しく、素す晴ばらしく軽くて、柄つかに触ふれるだけで秘ひめられた魔力がびんびん伝わってくる逸いつ品ぴん中の逸品だった。

　加えて、凍甚は妹、劫火は姉とされており、妹でこれだとすれば姉ならどれほどのものか。カタリは前々から、何とかして劫火を一目見たいと切望していた。

　それが、どうやらレディ・麟霊の所蔵品に含まれていたらしいのだ。

　記録によれば、レディ・麟霊は魔導王時代の終末期に行方ゆくえをくらましている。

　ただ、一説によると、キング・グッダーがエルデンを建設した際、レディ・麟霊の助力があったともいう。その際、レディ・麟霊は財宝とともに一族郎ろう党とうを引き連れ、のちにアンダーグラ

ウンドと呼ばれることになる大穴メガボロスに身を投じたともいわれている。彼女は魔導王時代の終しゅう焉えんを予知し、エルデンを自らの墓標とすべく、そのような行こう為いに出たのだ、とも。

　また、数少ない喪神街オレストロ深層の探索記を紐ひも解とくと、偽魂に支配されて半死者ハーフデッドとなったレディ・麟霊を目もく撃げきしたとの記載があった。別の手記によれば、生きたレディ・麟霊に歓かん待たいされた侵入者クラッカーがいるともいう。喪神街深層には、人知れず彼女の王国が築き上げられているのだ、と。そこまでゆくと眉まゆ唾つばだとしても、レディ・麟霊が喪神街深層にいるというのは、すでに半ば定説になっていた。

　しかし、カタリは、嘘うそっぱちだと思っていたあの手記の内容が、実は真実に近かったのではないかと今は考えている。なぜなら――

「……ぐうっ！」

　愛用の変形斧おの、右手のイノイチでうまく受け止めたかと思った湾わん刀とうは、いきなり軌き道どうを変えてきた。とっさに体をのけ反らせながら、左手のロノニーを繰り出さなければ、鼻を削そぎ落とされていたかもしれない。

　さらに、ロノニーに触れかけた湾刀を、その寸前で引っこめる芸当さえ、やつはしてみせた。

　何て反射神経だ。が、適切な対処ではある。イノイチ、ロノニーの刃はは、斧にしては薄うすいものの、それでも湾刀の刃など問題にならない。刃と刃が嚙かみあえば、華きや奢しやな湾刀は盛大に刃こぼれしてしまうだろう。

　それを巧たくみに回かい避ひして、その上、即そく座ざに距離をつめてこようとしている、やつは――

　ムサド。

　口の部分に穴が空いただけで、視界も完全に遮しや断だんする異様な形の兜かぶとをかぶったムサドは、体中に布のようなものをびっしりと巻きつけている。それは布に見えるけれども、布ではない。非常に薄い特とく殊しゆな金属製で、革かわ鎧よろい以上の防ぼう御ぎよ力を誇ほこるだけでなく、かなり軽量でもある。

　その身体能力は驚きよう異い的だ。関節という関節の可動範はん囲いが広く、予想していない角度から湾刀が伸のびてくる。しかも、どういう手品か知らないが、ムサドは壁かべだの天てん井じょうだのをまるで床と同じように利用することができた。

　これはかなり厄やつ介かいだ。何しろ、こんな敵とやりあったのは初めてなので、動きが読みづらい。二本の斧を駆く使しし てある程度のスペースを確保しつつ、機を見て一気にしとめるのがカタリの戦い方だから、間断なく変へん幻げん自在に攻せめ立てられると、なかなか手が出せないのだ。

　とはいえ、今、トマトクンは三人、ピンパーネルも二人のムサドを引き受けている。二人は他ほかの半死者ハーフデッドの大群も向こうに回していた。彼らの間を抜けてきたムサド一人だけを相手にしているカタリが、助けを求めるわけにはゆかない。自力で何とかしなければ。

　そんなことは承知しているし、そうしたいのは山々なのだが、事態は切せつ迫ぱくしていた。

　背中が硬かたいものにあたった。

　壁だ。追いつめられた。もう下がれない。

「チィッ……！」

　ここで立ち往生してしまうのは最悪だ。動かなければと思い、カタリは舌打ちとともに右方向へ足を踏ふみ出した。向かって右──湾刀を右手に持っているムサドの左手側ということは、要するに逃にげたのだ。カタリはとっさに湾刀から遠ざかろうとした。

　けれども、逃げれば当然、追われる。追われれば、さらに逃げなければならなくなる。

　カタリが壁沿いに右へ移動するたびに、そのすぐ脇わきをムサドの湾刀がかすめていった。止まれば、やられる。背中を見せても、やられる。カタリは逃げつづけるしかない。必死で振り回すイノイチとロノニーは、ムサド自身はおろか、やつの湾刀にさえかすりもしない。

　もうジリ貧だ。カタリはおのれの判断が間ま違ちがっていたことを悟さとらざるをえなかった。逃げるべきではなかったのだ。追い

つめられた状じよう況きようでこそ、前に出るべきだった。そもそも、そういうときに一か八か強気の賭かけに出て、死中に活を求めるのがカタリの人生哲てつ学がくではなかったか。

まあ、その賭けに敗れることが多いと、立派な死にマニアができあがるわけだが。

それでいいと思っていた。

正直、カタリは自分の命をさほど重く考えていない。もちろん、死ぬよりは生きていたいが、死んだら死んだで、もっと生きていたかったと思うこともないだろう。カタリは死後の世界なんて信じない。誰だれにも望まれずに溝穴の糞鼠として生まれ、誰からも無視されて育ったカタリは、ここが救いのない世界だと知っている。教育係のジャン・モーロウは、そんな世界で生き抜ぬくためのすべを、態度を、カタリにしっかりと叩たたきこんだ。

期待するな。求めるな。望むな。惜おしむな。自分の力で手に入れろ。誰かに愛されると思うな。愛せ。誰かに守られると思うな。守れ。ただ力つきるまでひたすら歩け。

それなのに、カタリは今、大いに躊躇ためらっていた。

いつものように、平然と命を捨てる覚かく悟ごで勝負に出られない。軽かったはずの命が、こんなにも重い。命どころか、腕うで一本捨てることさえできない。つい考えてしまうのだ。

もし、自分が死んだら？　自分が大おお怪け我がをしたら？

自分は別にいい。国を出てからは好き勝手に生きてきたし、いつ死んでも後こう悔かいはない。

だが、カタリは知っている。皆みながカタリのように生まれたわけではない。誰かに望まれ、愛され、大切にされて生きている者はたくさんいる。自分の命ほど、他人の命は軽くない。

だから、怖こわいのだ。頭の中は、どうやって相手を倒たおすかではなく、死なないために、負傷しないためにどうするかで一いっ杯ぱいで、自然と及および腰ごしになってしまい、防戦一方どころか、逃げ回ることしかできない。

まったく、ひどいザマではないか。今もムサドの湾刀が鼻先をか

すめてひやりとしたところだが、こんな状態でいつまでももつはずがない。

　実際、カタリは不意にバランスを崩くずして、進行方向へ倒れこみそうになった。

　ムサドが湾刀で斬きりつけてくると見せかけて、足あし払ばらいをかけてきたのだ。

「━だあっ……くっ！」

　一いつ瞬しゅん、転ばないように踏ん張ろうとした。

　しかし、いっそのこと、ここは勢いよく床ゆかに転がりこんだ方がよさそうだ。そう思い、斜ななめ回転の高速でんぐり返しを決めた。そこで立ち上がらず、さらに横へ身を投げたのは、意識的な行動ではなかった。イノイチを投じたのも、右腕が勝手にやったことだ。しかも、これがまんまと命中してしまうのだから、わからないものだった。

　床に寝ね転ころがった体勢で見上げると、ムサドの土手っ腹にイノイチが深々と突つき立っていた。ムサドの動きが止まっている。少なくとも、カタリには止まっているように見えた。

　カタリは立ち上がりざま、ロノニーをムサドの首筋に叩きこむのと同時に、イノイチをその腹部から引き抜いた。

　間かん髪はつを入れず、ロノニーを首筋から抜きながら、今度はイノイチを首の逆側に食いこませ、念のために両の斧でムサドの両りよう膝ひざも破は壊かいしておいた。

「……往生せえや」

　蹴け倒たおしたムサドに向けて、カタリは汗あせをぬぐいつつ、呻うめくような声でそんなくだらない台詞せりふを吐はいた。何か言わずにいられなかったのだ。たとえそれが相手より自分をみじめにする言葉でも、いくら吐き出しても吐き出し足りないものが、カタリの胸にたまっていた。

　だが、まだムサド一体屠ほふっただけだ。かなり体力を消しよう耗もうしてしまったが、休んでいる場合ではない。それぞれ引き受けていたムサドを始末し終えたトマトクンとピンパーネルが、押し

よせる半死者ハーフデッドの切り崩しにかかっている。カタリも加勢しなければならない。

　結局、大たい剣けんの一振りごとに二匹ひき、三匹とひねり潰つぶしてゆくトマトクンと、目にも止まらぬ速さで雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を操あやつって次々と敵を解体してゆくピンパーネル、これにカタリが加わると、総計二十かそこらの半死者ハーフデッドはものの数分で壊かい滅めつした。

　あとに残ったのは、すでに半死者ハーフデッドとしての偽いつわりの生をも維い持じできなくなった、大量の血と肉と骨のかたまりだ。それから、疲ひ労ろうもか。

　まあ、大汗をかいて肩かたで息をしているのは、カタリだけだが。

「──っちゅうか、お前じぶんら二人……ゼェ、ハァ、ホンマ、フゥ、ゼェ……バ、バケモンや。な、何で、こんだけやって、ハァ、ハァ、息も乱れとらんのや……」

「お前は無む駄だな動きが多すぎるんだ」

　トマトクンは自分で斬り伏ふせたムサドの兜を、大剣の先でつついている。

「それに、ムサド相手にずいぶん余計な体力を使っていたな。腰が引けていたせいだぞ。お前らしくもない」

「わしは……」

　カタリはいったん呼吸を整え、返り血で染まった自分の体を見回した。左腕に一箇か所しよ、右の腿ももに一箇所、皮一枚切れただけの傷と、左肩に若じやつ干かん、打だ撲ぼくの痛みがあるものの、いずれも浅手だ。これくらいなら何ともない。

「──わしはごくふっつーの人間やさかい、そら、たまには迷うたり後ろ向きになったりすることもあるがな。お前じぶんらと一いつ緒しよにせんといてくれ」

「そんなものか」

「当たり前や」

「ふむ」

　トマトクンはさして納なつ得とくしたふうでもなく軽くうなずくと、屈かがみこんで力任せにムサドの兜を脱ぬがせた。さっきからいったい何をやっているのだろう。トマトクンに近づいて、そのすぐ横にしゃがみこんだカタリは、奇き妙みようなものを見た。

「……う、わ……何やこれ」

「間違いない」

　トマトクンは呟つぶやくようにそう言って、わずかに目をすぼめた。

「本物のムサドだな」

「戦せん闘とう奴ど隷れい、か……」

　そう。最初、第四層への坂道でムサドを見たときは何となく引っかかる程度だったが、その後、思い出した。ムサドとは戦闘奴隷の別べつ称しようだった。

　カタリは兜を剝はぎとられて露ろ出しゆつしたムサドの顔面に視線を滑すべらせ、顔をしかめた。

　しかし、それが顔面といえるかどうか。少なくとも、目と鼻があり、口があって、眉まゆがあるといった顔ではない。かろうじて、口の部分だけは上うわ顎あごと下顎らしきものが嚙かみあう形になっているが、唇くちびるも歯もなく、黄色っぽい口こう腔くうの中には舌すら見受けられないのだ。

　その口ともいえない口以外の部分は、皮ひ膚ふではなく、金属板と無数の管に覆おおわれている。

　光こう沢たくのない黒色の金属板は、丸みを帯びながら人間の顔の形に近い造形になってはいるが、ところどころから飛び出している管の束は何だろう。カタリには見当もつかないけれども、そうした管の一部はトマトクンが持っている兜と繫つながっており、他ほかは引きちぎれて丸まったり跳はねたりしている。ちぎれた管の先せん端たんからは、微び細さいな火花が散っていた。

「ムサド──戦闘奴隷っちゅうたら、一部の魔ま導どう王が直属の白

兵戦隊として従えとったといわれとる連中や。まさか、この目で実物を拝むことになるなんてな……」

　黄昏たそがれの魔導王の一人〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟霊は、史上最大規模のムサド兵団〝戦慄シバレス・楽団オルケストラ〟を保有していたといわれている。秘宝・泣スクきリー叫ミンぶグ・短剣ダガーを生み出すため、レディ・麟霊が自分のムサド千人を手ずから殺したという逸いつ話わは、真しん偽ぎのほどは別としてもかなり有名だ。

　だが、それは九百年以上前の出来事であり、現在、最さい高こう齢れいとされる魔術士でも、齢よわい三百歳程度でしかない。そのくらいでも、カタリなどにとっては十分想像しづらい話なので、迂う闊かつなことに、正直、ムサドのことはまったく頭になかった。

　けれども、レディ・麟霊がいるなら、当然、ムサドがいてもおかしくはない。

　逆の考え方をすれば、ムサドの存在が一つの証しよう拠こにもなりうる。

　やはり、レディ・麟霊はここにいるのだろう。

「せやけど、素す顔がおも何かようわからんことになっとるし、いったい何なんや、こいつら」

「うむ」

　トマトクンはムサドの兜かぶとを床ゆかに置き、大たい剣けんを外がい套とうの裾すそでひとぬぐいした。それから、周囲を警けい戒かいしているピンパーネルに一いち瞥べつをくれたが、今のところ危険は迫せまっていないようだ。ピンパーネルは黙もく々もくと四方に視線を配り、物音に耳を傾かたむけている。

「ムサドは、もとは人間だが」

「人間や……ないんか」

「ただの人間に見えるか？」

　トマトクンは唇の片かた端はしを少しだけつり上げて、苦笑いをしてみせた。

「こいつらは、魔導王とその眷けん属ぞくが人間をベースにして作り出した生体兵器だ」

「生体兵器やて？」

「ああ」

　トマトクンは再びムサドに目を落とした。黄玉の瞳ひとみが何らかの感情でかすかに揺ゆれている。

　哀あわれみ、だろうか。

「薬物と外科的処置による筋力増強、神経伝達速度と骨格強度の向上、細さい胞ぼう分ぶん裂れつの恒こう常じよう化、そして、脳の改造。今でいう医術式のもとになった魔術の一系統は、ムサド開発の過程で飛ひ躍やく的に進歩した。機術もそうだな。俺も詳くわしいことは知らんが、あまりにも脳みそをいじくりすぎたせいで、ムサドは固有の魂アニマを喪そう失しつしているらしい」

「あー……と、んー……」

　時折、トマトクンの口からは、カタリの聞いたことがない知識が洪こう水ずいのごとく溢あふれ出す。しかも、本人にはその自覚がないらしく、こちらが首を傾かしげていると、少し不思議そうに目を見開いたりするから手に負えない。

「ようわからんけど、つまり、あれやな……改造人間っちゅう感じか」

「改造人間だと？　うむ。何だか、どこかで聞いた覚えのある言葉だぞ」

「へ？　わしが今、作った言葉やで」

「俺の気のせいか」

　トマトクンは顎を撫なでた。

「まあ、とにかく、ムサドは人間から作られた生体兵器だが、魂がない。もともと虚うつろな存在だから、偽ぎ魂こんに支配されることもない。こいつらは見かけ以上に人間とかけ離はなれてる。生きているように見えるし、実際、生きているみたいに動くが、基幹部

分は生体ですらないはずだ」

「半死者ハーフデツドやないんか」

　だが、確かに、独特の鈍にぶさや本能的で衝しよう動どう的、また受動的なところなど、半死者ハーフデツドの特とく徴ちようがムサドにはない。喪そう神しん街は、偽魂に支配された半死者ハーフデツドのみが闊かつ歩ぽするエリアだという先入観に惑まどわされていたのか。そう考えると、あの竜騎士ドラグーン気どりのローブの半死者ハーフデツドも、ローブを着て容よう貌ぼうを隠かくしただけの、半死者ハーフデツド以外の何ものかだった可能性もある。ピンパーネルが鮮あざやかな手並みで徹てつ底てい的に解体してしまったから、そのあたりは確かく認にんするべくもなかったわけだが。

　それにしても、今の話を聞いたあとだと、ムサドを見下ろすトマトクンの眼まな差ざしに憐れん憫びんの情が混じっていたような気がするのも、うなずける。どういう経けい緯いで彼らがムサドになったのかは知らないが、カタリもだんだんと腹が立ってきた。

「胸むな糞くそ悪いモン作りくさりおって、魔導王っちゅうヤツらはホンマ、血も涙なみだもない鬼おにやな。ここまでいったら、人間が人間を力で支配するとか、殺ばらすとか、搾さく取しゆするとか、そういう次元の問題ともちゃうやろ。魔導王かて同じ人間やないんか。人間を何やと思っとるんや」

「同じ人間、か」

　トマトクンは少しだけ唇を歪ゆがめた。カタリにはその表情が、なぜか自じ嘲ちようめいた笑えみに見えた。

「そもそも、やつらは自分を人間以外の何かに変えようとしていた連中だからな」

「ハッ、そないなこと、できるんかい」

「さあな」

「できとったら、今いま頃ごろ、どの魔ま導どう王はんも神さんにでもなって、お空の上にでものぼってるちゃうんか。せやけど、現実には、あの原子のアトミツク・極大マキシマム・魔術士ドレツドスター、黄昏の魔導王の中でもっとも強大な力の持ち主やった初代

キング・グッダーかて死んだ。双そう生せい児じ魔導王ニオ・キオも。東の原野の魔導王天正具象も。〝鴉大帝グレイト・クロウ〟ギュンツァーも。恵めぐみと慰なぐさめのジヴリールもや。そら、行方ゆくえ不明とされとる魔導王もおるけどな。たいがい、どこかで死んだっちゅう記録やら墓所が見つかっとるし、よしんば見つかっ——」

　カタリはその先の言葉を呑のみこんで、口をつぐんだ。

　そうだ。死んだ証拠が一つもない魔導王も中にはいる。その代表格こそがレディ・麟霊。この喪神街オレストロ深層での目もく撃げき談があり、また、ムサドの存在によって、ますますここにいる可能性が高まってきた死霊女王スペクトラクイーンなのだ。

　仮に、彼女が生存していたとする。

　人間の常識からすると、それは明らかに異常だ。魔導王たちの子孫ともいうべき現代の魔術士にとっても、決して普ふ通つうの寿じゆ命みようとはいえないだろう。だとしたら、あくまで仮定の話ではあるが、彼女は人間を超ちよう越えつした、ということにはならないか。

　トマトクンが天てん井じようを見上げた。

　そこには偽魂の群れが漂ただよい、青白い光で喪神街を照らしている。

「異界生物フリークスじゃないとして、あれは何だ……？」

　トマトクンはそう低く呟つぶやきながらも、本気で答えを探しているようには見えなかった。探すまでもなく、すでにトマトクンの中で答えは出かけているのではないか。ただ、それが正解だという確信はまだ持てずにいる。カタリには何となくわかった。なぜなら、カタリも自分なりに答えを見み出いだしつつあったからだ。

　偽魂に支配されて、偽いつわりの生を享きよう受じゆするというよりも、強制されている半死者ハーフデツド。

　魔術によって作られた、虚ろな生体兵器ムサド。

　人を超こえることを目指した魔導王。

レディ・麟霊。

すべては一本の線で繋つながっている。

「──さて」

トマトクンがカタリを横目で見た。

「そろそろ大だい丈じよう夫ぶそうだな」

「へ？　え、ああ……」

間の抜ぬけたことに、カタリはたった今、気づいた。トマトクンが長話をしていたのは、カタリの回復を待つためだったのだ。そうでもなければ、先を急いでいるこの状じよう況きようで、無む駄だ口を叩たたいて時間を費ついやすはずがなかった。

つまり、カタリはもう足を引っ張っている。

自分のせいで、余計な時間を使わせて。

「な、何を言うとんねん。わしなら全然平気やで。休みすぎたくらいや。さ、とっとと先に進まな。時は金なり、や。今は金より大事なモンがかかっとるわけやし」

「そうだな。ピンプ」

トマトクンに呼ばれると、少し離れて哨しよう戒かいしていたピンパーネルが疾しつ風ぷうのように戻もどってきた。むろん、疲つかれているような様子はまったく見受けられない。振ふり返ってみても、つらそうにしているピンパーネルなど、今まで一度でも見たことがあるだろうか。ない。一度もない。

ひどい怪け我がをしても、表情一つ変えず、普ふ段だんと同じように働いてみせる。たとえ腕うでや足の一本くらい失っても、他人の足を引っ張ったりはしない。

ピンパーネルはそういう男だ。誰だれかさんみたいに、コロコロ死んで、死にマニアなどいう不ふ名めい誉よな称しよう号ごうを賜たまわったりは絶対にしない。

「──ほんなら、とりあえず大通路に戻って、行けるとこまで行って

みよか。どうも、喪神街は下から上に向かって工事していっとるみたいや。ざっと見た感じやと、大通路が一番古うて、そっから離れるごとに作っとる最中の場所が増えていっとる。大通路が下に通じとる可能性は高いやろ」

　説明しながら、何でこんなことがすぐにわからなかったのかと、自責の念もわいてきた。今は行く道を決めるしか能のない自分が、こんなことでは本当に役立たずだ。

　とはいえ、そんなことを考えて落ちこんでなどいられない。だいたい、自分らしくない。

　だが、それでは、自分らしいとは何だ？　どういうことだ？

　カタリは自分自身を見失いかけて、ひどく焦あせっていた。

4

　骨置き場からは、合計五つの通路が延びていた。

　アンダーグラウンド内部では、磁石が用をなさない。そのため、方角は不明だが、骨置き場の一つの角は骨の山で隠れていて、それ以外の三つの角に通路が一つずつ。残り二つの通路は、正方形に近い骨置き場の二辺の、それぞれ真ん中あたりから延びている。いずれの通路も、幅はば、高さともに約三メーテルと、判を押したように同じ大きさだった。

　このうち、一辺の両りよう端たんに位置する角から平行に延びた二つの通路は、すぐに頑がん丈じようそうな金属製の扉とびらにぶちあたった。少し調べたところ、これらの扉は内側から施せ錠じようされており、簡単には開けられそうもなかったので、とりあえず手をつけないでおいた。カタリあたりなら、何も考えずにこじ開けかねないが、そんな賭かけをする気分ではないし、その余よ裕ゆうもない。

　判断を間ま違ちがえれば、マリアローズ自身だけでなく、ユリカとサフィニアにも危険が及およぶかもしれないのだ。負傷しても、ユリカに治ち療りようしてもらえるという意識は、この際、頭の中

から追い払はらうべきだろう。えてして、そういう甘さが気の緩ゆるみに繋がるものだ。

　そもそも、マリアローズにとってのアンダーグラウンドは、いつも生と死が隣となりあわせで化かしあいをしている、過か酷こくで苛か烈れつな弱肉強食生存競争の場だったはずであって。

　まあ、他人の命を背負っているぶん、方眼紙に書き入れる鉛えん筆ぴつの線もぶれるというものだが、しばらく忘れていたこういうぎりぎりの緊きん張ちよう感は、決して嫌きらいではない──と、思う。

　思うことにした。そうとでも思わなければ、やっていられるか。この状況では、こんなふうに開き直りでもしない限り、平常心を保てない。

　何にせよ、すぐ扉に突つきあたる二つを除けば、通路は残り三つだ。

　うち二つは、他の一辺の端はしと中央あたりから平行に延びていて、別の通路と直角に交差したあと、いくつもの扉がずらっと並ぶさらにまた別の通路に行きあたる。

　マリアローズはかなり時間をかけて、慎しん重ちようにその一帯を探さぐったのだが、残念ながら、この先には進めないと結論づけざるをえなかった。いたるところに敵が──確かトマトクンがムサドと呼んだあの妙みような格好したやつが、うじゃうじゃいたからだ。

　だが、ムサド。あれは何ものだろう？

　見たところ、どうやらムサドには、黙だまって突っ立っているタイプと、巡じゆん回かいしているタイプの二種類がいるようだ。その動きから察するに、ここを警備しているのか。あの天井に立っていた非常識なムサドと完全に同じかといわれれば、近くで見たわけではないし、正直、自信はないけれども、姿形はかなり似ていると思う。

　どちらにしても、これだけはいえる。

　あの滑なめらかな身のこなしや、時折、すれ違うムサド同士でうなずきあったりする仕草などは、半死者ハーフデツドのそれではな

い。半死幼よう竜りゅうに乗り、召しよう喚かん魔ま術じゅつを使ったローブの半死者ハーフデッドもそうだった。果たして、彼らは特とく殊しゅな半死者ハーフデッドなのか？　もしくは、半死者ハーフデッドではない？

　わからないが、ムサドを普通の半死者ハーフデッドと同じように考えるのは危険だろう。少なくとも、連中には仲間同士でコミュニケーションをとる能力はありそうだ。戦せん闘とう能力は不明だけれども、低く見積もるより高く見積もっておいた方がいいはずだし、差し迫せまるまで戦いはさけたい。目的はあくまで生き延びることなのだから、リスクは極力、抑おさえたい。

　そんなわけで、五つの通路のうち四つが消え、残りは一つ。

　大勢のムサドがいた通路と向かいあう形で、逆側の辺の中央から延びる通路──

　これがダメなら、扉を開けてみるか、骨置き場にとどまって骨の山の中に身を隠かくすか。

　いっそ、ムサドがひしめきあっていて、一目でこれはもう絶対に無理、という感じだったらまだ諦あきらめもついたのだが。

　微び妙みようだった。

　その通路はずいぶん長い。通路の先は左に折れているが、逆側の通路と比べれば、明らかに閑かん散さんとしている。何しろ、ムサドがいない。しばらく骨置き場から様子をうかがっていたけれども、巡回タイプも姿を現さなかった。

　むろん、左へ折れた先に、突っ立っているタイプがいるかもしれない。その可能性は否定できないが、この状況で確実に安全が保証された選せん択たくなんてあるだろうか？　そんなものがあるのなら、どうか教えて欲しいものだ。

「行こう」

　マリアローズは後ろに控ひかえているユリカとサフィニアを振り返った。

　声が、かすれた。口の中がからからに乾かわいているせいだ。

「とりあえず、あの曲がり角までかな。その先は様子を見ながらってことになっちゃうけど」

「わかったわ」

「……はい……」

　ユリカが棍こんを、サフィニアが水晶様材クリスタリンの杖つえを、それぞれ握にぎり締しめた。二人とも、ずいぶん緊張しているようだ。それはそうか。トマトクンならともかく、マリアローズに命を預けようというのだ。きっとマリアローズが彼女たちの立場でも、不安で、怖こわくて、硬かたくなる。

　トマトクンがそばにいるだけで、安心できるのだ。必ずしも、強さだけのせいではない。人格とか、雰ふん囲い気きとか。トマトクンが備えているそういった部分のおかげで、彼のもとでは誰もが自分の力を十二分に発揮できてしまう。

　今、ユリカやサフィニアが普ふ段だんより頼たよりなく見えるのは、そのあたりが多分に影えい響きようしているのだろう。

　もちろん、マリアローズでは、トマトクンの代わりにはなれない。集団パーテイーの芯しんとなり、軸じくとなって、皆みなに安心感を与あたえ、的確な判断を下し、大事なところは自分が締める。そんなことはとうてい不可能だし、別にできなくてもいいと思う。いつもならば。

　トマトクンがいてくれれば、必要なかったのだ。

　そこに、速度と効率性でいえばトマトクンをも上回るピンパーネルがいて、サフィニアの強力な魔術があって、ユリカが全員をサポートして、カタリは、まあ、それなりに働いて、その間をマリアローズがちょこまかと動き回る。

　いつしか、何の抵てい抗こうもなく、そういうものだと思うようになっていた。この形が崩くずれるなんて、考えもしなかった。できれば、崩れて欲しくなかった。

　マリアローズには自信がない。トマトクンみたいに「俺に任せろ」なんて口が裂さけても言えない。言えるはずがないではないか。

　マリアローズなんて、ただ多少すばしっこくて、侵入者クラッカーの経験が多少あって、他人とはちょっと違ちがう生き方をしてきたおかげで身につけた、小手先の芸がいくつかあるだけだ。あとは、少しばかり知ち恵えが回るくらいか。それにしたって、体格と筋力の圧あつ倒とう的な不利を補うため、頭を使わざるをえなかっただけのことで、威い張ばれた話ではないだろう。

　かといって、ユリカも、サフィニアも、頼りにならない。

　ユリカは医術式に鵺ぬえ流古式戦闘術、サフィニアは魔術と、それぞれマリアローズなど及びもつかない才能と能力を持っている。だが、侵入者クラッカーとしては初心者ニュービー同然だと判明した。純じゅん粋すいな戦闘以外では、彼女たちはまるであてにならないということだ。今や彼女たちの方こそ、マリアローズに依い存ぞんしているくらいだ。

　冗じよう談だんじゃない、と思う。

　人には向き不向きというものがあって、こんな役回りはマリアローズに相応ふさわしくない。絶対に違う。キャラじゃない。ふざけるな。やってられるか。

　それなのに、どういうわけか、マリアローズはユリカとサフィニアに笑ってみせていた。

「大だい丈じよう夫ぶ、何とかなるよ。てゆうか、何とかする。うん。そういう気持ちでいないとさ、うまくいくものも、うまくいかなかったりするし」

「……しょうね」

　ユリカが微笑ほほえんでくれた。サフィニアもかすかに口くち許もとを緩ゆるめたように見える。一方、マリアローズは自分の言葉を全然信じていなかった。何とかする、だって？　そんなことを言ってしまっていいのか？　責任を持てるのか？

　持てない。不可能だ。

　だが、言うだけならタダだし、少しでもユリカたちが元気になるなら、多少のやせ我が慢まんくらいするべきだろう。それで彼女たちが顔を上げてくれれば、マリアローズも若じやつ干かん心強くなる。もとより、こと戦闘となれば、マリアローズよりも頼り甲が斐

いのある二人だ。

「僕が先行する。サフィニアが真ん中、ユリカは後ろについて」

　マリアローズはそう言うなり、通路に足を踏ふみ入れた。足音を立てないように気をつけつつ、左手の壁かべ沿いを十歩進んだところで、ちらりと後ろを見る。二人はついてきている。チョークで壁に印をつけた。また十歩。チョークで印。十歩。印。十歩。印。曲がり角まであと一息の地点に到とう達たつした段階で、印は七個になった。

　マリアローズの一歩は、背せ丈たけに比して足が長いぶんちょっと広めで、およそ四十サンチだから、十歩で四メーテルになる。かける七で二十八メーテルだ。進んできた通路を、手早く方眼紙に鉛筆で書き入れる。通路の長さは、骨置き場からの目測とだいたい同じくらいか。

　まあ、ここまではいい。問題は、あの角を左に曲がった先に何があるか、だが。

　物音はしない。となれば、一番警けい戒かいすべきは、曲がってすぐ突つっ立っているタイプのムサドがいた場合だろう。けれども、それについては見てみないとわからないし、必要以上に恐おそれていては、かえって冷静な対処ができなくなってしまいそうだ。

　一体、二体なら、さっさと片づけてしまえばいい。

　それくらいの気持ちでいようと決め、マリアローズはいよいよ角へ向かった。十歩で印。さらに二歩で角の縁ふちにたどり着き、しゃがみこんでそっと顔を出すと──やはり、というべきか。

　いる。

　向かって左側の壁に背をつけ、立っている。

　ムサドだ。しかも、そうとう近い。三メーテルくらいか。

　ただ、マリアローズにはまだ気づいていないようなので、決して慌あわててはならない。まずは後ろのユリカやサフィニアに伝えるため、動くな、という感じの手て振ぶりをしてみせた。マリアローズの意図はうまく伝わったようだ。二人はマリアローズが顔を引っこめるまで、おとなしくしていてくれた。さて、これからどうする

か。

（いるの？）

　ユリカがジェスチャーでそう訊きいてきた。

（うん。すぐそこ）

　マリアローズが同じく身振り手振りで返事をすると、ユリカが指を一本、二本、三本と立てて、首を傾かしげてみせた。

　ちなみに、ユリカが小首を傾げると、とてつもなくかわいい。何も心構えをせずにその仕草を見てしまうと、全然その気がなくても、胸がきゅんと締めつけられてしまう場合がある。よくよく注意しなければならない。

（相手の数は？）

（うーん……一、かな）

　そう答えたものの、まだ奥に別のムサドがいるかもしれない。慌てずに、と思いはしたが、じっくり通路の向こうまで観察する余よ裕ゆうはさすがになかった。もう一度、確かく認にんすべきか。しかし、視野を広く確保できるほど顔を出せば、今度こそムサドに気づかれてしまうかもしれない。

　迷うところだ。が、ここで長々と悩なやんでいても、あまりいいことは起こりそうにない。複雑に考えすぎれば、身動きがとれなくなる。そう、単純な話だ。現時点でとりうる選せん択たく肢しは、所しよ詮せん、たった二つしかないのだ。進むか。引き返すか。どっちだ？

　マリアローズは下した唇くちびるを強めに噛かんで、ゆっくりと、音を立てないように鼻で深呼吸した。

（やろう）

（わかったわ）

　ユリカが棍を握る手に力をこめ、サフィニアもうなずいた。

　そうと決まれば、剣けん聖せい直系正統派剣けん闘とう術の居合

いでいくか、はたまた籠こ手ての矢を使うか。

　とにかく、あのムサドはごく短時間で始末してしまいたい。

（まず僕とユリカが飛び出して、二人で手間取ったら、サフィニア、お願い）

　身体言語ボデイランゲージだけで伝えるには少々複雑な内容だったが、どうやら通じたようだ。

　サフィニアが特殊なチヤネ精神集中リングに入った。術者によっては、特殊なチヤネ精神集中リングの間、完全な忘我状態に陥おちいって無防備になる場合も結構あるのだが、サフィニアは簡単な動作くらいならしてのける。そのあたりもサフィニアのすぐれた資質の賜たま物ものに違いない。

（よし）

　マリアローズはユリカと顔を見あわせた。ムサド。どんな敵なのか。ふと、二年半以上前、侵入者クラツカー稼か業ぎようを始めた頃ころのことを思い出した。あのときは、アンダーグラウンドに入ってこの目で見た異界生物フリークスすべてが恐ろしかった。異界生物フリークスではない、地上にいる脂羽蟲ゴキとは大きさが違うだけの大脂羽蟲ゴツキーさえ、何かとんでもなくおぞましい強敵に思えたものだ。

　逆に、たいしたことはなかろうとタカをくくって挑いどみかかったやつが、太刀たち打ちできないほど手て強ごわくて、命からがら地上へ逃にげ帰ったこともある。

　そんなことを何度も繰くり返すうちに、こいつはやばそうだとか、あいつは平気だとか。おおよそ見当がつくようになってきて、やがて誰だれもが身の丈たけにあわせた侵入者クラツカー生活を送るようになるわけだ。

　で、あのムサドだが、マリアローズ単独なら絶対に戦わない。それくらいやばそうな相手だ。

　もっとも、マリアローズは一人ではない。ユリカがいる。サフィニアがいる。やれる。かどうかはわからないが、もう決めたのだ。この期ごに及およんで尻しり込ごみしていても仕方ない。

動け、体。そうだ──行け。

マリアローズは角から飛び出した。ムサドはこちらを見ていない。もしかして、こいつ、鈍にぶいのか。だとしたら好都合だ。三メーテルは一いつ瞬しゆんでゼロになった。

腰こしを左に回転させるように引きつつ、手首のスナップをきかせて鞘さやから一気に偽にせ劫ごう火かを抜ぬいた。

抜き打つ。

──馬ば鹿かな。

タイミングは絶ぜつ妙みようだったし、完全にとらえたと思ったのに、かわされた？

しかも、横向きのまま、不自然な体勢で奥の方へ倒たおれこむようにマリアローズの居合いをよけたムサドは、壁についた両手を軸にして体を回転させ、壁に着地した。

むろん、普ふ通つうに考えればありえないけれども、天てん井じように立っていたくらいだ。それくらいやってのけたとしても、不思議ではない。いや、かなり不思議だが。

ともあれ、初太刀は外された。ただ、ムサドも即そく座ざに反はん撃げきしてくる様子はない。それならばということで、マリアローズはさらに距きよ離りをつめて二撃目を放とうとしたが、それよりも早く、ユリカが脇わきをすり抜けていった。

その小さな手の中で、すでに棍こんの先せん端たんが変形し、幾いく股またにも分かれている。

完かん璧ぺきに使いこなすことにより、斬ざん・砕さい・掛か・抉けつ・突とつ・払ふつ・打・流・弾だん──それらすべての攻こう防ぼう動作を行うことができるという、鵺ぬえ流古式戦闘術独自の武器、極限クライマツクス九手棍ナインポール。



　ユリカはその棍で、まず突ついた。これを紙一ひと重えでムサドに回かい避ひされると、また突いた。突いて、突いて、突いた。五発目がムサドの奇き怪かいな形の兜かぶとをかすめた瞬間、ユリカは石いし突づきに手を添そえて棍全体を回転させた。斬だ。

　しかし、ムサドはとっさに壁にへばりついて、腰の後ろにくくり

つけてあった鞘から湾わん刀とうを抜いた。マリアローズが頭上に重く鋭するどい何かを感じたのはそのときだった。

　これは──殺気？

　慌あわてて上を向くと、別のムサドが天井を這はっていた。

　目が、あった。ムサドは顔面を覆おおう兜をかぶっているので、顔があったというべきか。

「──っ……！」

　二体目がいたのだ。胃の底あたりが凍こおりつき、一瞬、息がつまったが、体は反応してくれた。ほとんど何も考えず、偽劫火を持った右手を天井のムサドに向けて、左手で右籠手のスイッチを押した。矢は発射された。命中もした。だが、弾はじかれた。弾いた？　ムサドの全身に隙すき間まなく巻きついている布のようなものが？　布じゃない？

「爆条Ｍｅｘｅｓ雷來礼」

　次の瞬間、サフィニアが呪じゆ文もんを詠えい唱しようする声を聞いて、マリアローズは心底、助かった、と思った。

　この呪文は爆ばく雷らい索さくだ。サフィニアの杖つえから幾条もの雷いかずちが発せられて、彼女の意のままに敵をとらえ、黒くろ焦こげにする。そのとおりになった。かと思われた。実際、ＬＥＰの雷らい霊れいＸｅｗが発生させた雷は、確かに天井と壁のムサドを両方ともとらえたのだ。

　ところが、Ｘｅｗの雷に撃うち抜かれた二体は、跳はねるように大きく体を震ふるわせてから脱だつ力りよくし、一度は床ゆかに落ちて──すぐに飛び起きた。

「……嘘うそ」

　当然、起きただけで終わりではない。ムサドはすぐさま攻撃の態勢に移ろうとした。それでも、ユリカはさすがだった。目の前のムサドが行動を起こす前に棍を叩たたきこんだ。これでもかこれでもかというほど突いて、斬きって、抉えぐり、打ち据すえた。

　だが、惜おしむらくは、ユリカの体は一つしかない。もう一体の

ムサドについては、マリアローズが何とかするしかない。それはわかっているのだが、やつはもうマリアローズに背を向けてサフィニアに襲おそいかかろうとしていた。

　ただ、まだ剣けんが届く距離だ。しかしながら、大きな問題がある。

　偽劫火は業わざ物ものだけれども、トマトクンが持つ大剣のような破は壊かい力はない。マリアローズにはピンパーネルのように一瞬で敵を解体する技術も力もない。やつに一太刀浴びせたとして、それで止められるかどうか。おそらく、止まらないだろう。

　だからといって、こんなことをするのは、馬鹿げている。冷静に考えればそうに違ちがいないが、今のマリアローズにはこれしか方法が浮うかばなかった。

　後ろから飛びついたのだ。

　さしものムサドも、これには不意を衝つかれたのか。ムサドの足首のあたりにマリアローズの手がかかった。思いきり抱かかえこんだ。マリアローズはムサドを引き倒した。止まった。止めてやった。ここまでは目もく論ろ見みどおりだった。

　しかし、この先については、何の計画もなかった。正直、計画どころか、頭の中が真っ白になっていた。ムサドは違ったようだ。やつには意志があった。たぶん、敵対者を排はい除じよするとか、そういった攻撃的で積極的な意志が。その差が如によ実じつに出た。

　気がついたときにはもう、しがみついたのとは逆の足で何度も顔面を蹴けられていた。

　それでもマリアローズは我が慢まんした。というか、やつの足をつかんでいるだけで精せい一いつ杯ぱいだった。

　かといって、それほど痛かったわけではない。痛いはずなのに、あまり痛くはなかった。初めて「これはちょっとやばいかな」と思ったのは、左目のあたりにムサドの踵かかとがまともに入り、ひどい音がして、視野がちょうど半分になったときだ。ムサドが腰の後ろから湾刀を抜いたのを見たような気がして、「だいぶやばい」と思った。

　──死ぬかも。

頭だけはやめて欲しい。

いや、ムサドがこっちの願いなんて聞き入れてくれるはずがないし、自分で庇かばわないと。

けれども、そのためにはこの手を放さなくてはならなくて、そうすると、どうなる？　どうなるんだったか？　自分は何のためにこんなことを？　必死で？　死んでまで？　そこまでして、なぜ？　しなければならないのか？

だが、もう遅おそい。

否いや、もう少しだった。

ユリカがムサドの兜に棍を打ちこむのが、ついでにサフィニアが水晶様材クリスタリンの杖をムサドの首筋に叩きこむのがもう少し遅かったら、本当に何もかも手て遅おくれになっていただろう。

「……助かっ……た……？」

そうらしい、と理解するまで少し時間がかかった。

ユリカがムサドにとどめを刺さし、サフィニアに助け起こされて、ようやく気が抜ぬけた。

同時に、顔中がじくじくと痛みはじめ、きっと今、自分はさぞかしひどい有様なのだろうと思った。片方しか見えない目でとらえたサフィニアやユリカの表情からすると、そう考えざるをえなかった。

ユリカは厳しい面おも持もちで、すぐにマリアローズの頬ほおに手をあてて医術式を開始したが、サフィニアに至っては泣いている。とめどもなく溢あふれて落ちる涙なみだが、傷に沁しみた。

「……す、すみません……ごめんなさい、わたしが……倒たおしきれなかったせいで……」

声の合間に、しゃくり上げる音が混じる。サフィニアって、結構、泣き虫だ。鼻やら左目やら頬やら、内側からいじくり回される嫌いやな感かん触しよくに耐たえつつ、マリアローズはそんなことを思った。口の中も切れているから、喋しやべると、まだ痛そうだが。

「いや……いいって、そんな──」

　案の定だった。マリアローズが痛みに顔をしかめると、サフィニアはさらにぼろぼろと涙をこぼした。

「わ、わたし、わたしの、せい、です……ご、ごめんなさい、わたしが……わたしが、いる、せいで……マリアさん、こんな……わたし……助けて、も、もらうような、資格なんて……」

「んー……」

　言いたいことはあるが、今は言いたくない。とりあえず、見た目より負傷の程度は軽いようだし、サフィニアの嗚お咽えつを聞きながら、ユリカの医術式が終わるのを黙だまって待つことにした。そう時間はかからなかった。

「──どう？」

　ユリカは三、四分で治ち療りようを完かん了りようさせると、白い布でマリアローズの顔を拭ふいてくれた。

「あまりゆっくりもできないから、目についたところだけ治したけど。まだ他ほかに痛いところはある？」

「ううん、大だい丈じよう夫ぶ」

　マリアローズは体を起こして、背負い袋ぶくろから出した水すい筒とうの水で口の中をすすいだ。その間も、サフィニアが肩かたを震わせてこちらを見つめていることには気づいていた。

　だが、さっきちらりと思った言いたいこととやらは、いったん口に出すと、長くなってしまいそうな予感がする。時と場合の問題もある。

　結局、サフィニアの肩を軽く二、三度叩いて、一言だけにとどめた。

「ま、お互たがい様ってことで」

「……で、ですが……」

　一言で終わらせようと思ったのだが、サフィニアがそれでわかっ

てくれないのなら仕方ない。本当はこんなことを言いたくはないのだけれども、この際はやむをえないだろう。

　それにしても、こっ恥ぱずかしくて嫌になる。

「仲間って、そういうものでしょ？　たぶん、さ」

　でも、否定されたらどうしよう。そのときは、二度と立ち直れないくらい深刻な赤っ恥ぱじをかく羽目になりそうだが、どうやら最悪の事態はさけられたらしい。サフィニアはほとんど聞きとれない小さな声で「……はい……」と返事をし、ローブの袖そでででごしごしと涙をぬぐった。

「……すみませんでした……」

「どうせなら、謝るのもやめにしない？　僕もわざわざ謝らないし」

「は、はい……」

　下を向いたまま、かすかに首を縦に振ふるサフィニアを見ていると、それは少し無理か。

　おそらく、サフィニアにしてみれば、周囲で起こる不運、不ふ慮りよの事故、他人の不始末までも、すべてが自分のせいのように感じるのだろう。こればかりは本人の感じ方の問題だし、他人が口を挟はさんだところで、どうにもならないのかもしれない。

「──じゃ、こうしようか」

　とはいえ、いつまでもサフィニアにしょげ返っていられても困る。

「もしこの先、僕とかユリカにすまないって思うことがあったら、謝る代わりにあとでそのぶん、アイスか何かご馳ち走そうしてくればいいよ。謝罪一回分につき一回奢おごり、だと、ちょっと釣つりあいがとれないかな。三回分で一回とか。うん。だから、これからはいっぱい、いくらでも僕らに迷めい惑わくかけていいから。それだけ、僕らが得するわけだし」

　我ながら、身勝手でたわけた申し入れだと思ったが、多少の効果はあったらしい。サフィニアは顔を上げて微笑ほほえんでくれた。

相変わらず薄はつ幸こうそうではあるものの、楚そ々そとした風情ふぜいがあって、なかなかに魅み力りよく的なその笑い方からすると、どうやら元気になってくれたようだ。

　そうなると、次だ。これからどうするか。

　その前に、今、自分たちが置かれている状じよう況きようを正確に把は握あくしなければならない。

　現在地は━そう、骨置き場から延びた三十三メーテル近くの通路を、左に曲がってすぐの場所だ。

　マリアローズは立ち上がって曲がり角まで戻もどり、十歩。
チョークで壁かべに印をつけ、鉛えん筆ぴつで地図に書き入れた。

　この通路はまっすぐ続いていて、目測で十五メーテルほど進んだあたりに右への曲がり口が見える。その向こうにも、さらに右への曲がり口。だいたい、同じくらいの間かん隔かくだ。その先にもう一つ、全部で三つの右への曲がり口があって、突つき当たりには扉とびらがある。ということは、およそ六十メーテルの通路か。

　ここで、十五メーテル四方の骨置き場から、約三十メーテルずつ左右に張り出し、前方に六十メーテル突つき出だした長方形の空間を思い描えがいてみる。

　今、マリアローズたちがいるのは、骨置き場の右側だ。ムサドがうじゃうじゃいた方面は、左側にあたる。様子からして、右側と左側では、目的というか役割が違ちがうのだろう。

　どう違うのか？

　わからないが、いずれにしても、上層の広さと比ひ較かくして考えれば、マリアローズが想定した一帯はこの階層の一部のはずだ。これで全部だとは思えない。

　加えて、床が抜ぬけて落ちた地点━第四層への坂道は、第三層の端はしに近かった。となれば、骨置き場もこの階層の端近くに位置していて、中心部からは離はなれているのではないか。

　やはり、あの骨置き場は、ゴミ捨て場なのではないかとマリアローズは思うのだ。

なぜなら、骨置き場に積まれていた骨は、自然に白骨化したものではない。マリアローズの故郷では火か葬そうが一いつ般ぱん的だったから、ぴんときた。あれは焼かれた骨だ。

つまり、半死者ハーフデッドとしての体てい裁さいをも維い持じできないくらい崩くずれた死体を、何ものかがどこかで焼しよう却きやくし、焼け残った骨を骨置き場に運んでいる。おそらく、そういった場所は、中央より隅すみっこの方に設けられるものだろう。

もちろん、以上はマリアローズの推測にすぎない。この推測が正しかったとして、何かの足しになるのかも不明だが、もともと何の情報も持っていない場所にいるわけで、今のところはこうして一つずつ積み重ねてゆくしかない。行き当たりばったりは危険すぎる。偶ぐう然ぜんの要素にも期待したいところだが、期待すればするほど、裏切られたとき、余計につらい。

こうして色々考えたつもりでいても、たまたま何かが抜けていたのか、それとも、この程度がマリアローズの限界なのか。

いきなり突き当たりの扉が開いた。

そこから出てくるというべきか、入ってくるというべきか。ムサドが三体。それだけではない。ムサドどもは多数の半死者ハーフデッドを引き連れている。だが、半死蜥蜴とかげ人だったり半死亜あ人じんボーグだったり半死人間だったりする半死者ハーフデッドの群れが、全員、同型の甲かつ冑ちゆうを身にまとい、まったく同じ剣けんと盾たてを持っているのはどういうわけだ。これではまるで、軍隊か何かみたいではないか。

「……ど、どうしよ……」

マリアローズは思わずユリカを見た。ユリカはサフィニアを見ていた。そこで、サフィニアに顔を向けてみた。

サフィニアは、マリアローズとユリカに何を奢るべきか、ひたすら考えこんでいるようだった。鉄てつ鎖さの憩いこい場の露ろ店てんでアイスクリーム。東部料理店でアンミツか、アンニンドーフ。はたまた、有名喫きつ茶さ菓か子し店でチョコレートパフェ。

いや、それは錯さく乱らんしかけたマリアローズの勘かん違いだった。サフィニアは特殊なチヤネ精神集中リングの只ただ中なか

にいた。ローブの各所、主に裏側にたくさんついているポケットから、いくつかの触しよく媒ばいを取り出し、今まさに呪じゆ文もんの詠えい唱しようを開始しようとしていた。

　だが、間に合うのか。何の術だろう。わからないが、マリアローズはとにかくユリカと一いつ緒しよにサフィニアの横まで下がった。邪じや魔まになるといけないと思った。

「極羅雪怨慈励印ＲｅｕＬａｕＲｕ度律ＭａｕＬｅｕ浄土Ｄｕｇｕｓ痕厳頑玄月結氷獄」

　サフィニアの呪文は長かった。おかげで、ぎりぎりだった。先頭のムサドなど、もう五メーテルの距きよ離りまで迫せまっていて、マリアローズとユリカもその迎げい撃げきのために飛び出す寸前だった。距離と時間の関係を考えれば、本当に紙一ひと重えだったといってもいいだろう。

　そう、あとわずかというところで、ムサドどもの突とつ進しんは停止した。サフィニアによって、ＬＥＰから呼び出された水すい霊れいＣｙｄと時じ霊れいＸａｊが、連中をあまさず瞬しゆん時じに凍こおりつかせ、運動能力を奪うばい去ったのだ。

　以前、マリアローズは、サフィニアがこれと似た縛ばく氷獄という術を使う場面に何度か接したことがある。しかし、この術は縛氷獄以上だ。これだけの数の敵が一度に全身白い霜しもまみれになり、時間が止まったかのように動きを止めるなんて、かなり凄すごい。

　もっとも、武装した半死者ハーフデツドどもはともかく、ムサドはその状態でもゆっくりと手足を動かしている。何ともしぶとい連中だが、このざまではムサドもただの的だった。

「──マリア、今のうちに！」

　そう言いながら、ユリカが一体のムサドの胸部に棍こんの連打を叩たたきこんだ。マリアローズも別のムサドの首に偽にせ劫ごう火かで斬きりつけたが、刃はを阻はばんだのは頸けい骨こつだろうか。それにしては硬かたすぎるようだけれども、いずれにせよ、マリアローズには強引に押し切れるほどの膂りよ力りよくはない。

　やむをえず、いったん刃を引き戻して、すかさず今度は心臓のあ

たりに突きを見み舞まった。細身で両刃の偽劫火は、斬ることもできるが、刺し突とつにも適している。籠こ手ての矢を弾はじいたあの布みたいな防具も、やすやすと貫つらぬき通すことができた。達した手て応ごたえがあった。偽劫火を引き抜くと、黒っぽい血液が溢あふれた。

　それでもムサドは、サフィニアの魔ま術じゆつの影えい響きようで緩かん慢まんな動作ではあるものの、腰こしの後ろから湾わん刀とうを抜こうとしている。

「しつこい……！」

　仕方ないので、もう一ひと突つき。さらに一突き。赤黒く粘ねばっこい液体を浴びながら、ムサドがぴくりとも動かなくなるまで、刺さして、刺して、刺しまくる。

　無様なやり方だが、なりふり構っていられない。ユリカはすでに二体目のムサドを叩き殺していた。それに、急がなければならない理由がまだある。突き当たりの扉とびらから、新手が現れたのだ。

「くそ、これじゃあ……」

　やられてしまう。

　だって、確かに、サフィニアの魔術で霜まみれになった半死者ハーフデッドの集団が、いまだに通路をほぼ塞ふさいではいる。が、そんなものは無意味だ。壁かべや天てん井じようを床ゆかと同じように利用できるムサドには、まったく関係ない。実際、新手の中にもムサドが三体ほど混じっており、そいつらは天井を走って接近してきつつあるではないか。

　最悪だ。

　もう明るい未来なんて、これっぽっちも信じられない。何をしても、どの道を選んでも、最後は結局、袋ふくろ小路に行きあたって袋叩きにされそうな気がする。全部、無む駄だに思える。どうすればいい？　どうもこうもないが。

　愛用の極限クライマツクス九手棍ナインポールを手に、ぐっと重心を低くしてムサドどもを待ち構えているユリカと同じだ。マリアローズもやるしかない。やるのだ。最後まで。サフィニアは？

　見たところでは、彼女もまだ諦あきらめていないようだ。何やら銀色の細い鎖くさりのようなものを両手に絡からめ、すり潰つぶした石せつ灰かいか何かを用いて、杖つえの先で床に何か描かいている。あれは魔法円か。ひょっとすると、前の魔術を発動させた直後から、ずっと用意しつづけていたのかもしれない。できあがった魔法円はずいぶん大きかった。

　そして、魔法円の外に立ち、特殊なチヤネ精神集中リングに入る前に、サフィニアはひっそりと言った。

「……時間が、必要です……」

　つまり、時間さえあれば逆転可能ということか。

　サフィニアの言葉をそう解かい釈しやくしたマリアローズは、急に力がわいてくるのを感じた。明るい未来にも、もしかしたら出会えるかもしれない。うまくゆけば、いい抜け道を見つけることができて、そこからハッピーエンドに到とう達たつできてしまうかもしれない。現金なものだ。一転してそう信じられるようになった。

　だとすると、これでやるべきことも決まった。

　とにかく、一いち途ずにひたむきにひたすら時間を稼かせぐのだ。それだけでいい。単純明快だ。実にわかりやすいし、そのためにマリアローズができることも限られている。サフィニアのように見たこともない魔術が次から次へと出てくるわけではないので、こんなものしかない。

　ハーレム・ゴードンという名の透とう明めいな液体で満たされた、小こ瓶びん━愛あい称しよう、爆ばく弾だん。

　普ふ段だんはこの爆弾を六本と、他ほかの小瓶を三本、ベルトのホルダーに収納しているのだが、今日は色々考えた末に、爆弾のみ九本携けい帯たいしてきた。そのうち一本は対半死幼よう竜りゆう戦で使用したから、残りは八本。一本あたりの材料費が三千ダラーといえば、決して安くはないけれども、こういうときは思いきりが肝かん心じんだ。マリアローズは偽劫火を鞘さやに収めた。

「ユリカ……！」

　名を呼んで注意を引きながら、右手の人差し指と中指の間、中指と薬指の間にそれぞれ一本ずつ挟はさみ、左手には一本、計三本の

爆弾を用意した。わざわざ確かく認にんする必要はないだろう。ユリカのことだから、マリアローズが何をしようとしているか、察してくれているに違ちがいない。

　二段構えだ。

　三体のムサドが、およそ十五メーテルまで近づいてきたところで、右手の二本を投げた。

　だが、巻き起こった閃せん光こうと爆音と炎ほのおの中をくぐり抜ぬけ、突き進んでくるムサドが一体いた。左手の一本はそいつを狙ねらって直ちよく撃げきさせた。再び爆発が起こった。

　それにしても、約三メーテル×三メーテルという狭せまい通路なだけのことはある。ひどい音だった。耳がすっかり馬ば鹿かになったが、それだけの甲か斐いはあった。と思いたいところだが、単独で侵入者クラツカーをやっていた経験のあるマリアローズには、楽観を自ら戒いましめる癖くせが身についている。これまでのさして長くもない十七年と半年の人生で、あまりろくな目に遭あってこなかったせいもあるだろう。そのわりにはひどい悲観論者ペシミストではないつもりだが、たまに図に乗ったり有頂天になっても、すぐに目が覚めてしまうのだ。

　だから、気を抜いてはいなかった。

　正解だった。煙けむりの中で何かうごめくものが見える。爆ばく風ふうに吹ふっ飛とばされ、折り重なるように倒たおれた半死者ハーフデツドどもの上に、のっそりと立ち上がった何ものか。

　一体、いや、二体いる。

　ムサドだろう。

「……吾密蚊丹唱園膈長卦師獣埜皇子彼埜者汚喚毘師吾名環Ａｒｄｅｔｔ Ｙｏｒｉｋｏ Ｊｕｔｅｎｂａｌｅ永久幸運出痲脊出痲脊盟約丹従威吾声丹応荏与……」

　そのとき、やっとサフィニアの呪じゆ文もんの詠えい唱しようが始まった。さっきの術より、さらに長い呪文だ。呪文の感じからすると、要素魔術ではないようだが、そんなことはどうでもいい。

　ユリカと力をあわせて、何としてもあのムサド二体を止めるの

だ。こちらへ押しよせてこようとしている爆発の被ひ害がいを免まぬかれた半死者ハーフデッドも、止める。必ずや全部、止めてみせる。

「吾高螺禍丹唱園真心悲師獣埜皇子彼埜者汚喚毘師吾環只人埜子也師喪契約者也故丹汝吾丹従威師故在……」

　サフィニアの呪文が終わるまで。

　ムサドはもう駆かけ出していた。近すぎて爆弾は使えない。マリアローズは偽にせ劫ごう火かを抜いた。抜きながら、あえて前に踏ふみこんだ。踏みこみつつ斬ざん撃げきを放った。かわされる、と思った。そのとおりになった。ムサドはマリアローズの初しよ太刀だちを見切って横っ飛びし、壁を伝って天井に至った。

　そうだ。こういう芸当が可能な連中だった。忘れていたわけではないが、今さらながら、反則じゃないかという気持ちはぬぐえなかった。

　ムサドはマリアローズの真上にいる。これでは届かない──わけでもない。天井は三メーテルしかないのだ。いくらマリアローズの背が低めで、偽劫火もさほど長くはないといっても、あわせればゆうに二メーテル三、四十サンチにはなる。振ふり回せば、当たる。ムサドが黙だまって天井に突つっ立たっていてくれれば。

　もちろん、そんな都合のいい話などあるはずがない。

「くそ……！」

　マリアローズが偽劫火で斬きり上げると、ムサドはその場にしゃがんでこれをよけた。やや感情的になってしまったせいだろうか。その際、大振りになりすぎて、一いつ瞬しゆん、マリアローズの上半身ががら空きになった。そのタイミングを見み逃のがしてくれる敵ではなかった。

　ムサドが天井から急降下してくる。その手にはすでに湾わん刀とうが握にぎられていた。マリアローズは、しかし、もう終わりだとか、殺やられるとか、そういったことは一いつ切さい考えなかった。自分の迂う闊かつさを悔くいることさえ後回しにした。ただ本能に命じられるまま、生き延びることを最優先にしようとした。

　が、いけない。それではダメなのだ。

たとえ今、マリアローズが前後左右いずれかに体を投げ出し、無事この場を切り抜けたとしても、その結果、サフィニアがムサドに襲おそわれてしまったら、何の意味もない。

それくらいなら、むしろ──

むしろ、何だ？　自分が盾たてになって死んだ方がいいとでも？

馬鹿げている。けれども、正しい判断なのだろう。だから、そうせざるをえず、マリアローズは逃にげなかった。ムサドの湾刀をぎりぎりまで引きつけて、鋭するどく振り出した偽劫火で受け止めた。刃はと刃が、噛かみあった。偽劫火と比べて薄うすっぺらい湾刀が半ば折れ、飛び散ったその破片がマリアローズの頬ほおをかすめていった。

ムサドはそのまま体ごと落ちてくる。もつれあうように、というよりは、マリアローズが一方的に押し潰され、押し倒される格好だが、こうなってしまった以上、放さない。マリアローズはムサドの腰に両足を巻きつけた。絶対に放してたまるか。

とはいえ、むろんムサドにとっては、そのままでいいはずがない。

ムサドは湾刀を捨て、両手で偽劫火を奪うばいにきた。マリアローズが懸けん命めいに抵てい抗こうすると、今度は右手でマリアローズの両手を封ふうじ、左手で殴なぐりかかってきた。マリアローズは必死に顎あごを引き、首を固めて、これにもしばし耐たえた。すると、とうとうムサドは、マリアローズの決して太くはない首を絞しめにかかった。

実際、有効な手段だ。体格の小ささときわめて筋肉のつきにくい体質の悲しさで、マリアローズの首はたおやかな女のそれのように絞めやすくできている。トマトクンほどではないにしろ、一・八メーテルはある立派な体たい軀くのムサドであれば、マリアローズなど片手でやすやすと絞め殺してしまえるだろう。

マリアローズは何とか左手を自由にして、ムサドの左手をはねのけようとした。それが不可能だと悟さとると、首とムサドの手との間に、一本でもいいから指を差しこもうともがいた。声はほとんど出せなかったが、情けないことに、ユリカに助けを求めた。

もちろん、今いま頃ごろはユリカも別のムサドと戦っていて、そんな余よ裕ゆうはないはずだ。余裕があれば、とうに助けにきてくれているだろう。

無む駄だなのだ。

こんなに苦しくても。

苦しいから。

視界が、歪ゆがむ。苦しい。所しょ詮せん、こんなものか。息が。苦しい。できない。助けて。くそ。これで。苦しい。助けて。誰だれか。苦しいよ──トマトクン。

ああ。ここにいないやつのことなんか考えて、どうする。

しかも、あんなふざけた名前のやつのことなんて。

「出痲脊出痲脊此処丹出誓威汚為」

サフィニアの呪文も、マリアローズの耳にはほとんど届かない。その代わりに、耳みみ許もとで太たい鼓こが打ち鳴らされているような音がする。これは、心臓か。どうしてそんなところに心臓があるのか。わからない。おかしい。壊こわれてしまったようだ。目の前が真っ赤だ。次はおそらく真っ黒になる。そうなったら、おしまいだ。

だが、自分の上を何か強い風のようなものが通りすぎてゆく気配がして、急に楽になった。

と言いたいところだが、実に久々のような気がする呼吸は、マリアローズに苦痛をもたらした。喉のどと肺が猛もう烈れつに痛んで、頭もがんがんする。ただ、思考能力と知覚は急速に回復した。いったい、何が起こったのか？

この重く低い咆ほう哮こうは。

引き裂さき叩たたき潰つぶし食いちぎる音は。

何だ……？

そして、マリアローズは目もく撃げきした。

　それは大きくて、黒かった。四足獣じゆうのようだった。尻尾しっぽがあった。全身が体毛に覆おおわれていた。ちょっと、いや、かなり大きすぎたが、マリアローズはそれによく似た姿の獣けものを見たことがあった。別に珍めずらしくもない獣だ。

　太古に家か畜ちく化されたという彼らは、エルデンでさえ人に飼われていて、また、野の良らとしても人間たちの生活圏けんの中に独自の領土を築いて暮らしている。

　人はそれを猫ねこと呼ぶ。

　もっとも、人間より遥はるかに大きな体を持つ猫がいるなんて、寡か聞ぶんにしてマリアローズは知らない。というか、牙きばと爪つめで次々と半死者ハーフデツドども──たぶん、マリアローズを殺そうとしていたムサドやユリカが相手にしていたムサドも含ふくめて、すべての敵を単なる肉につ塊かいに変えてゆくそれは、明らかにただの猫ではない。ただの猫であってたまるか。

　巨きよ大だいな黒猫の首には、銀ぎん鎖さが巻かれている。

　首から延びたその銀鎖の先は、サフィニアの手に握られていた。

　サフィニアの表情は真しん剣けんそのものというより切せつ羽ぱ詰つまっていて、まるで黒猫と綱つな引ひきをしているかのようだ。サフィニアの体格からすると、かなり分の悪い勝負になりそうだが、銀鎖は長いし、単純に力比べをしているわけでもないらしい。今のところ、サフィニアは黒猫に引きずられていない。黒猫は鎖に繋つながれたまま、殺さつ戮りくというよりも、破は壊かいをほしいままにしている。

「──召しよう喚かん魔ま術じゆつ……」

　そう。召喚魔術だ。あの黒猫はサフィニアの魔術によって、どこぞの異界から召喚されたものに違いない。

　ただし、普ふ通つう、召喚しただけでは言うことなど聞いてくれないはずだから、そのあたりをあの銀鎖で何とかしているのか。マリアローズには、召喚魔術などという超ちよう高等魔術のことはさっぱりわからないが、おそらくそうなのだろう。

　それにしても──と、マリアローズはやや所在なげなユリカと顔を見あわせた。

「正直、こんな術があるなら、とか思わなくもないよね」

「しょうね」

　ユリカは微び苦く笑しようを浮うかべてみせた。本当に拍ひよう子し抜ぬけだ。何せ、マリアローズがあれだけ苦しめられ、何度か殺されそうにもなったムサドを、あの黒猫はあっさりぶち殺してしまったのだ。

　しかし、サフィニアにも言い分があるだろう。

　緩ゆるみがなくなってきて、あと少しでぴんと張りそうな銀鎖を持つサフィニアの白い手が、物もの凄すごい勢いで震ふるえている。

　黒猫は、三十メーテルほど先の半死者ハーフデッドを二体まとめて肉球の一撃で粉ふん砕さいしたところだった。

「……深シエン暗アン太タイ緑ウー界ジエの黒影姫ヘイユイジは……彼女の、種族名ですが……とても好戦的で、言うことを聞いてくれないというか……制せい御ぎよしづらいので、ぼ、暴走すると、こ、こここここここ……！」

　と、瞬しゆん間かん的に抵てい抗こうしたのもむなしく、サフィニアが引きずられた。というよりは──

　飛んだ。

　それくらい、黒影姫ヘイユイジは猛烈な勢いでダッシュしていた。

　だが、なぜ？　何のために？　黒影姫ヘイユイジは、何とあれだけいたムサドや半死者ハーフデッドどもを壊かい滅めつさせてしまい、すでにこの通路にはマリアローズとサフィニアとユリカと黒影姫ヘイユイジ自身以外、動くものの影かげとてないのに。

「──って、考えてる場合じゃないし！」

「しゃ、サしやフィニア……！」

　マリアローズとユリカは慌あわてて黒影姫ヘイユイジとサフィニアを追った。黒影姫ヘイユイジはもう通路の突つき当たりに達し

て、扉とびらに体当たりを食らわせている。サフィニアは大だい丈じよう夫ぶか。走りながら見る限りでは、生きているし、動けるようだ。サフィニアは、今にも破れそうな扉に決定打を見み舞まおうと少し後退した黒影姫ヘイユイジの尻しりに、何とかしがみつこうとしている。

そうだ。頑がん張ばれ、サフィニア──マリアローズは心の中で応おう援えんした。とりあえず、つかまっておけ。このままでは、喪そう神しん街オレストロ引き回しの刑けいで死んでしまう。同時に、すまない、と詫わびたい気持ちで一いつ杯ぱいだった。こんな術があるなら、最初から使っておけ？　何て無責任な。リスクが大きいからこそ、サフィニアはやむをえなくなるまで使わなかったのだ。

そもそも、黒影姫ヘイユイジの召喚のみならず、サフィニアは信じられないくらい多種多様な魔術を身につけている。だが、地形や状じよう況きようや様々な条件によって、使用できる術はかなり絞しぼられてくるものだ。その見み極きわめを誤れば、仲間や自分の身を危険にさらすことになりかねない。いくら才能豊かで、太古の強力な魔術を行使できたとしても、異界生物フリークス一体を葬ほうむるために全世界を破滅させるような魔術をぶっ放すやつは、単なる馬ば鹿かでしかないのだ。

いい魔術士は、無む駄だに力を浪ろう費ひするような真似まねはせず、必要なときに必要なだけの力を使う。

その意味でいうと、サフィニアは実に賢けん明めいな魔術士だった。たった二巡じゆん月げつ余りとはいえ、彼女と行動をともにしてきたマリアローズは、そのことをよく知っていた。

──それなのに、僕は。

「サフィニア！」

黒影姫ヘイユイジがついに扉を破り、通路の向こうに飛びこんでいった。

サフィニアは、黒影姫ヘイユイジの尻尾のつけ根あたりにしがみついていたようなので、ただちにどうこうということはないかもしれないが、いつまでも無事でいられるとは思えない。さりとて、マリアローズにしろ、ユリカにしろ、黒影姫ヘイユイジに追いつける

ほど足が速くない。というか、ＺＯＯ最速を誇ほこる元アッサシンのピンパーネルであっても、黒影姫ヘイユイジにはとうてい及およばないだろう。

　だいたい、あの黒影姫ヘイユイジというでかすぎる黒くろ猫ねこは、いったい何を欲しているのか。サフィニアは黒影姫ヘイユイジを好戦的と評し、事実、殺し、壊こわすことを楽しんでいたふうでもあったから、さらなる敵を、血を求めてでもいるのか。

　黒影姫ヘイユイジから遅おくれること約三秒、扉を出てすぐの逆Ｌ字路で、マリアローズとユリカはまっすぐ延びている方の通路の先に黒い獣の後ろ姿を見つけた。

　もう二十メーテルほど先か。やばい。このままだと離はなされる一方だ。必死に足を動かしながらそう思っている間にも、どんどん距きょ離りは開いてゆく。

　三十メーテル。

　四十メーテル。

　しかし、不意に黒影姫ヘイユイジが立ち止まって、右方向へ首を向けた。匂においを嗅かぐような仕草をしている。どうもそこに右への曲がり口があるらしい。

　いずれにしても、今が追いつくチャンスだ。まあ、追いついてどうするというアテもないのだが、追いつかないよりはいくらかマシだろう。

　先行するマリアローズとやや遅れ気味のユリカは、互たがいに示しあわせるまでもなく、ここが勝負所だという認にん識しきで一いつ致ちして足を速めた。せめて、黒影姫ヘイユイジがもう少しその場にとどまっていてくれたら、マリアローズの手がサフィニアのローブの裾すそくらいはつかむことができただろう。

　要するに、届かなかったのだ。タッチの差で逃にげられた。

　しかし、マリアローズは悔くやしがったりしなかった。そんなことをしている暇ひまがあるなら、さらに追えという話だ。マリアローズとユリカはそうした。いい加減、息が切れていたけれども、あと一ひと踏ふん張ばりだという気がした。

一つには、たぶん、黒影姫ヘイユイジが右へ曲がって入りこんだ通路が長くなく、突き当たりの扉が開いたままだったからだろう。

もう一つには、そこが他ほかとは趣おもむきの異なる場所だと示す、いくつかの手がかりがあった。

たとえば、地じ響ひびきのような低い音。たとえば、開け放たれた扉の向こうから洩もれ出る光の揺ゆらめきと、熱。

何となく、黒影姫ヘイユイジの目的地はここではないかと思った。また、この先がどういった場所なのかも、マリアローズには予想がつきかけていた。ただ、その場所がどうして黒影姫ヘイユイジの目的地なのかはまったくわからない。いや、わからなかった。その中に足を踏み入れるまでは。

やはり、そこはマリアローズが思ったとおりの場所らしい。奥行きは約二十メーテル、幅はばは三十メーテルほどあるだろうか。結構な広さだが、その半分以上があるもので占しめられている。

炎ほのおだ。

燃えている。

手前から十メーテルあたりに頑がん丈じようそうな柵さくが設けてあって、その向こう側で何か色々なものが、おそらく半死者ハーフデッドでいられなくなった死体が、燃やされていた。

それはたぶん焼しよう却きやく炉ろだった。炉と呼ぶほど洗練されていないとすれば、焼き場でもいい。だが、煙けむりは天てん井じように設置された何基もの回転する装置に吸いこまれ、どこかへ運ばれるか、処理されて消えるかしているようだ。おかげで、この焼却炉には耐たえがたいほどの熱気はこもっていないのだろう。高度な仕し掛かけと無造作さが雑居していて、何とも奇き妙みようだった。

もっとも、人としてまず驚おどろくべきことは、この施し設せつについてではないかもしれない。

ここは赤黒い血の海だった。

肉塊が散乱していた。

大量の死が撒まき散らされたあとだった。

その中心に、炎の照り返しを受けて傲ごう然ぜんと立つ何ものかの姿があった。

赤い。

炎のせいではないだろう。

マリアローズの頭とう髪はつよりはわずかに暗い紅色の、滑なめらかでどこか艶なまめかしくさえある何らかの材質でできた、人形。それが第一印象だが、人間の特とく徴ちようを備えた形であるにも拘かかわらず、どこか人外の匂いがする。胸や尻しりの膨ふくらみなどは明らかに女性的なのに、身の丈たけが二メーテル以上ありそうで、全体的にかなり細身だけれども、何か凶きよう暴ぼうな力を秘ひめているように見受けられる、形状のアンバランスさのせいか。あるいは、その両手に一ひと振ふりずつ持った禍まが々まがしいほどに長く湾わん曲きよくした刀とう剣けんのフォルムのせいか。

それは、何なのだろう。

全身を紅色の甲かつ冑ちゆうで完全に覆おおったきわめて長身の女、と言えないこともない。

が、そうとう無理がある。

それは人間に似ているものの、色々な部分で人間と違ちがいすぎる。あれを人間だと認めることに、マリアローズの中の何かが拒きよ絶ぜつ反応を起こしている。あれは人間にしては生命から遠すぎる。人間にしては死に近すぎる。あまりにも静止している。呼吸しているようにすら見えない。

しかし、やつは突とつ如じよ、動きはじめた彫ちよう像ぞうのごとくゆっくりと向き直った。総身の毛を逆立てて喉のどの奥で唸うなっている黒影姫ヘイユイジを誘さそうように、禍々しき双そう剣けんの切っ先が下げられた。

間違いない。やつは黒影姫ヘイユイジを挑ちよう発はつしている。

おそらく、深シエン暗アン太タイ緑ウー界ジエの黒影姫ヘイユイ

ジは、人間にはない感覚でやつの気配を感じとって、ここまで来たのだ。殺すために。もしくは、殺されるために。どちらにしても、戦うために。

　マリアローズもユリカも一言も発しなかった。身じろぎもしなかった。戦機が熟しきるまでの、何秒か。何十秒か。何分か。何時間か。ただ固かた唾ずを呑のんで見守ることしかできなかった。

　サフィニアが黒影姫ヘイユイジに振り落とされるのと、やつが禍々しき双剣をやけに優ゆう雅がな所作で振るうのとは、ほぼ同時だったように見えた。

　振り落とされて、よかった。

　本当に、よかった。

　目にもとまらぬ速さでやつに飛びかかっていった黒影姫ヘイユイジは、もとの姿のまま再び地面に降り立つことはなかったからだ。次に着地したとき、黒影姫ヘイユイジは四枚におろされていた。

　もちろん、やつの禍々しき双剣の仕し業わざだろう。マリアローズにはまったく見えなかったが、そうに違いない。どこを探しても、それ以外の可能性はありそうもなかった。

　ついでに、マリアローズたちに残された可能性も、たいした数はなさそうだ。

　二枚におろされるか。三枚か。四枚か。それ以上か。

　正直、マリアローズは泣きたくて仕方なかった。心がきれいに折れてしまいそうだ。というか、とっくに折れていてもおかしくないはずだった。それなのに、どういうわけか、体はベルトのホルダーから爆ばく弾だんを全部抜ぬいて前に進み出ていた。

「ユリカ、サフィニア……逃にげて！」

　──ばかだ、僕は。

　ため息も出ないほどに、心の底から深く痛切にそう思った。

　なぜなら、マリアローズはやつに向けて駆かけ出していた。そのままもっと接近するつもりだった。できるところまで近づいて、要

するに、自爆しようとしていた。だが、やつのリーチや手並みを考こう慮りよに入れれば、どう考えてもそれが一番、確率の高そうな方法だった。

　そうか。何枚かにおろされる以外にも粋ＣＯＯＬな可能性があった。

　爆ばく死しする。これだ。

　超最悪ＳＵＣＫ。

5

　最悪も最悪だ。これ以下はそうそうないくらい、最低で超最悪ＳＵＣＫな状じよう況きようだった。

　喪そう神しん街オレストロ第五層に入ってどれくらい経たっただろう。カタリたちは追われていた。

　何に、と一口にはいえない。とりあえず、目についたものだけ挙げると、メリクル、亜あ人じんボーグ、下等蜥蜴とかげ人、蜥蜴人、人間、各種悪あく魔ま、小型の竜りゆう各種、以上それぞれの半死者ハーフデツド、それからムサド、暗色のローブを着ているたぶん半死者ハーフデツドではない人型の何ものか、さらに、子供のような体格のムサド、等々──とにかく、たくさん。

　発ほつ端たんは、第五層に下りてすぐ、竜騎士ドラグーン気どりのローブ野や郎ろうと鉢はち合あわせしたことだった。

　だが、近くに小通路があったので、そこへ逃げこんでひとまず難を逃のがれた。と思ったら、そこには大勢の半死者ハーフデツドとムサドがいた。とはいえ、引き返すことはできないので、やむなく連中を強引に突とつ破ぱして奥へ進んだ。進むごとに別の敵と出くわし、そのたびにいくらか戦ったり、できるだけ大通路をさけて進路を変えたりしているうちに、もう自分たちがどれくらいの敵に追い回されているのかも把は握あくできなくなった。

　カタリはかろうじてまだ走ってはいるものの、完全に息が上がっ

ていた。先を行くトマトクンですら、さすがに少々呼吸が荒あらかった。しんがりのピンパーネルだけは平気そうだが、仮に彼一人のみが無限に駆けつづけられたとしても、意味がない。どうせ、走る速度は一番遅おそい者にあわせざるをえないのだ。

　それが誰だれかといえば、カタリだ。

　まあ、トマトクンとピンパーネルの持久力が化物じみているだけの話で、カタリが特別、劣おとっているわけではない。そんなことはカタリもわかっているが、慰なぐさめにはならない。言い訳にもならないだろう。

　今や、道順を決めているのもトマトクンだ。ピンパーネルに背中を守られ、トマトクンに導かれて、カタリは必死でついてゆくだけだった。いよいよ本当に、何の役にも立っていない。これっぽっちも、だ。

　これではいけない、という思いは当然ある。しかし、どうすればいいのか。どうしようもない。せいぜい二人の邪じゃ魔まにならないようにしているしかない。いや、もう邪魔になっている。

「ええい、どこだここは……！」

　トマトクンも若じゃっ干かん苛いら々いらしているようだが、走るだけで精せい一いっ杯ぱいのカタリには何もできない。時折、周囲に目を配って、ここはさっき通らなかっただろうかとか、現在どのあたりだろうとか。考えようとしてはみるものの、頭が全然、働いてくれない。

　所しょ詮せん、半魚人ということか。脳も魚並みか。

　そんなふうに自じ虐ぎゃく的になっている場合でもなさそうだ。

　カタリの前方で、丁てい字じ路ろを右に曲がろうとしてやめ、左に曲がったトマトクンが、すぐに引き返してきた。

「どっちも行き止まりだ、やむをえん、やるぞ！」

「や、やる？」

「ああ」

　トマトクンはカタリのやや前に位置どって大たい剣けんを担かつぐように構え、二度、深く呼吸をした。

「──追ってくるやつらをここで残らず片づける。用意しろ」

「そ、そんな無む茶ちゃな……」

「どのみち、いつまでも走り回っていられるわけじゃない。やるなら、疲つかれて動けなくなる前に勝負をかけなきゃならんしな。ここなら前後から挟きよう撃げきされる心配もない。悪くない条件だ」

　これで悪くない条件とは、いったいどういう神経をしているのだろう。

　だって、もと来た通路から津つ波なみのごとく押しよせてくる、敵。敵。敵。数えるのも嫌いやになるほどの、敵。その圧あつ倒とう的な数の暴力に正面から立ち向かおうだなんて、どこかおかしいとしか思えない。

　トマトクンにしても、その隣となりで雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣を手にゆったりと立っているピンパーネルにしてもそうだ。狂くるっている。彼らは当然のように勝つつもりでいるのだ。あるいは、勝敗を意識してさえいないのかもしれない。その必要がないのかもしれない。

　たぶん、彼らはもっと困難な状況に置かれたことが何度もあり、それを切り抜け、乗り越こえて、今、ここにいるのだろう。彼らにとっては、日常とまで言わなくても、この世の終わりのような出来事ではないのだ。

　だが、カタリにとってはそうではない。それでも、ここにユリカがいて、サフィニアがいて、マリアローズもいれば、カタリも余よ裕ゆうぶってこの危機を楽しむふりをしてみせたかもしれない。いや、実際、楽しむことができたかもしれない。

　けれども、そのベースには、トマトクンとピンパーネルの卓たく絶ぜつした戦せん闘とう能力があり、サフィニアの魔ま術じゆつがあった。ユリカの医術式と鵺ぬえ流古式戦闘術によるサポートがあり、二巡じゆん月げつ前にマリアローズの攪かく乱らん戦術がこれに加わった。トマトクンやピンパーネルほど修しゆ羅ら場ばを経験

してきたわけではないカタリは、それらの上にあぐらをかいていい気になっていただけだった。

　今さらながらに思い知らされる。

　自分は無力だ。疲れて動けなくなる前に勝負をかける？　もうカタリは疲れ果てている。動けなくなっている。まともに戦えそうもない。十。二十。三十。敵はどれだけいるのか。

　死ぬ。絶対に死ぬ。それはいい。カタリが死ぬのは構わない。

　しかし、ピンパーネルはともかく、トマトクンは仲間の死に無関心でいられるような男ではない。サフィニア、ユリカ、マリアローズの三人が穴に落ちたときの激げつ昂こうぶりを思い返すまでもなく、カタリはそのことを知っている。何度かトマトクンの前で死んだことがあるからだ。

　そのたびに、トマトクンは何ともいえない表情で蘇そ生せいしたカタリを叱しかった。カタリが死ぬと、死体の回収を最優先にして他ほかのことは全部、後回しにすることも、あとから聞いて知っている。

　もし、今、カタリが死んだら？

　トマトクンは選せん択たくを迫せまられるだろう。三人を見捨てて、カタリの死体を守って地上に戻もどるか。それとも、カタリを諦あきらめて三人を救助しに向かうか。

　もちろん、カタリとしては、自分のことなど捨て置いてくれていい。むしろ、そうしてもらいたいくらいだが、トマトクンはそう考えないだろう。トマトクンは悩なやむだろう。その逡しゅん巡じゅんが毒となって、トマトクンを蝕むしばんで鈍にぶらせるかもしれない。

　だから、カタリは死ねないのだ。

　サフィニア。マリアローズ。そして、ユリカ—ああ、ユリカ。

　カタリはあの小さなユリカには逆らえない。なぜだろう。自分でもよくわからないが、もし姉がいたら、まあ、半分しか血の繫つながっていない、一度も会ったことのない姉がいることはいるのだが、ちゃんとした姉がいたら、あんな感じなのかもしれないと思

う。

　彼らは無事でいるだろうか。まだ生きているだろうか。

　いや、絶対に生きている。そう信じてはいるが、きっと不安がっているだろう。心細いに違ちがいない。急がなければならない。急いで、彼らを見つけ出さなければ。そのためには──

　カタリはイノイチとロノニーを強く握にぎり締しめた。無理やり息を整えようとしたが、うまくゆかない。すでに敵の先頭はあと十五メーテルほどまで迫っている。焦あせりだけがつのる。噴ふき出す汗あせを手の甲こうでぬぐい、奥歯を噛かみ締めてぐっと腰こしを落とし、格好だけはそれらしく取り繕つくろった。が、このコンディションでどれだけやれるのか。違う。

　やれるか、ではない。やるのだ。もうやるしかない。

「俺とピンパーネルは突つっこむ。カタリは後方支援バツクアツプだ。いいな」

　だが、トマトクンにそう言われた瞬しゆん間かん、力が抜けた。

　後方支援バツクアツプ。弓矢を持っているか、魔術でも使えるのなら別だけれども、得物といえばイノイチとロノニー、それにナイフを携けい帯たいしているだけのカタリが、後方支援バツクアツプ？　どうやって？

　つまり、お前は使い物にならないから、そこで黙だまっていろ。そういうことか。

　なるほど、しかし、正しい判断かもしれない。確かに、少なくとも今のカタリでは、ろくな戦力にはならないだろう。通路は狭せまいし、そんなやつにうろちょろされては邪魔くさい。カタリがトマトクンでもそう指示する。トマトクンは間違っていない。そして、トマトクンに命じられれば、カタリは黙って従わなければならない。それが適切な命令であれば、なおさらだ。

　カタリはその場を動かず、半死者ハーフデツドの群れに突とつ撃げきしてゆくトマトクンとピンパーネルをじっと見守った。

　トマトクンの剣身波打つ大剣が半死者ハーフデツドどもを薙なぎ倒たおして、斬きるというよりは破は砕さいするさまを。

放たれた矢のごとく跳ちよう躍やくし、敵の只ただ中なかに着地したピンパーネルが、雄おすのグレアデと雌めすのリレッザで周囲の半死者ハーフデツドどもを手当たり次し第だいに細切れにするさまを。

あっという間に敵の先頭集団を粉微み塵じんに打ち砕くだいた二人が、今また真打ち登場とばかりに後ろから躍おどり出てきたムサドどもと斬り結ぼうとしている場面を。

ムサドは四体いた。それから、子供のような体格のムサドが三体、天てん井じようからトマトクンとピンパーネルの頭上を脅おびやかそうとしている。カタリは思わず「上や！」と声を張り上げたが、無用な心配だった。トマトクンが大たい剣けんで小ムサド三体を一拳に両断し、ピンパーネルもムサド一体を手早く解体した。これで、ムサドは残り三体━だが、あれは、いったい。

半死者ハーフデツドどもを押しのけるどころか、跳はね飛ばし、踏ふみ潰つぶして前に進み出てくるあれは、何だ。

でかい。

それはムサドに似た兜かぶとをかぶってはいるものの、体つきはずいぶん違う。太っているわけではないが、肩かた幅はばが異様に広く、がに股またのがっちりした足は短めで、逞たくましい腕うではかなり長い。身の丈たけは二メーテル以上あるだろう。その巨きよ軀くに、あの布のような防具ではなくて、昆こん虫ちゆうの外骨格を思わせるような甲かつ冑ちゆうをまとっている。

やつは右手に櫛くしを二つあわせたような形状の武器を持っていた。

あれはかなり大きいけれども、小さいものなら、カタリも以前、見たことがある。

魚フイのツシ背ユス骨パイのンソ剣ード。

名前のままだ。魚の背骨に似ていることから、そう名づけられた。ただ、その凶きよう悪あくな外観とは裏腹に、防ぼう御ぎよ目的に作られた刀剣で、相手の斬ざん撃げきを絡からめとってその剣身ごと折ってしまうのが主な用法だ。少なくとも、カタリが知っている魚フイのツシ背ユス骨パイのンソ剣ードはそうだった。

しかし、あれは違うだろう。あの一・五、六メーテルはあるおぞましい剣身が、相手の刀剣を叩たたき折るためだけのものとは思えない。あれは一ひと振ふりで無残に相手を損そん壊かいするための剣だ。過去、そうした種類の武器はいくつも生み出され、現在も作られつづけている。

敵を効率よく殺傷するためではなく、まず標的に不必要なほど大きな打撃を与あたえることを念頭に置いて設計され、その結果、標的の周囲にも恐きよう怖ふを撒まき散らす。

収集家マニアはそれらを残酷なデツドリー武器ウエポンと呼び、通常の武器とは区別している。魚フイのツシ背ユス骨パイのンソ剣ードと比ひ較かくすれば、やつが手にしている残酷なデツドリー武器ウエポンは、さしずめ牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードといったところか。

やつはその牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードでもって蠅はえでも追い散らすように軽々と半死者ハーフデツドどもを排はい除じよし、三体のムサドを従える格好で、トマトクンとピンパーネルの前に立ち塞ふさがった。

「──楽団オルケストラ……Ｄダブル・・バＢス・ヴ・イオＶリストか……」

かすかにだが、トマトクンの声がカタリの耳に届いた。

楽団？

まさか、レディ・麟霊が所有していたという史上最大規模のムサド兵団、戦慄シバレス・楽団オルケストラのことか。

いや、まさか、ではない。喪そう神しん街にレディ・麟霊がいて、ムサドがいるなら、戦慄シバレス・楽団オルケストラがいても不思議はない。

確か、カタリの記き憶おくによると、戦慄シバレス・楽団オルケストラは精せい鋭えいの奏者とそれ以外に大きく分かれており、真の意味で楽団といえば、奏者たちのこと指すのだという。あのでかいやつがＤ□Ｂ□Ｖ、つまり奏者だとしたら、今まで出くわしてきたムサドは、おそらく単なる雑兵だったのだろう。

まあ、その昔、戦場では血と肉と悲鳴の交こう響きよう曲きよく

を、王宮では剣を楽器に持ち替かえて美しい協奏曲を奏でたという、あの戦慄シバレス・楽団オルケストラだ。雑兵といえども、カタリごときが楽に倒せるはずはないし、その精鋭となればもっと厄やつ介かいな相手に違いない。

　そう──Ｄ□Ｂ□Ｖ、やつが危険な敵だということは、一目見ればわかる。

　竜騎士ドラグーン気どりのローブ野や郎ろうにも久々に肝きもを冷やしたものだが、Ｄ□Ｂ□Ｖはあの上をゆく。ムサドにはまだ人間の面おも影かげというか、その名残なごりがあったけれども、Ｄ□Ｂ□Ｖは違う。完全に別物だ。

　やつには人間を狩かるものとしての強きよう烈れつな意志がある。風格がある。威い厳げんさえある。また、三体のムサドを統とう率そつしている様子からは、知性をも感じさせる。

「ピンプ、お前はムサドをやれ」

　トマトクンはそんなＤ□Ｂ□Ｖを一人で引き受けるつもりのようだ。というか、すでに猛もう然ぜんと踏みこんでＤ□Ｂ□Ｖを間合いにとらえている。

　空気を切るというより叩き壊こわす音とともに、大剣が振り下ろされた。

　が、当たらなかった。Ｄ□Ｂ□Ｖが飛び退しさってよけたのだ。

　しかし、トマトクンは気にもとめていないように、さらに前へ出て大剣を横よこ薙なぎに振るった。右から左、左から右へ。全部で三往復させた。Ｄ□Ｂ□Ｖはこれらをすべて回かい避ひしたのち、やおら跳とび上がり、膝ひざを抱かかえて半回転した。着地した先は天井だ。そこから牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードを繰くり出してきた。天井に立っているため、むしろ突つき上げてくるような角度だった。

　これに対して、トマトクンは右の肩口に引きよせて構えた大剣を押し出すように鋭するどく打ち下ろし、牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードを弾はじき返した。打ち返した。跳ね返した。執しつ拗ように大剣を牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードに浴びせつづけた。トマトクンがＤ□Ｂ□Ｖを狙ねらっていないことは明らかだった。では、

何を？

　牛のブルス背パイ骨ンソ剣ード、だ。

　四度目の大剣との激げき突とつで、牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードの肋ろつ骨こつにあたる部分が数本折れ、砕くだけ飛んだとき、たぶんＤ□Ｂ□Ｖも気づいただろう。

　手を止めれば、トマトクンの大剣はすみやかにＤ□Ｂ□Ｖ自身を襲おそう。それをさけるためには、牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードを振るいつづけるしかない。いや、そうしたところで、いつまでもトマトクンの大剣を防いでいられるわけではない。

　やつの残酷なデツドリー武器ウエポンは、強度の限界に近づいていたからだ。すでに超こえつつあった。何合か打ちあったあと、力強く振り下ろされたトマトクンの大剣が牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードを縦に叩き割った。これでＤ□Ｂ□Ｖは攻せめ手を失った。一つだけだが。

　まだ残っていた。

　使いものにならなくなった牛のブルス背パイ骨ンソ剣ードを手放したＤ□Ｂ□Ｖが、右腕を、左腕を振った。何かを投げるような動作だった。実際、Ｄ□Ｂ□Ｖの腕から何かが放たれた。

　それも、一つや二つではない。十か、二十か。

　おそらく、腕の装そう甲こうに仕込んであったのだろう。小さな投げナイフの群れが、トマトクンに降り注ぐ──いや、トマトクンだけではない。

　その頃ころ、ムサド一体をしとめ終えていたピンパーネルや、ムサドにも、そして。

「──ひえっ」

　カタリはとっさに体をくの字に曲げて、何とかよけた。

　だが、トマトクンの場合、流れ矢的にいくつか飛んできただけのカタリやピンパーネルとは事情が異なる。体たい捌さばきや足捌きでどうにかなるレベルではないから、そうするより他ほかになかったのか。それとも、愛用の炎模様フアイヤーパターンで飾かざられ

た濃のう紺こん色の全身鎧よろいは、その程度で傷ついたりしないという自信があったのか。

　トマトクンは一歩も退かずに大たい剣けんを振ふり上げた。その浅黒い頰ほおにうっすらと赤い傷が走り、褐かつ色しよくの頭とう髪はつが幾いく本か切り飛ばされはしたが、鎧に命中した投げナイフはすべて弾かれた。

　頰に切り傷一つと、髪かみの毛数本。たったそれだけの犠ぎ牲せいでD□B□Vを葬ほうむることができたとしたら、安いものだったかもしれないが。

　残念ながら、左腰こしから右みぎ肩かたまで真一文字に斬きり裂さかれながらも、D□B□Vは致ち命めい傷しようを免まぬかれたようだ。

　とはいえ、さすがに軽傷ではないらしい。すかさず追い討うちをかけようとするトマトクンに、D□B□Vは捨て身でぶつかってきた。右肩にトマトクンの大剣が深々と食いこむのにも構わなかった。D□B□Vはトマトクンに覆おおいかぶさり、床ゆかに組み敷しく体勢になった。

「と、トマトクン……！」

　こうなると、カタリも黙だまって見てはいられない。ピンパーネルはまだムサドを一体残しているし、D□B□Vに破は壊かいされなかった半死者ハーフデツドどもが、同類の残ざん骸がいを乗り越こえて迫せまってこようともしている。今まではかえって邪じや魔まになりそうでおとなしくしていたが、この状じよう況きようで何の手助けもできないようなら、本当に死んだ方がいい。

「おんどれ！」

　トマトクンにのしかかっているD□B□Vの後頭部に、イノイチとロノニーを叩たたきつける。カタリは力一いつ杯ぱいやっているつもりでも、D□B□Vはやたらと石頭だ。もちろん、異常なまでの硬こう度どを誇ほこっているのは異様な形の兜かぶとなのだが、それにしたって硬かたすぎる。これは無理か。では、どうする？迷っていると、トマトクンが叫さけんだ。

「……カタリ、俺はいい！　他を……」

「せ、せやけど」

　カタリはそう言いながらも、周囲に目を配った。ふと、大変なことに気づいた。

　──後方支援バックアップ。

　卑ひ屈くつになっていたせいで、意味を取り違えていた。

　トマトクンは、何も、カタリに後ろで膝を抱えてじっとしていろなどと言ったわけではない。たった三人しかいなくても、常に全体を見み渡わたして、何かあればその都度、適切な対処をするための人員が最低一人は必要だ。それがカタリだった。

　むろん、トマトクンとピンパーネルの様子はずっと見ていたが、心構えが違った。いじけ半分、傍ぼう観かん者に近い気分でいたりしたから、こんな羽目に陥おちいったのだ。

　通路の奥から何か聞こえる。

　声だ。

　声の主は、前進してくる半死者ハーフデツドどものさらに後ろにいた。

　第五層に入ってからも、何度かやつを見かけたが、いつも半死下等竜りゆうやら何やらに乗って移動していた。やつをさけるために、わざわざ小通路を選んで逃にげてきたのだ。小通路の高さと幅はばならば、やつは追ってこられまい。そう考えていた。

　大おお間ま違ちがいだった。そんなのは単なる決めつけにすぎなかった。たった一体のみとはいえ、やつは自分の足で歩いてカタリたちを追ってきたようだった。

　ローブ野や郎ろう。

「……××××××××××××××××××××××××……」

　何やら呪じゆ文もんを詠えい唱しようしている。小声だし、十メーテル以上はゆうに離はなれているので、その内容までは聞きとれない。聞きとれたとしても、どうせ何の魔ま術じゆつかなんてわ

からないだろうが、とにかく長い呪文だ。やばい。カタリの素人しろうと考えかもしれないけれども、だいたい、魔術というやつは、呪文の長さに効果の大きさが比例するものだ。

　今から全力で走って、半死者ハーフデッドどもの間をすり抜ぬけ、ローブ野郎を斬り伏ふせる。間に合うか？

　わからないが、もう一刻の猶ゆう予よもないと思った方がいいだろう。ということは、カタリに残された手段は多くない。たかだか十数メーテルだ。成功させる自信だってないこともない。

　そうだ。暇ひまなときには、隠かくれて練習している得意技わざではないか。大だい丈じよう夫ぶだ。たぶん。こんなときに限って外れたりはしない──はずだ。

　カタリは二メーテルだけ前に出て、イノイチを投げた。続けてロノニーを投げた際に違い和わ感かんがあった。わずかだが、タイミングがずれた。そんな気がしただけですんでくれればよかった。

　理由はいくらでも考えられる。しかし、無意味だ。カタリは得物を失い、イノイチはたまたまコースに入ってきた半死者ハーフデッドに当たって、ロノニーはローブ野郎をかすっただけだった。その結果がすべてだ。

　カタリは失敗した。

　ただ、それでピンパーネルがローブ野郎に気づいてくれたのは、僥ぎよう倖こうとしか言いようがない。

　その後のピンパーネルの動きは、芸術的というか、ほぼ神技の域に達していた。ピンパーネルは激しく斬り結んでいたムサドを一いつ瞬しゆんで置き去りにして、半死者ハーフデッドの集団をすり抜け、まばたきほどの間にローブ野郎に接近し、雌し雄ゆう一いつ対ついの短剣でこれを斬り刻んでみせたのだ。

「……た──」

　助かった。そう呟つぶやきかけたカタリは、だが、最後まで言いきることができなかった。湾わん刀とうを持ったムサドが、どうして目の前に？

　そうか──数秒前まで、ピンパーネルとやりあっていたやつ。そい

つが手近に間抜け面づらの獲え物ものを見つけて狩かろうとしている。しかも、獲物は素す手でだ。ムサドにしてみれば、舌なめずりするしかないシチュエーションだろう。

　当然、獲物＝カタリにとって、絶体絶命の危機であることは言うまでもない。

　何しろ、繰くり返すが、カタリは素手なのだ。予備のナイフを抜こうにも、そんなことをしている余よ裕ゆうがそもそもない。とりあえず、尻しり餅もちをつくようにして初しよ太刀だちはかわしたが、そこまでだった。

　カタリは交差させた両りよう腕うでで顔を庇かばい、目をつぶった。まるで悪漢に襲おそわれた初心うぶな乙女おとめみたいな反応だ。これでは殺してくれと言っているようなものだが、なぜか悪漢はいつまで経たっても襲ってこない。怪け訝げんに思って瞼まぶたを押し上げたカタリは、自分が世にも情けない死に方をせずにすんだことを知った。だが、心の中はやはり世にも情けなかった。

　ムサドの両りよう肩かたを足場にして、ピンパーネルがしゃがんでいる。

　雄おすのグレアデはムサドの右腕、雌めすのリレッザは左腕に深々と突つき立てられていた。

　それから、ピンパーネルの解体作業が始まった。またたく間に終しゆう了りようしてしまったが。

　トマトクンが、ようやくＤ□Ｂ□Ｖを押しのけて大剣で首を斬きり飛ばし、半死者ハーフデッドどもの掃そう討とうにかかったのもその頃ころだった。ピンパーネルもこれに加わった。カタリは動けなかった。ピンパーネルの背中が赤く濡ぬれているのを目にして、膝ひざが、手が震ふるえた。震えの止まらない掌てのひらをただ見つめていた。

　やがて、名を呼ばれた。

　顔を上げると、血みどろのトマトクンがすぐそばに立っていた。その赤い液体の九割九分までが返り血だとしても、カタリにとっては何の気休めにもならない。

「どうした、カタリ」

　トマトクンの息はだいぶ荒あらい。かなり珍めずらしいほどに。

「怪け我がでもしたのか。そういうふうには見えんが」

「い……いや……」

　カタリはトマトクンの目を見返すことができなかった。あの黄玉の瞳ひとみには何でもかんでも見み透すかされてしまうような気がする。普ふ段だんはいいのだ。隠すほどのことはない。しかし、今はたまらない。本当に、たまらない。そうしてカタリが逃げるように視線を泳がせた先に、ピンパーネルがいた。半死者ハーフデッドやらムサドやらの残ざん骸がいの中を漁あさって、何か探しているようだ。

　さっきもちらりと見たが、その砂色の衣ころもが赤く染まっていた。

　背中だ。あの出血だと、結構、深く切られている。カタリには心当たりがあった。ピンパーネルがロープ野郎をしとめようとしたときだ。置き去りにしたムサドか、すれ違った半死者ハーフデッドか、どちらかにやられたに違いない。

　カタリがトマトクンの命令を曲解したせいで。しくじったおかげで。

　全部、カタリが悪い。

　何もかも、すべて、だ。

「あのな……トマトクン、わしな……」

　カタリは依い然ぜんとしてトマトクンと目をあわせることができないでいた。

　このままずっと顔をあわせずにすむ方法はないものか。

　正直、今は申し訳なさよりも、胃の腑ふをむかつかせ、心臓を針で刺さすようなこの苦痛から逃のがれたいという気持ちの方が強い。そう、ありていに言って、それは逃とう避ひのためだった。

　カタリは床ゆかに額をこすりつけて土下座した。反吐へどの代わりに、反吐同然に薄うす汚ぎたない言葉を吐はいた。そうせざるを

えなかった。

「━頼たのむわ。後生や。お願いやから、わしをここに置いてってくれ！　わしは最初っからおらへんかったことにしたってくれ！　わしのことはきれいさっぱり忘れてくれ！　無理や。わしは足手まといにしかならん。何の役にも立たん。そんなんせつないわ。きっつすぎるわ。わしなんか、おらん方が絶対にええねん。な、頼む。このとおりや。このとおりやから……」

「……そういうことか」

　トマトクンは短くため息をつくなり、カタリの襟えり首くびをつかんで強引に立ち上がらせた。

　抵てい抗こうする間もない早はや業わざだった。鈍にぶい音がして、目の前に火花が散った。何が起こったのか理解するまで、少し時間がかかった。

　床にへたりこんだカタリは、口の中に溢あふれた鉄っぽく塩気のある味を呆ぼう然ぜんと感じていた。

　左頬ほおに手を伸のばすと、熱い。

　というか、痛い。

　口こう腔くう内を舌で探さぐってみたら、奥歯が一本ぐらついていて、カタリはやっと我に返り、何もここまで、と思った。瞬間的にかっとなり、飛び起きてトマトクンにつめよった。

「いきなり殴なぐることないやろ！　痛いやないか！」

「あまり手加減しなかったからな。当然、痛いだろうさ」

　トマトクンは片方の眉まゆを大おお仰ぎょうにつり上げて、唇くちびるをひん曲げた。

「少しは目が覚めたか。それとも、まだ足りないか。俺は今、かなり頭にきてるみたいだ。いつまでも寝ね惚ぼけてるつもりなら、いくらでも殴ってやるぞ」

「ね、寝惚けとるやて？　誰だれがやねん！　誰が寝惚けとるっちゅうんや、おお！」

「お前だ。どうやら本当に夢の中らしいな。死なないとわからんのか。いや──」

　トマトクンは呆あきれ果てたように笑った。それこそ、カタリに向けられるのに相応ふさわしい表情のはずだった。

「死んでもわからん。それがお前だったな、カタリ」

「……そ、そうや」

　確かに、そのとおりだ。だが、あんな顔で面と向かって言われれば、胸にずんとくるものがある。けれども、まったく否定しようがない。カタリはうつむいた。

「そうや。考えてみたら、わしはみんなに迷めい惑わくばっかりかけとる。わしは死んでもわからんのや。一向に懲こりへん男や。しかも、役立たずで、邪じや魔まモンときたら、いる意味ないやんか。わしはもう心苦しうて、心苦しうて……」

「それで、ここに一人で残って、どうするつもりだ」

「わからん……何とかするわ。地上に帰るなり、野垂れ死ぬなり……」

「あいつらのことはどうする。サフィニアは。マリアは。ユリカはどうする」

「そ、それは──」

　カタリは両の拳こぶしを力一いつ杯ぱい握にぎり固め、絞しぼり出すように言った。

「……お前じぶんらに任せるしか……ないな。どうせわしがいても、かえって……な」

「お前はそれでいいのか」

「ええも何も」

「俺はよくないぞ」

　トマトクンの黄玉色の瞳が、その深い部分で何か別の色をたたえ

はじめたかのように彩いろどりを変えた。カタリがそれを見ることができたのは、むろん、顔を上げたからだ。

　しかし、トマトクンが何を思っているのか、はっきりとはわからない。表情と瞳の色がどこかアンバランスで、真意を推おし量りがたい。

　ただ、トマトクンは自分でも言ったように腹を立てていた。それだけはカタリにも伝わってきた。それでいて、声こわ音ねはやけに淡たん々たんとしていて、妙みような感じだった。

「お前を置いていくつもりはない。ユリカたちと合流するのはもちろんだが、そのためにお前を失うなんてごめんだ。だいたい、その必要がない。もちろん、この先、大をとるために小を捨てる決断をする場合もあるかもしれん。俺はそういう立場にいる。わかってるさ。でもな。今はその必要がない。何でこの程度の状じよう況きょうでお前を捨てなきゃならない？」

「……せ、せやけど、ピンパーネルはわしのせいで、怪け我がを」

「だから何だ」

「わしがちゃんとやっとれば……わしが、おらへんかったら……」

「お前がいなかったら、だと？　それは仮定にすぎん。くだらんな。実際、お前はここにいて、俺の仲間だ。いや、俺たちの仲間だ」

「そうはゆうても」

「同じことを二度、言わせるつもりか？」

　トマトクンは再びため息をついた。

「お前は俺たちの仲間で、ここにいる。それ以外の仮定は無意味だ。その必要に迫せまられてるわけでもないのに、仲間を切り捨てる趣しゅ味みなんて俺にはない。お前は俺を舐なめてるのか」

「舐めてる、て……何でやねん」

「どうせ、死ねない、怪我でもしたら大変だと思ってびくびくしてたんだろう」

「あ、当たり前やがな。事実やないか」

　それこそ、カタリがずっと思い悩なやんできた原因に他ほかならない。まあ、どうも何をやってもうまくゆかないというか、色々な面で自分の無能さや頼たよりなさを自覚する出来事が重なったことも関係しているかもしれないが、トマトクンは簡単に切って捨てた。

「何が事実なんだ。仮にお前が死んだとしても、死体を担かついでユリカたちと合流するくらい何でもない。そうならない方が確かに楽だが、俺はもっとやばい橋をいくつも渡わたってきたし、それくらいで死ぬほどやわじゃない。いざとなったら、お前とピンパーネルの死体を引きずってでも深層まで行くさ」

「む、むちゃくちゃや。そないなこと、できるわけないやん」

「何度負けても、性しよう懲こりもなく一か八かの賭かけに出て、挙句の果てに今や立派な死にマニアのお前が言う台詞せりふじゃないぞ」

　トマトクンはヒヒヒと例の似合わない下げ卑びた笑い方をして、カタリの頭に手を置いた。まるで親が幼子の頭を撫なでるような仕草だった。実質、孤こ児じも同然のカタリは、いまだかつて誰にもそんなことをしてもらった経験がなかった。

「お前が他のやつを大事に思うように、他のやつもお前を大事に思ってる。自分の命だけ安いなんて考えるな」

　トマトクンがそう言ったとき、横から肩かたを叩たたかれた。何かと思ってそちらを見ると、ピンパーネルがイノイチとロノニーをカタリの目の前に差し出してきた。

「あ」

　カタリはイノイチとロノニーを受けとった。

「──捜してくれとったんか……おおきに」

　それ以上、何も返せずにいると、驚おどろいたことにピンパーネルが肩をすくめてみせた。

　しかも、不自然なくらい極きよく端たんなすくめ方で、大おお仰

ぎように眉まゆを八の字にして口角を下げる嘘うそくさい表情のおまけつきだった。普ふ段だんはせいぜい口くち許もとや目許を若じゃっ干かん緩ゆるめたり、目を軽く瞠みはるくらいが関の山で、身み振ぶり手振りにいたってはほとんどしないピンパーネルが、だ。

　いったい何のつもりなのだろう。

　わからなかったが、妙におかしかった。カタリが思わず吹ふき出すと、ピンパーネルはお馴な染じみの無表情に戻もどって少し後ろ頭を掻かいてから、そっと微笑ほほえんだ。

「ワタシ大だい丈じょう夫ぶ。怪我・たいシタことなイ。急ぎまショウ」

「……せやな」

　カタリはうなずきながら、ようやく理解した。おそらくピンパーネルは、ピンパーネルなりのやり方でカタリを気き遣づかってくれたのだ。

　それだけでなく、ピンパーネルにはさっき命を救ってもらった。思えば、そんなことが今まで何度もあった。ピンパーネルだけでなく、仲間たちの助けがあって、支えがあり、カタリはこれまで生きてきた。懲りずに幾いく度どとなく死にながら、生きてこられた。

　今のカタリには、守りたいものがあるだけではない。カタリを守ってくれる者たちもいる。

　ここは救いのない世界、か。

　誰にそんな言葉を吹きこまれたのだったか。そう──ジャン・モーロウだ。

　あのオッサンのそんな世よ迷まい言ごとを真に受けるくらい、カタリも以前は世界に絶望していた。自分の生まれを呪のろわずにはいられなかった。

　キングダム・イズルハの第三王子として生まれながら、王の子ではないという矛む盾じゅん。王おう妃ひと左大臣の不義。形式上の父親である王の小心と無能。そして何より、頭脳明めい晰せき顔がん貌ぼう珍ちん妙みようと陰かげ口ぐちを叩かれていた左大臣に似ているこの顔。それらすべてをカタリは憎にくんだ。

だいたい、知ったことではなかった。

キングダム・イズルハが、豊富な資源を餌えさに近きん隣りん諸国を操あやつることで、どうにか成り立っている小国だから何だ？　左大臣は外交の一いつ切さいを受け持っていた国の最重要人物で、その男と密通した王妃は同盟国の王室出身だからどうした？

ジャン・モーロウに言わせれば、左大臣とは正反対の眉び目もく秀しゅう麗れい頭脳凡ぼん庸ような王にとって、二人とも国の存続のためには必要不可欠だったらしい。王は左大臣を処断することも、王妃と離り縁えんすることもできなかった。王にはそんな度胸などなかったし、事後を考えるとただ単純にひたすら不安だった。それに、カタリは単なる第三王子だ。王太子になるわけでもない男児一人のために、国を傾かたむけるわけにはゆかなかった。

そこで、王はこのスキャンダルを隠いん蔽ぺいすべく、ある決断を下した。

これはもう、名案というより迷案と言うべきだろう。何と、王は涙なみだを流しながら、我が息子むすこは先天性の重病に冒おかされていると発表したのだ。そして、笑えるほど左大臣そっくりなカタリが人目に触ふれるのをさけるため、仮面をかぶらせて王宮の奥に閉じこめた。

この瞬しゅん間かん、悲劇は喜劇になった―とはジャン・モーロウの言だが、当事者のカタリにとっては悲劇は悲劇のままだった。

こんなことなら、いっそ生まれてすぐ殺してくれればよかったのに。カタリがそう言うたびに、ジャン・モーロウは決まって冷れい笑しょうした。

「我らが陛下は自分を善良なたわけと思いこんどる御ご仁じんや。むろん勘かん違ちがいやが、あのとんまが赤子を縊くびり殺す命令なんか出せるかい」

ところが、カタリが十三歳のとき、実の父親にあたる左大臣が流行病で死ぬと、にわかに風向きが変わった。カタリも詳くわしいことはわからないが、どうやら王宮内の勢力争いに絡からんで、過去のスキャンダルをほじくり返そうとする一派が現れたらしい。

この動きに慌あわてた王は、もっとも簡単な解決方法に飛びつい

た。

　証しよう拠こ、つまりカタリを隠いん滅めつ、要するに始末しようとしたのだ。それから、王は新たな左大臣を補ほ佐さする次官に、ジャン・モーロウを抜ばつ擢てきした。王宮の奥で孤こ立りつ無む援えんになったカタリの命は、もはや風前の灯ともし火びだった。

　こうして生きているからには、その絶体絶命の危機をどうにか切り抜けたわけだが。

　ジャン・モーロウが手を回したのだ。

　左大臣次官の任官式の夜、ジャン・モーロウは人を使ってカタリを王宮から脱だつ出しゆつさせ、馬車に乗せて国境を越こえさせた。てっきり、あのオッサンにも見捨てられたものだとばかり思っていたカタリにとっては、奇き跡せきのような出来事だった。嬉うれしかった。生き延びたことよりも、自分を生かそうとしてくれる人間がいたことが、何よりも嬉しかった。しかし──

　一目でよかった。顔を見せるだけでも、最後に会いにきて欲しかった。それが無理なら、手紙でもよかった。別れの言葉の一つもないなんて、寂さびしすぎるではないか。たんまり路銀を持たせるより、その方が大切なことなのだと、あの頭のいいオッサンがなぜわからなかったのか。

　風の便りによると、ジャン・モーロウは現在、キングダム・イズルハの左大臣として孤軍奮ふん闘とうしているという。

　たぶん、あのオッサンと再び会うことなんてないだろうが、もし顔をあわせる機会があったら、一つだけ訂てい正せいしたい。

　ここは救いのない世界なんかではない。

　この混こん沌とんとしたサンランド無統治王国でも、その気になってそれなりの運に恵めぐまれれば、自分のことを親身になって考えてくれる仲間を見つけられる程度には救いのある世界だ。

　カタリはここにいない仲間たちのことを思った。

　ユリカ。サフィニア。そして、マリアローズ。

人間ごときの祈いのりにいちいち耳を傾ける神などいないと知ってはいても、カタリは祈らずにはいられなかった。

待っていろ。すぐに行く。それまで、何とか無事でいてくれ——

6

残念ながら、カタリの祈りもむなしく、無事とはほど遠かった。

何しろ、マリアローズは爆ばく薬やく液ハーレム・ゴードンを満たした爆ばく弾だん五本を手に、禍まが々まがしき双そう剣けんを持つ紅色の馬ば鹿かでかい女（？）にぶつかってゆこうとしている最中だった。

マリアローズの計画では、このままやつに近づいていって、あわよくば密着する。その前にあの剣でぶった斬ぎられてしまいそうだったら、その時点で爆弾を投げてやつを道連れにする。

懸け念ねんは、これでやつに致ち命めい的な打だ撃げきを与あたえることができなかったら、という点だが、それならもう、あとは残されたユリカとサフィニアに任せるしかないだろう。

瞬時の判断だから、欠けつ陥かんはいくらでもあるにせよ、現状でマリアローズが考えうる最善の手がこれだった。

どうもせっかちというか、いったん決めてしまうと即そく行動に移さないと気がすまない性質タチなので、ユリカとサフィニアにまったく説明できなかったことについては、まあ、申し訳ないが、その余よ裕ゆうもなかったし。

奇き妙みように間延びした時間の中で、だが、マリアローズは不思議と全然怖こわくはなかった。よく走馬灯のように云うん々ぬんという話があるけれども、そういうこともなかった。ただ、自分の呼吸する音と心臓の音がやけにはっきりと聞こえた。他ほかの音は一いつ切さい聞こえなかった。

あとどれくらいだろう。

　やつは双剣の切っ先を床ゆかに向けたまま、無造作に突つっ立たっているように見える。

　本当に長い剣だ。やつの身長が二メーテル少々だとすると、同じくらいの長さはあるだろう。かなり反りがあるので、もっとかもしれない。

　また、あれだけ長いのに身み幅はばはそう広くなくて、厚みもない。それでいて華きや奢しやな印象はなく、鋼鉄をも断ち切ってしまいそうだ。実際、黒影姫ヘイユイジの巨きよ体たいを楽々と四分割してみせたくらいだから、そのくらいのことはやってのけるに違いない。

　あれでマリアローズも斬られるのか。すっぱりやってもらうと、意外と痛くなさそうだが。

　それにしても、恐きよう怖ふに対する感覚が麻ま痺ひしているせいか、今になって気づいた。

　炎ほのおの照り返しを受けたやつは、とてつもなくきれいだ。たたずまいがとても美しい。人間とは似て非なるシルエットだが、人間を超こえた異形の美を備えている。

　あれは、たとえば、女神。紅あかき死の女神──いったい、何ものなのだろう？

　どうでもいいか。

　やつが何であろうと、もう少しで終わる。

　少なくとも、マリアローズにとってはすべてが終わりを告げる。

　マリアローズは指に挟はさんだ爆弾の感かん触しよくを楽しんでいた。ハーレム・ゴードンの原型であるセーラム・ゴードンを生成したイシュタル・アガメムノ・ゴードン子し爵しやくは、マリアローズの人生に傷をつけ、歪ゆがませた一人だ。

　だが、皮肉にも、彼に仕込まれた技術によって、マリアローズはこれまで生かされてきた。

　むろん、感謝なんてしないけれども、痛みも、苦しみも、ぬくもりも、いたわりも、複雑に絡からみあっている。分かちがたく結び

ついている。今さらいいところだけを取り出すことなんてできない。人はそれらすべてを背負って生きて、自らの血肉に変え、そして死ぬしかない。

　そうか──そういうものなのか、と思った。

　こうして僕は死んでゆく。

　せめて、別れの挨あい拶さつくらいはしたかったけれど。

　今の自分には、その相手くらいはいたはずだけれど。

　ところが、およそ五メーテル。

　マリアローズは、そこから一息に禍々しき双剣の間合いへ突とつ入にゅうしようとしていたはずなのに。

　逆に入りこまれた。侵しん入にゅうは一いつ瞬しゅんだった。予ノー備モ動ー作シなヨしンに見えた。やつはもうマリアローズの鼻先三寸に立っている。しまった。ここだと近すぎる。ここで自爆したらサフィニアに被ひ害がいが及およぶかもしれない。

　マリアローズが迷っている刹せつ那なに、やつは禍々しき双剣を腕うでに収納して──そう、それは柄つかと剣身でできた一いつ般ぱん的な意味の剣ではなかったようで、どのような機構によるものか、やつの腕にするりと収まってしまった。

　そして、やつはマリアローズの手をつかまえ、紛まぎれもない、艶つやのある人間の女の声を出した。

「やめておけ」

　ただ、口調は男のそれのように硬かたい。

「お前たちを殺す気はない。それとも、どうしても死にたいか」

「……し、死にたくない、全然」

　マリアローズは思わず首を横に振ふって正直に答えてしまった。答えたあとで、それでよかったのかと訝いぶかった。が、時すでに遅おそく、やつは、いや、彼女は目にも止まらぬ早はや業わざでマリアローズの指の間から爆弾をすべて抜ぬきとり、自分の右みぎ掌

てのひらの上に並べてしげしげと眺ながめる動作をした。

「何なのだ、これは」

「ええと……一言では説明しづらいんだけど」

　それなのに、わざわざ説明しなければならないのか？　というか、自分は何をやっているのか？　気になってサフィニアやユリカをちらりと見てみたが、彼女らもぽかんとしている。それはそうだろう。マリアローズだって同じ気持ちだが、睨にらまれた蛙かえるが蛇へびに何か問われれば、生存本能に照らしあわせても、答えないわけにはゆかない。

「簡単にいえば、その中に入ってる液体が空気に触れると、あるガスが生成されて、その体積が瞬間的に膨ぼう大だいな量に増大して、要するに爆ばく発はつするんだけど、その反応の際に可燃性のガスもできるもんだから、爆発しつつ炎も出すっていう──」

「なかなかよくできた玩具おもちゃのようだな」

「そ、そう？」

「返そう」

　彼女はそう言ってマリアローズに右掌を差し向けてきた。実にあっさりしたものだった。あっさりしすぎていて、疑わしいほどだ。もしかしたら、これは罠わななのではないか？

　とはいえ、マリアローズはすでにこの状態で手も足も出ない。この上、手のこんだ罠にかけてどうこうする必要があるとも思えない。

　マリアローズはごくりと生なま唾つばを飲みこんでから、彼女の掌に向かって手を伸のばした。

　爆弾をつかみとる寸前で掌を閉じられたときは、やはり罠かと心臓が跳はね上がった。

　だが、どうやら違ちがうらしい。

　彼女は不意に屈かがみこんで、マリアローズの顔に自分の顔を近づけてきた。そうはいっても、何か圧あつ倒とう的なまでの力を象

かたどりつつ、女性的な優美さをも兼かね備えた形の紅い兜かぶとのようなもので隙すき間まなく覆おおわれた顔だ。今ひとつ見つめられているという感じはしなかった。

　あるいは、彼女にとっても、そのままでは不便か不都合があったのかもしれない。

　それにしたって、いきなりそんなことが起こるとは。

　滑すべるような音がして、彼女の兜のようなものが、ちょうど中央から左右に割れた。

　あらわになった。

　夜空のように黒々とした瞳ひとみが。あまり高くはないものの、すっきりと細い鼻び梁りようの下で緩ゆるやかに結ばれている、無む駄だのない程度にふくよかな桜色の唇くちびるが。

　額は秀ひいで、瞳と同じ色の眉まゆは細く弓形を、頬ほおは過不足のない曲線を描えがき、顎あごはほどよく尖とがっていて、まったく文句のつけようがない。



　人間の女性の顔だ。

　瑞みずみずしくも、熟成に向かいかけた、二十代半ばくらいに見える見事な美び貌ぼうだった。

　ただ、本来、生え際ぎわがあってもいいはずの場所に、一本の毛

もう髪はつもない。ちょうど剃てい髪はつした女性の頭部の前半分だけが、開いた兜のようなものに包まれているような格好だ。

　言うまでもなく、かなり奇妙だった。顔そのものの造作がきわめて美しいぶん、余計にある種のグロテスクさを感じずにはいられない。

　彼女の夜色の瞳が、マリアローズの目をじっとのぞきこんでいる。マリアローズは身動き一つできない。もっとも、実際にはそう長い時間ではなかったのかもしれない。

　彼女は目にしたものを瞼まぶたの裏に焼きつけるようにゆっくりとまばたきをしてから、マリアローズの手にそっと五本の爆弾を握にぎらせ、姿勢をもとに戻もどした。

「あたしはりりぃという」

　その一いち人にん称しようは口調にまったくそぐわず、名前らしい「りりぃ」の語感もまた、必ずしも彼女にぴったりとはいいがたかった。

　けれども、名乗られたからには、こちらも名を告げないわけにはゆくまい。それが礼れい儀ぎというものだろう。

「僕はマリアローズ、で……」

　ついでに、サフィニアとユリカを順々に指し示した。

「そっちがサフィニアで、あっちがユリカ」

「記き憶おくした。だが、喪そう神しん街オレストロ深層にたった三人で入りこむとは、無む謀ぼうだな」

「あ、いや、これにはちょっと事情があって」

　マリアローズは内心、まだ完全に警けい戒かいを解いたわけではなかった。

　当然だ。さっきから一言も発しないサフィニアやユリカも同様だろうが、それこそ喪神街深層──そう、ここはやはり深層だったのだ。そんな場所でいきなり出くわした得え体たいの知れない相手に、簡単に心を開けるはずがない。ぶった斬ぎられた黒影姫ヘイユ

イジは、暴走していたから自業自得だとしても、今のところ敵意はなさそうだからといって、りりぃを味方だと信じるのは危険だ。そんなことはわかっている。

　とはいえ、ここでりりぃの機き嫌げんを損そこねるような真似まねをするのはどうか。

　まずやめておいた方が無難だろう。というか、絶対にやばい。適度に話をあわせて、できるだけ友好的な雰ふん囲い気きを保っておくべきだ。

「──本当は、他ほかに仲間が三人いたんだけど、はぐれたっていうか、第四層に降りる坂道の途と中ちゅうで落っこちちゃって、ばらばらになって。僕らはもちろん他の三人と合流したいんだ。でも、どうしたらいいかわからないし、うろうろしてるうちにここに来たって感じで」

「なるほど。理解した」

「り、りりぃはここで何を？　あ、呼び捨てはまずい、かな……」

「構わない。あたしは単なる暇ひま潰つぶしだ。ここに戦慄シバレス・楽団オルケストラのバスーニストとティンパニストのリーダーがいるとわかったから、殺しにきた」

　殺しに。つまり、この焼しよう却きやく炉ろもしくは焼き場の凄せい惨さんな有様は、りりぃの暇潰しの結果か。

　物ぶつ騒そうな告白の中に、意味不明の固有名詞らしき単語もいくつか並んでいたが、マリアローズはとりあえずうなずいておいた。

「そっか。暇潰しね。うん。大事だよね。人生って暇の連続だし。なぜ時間を費ついやすかが問題なのではない、いかに時間を費やすかが問題なのだ、とかって言葉もあるくらいで……」

「至言だな。あたしも退たい屈くつせず時間を費やすために、もう何十年もここをうろついている」

「ここって……アンダーグラウンド？」

「ああ。地上にはあたしを満足させてくれるような相手はいくらも

いない。いや、いなくなった。大いなる力の大部分は先の大戦で失われてしまったからな」

　マリアローズにはりりぃの言うことがさっぱりわからない。先の大戦？　何のことだろう。魔ま導どう王時代末期の遊ゆう戯ぎ戦争のことだろうか。

　だが、その名のとおり遊戯戦争とは、魔導王同士が戦場やルールをあらかじめ定めて互たがいの軍を争わせ、勝敗を競い、星取り表を作って楽しんだという一連の戦争のことだ。大いなる力とやらが何なのか知らないけれども、そうしたものが失われるような消しよう耗もう戦ではなかったはずだし、第一あまりにも古すぎる。記録によれば、遊戯戦争が行われたのは千年も前の話なのだ。

　疑問に思うことは多々あれど、いちいちりりぃに質問してもいいものか。

　マリアローズが口をつぐんでいると、りりぃはゆっくりとサフィニアとユリカに目をやった。

「ところで、お前たちはどうするつもりなのだ」

「え？　どうするって……」

　とりあえず、殺さないで見み逃のがしてくれるのなら、黙だまって退散します。

　そう言いかけたマリアローズの機先を制して、りりぃが思いがけない申し出をしてきた。

「地上に戻りたいのなら、あたしが第四層あたりまで連れて行ってやってもいい」

「へ？」

　マリアローズはりりぃの言葉を脳内で反はん芻すうしてから、サフィニアを見た。サフィニアは翡ひ翠すい色の瞳を当とう惑わくげに揺ゆらしてうつむいてしまったので、次にユリカを見た。ユリカはマリアローズと数秒間、見つめあったのち、かすかにうなずいた。

　これで、棄き権けん一、賛成一。いずれにしても、マリアローズ

次し第だいということになる。

　決断を任されたマリアローズは、勇気を振ふり絞しぼってりりぃの目を凝ぎよう視しした。手がかりが欲しかったのだ。何でもいい。信用でも、不信でも、妥だ協きようでもよかった。その根こん拠きよを欲して強く下した唇くちびるを噛かんだマリアローズの視線に気づき、りりぃが微笑ほほえみらしきものを浮うかべてみせた。

　それはひどくぎこちない笑え顔がおだが、嘘うそや偽いつわりではない。たぶん、りりぃは笑うことに慣れていないのだろう。当たり前だ。何十年もの間、顔を隠かくしてアンダーグラウンドをうろつき回っていたのなら、笑う機会などなかったに違ちがいない。

「ずっと昔、あたしは人間だった」

　過去形を使ってそう言ったとき、りりぃは少しだけ眉まゆをひそめた。

「色々あってもう人間じゃない。あたしはお前に興味がある」

「興味……？」

「好きになれるかもしれないということだ、マリアローズ。命を粗そ末まつにするな」

　りりぃの言葉はやはり意味不明だった。だいたい、初対面ではないか。興味があるとか、好きになれるかもしれないとか、ついでに説教までして、いったい何様のつもりなのか。

　マリアローズは若じやつ干かんの反発を感じつつも、その一方で、笑い方が不器用なりりぃを受け入れようとしている自分に気づいていた。

　少なくとも、りりぃを敵だと疑う根拠は見つけられない。マリアローズが軽く頭を下げて第四層までのエスコートを頼たのむと、りりぃは兜かぶとをもとの形に戻して素顔を隠した。

「そこの魔術士。名はサフィニアだったな。そうとう疲つかれているようだ。ここはお前たちにとってあまり休息に適した場所ではなさそうだから、どこかで少し休んでから出発しよう」

確かに、ここは暑いし、赤黒い血と肉と骨と金属で散々汚よごされまくっていて、のんびり休んでいられるような環かん境きようではない。立てつづけに大きな魔術を使ったせいだろう。サフィニアは実際、かなり疲ひ弊へいしている様子なので、休きゆう憩けいは必要そうだ。

何だか親切すぎてあやしみたくなるが、一度、りりぃの世話になると決めたからには、マリアローズも腹を括くくることにした。

それに、完全に心を許したわけではないのだが、なぜだかりりぃのそばにいると気が安らぐのだ。あるいは、一方的に好意を持たれているらしいからか。よくわからないが、そうなると今まで半ば意図的に頭の奥底に押しこめていた不安やら心配事やらが首をもたげてきた。

トマトクン。ピンパーネル。そして、カタリ。

彼らも深層へ向かってきているはずだから、りりぃにもそのあたりを伝えた上で、すれ違いにならないよう何か手立てを講じなければならないだろう。

それはそうと、前者二人はまず大だい丈じよう夫ぶだと思うが、あの半魚人については大いに気がかりだ。

調子に乗って、二人の足を引っ張るような真似まねをしていなければいいのだが──

7

「──カタリ、無理をするな！」

トマトクンが戦慄シバレス・楽団オルケストラのＶヴイオ・ラ・Ｄダ・ブ・ラツＢチストを斬きり伏ふせながら叫さけんだ。

しかし、今のカタリを止められる者は誰だれもいない。

まあ、本当はいくらでもいると思うが、気分的にはそれくらい乗りに乗っていた。

カタリはもう恐おそれていなかった。もとより天性の博打ばくち好きだ。下手の横好きという噂うわさもある。幼い頃ころ、ジャン・モーロウにα大陸東部のマジャングという遊びを教わったときも、ヤクマンと呼ばれる難しい勝ち方ばかり狙ねらった。このヤクマンというやつは、そうとう難度が高いのだが、そのぶん勝ったときにえられる得点も高い。で、たいていジャン・モーロウに負けたわけだけれども、ごく稀まれに勝つと爽そう快かいだった。それこそが勝負だとカタリは思った。

キングダム・イズルハを出てからの、あやしげな賭と場ばを見つけるたびに立ちよって、だいたい大金をむしりとられ、時に馬ば鹿か勝ちした日々。

路銀のほぼ全額を賭かけ、一文無し同然になったこともあれば、数十倍に増やしたこともある。

賭けた。負けた。負けた。勝った。賭けた。負けた。負けた。負けた。勝った。振ふり返ってみれば、それがカタリの人生だった。

今は滅めっ多たに賭け事には手を出さないが、なぜかといえば、その必要がないからだ。別の勝負がここにある。金のやりとりよりもっと愉ゆ快かいな、命を賭けた勝負が。

「いっくでえ、我流──」

喪神街オレストロ深層に到とう達たつしたカタリは、戦慄シバレス・楽団オルケストラの奏者チェリストに挑いどんでいた。

もちろん、ムサドにも手こずるカタリにとっては、かなり分の悪い勝負だ。それはわかっていたし、事実、しばらくの間、カタリは防戦一方だった。両手に持った湾わん刀とうで四方八方から攻せめ立ててくるチェリストは、息つく間も与あたえてくれなかった。

それにも拘かかわらず、カタリは下がらなかった。

もともと、下がるのはカタリの戦い方ではないのだ。状じよう況きようの変化によって移動しなければならないときは別だが、ここと決めた一定のスペースを意地でも守り抜ぬく。逃にげの後退はしない。イノイチとロノニーで耐たえて、耐えて、耐え抜いて、相手の隙すきを見つけるというよりは探さぐりあて、一気に勝負をかける。それがカタリ流だったはずだ。

弱気になって、いつの間にか見失っていた。カタリは自分自身を取り戻す必要があった。だから、あえてトマトクンやピンパーネルの前に出て、チェリストに挑みかかったのだ。

やつの二本の湾刀は実に鋭するどく巧たくみで、カタリは何箇か所しよも斬られたが、いずれもたいした傷ではない。どっしりと腰こしを落ち着けて虎こ視し眈たん々たんと逆ぎやく襲しゆうの機会をうかがっていれば、そうそう致ち命めい傷しようなど食らうものではないのだ。自分で言うのも何だが、カタリとて、ＺＯＯの面々とともに幾いく多たの実戦をくぐり抜けてきた歴戦の猛も者さなわけで、ぺーぺーの初心者ニユービーでもあるまいし、いくら相手が強敵だとしても、簡単にやられてたまるか。

そして、ついにその機会がやってきた。

チェリストが繰くり出した右の湾刀を、必死の体捌さばきでよけつつ、ほぼ同時に猛もう襲しゆうしてきた左の湾刀をロノニーで受け流すことに成功したのだ。

おそらくチェリストは、体勢を崩くずしかけたカタリをしとめようとしたのだろう。そのぶん湾刀に力が入り、太刀たち筋がやけにまっすぐで読みやすかった。

とはいえ、チェリストが持つ湾刀はムサドのそれよりずっと厚く、イノイチやロノニーでも容易には破は砕さいできない。チェリスト自身の膂りよ力りよくも並みではなかった。もし、カタリが湾刀を弾はじこうとしていたら、力負けしたかもしれない。

カタリはとっさにそれを見み越こして手首を返し、左手のロノニーで湾刀にかかった力を後方へ逃がすようにした。それだけでなく、体も回転させ、裏拳打ちバックナツクルの要領でイノイチをチェリストの兜かぶとに叩たたきこんだ――りはしなかった。

一つには、チェリストが即そく座ざに右の湾刀で迎げい撃げきしてこようとしたから、これを回かい避ひする必要があった。

だが、よけるだけなら、その場で思いきりしゃがみこむのはいかにも大おお仰ぎようだ。というか、明らかに無む駄だな動作だろう。狙いは別のところにあった。

ここで、「いっくでえ、我流――」となったわけだ。

「猛もう烈れつゥッ！　無限ンッ！　断・乱・撃ィィッ……ヤッハァァァッ！」

　むろん、カタリはただ叫んだのではない。両りよう腕うでを休みなく振り回し、チェリストの向こう脛ずねからはじまって膝ひざから腿ももから股こ間かんから脇わき腹ばらまで、イノイチとロノニーで斬って、斬って、斬りまくりながら叫んだ。力の限りにしばいて、声を限りに叫んだ。その間、頭上からチェリストが湾刀を振り下ろしてくるのでは、なんてことはこれっぽっちも考えなかった。どうでもよかった。

　ここが勝負所なのだ。これで倒たおせなければ、どうせそのうち負ける。相討うち覚かく悟ごくらいの勢いでゆかなければ、倒せる相手ではない。だからといって、後ろに引っこみ、トマトクンたちにエールを送っているだけなんてショボすぎる。そんなのは嫌いやだ。

　だいたい、格好悪いではないか。顔がまずいのだから、行動や態度くらい格好つけておかないと、本当に女に見向きもされない。

　──しょっぱい見み栄えやな。

「せやけど、これがわしの生きる道や！」

　カタリはチェリストが苦し紛まぎれに突つき出してきた湾刀をかいくぐり、その顎あごの下にまずイノイチを叩きつけた。それから、ロノニーを同じ箇所にぶちこんだ。

「死にさらせ……！」

　あとは、チェリストの全身が力を失って仰あお向むけに倒れるまで、それを繰り返した。ひどく疲れる作業だった。どう考えても、スタミナの使いすぎだ。マリアローズやユリカがいれば、きっと少しは先のことを考えて動けとやかましく騒さわぐだろう。うっさいわ、とカタリは思う。

　男一いつ匹ぴき、一時間先や明日や明後日あさつてのことなどいちいち考えていられるか。

　男なら、今を生きる。この一いつ瞬しゆん、輝かがやいていれば、すぐに燃えつきたとしても悔くいはない。

　ああ、しかし、どうしてか、マリアローズにツッコまれ、嫌いや味みを言われて、けちょんけちょんにけなされたい。ユリカにどつかれたい――

「……アホか。マゾやあるまいし」

　カタリはチェリストの死体を前に、荒れた息を無理やり整えようとして激しく咳せきこんだ。まるで、喘ぜん息そく持ちが発作を起こしたようなひどい有様だが、戦慄シバレス・楽団オルケストラの奏者を倒したとなると、カタリにとってこれはもう大金星といえる。周りの戦せん闘とうもすでに落ち着いているようだし、少しの間、達成感にひたりつつ休んでいてもバチは当たるまい。

　などということを考えていたら、後頭部を小こ突づかれた。

「あだっ」

「何が猛烈無限断乱撃だ。いつそんな大層な技わざを覚えた」

　振り返ると、トマトクンが片方の眉まゆをつり上げて笑っていた。

「休憩は終わりだ。行くぞ」

「もうかいな。ちっとばかし休ませてくれたっても……」

　カタリはそう言いかけて、途と中ちゆうでやめた。

　トマトクンは、カタリがまだ息を切らしていることを承知の上で、先を急ごうとうながした。当然、ようやく深層にたどり着いて、心が逸はやっているせいもあるだろう。だが、そうであっても、さっきまでのカタリであれば、子供扱あつかいしてゆっくり休ませようとしたに違いない。

　何にせよ、トマトクンは行けると判断したのだ。もしくは、カタリに期待したというより、要求した。それならば、カタリとしては応こたえてみせるだけだ。

「――よっしゃ。ほんなら、行きまっか」

「うむ」

　トマトクンは眉をひそめて匂においを嗅かぐ仕草をした。

「どうもかなり嫌な匂いがする。気のせいだといいんだが」

「今までの例でゆうたら、気のせいっちゅうんは望み薄うすしやろな」

　カタリはイノイチとロノニーを腰に吊つるして、額の汗あせと返り血を手の甲こうでぬぐった。どうやら、本当に急がないといけないようだ。

　現在地は、喪そう神しん街オレストロ第六層、いわゆる深層に下りてすぐの丁てい字じ路ろを右に曲がり、十五メーテルほど進んだあたりの曲がり角を、左に折れてすぐの場所だ。

　通路は第四層、第五層の小通路と同程度の幅はばと高さだが、壁かべと床ゆか、天てん井じようの質感が違ちがう。たぶん、何らかの岩石なのだろうけれども、丹たん念ねんに磨みがかれたようにきわめて滑なめらかで、それでいて光こう沢たくがまったくなく、天井に垂れこめている偽ぎ魂こんの光も反射しない。全面が継つぎ目すらない同じ素材なので、嫌味なほど変化はないのだが、それでも統一感のある美が成立していて、端たん的てきにいえば、上よりも造りが丁てい寧ねいで上等だということなる。

　ただ、第五層を抜けるのにそうとう苦労したカタリが思うに、この深層は上のフロアほど複雑ではないだろう。理由は二つある。

　一つは、この整然として均整のとれた深層の印象自体。

　もう一つは、第五層のいたるところにあった、アンダーグラウンドの他ほかのエリアに通じる大小様々の通路の存在。

　つまり、偽魂はそこからさまよい出て、異界生物フリークスの死体を探しあてると、これに取り憑ついて半死者ハーフデッドと化していたのだ。そうした経路が入り組んでいたせいもあり、第五層はとりわけ混こん沌とんとしていたのだった。

　が、見たところ、深層は違う。もっと異なる役割を与えられ、異なる思想のもとに造られたに違いない。第四層や第五層のように迷路めいた乱脈な構造では、おそらくないはずだ。また、第五層まで各層を繋つなぐ坂道は一つずつしか見つけられなかったから、第五層と深層についてもたぶん同様だろう。

　そこで問題となったのは、深層に下りてすぐの丁字路を右へ行くか、左へ行くかということだったが、カタリは迷わず箸はしを持つ方の右を選んだ。トマトクンも右がよさそうだと同意して、ピンパーネルはいつもどおり無言でその決定に従った。あとはこの道を突き進み、ユリカたち三人と合流できることを信じるしかない。

　むろん、すでにすれ違っていて、三人が深層にいないという可能性もあるが、その確率は低いだろう。ユリカとサフィニアは戦闘要員としては有能だけれども、侵入者クラツカーとしては初心者ニユービーと変わらないから、色々と細かくてカタリより十倍以上慎しん重ちようなマリアローズが主導権を握にぎっているはずだ。だとすれば、無む茶ちやはしないだろうし、あの危険きわまりない第五層を押し通ろうとするとは考えづらい。もし仮に深層を突とつ破ぱしても、坂道あたりでカタリたちを待っている、とか。そうでないとすると、やはりまだ深層のどこかにいるということになる──無事であれば。

　いや、必ず無事だ。と思う。たぶん。

　ともあれ、人事をつくして天命を待つべく、右の通路をある程度、進んで何もなければ、引き返して左の通路を調べてみよう、という腹案もカタリにはある。

　一点勝負で右にすべてを賭けるのも男らしくて素す敵てきだが、仲間のために時には安全策を講じるのもまた、男のさりげないやさしさだろう。などとたわけた理り屈くつで自分を納なつ得とくさせようとしているうちは、まだ自分は大だい丈じよう夫ぶだとカタリは思っている。

　しかし、トマトクンが言う「かなり嫌な匂い」とは何なのか。

　目と耳がいいピンパーネルは、そうとう神経を尖とがらせて周りに気を配っているようだが、カタリも足を進めている間にえもいわれぬ緊きん張ちよう感に苛さいなまれ、若じやつ干かん息苦しくなってきた。

「鬼おにが出よるか、蛇へびが出よるか、はたまた両方ともいっぺんに、か……」

　いずれにしても、出たとこ勝負だ。

通路はしばらくまっすぐ延びていて、その先で右に折れている。

とりあえず、曲がり角の手前までは何事も起こらなかったので、カタリはトマトクンとピンパーネルを止まらせ、角の縁ふちから顔を出して様子を見てみた。

何もいない。また十五メーテルほど続いて、今度は左に折れているようだ。カタリはトマトクンたちに手て振ぶりで合図をして、角を曲がった。それから間もなくだった。

後ろでトマトクンが立ち止まる気配がした。

「どないしたん？」

振り返ると、トマトクンが大たい剣けんの柄つかに手をかけ、獲え物ものに狙ねらいをつけた猛もう獣じゆうのように背中を丸めていた。

「カタリ、下がれ。俺が前に出る」

有無を言わさぬ口調だった。カタリは拒きょ否ひすることなど思いもよらず、飼い慣らされた家か畜ちくみたいにおとなしくトマトクンの後ろについた。

そう、今のトマトクンと比べれば、カタリなどただ乳を搾しぼられるか、殺されて食われるだけの家畜だ。むしろ、比ひ較かくするのが間違っている。そこにあるのは、歴然とした差というよりも、絶望感さえ抱いだかないほどの徹てつ底てい的な断絶だった。

トマトクンは足音を消して歩きはじめた。

カタリとピンパーネルがあとに続く。

何かが高まりつつあり、迫せまりつつあった。

それが何か。カタリにはわからない。わからないままですめばいいのにと、少しだけ思った。

先を行くりりぃが足を止めた。

マリアローズも、さっきからりりぃの様子が少々変だと感じていた。焼き場を出て小一時間休きゆう憩けいしてから出発したあと、りりぃは時折、深層について説明する以外は無言だったが、これほど張りつめたものは漂ただよわせていなかった。

つい二、三分くらい前だ。りりぃが不意に何もないはずの壁を眺ながめるような動作をして、かすかに首をひねった。それから、低く呟つぶやいた。

「不快だ」

一瞬、マリアローズたちのことかと思い、ひやりとした。マリアローズはまだ完全にりりぃを信用したわけではなく、ずっと気を張って彼女の様子をうかがっていたので、瞬しゆん間かん的にもうダメかと思った。

しかし、マリアローズたちを連れてここに至るまでの間、りりぃはムサドやら戦慄シバレス・楽団オルケストラとかいうムサドの兄貴分みたいな連中やら半死者ハーフデツドやら、立ち塞ふさがるものどもをすべて排はい除じよしてくれた。正直、マリアローズたち三人だけではどうにもならない敵の質と量だったから、非常に助かった。そこまでしておいて、今さらマリアローズたちに「不快だ」はないだろう。

「……どうかしたの？」

おそるおそる尋たずねると、りりぃは振り返らずに答えた。

「不ふ愉ゆ快かいな気配がするのだ。久しぶりだ、この感覚……人間ならば虫むし酸ずが走るとでもいうところだな」

りりぃはそれまでより歩ほ幅はばを狭せばめ、ゆっくりと歩き出した。足音はまったく立てない。りりぃをしてそこまで用心深くさせるような、何か尋じん常じようならざるとんでもない事態が起こりつつあるようだ。

自然と、マリアローズたちも抜ぬき足差し足忍しのび足といった足どりになり、足の長さの関係上、りりぃとの差が開きはじめた。

さっきまではマリアローズたちにあわせて歩いていた節があるりりぃだが、今はまったく頓とん着ちやくする様子がない。

　りりぃは何かにとらわれている。

　それに向けて全神経を集中し、他に注意を払はらうことをやめてしまったかのようだ。

　だが、それとはいったい、何なのか？

　通路は二十メーテルほど先で左に折れている。

　それは、その向こうにいるのか。あるいは、あるのか。

　りりぃとマリアローズの間は、もう十メーテル近く離はなれている。そういえば、地図を作るのを忘れていた。いつからだろう。ずいぶん前からのような気がする。そもそも、何をしに来たんだっけ──そうか。劫ごう火かだ。三億ダラー相当。そんな事こと柄がらがいくつか浮うかんでは消え、ふと、目が乾かわいていると思い、意識的にまばたきをした瞬間だった。

　りりぃがあの禍まが々まがしき双そう剣けんを両手の先に出現させ、急に速度を上げた。

　それと、角の向こうから何かが飛び出してくるのとでは、どちらが早かっただろう。

　おそらく、ほぼ同時だった。

　いずれにしても、両者は激げき突とつした。

　というか、りりぃと正面からぶつかって無事でいられるものが存在したことこそ、マリアローズにとっては驚おどろきだった。いや、もっと仰ぎよう天てんしたことがあった。

　けれども、りりぃは目にも止まらぬ速さで、禍々しき双剣を振り回しつづけている。相手も琥こ珀はく色の剣身波打つ大剣を豪ごう快かいかつ精せい緻ちに操あやつってこれを防ぎ、また時折、りりぃを脅おびやかす。両者の足運びが、体たい捌さばきが、人間の常識を超こえている。

　彼らの武器は、決してこの狭せまい通路に相応ふさわしい長さで

はないのにも拘かかわらず、繰くり広げられているのはミル単位の攻こう防ぼうだ。何かがわずかでもずれれば、その身は木こっ端ぱ微み塵じんに砕くだけ散る。

　完かん璧ぺきなまでの均きん衡こう。恐おそるべき拮きつ抗こう。確実にどちらかの破は滅めつに向かって突つき進んでいながら、この時間が永続するかのような錯さつ覚かくを抱かせる。そう願わせる。

　驚きよう愕がくし、感かん嘆たんしつつ、思わずにいられないからだ。

　これは一種の舞ぶ踏とうなのではないか。計算しつくされ、細部に亘わたって何もかも全部、定められて、練習し、研けん鑽さんして、その果てに実現した一種の芸術なのではないのか。

　それは絶技と絶技の応おう酬しゆうだった。互たがいの何もかもを知りつくしているかのような二人だった。そして、深く、深く、憎ぞう悪おしあっているようだった。とりわけ、りりぃは相手の全存在を否定するために禍々しき双剣を操っている観があった。相手はそれをすべて受け止めて、こちらもやはり、できうることならりりぃを抹まつ殺さつしようとしているに違いなかった。

　しかし、なぜ、この二人が争わなければならないのか？

　マリアローズはようやくその疑問に思い至り、まずユリカに目をやった。ユリカはなまじ鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術の心得があるからか、二人の戦闘に魅み了りようされているようだ。次に、サフィニアに視線を移し、マリアローズは大いに慌あわてた。サフィニアが駆かけ出そうとしていたからだ。

「ちょ、ちょっと、サフィニア……！」

　マリアローズはすんでのところでサフィニアをつかまえた。

「何をするつもりだよ！　危ないだろ、きみが出ていっても──」

「でも、止めないと！」

　サフィニアの声はいつもと違って力強かった。そんな声も出せたのかと目を瞠みはるくらいだった。それだけ切せつ迫ぱくしているのだ。サフィニアにとって大切な人が、あのりりぃと壮そう絶ぜつ

華か麗れいな一いつ騎き討うちを演じているのだから、当たり前か。

　何しろ、マリアローズもトマトクンは今まで会った中で屈くつ指しの剣士だと思っていたが、りりぃだって同じだ。それどころか、正直、本人に言わせれば「もとは人間だった」点を考えあわせると、りりぃの方が色々な意味で衝撃度インパクトが大きい。あのトマトクンが負けるとは思わないが、必ず勝てるとも思えない。

　だいたい、繰り返すが、どうして二人が戦わなければならないのか？

　そうだ。まったくもって、サフィニアは正しい。止めないと。

「サフィニアはここにいて！」

　自分の方が適任だという気がした。

　マリアローズならば、トマトクンだけでなく、りりぃをも思いとどまらせることができるかもしれない。りりぃの「興味がある」発言を信じればの話だが、そうでなくても、サフィニアよりはマリアローズの方が身軽だし、まあ、声もよく通るだろう。

「二人とも、やめて！　やめろったら！　トマトクン、りりぃ！　敵じゃないんだ、戦う必要なんてないんだよ！　頼たのむから……！」

　マリアローズは走りながら声を限りに叫さけんだ。

　けれども、二人は止まらない。いくら二人が戦闘に没ぼつ頭とうしているとはいえ、せいぜい十メーテルの距きよ離りなのに。聞こえないはずがない。聞こえているのに、無視しているのだ。

　それほどまでに憎にくいのか。何かよほどの因いん縁ねんでもあるのか。また、互いに引き時をつかめないという可能性もある。どちらかが少しでも気を抜けば、いや、気を抜かなくても、剣筋がかすかにでもぶれれば、あっという間に決着がついてしまいそうな紙一ひと重えの勝負だ。やめろと言われて、そうしようとは思っても、なかなかできないものなのかもしれない。

　だとしたら、今、マリアローズがしようとしていることはかなり危険だ。

　とはいえ、このままやめろとがなり立てていても、ずっと無視されかねない。

　言ってわからないのなら、行動でわからせる。マリアローズは腹を決めた。ふと、角からけったいな魚顔がひょっこり出ているのが目に入った。あの馬ば鹿か。何をやっているのだ。ピンパーネルまでその隣となりに雁がん首くびを並べて、のんきに観戦中か。何てやつらだ。

　確かに、トマトクンとりりぃによる技わざと力の競演は、滅めつ多たに見られない見物かもしれないが、だからといって。

「──ばかばっかり、ばかしかいない、いい加減にしろ！　この……！」

　マリアローズは飛びこんだ。

　たまたま通路の壁へき面めんに対して斜ななめに対たい峙じする形になっていた、トマトクンとりりぃのど真ん中へ。

「やめろって言ってるだろ……！」

　もっと正確にいうなら、交こう錯さくするトマトクンの大たい剣けんと、りりぃの禍まが々まがしき双そう剣けんの間へ割って入った。

　これでは、計三本の剣でざくざくに斬きられても、文句は言えない。いや、マリアローズの気持ちとしては、むしろ二人を正座させた上、最低でも小一時間は説教したいところであり、その抗こう議ぎの意志をこめた実力行使のつもりだった。

　そうはいっても、突とつ入にゅうの際には目をつぶってしまった。だから、死ぬとしたら、おそらく瞼まぶたの裏に広がる無限の闇やみの中、何もわからないまま逝ゆけるだろう。

　結果として、そうはならなかった。

　二人の中間で両手を突っ張るように伸のばしたマリアローズは、しばらくして、疑いながらも自分の生存を確かく認にんしたわけだが──

「命を粗そ末まつにするなと言った！」

「何を考えてるんだ、お前は！」

　間かん一いつ髪ぱつで互いの剣を静止させたりりぃとトマトクンに一いつ斉せいに怒ど鳴なられて、その理り不ふ尽じんさにぶちきれた。

「──は……？　命がどうしたって？　何を考えてるかって？　いったいぜんたい、どうしてどこからそんな言葉が出てくるんだよ？　僕はやめろって何度も何度も大声で言ったよね？　聞こえなかったなんて言わせない！　何か理由があるのかもしれないけど、僕とサフィニアとユリカはりりぃに助けてもらったんだし、トマトクンは大事な仲間だ！　百億歩譲ゆずって、殺しあうのは結構、でも、その前に話も聞けないっていうのは、頭、弱すぎ！　衝しよう動どうと欲求に身を任せて感情に流されるだけの思考能力がない腐くされ頭の土ど手て南瓜かぼちやだ！　いい？　僕が要求してるのはたったこれだけだよ。何をするにしても、まず僕の話を聞いて、それからにしろってこと。簡単でしょ？　理解できるよね？　二人とも人間の言葉はわかるね？」

「……あ、ああ」

「うむ」

　返事をしたのはりりぃの方が早かったが、先に剣けんを引いたのはトマトクンだった。

「ひとまず停戦といこう、りりぃ」

「貴様にその名で呼ばれるいわれはない」

　りりぃも憎にく々にくしげにそう言い返しながら、禍々しき双剣を両りよう腕うでの中に収めた。

「それに、今の貴様ではあたしに勝てない。時を待たずその首が飛んでいたはずだぞ。マリアローズに感謝することだ」

「ふむ」

　トマトクンは微び妙みような苦く笑しようらしきものを浮かべつつも、否定はしなかった。りりぃの主張を認めた、ということなのか。

「まあ、頭は冷えた。ずいぶん久しぶりのせいか、最初、お前の匂においだとわからなかったから、よほど相性の悪い化物でもいるのかと思ってな」

「妙な言い方をするな。匂いなどと」

「別にそういうつもりはないが」

「だったら、どういうつもりなのだ」

「つっかかるなよ、りりぃ」

「その名で呼ぶなと言ったろうが。死にたいか」

「いや──」

　トマトクンはマリアローズを一いち瞥べつし、それからサフィニア、ユリカ、カタリ、ピンパーネルの順に目をやってから、頭を掻かいた。

「ここでお前に殺されてやるわけにはいかんな」

「だったら、あたしの機き嫌げんを損そこねないよう、せいぜい言動に気をつけることだ」

　りりぃはマリアローズに向き直って、軽く頭を振ふった。

　何だか、トマトクンと出くわしてからの彼女は、いきなり人間くささが数倍増しくらいになったように感じられる。表情は兜かぶとに隠かくされていてうかがえないのだが、声こわ音ねと口調、仕草に露ろ骨こつなほど感情が表れていて、かえって親しみがわくほどだ。

「しかし、マリアローズ。お前の仲間とやらが、まさかよりにもよってこの男だとは思わなかった。悪いことは言わない。この男とは早く手を切るがいい。今は猫ねこをかぶっているのかもしれないが、この男はとんでもないやつだ」

「そ、そうなの……？」

　ある意味、とんでもない男ではあるが。

　マリアローズの声に、否定的なニュアンスが含ふくまれていたことを感じたのだろう。りりぃは実際にため息をついたわけではないものの、ため息をつくような仕草をした。

「いい。あたしにはあたしの、お前にはお前の心があり、考えがあり、宿命がある。あたしにとってこの男は永遠の怨おん敵てきだが、お前にとってもそうとは限らないからな。ただ、この男がいるからには、あたしは去らなければならない。この男がそばにいると、斬きりたくて斬りたくて仕方なくなる。この男の血を、我が刃やいばだけでなくあたしの全身に吸わせたいというのは、あたしの抑おさえがたい切実な欲求なのだ。だが、お前はそれを望まないのだろう」

「それは……望まないね、確かに」

「ではやむをえない。あたしは去る。マリアローズ、命を粗末にするな。お前とはいつかまた会うだろう。あたしはお前個人の敵に回らないということだけ、覚えておくがいい」

「え……？　あ、うん」

　敵に回らない？　初めて会って、少しの時間だけ一いつ緒しよにいて、もう別れる相手へ贈おくる言葉としてはずいぶん大おお袈げ裟さだ。「いつかまた会う」というくだりにも、奇き妙みように真実味があって予言めいていた。

　結局、それらすべての謎なぞは、あの疑問に行き着くことになる。もとは人間であり、トマトクンとは悪あく縁えんで結ばれているらしい彼女は、果たして何ものなのか？

　りりぃは答えを与あたえないまま、マリアローズの肩かたに軽く手を置いてから、トマトクンに近づいていった。

　瞬しゆん間かん、マリアローズはまた何か始まるのかと緊きん張ちようしたが、トマトクンの耳みみ許もとに顔をよせたりりぃに殺気はない。だからこそ、トマトクンも黙だまって接近を許したのだろう。

「貴様はもう興味がないとばかり思っていたのだがな」

「……そういうつもりじゃない」

　トマトクンは一瞬だけひどく険しい、というより、苦しげな表情になった。

「前にも言ったはずだ。やつらの思おも惑わくなんて俺にはどうでもいい。これは偶ぐう然ぜんだ」

「偶然だと？　何の冗じよう談だんだ、それは」

　りりぃは嘲あざ笑わらうように肩を揺ゆらして、カタリとピンパーネルがいる角の方へと足を向けた。マリアローズは少し躊躇ためらってから、その背中に「色々ありがとう」と言ったが、りりぃは振り返らなかった。立ち止まりもしなかった。りりぃはカタリとピンパーネルが気け圧おされるように空けた道を通り、あっという間に角の向こうへ消えてしまった。

　暇ひま潰つぶしのために、ずっとアンダーグラウンドをうろついているという、りりぃ。

　本当に、彼女とまた会うことなんてあるのだろうか。

　それよりも気になるのは、去り際ぎわにトマトクンと交かわした会話の内容だが、あいにくマリアローズにはさっぱり意味がわからない。マリアローズが探さぐるような視線を送ると、トマトクンは人差し指の先で鼻の頭を何度かこすったあと、ふっと肩の力を抜ぬいたように微笑ほほえんでみせた。

「まあ、とにかく、無事に合流できて何よりだな」

　マリアローズがようやく心の底から安あん堵どしたのは、その言葉を聞いたときだった。

　そうだ。すぐそばにトマトクンがいる。カタリとピンパーネルもゆっくりと近づいてくる。サフィニアとユリカも歩いてきた。やっとまた六人揃そろったのだ。

　安心したら、途と端たんに立ちくらみがしてその場に座りこみたくなったが、マリアローズはどうにかこらえて肩をすくめてみせた。

「ホント、カタリあたりがまた死んだりして、来るのに手間取るんじゃないかって、気が気じゃなかったけどね」

「アホぬかせ」

　カタリが魚顔をひん曲げた。

「こっちかて、お前らがくたばっとるんちゃうかと心配で心配で夜も寝ねられへんかったわ」

「いくら何でも、まだ夜は越こしてないだろ」

「もののたとえや。そんくらいわかるやろが」

「ああ、きみのつるつるしたプリン脳じゃ、その程度のたとえしか思いつかないんだろうね。かわいそうに」

「哀あわれむなや！」

「このたびは突とつ然ぜんのことで……」

「悼いたむな！」

「あーもううるさいな。きみと話してると疲つかれるから、どっか行ってくれない？　しっしっ」

「追い払はらうな！　犬いぬ猫ねこやないねんど！」

「そりゃ、犬とか猫の方がきみよりずっと上等で高等な生き物だしね。きみってば、魚だし」

「魚かいな！　せめて半魚人にしたってくれや」

「しょうがないな。じゃ、半魚人。とっとと失うせろ」

「失せるか、この──」

　と、マリアローズにつかみかからんばかりの勢いで迫せまろうとしたカタリの腕うでを、ユリカがぐいと引っ張った。

「たくしゃん怪け我がをしているわね。見しぇなしゃい」

「お、あ、えや、わしはそんなたいしたこと……わしよりか、ピンプの方がむしろ……」

「ピンパーネルの背しえ中なかはあなたが騒しやわいでいる間にも

う治したわ。トマトクンの頬ほおも。あとはあなただけ。しゃあ、座しゆわって━届かないから」

　実際、カタリはいくつも浅手を負っていたし、もともとユリカには逆らえないので、それ以上、抵てい抗こうせずにおとなしく従った。

　床ゆかにあぐらをかいた半魚人と、それに医術式を施ほどこす小さな美少女。かなり珍ちん妙みような組み合わせだが、場合によっては二度とこの光景が見られなかったかもしれないわけで、そう考えるといい眺ながめといえないこともない。

　いずれにせよ、リーダー的な役割を演じざるをえなかったマリアローズにしてみれば、いくつもの不手際があって、判断ミスもあった中、これは悪くない結果だ。

　もし、りりぃとの出会いという偶然の要素がなかったら、と考えれば冷や汗あせものだが、運も実力のうちと古人も言っている。カタリが好みそうな格言で少々嫌いやだけれども、反省は後回しでいいだろう。今は束の間の安堵感に身をひたし、次なる目標へ向けて前進するため、一息ついても許されるはずだ。

　だが、一息ついていられない気分の者もいるようで。

　サフィニアは、トマトクンのすぐ前に立って、その胸のあたりに恨うらめしげな視線をじっと注いでいる。水晶様材クリスタリンの杖つえを握にぎり締しめる両手にも、ずいぶん力が入っているようだ。ただでさえ白い指がさらに血の気を失っている。

「どうした、サフィニア」

　トマトクンに声をかけられても、サフィニアは姿勢を崩くずさず、一言も洩もらさない。マリアローズはサフィニアがトマトクンに淡あわい恋こい心ごころを抱いだいていることを知っていたし、ユリカはもちろん、カタリでさえ察しているだろうが、実際のところ、サフィニア自身はどうなのだろう。どうもその方面に関しては奥手そうなので、自分の気持ちに薄うすうす気づきつつ、持てあましているといった感じではないかと、マリアローズなどは勝手に推測しているのだが。

　ちなみに、トマトクンはサフィニアの想おもいにまったく感づい

ていないように見える。もしくは、そう装よそおっているのか。

　また、マリアローズにとって意外だったのは、ピンパーネルが目をわずかに細めてトマトクンとサフィニアを注視していたことだ。ある意味、一番疎そうな男なのに。意外と、ピンパーネルがアッサシンを辞やめてラハン大陸から出てきた理由は、悲ひ恋れんだったりして。

「何か言いたいことがあるなら言え。そう黙ってられると俺も困る」

　ややあって、トマトクンがもう一度うながすと、サフィニアはようやく少しだけ顔を上げた。

「……い、いえ……何でも……」

　と思ったら、それだけ言ってまたうつむいてしまった。

　何ともじれったい話だが、サフィニアにしてみれば、そのあたりが限界だったのだろう。ずいぶんとまあ低すぎる限界値だけれども、サフィニアはトマトクンにそっと肩を叩たたかれただけで、頬を染めてくすぐったがるように身をすくめながらも、明らかに嬉うれしがっている。今はそれで十分、といったところか。

「さて」

　トマトクンが顎あごを撫なでながら、皆みなを見回した。

「これからどうする。地上に戻もどるか。それとも──」

「せっかくここまで来たんや」

　ユリカに治ち療りようしてもらったカタリが、手を挙げてトマトクンの言葉を遮さえぎった。

「目的地はここにあるはずやろ。行かない手はないで。結果的にはやけど、戦力は欠けてへんし、ここで引き返す理由はないと思うけどな」

「うむ。だが、気持ちの問題もあるからな。ユリカはどうだ」

　トマトクンに話を振られると、ユリカはやれやれといったふうに

カタリを見た。しっかり者の姉が出来の悪い弟を見るような心配三分の一、諦あきらめ三分の一、親愛の情三分の一の眼まな差ざしだ。

「どっちでも」

「サフィニアは」

「……皆さんに、お任せします……」

「ピンプ？」

「はイ」

　ピンパーネルは、トマトクンの短い問いかけにうなずいただけだった。

　あまり返事にはなっていないが、それが彼の意思表明なのかもしれない。つまり、いつもどおり主人に従い、命じられるままに働く。仲間のために雌し雄ゆう一いつ対ついの短たん剣けんで敵を解体する。そのための準備は常にできていると、ピンパーネルは言いたかったのだろう。

　トマトクンもそう理解したのか、「そうか」と低く呟つぶやいてから、最後にマリアローズに向き直った。

「お前はどうだ、マリア」

「うん」

　当然、トマトクンに意見を訊きかれることは予想していたので、マリアローズも自分なりに考えはまとめていた。心はすでに決まっている。不本意ながら、半魚人カタリと同じ意見だ。ここまで来て、三億ダラー、いや、魔ま導どう王時代の秘宝、焼バきーつこくンしグ刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟を諦める手はない。

「このまますごすご帰ったんじゃ、丸損だからね。昨日も赤字、今日も赤字なんてやってられないよ。帳ちよう尻じりはきっちりあわせないと」

「よかろう」

　トマトクンがそう言った瞬間、方針は決定された。

「俺も個人的に気になることがある。場合によっては、片づけなきゃならん仕事ができるかもしれんが──とりあえず、この先はカタリよりマリアに任せた方がよさそうだな」

「レディ・麟霊がいる玄げん室しつへの行き方は、りりぃに教えてもらったから、それは大だい丈じよう夫ぶ。そんなに遠くないよ」

「玄室だと？」

「りりぃがそう言ったんだ。劫火のこともちらっと話して、それだったら、レディ・麟霊の玄室にあるんじゃないかって。でも、変だよね。玄室って、お墓の中で遺体を安置する場所のことでしょ。僕も妙みようだと思ったんだけど……」

「ふむ」

　トマトクンは思案顔になったが、すぐに軽く首を横に振ふった。

「まあ、いい。いずれ答えはわかる。俺が考えていることについては道すがら話そう」

「わかった。じゃあ──」

　マリアローズは皆を見回した。すでに全員、心の準備ができている面つら構がまえだ。

「行こう。レディ・麟霊の玄室へ」

Omenage 897 9th revolution 3rd day

サンランド無統治王国首都エルデン・アンダーグラウンドD9

〝喪神街オレストロ〟

chapter.7

〝nite.〟

無色透とう明めいで非常に硬かたく、靴くつの踵かかとで擦こすっても傷一つつかないこの階段は、何でできているのだろう。魔導王時代に流行したクライスト式建築特有の、壮そう麗れいだがどこか生物的でグロテスクな形状の手すりも材質は同じだ。

階段の幅はばは約十メーテルもあり、すでに五十段は下りてきた。これで半ばといったところか。

長い階段だ。

ここには偽ぎ魂こんがいない。従って、偽魂が発する光もない。

それでも、十分な明るさが確保されているのは、手すりの中に何らかの光源が組みこまれているからだ。例の透すきとおったものを幾いく重えにも重ねた壁かべも同様で、ところどころに光が生まれては消え、消えては生まれる。

それらの明めい滅めつは、光が移動しているかのような錯さつ覚かくをもたらした。

壁全体が蠕ぜん動どうしている。あるいは、鼓こ動どうしている。生きている。

「サフィニアは当然、知っているだろうが──」

先頭を行くトマトクンの声に混じって、何かの音が聞こえる。まるで硝子ガラスの鈴すずが鳴るような澄すんだ音だ。それが何か、マリアローズにはわからないが、壁の中で光がついたり消えたりするときに出る音のように思われた。

「つまるところ、魔術士の目標は人間を超ちよう越えつすることだ。昔、魔導王どもはそのために思いつく限りのありとあらゆることをやった。やつらが一番熱中したのは、強大な力をえることだ。大勢の人間をたやすく殺せる力を持てば、人間を超こえた存在になったような気になれる。だが、全員がそう考えたものだから、あっちがある術を生みだせば、こっちはそれ以上の威い力りよくを持つ術をという具合にきりがなくなった。だいたい、馬ば鹿かげてる。たとえ大陸一つ吹ふき飛ばしちまえるような力があったところで、どう使う。それに、誰だれかが使ったが最後、報復が報復を呼んで、共とも倒だおれにならないとも限らん。結局、やつらは超越者になりおおせるために、別の手段を重視するようになっていった

──」

「……不死性イモータリテイの、獲かく得とく……」

　サフィニアがおそるおそるといった感じで口にした言葉に、トマトクンは前を向いたままうなずいた。

「そういうことだ。だが、こいつが難題だったらしい。やつらは人間を腑ふ分わけして中身の構造を調べたり、色々な方法で人体に手を加えたり、できそうなことを次から次へと試ためした。ムサドもその中で生み出された。ここから先は俺の推測だが、おそらく、あの偽魂というやつもムサドの同類だろう」

「同類？　ムサドと偽魂が？」

　両者に共通点があるとは、マリアローズには思えない。

　トマトクンはすぐに言い直した。

「同類というよりも、対ついになる存在といった方がいいか」

「対って、どういう意味？」

「ムサドの肉体は老化しない。あくまで理論上の話だがな。ただ、やつらは製造の過程で魂アニマを失っている。生き物みたいに動いているが、つきつめれば虚うつろな肉の人形にすぎん。偽魂はその対極にある存在だ。あれが魂と同じだとは思わんが、似たような働きをするのは確かだろう。しかし、偽魂は肉を持たない」

「あ……」

　ようやくマリアローズにもわかりかけてきた。ユリカやサフィニアも何かに気づいたように短く息をついたり目を瞠みはったりしている。カタリはもう見当がついていたのか、表情を動かさない。同じく無表情のピンパーネルは──ちゃんと話を聞いているかどうかもあやしい感じだ。

「レディ・麟霊は、魔導王どもの中でも、とりわけ不死性の獲得に執しゆう着ちやくしていた女だ」

　トマトクンはさりげなくそう言い切った。

「そんな女が自分の意志でここに来たんだとしたら、たぶんそのためだろう。ここは異界に繋つながってるからな。何かここでしか手に入らん重要な物資でもあったか、よくわからんが、やつは不死という叶かなわぬ夢を追い求めて、ここで研究と実験を続けたんじゃないか。永遠の時間に耐たえうる肉体。その肉体に宿らせるための滅ほろびざる魂。そして、その魂に自分の魂の情報を複写コピーする、か。くだらん話だが」

「……くだらない、でしょうか……」

　遠えん慮りよがちに反論したのはサフィニアだ。サフィニアも魔ま術じゆつ士なので、いくら相手がトマトクンでも、魔術の究極目標をけなされるのは納なつ得とくがゆかないのだろう。

「高みを目指さなければ……人は向上しません。不可能に挑いどんできたからこそ、今のわたしたちの暮らしがあるのだと思いますが……」

「だが、永遠に生きてどうする」

「……それは……時間がたくさんあれば、そのぶん……」

「もっと大きな力を求めてあがきつづけるのか。いい加減、飽あきてきそうだぞ。別に、俺が口出しする筋合いじゃないけどな。まあ、そんなことより──」

　トマトクンが階段を下りきった。続いて、マリアローズ、カタリ、ユリカ、サフィニア、ピンパーネルの順にあの透明なものでできた床ゆかに降り立ち、三十メーテルほど先にそびえ立つクライスト式建築の巨きよ大だいな扉とびらを見上げた。

　あの扉も、やはり壁や床と同じものでできているようだ。ただ、クライスト様式の複雑怪かい奇きな紋もん様ようや図案が全面にびっしりと浮うき彫ぼりされているせいで、向こう側が透けて見えたりはしない。マリアローズたちが立てる足音や呼吸音、衣きぬ擦ずれや金属の装備が擦こすれる音と、光の鳴る音以外、何の物音もしないので、静かすぎてかえって落ち着かないくらいだ。

　りりぃの言葉を信じれば、この先が黄昏たそがれの魔導王の一人、〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟霊の玄げん室しつということになる。

「──問題は、レディ・麟霊が成し遂とげたのかどうかだ」

　そう言いながらも、トマトクンは彼女が成し遂げたとは考えていないのだろう。やや乾かわいた口調からもそのことは伝わってきた。

　だとしたら、夢破れてついに人知れず朽くち果てた女王の骸むくろが、ここには安置されているのか。

　戦慄シバレス・楽団オルケストラは主人の御ご陵りようを守るべく働いている墓守たちなのか。

　もしそうであれば、王の墓というと、副ふく葬そう品ひんがつきものだ。過去には、ある魔導王の御陵から魔導王時代の秘宝が大量に見つかり、大変な騒さわぎになったこともあったという。レディ・麟霊は、その強大な魔力によって多くの秘宝を生み出したことで名高い魔導王でもあるから、想像を絶するお宝がここに眠ねむっていてもおかしくはない。

　そう、劫ごう火かをはじめとする、マリアローズがお目にかかったことのないような千万、億、兆ダラー単位の値段がつく凄すさまじい財宝が、ざっくざっくと。

「マリア、涎よだれが出てるぞ」

「へ？」

　トマトクンに指し摘てきされ、慌あわてて口の周りを掌てのひらでぬぐってみたが、唾つばなんて垂れていない。

「出てないじゃないか！」

「ヒヒヒ」

「ヒヒヒ、じゃないだろ！　何だよ、まったく。人が気持ちを高めて集中してるときにさ」

「そいつは悪かったな」

「悪いね。極ごく悪あく。きみのせいで何もかも台無し。どうしてくれるんだよ」

「まあ、勘かん弁べんしろ。うまくすれば、劫火はお前のものだぞ」

「わかってるよ。当たり前だろ。そのために来たんだからさ。そうだよ。こんなところでくっちゃべってても仕方ないし、さっさと行こ。もう行くって決めたんだしね」

「うむ」

　トマトクンは目を伏ふせ、顎あごを撫なでつつ少し考えてから、まずサフィニアに目をやった。

「サフィニア。扉の大きさから考えて、玄室の中はかなり広いはずだ。でかいやつをいつでもぶっ放せるように用意しておけ。術の種類は任せる」

「……はい……」

　サフィニアはいつになく硬い表情でうなずいた。それもそのはずだ。マリアローズが知る限りにおいて、トマトクンがサフィニアに「でかいやつをぶっ放せ」などと命じたことは一度もない。

　つまり、トマトクンは独特の嗅きゆう覚かくをもとに予感しているのだ。

　かつてないくらい厳しく壮そう絶ぜつな戦いが、この先に待ち受けていることを。

　トマトクンはユリカとカタリを順番に見た。

「ユリカはサフィニアに張りついて、何があっても守りとおすんだ。カタリはユリカをカバーしつつ、俺とピンパーネルが討うち洩もらしたやつを意地でも狩かれ」

　ユリカとカタリがそれぞれうなずくと、次はマリアローズだった。

「マリア、お前は俺とピンプの後ろについて好きに動け。状じよう況きよう次し第だいでは、お前の判断でカタリたちを動かしても構わん」

「了りよう解かい」

　要するに、マリアローズの役どころは遊兵ということだ。さらに、トマトクンを指揮官とするなら、副指揮官的な仕事もこなすことになる。純戦せん闘とう能力ではサフィニア以外の全員に劣おとり、サフィニアのように強力な魔術を使いこなせるわけでもなく、しかもクランに加盟して二巡じゆん月げつ余りしか経たっていないマリアローズがどうして、とは誰も言わない。思いもしないだろう。

　トマトクンの決定は絶対だ。皆みな、トマトクンの判断はおおむね正しいと信じてもいる。もちろん、たまに間ま違ちがえることはあるが、トマトクンはそのあやまちをあとで認め、修正する度量のある男だと誰もが知っている。責任は自分が背負い、他人に転てん嫁かしない男だということも。

　何よりこの男は、いい加減だったり、適当だったり、時に多少意味不明だったり、忘れっぽかったりするが、仲間のことを第一に考えている。その判断基準がぶれることは決してない。自分の欲得と仲間を両りよう天てん秤びんにかけて迷うような真似まねは、絶対にしないのだ。

　だから、信しん頼らいできる。

　まあ、容姿はともかくとして、格好は派は手でというか、かなり悪目立ちする異い端たんなセンスだが。

「行くぞ」

　そのトマトクンが先頭に立ち、右みぎ隣どなりにやや下がってピンパーネルがついた。二人の後ろがマリアローズで、これにカタリとユリカ、サフィニアがひとかたまりになって続く。

　三十メーテル。

　何事もなければ、あっという間の距きよ離りだ。

　さりとて、この場ば所しよ柄がらで何も起こらないのも、いい加減、気味が悪い。

　階段までの道については、三分の二程度、一度りりぃとともに通った通路と重なっていた。おかげで邪じや魔まな敵はおおかた片づけられていたから、まだわかるのだ。だが、玄げん室しつを目前にした階段とこの通路にムサド一匹ぴきいないというのは、いった

いどういうわけだろう。

　何か罠わなでも仕し掛かけられているのではないか。

　ついそんなふうに勘かん繰ぐりたくなるが、トマトクンは迷いのない足どりでどんどん扉へと近づいていった。マリアローズたちは、トマトクンに牽けん引いんされるように歩いた。結果的にものの一分もかからなかった。扉の前まで来てしまうと、今度は考えるべきことが別にできた。

　どうやってこの馬鹿でかい扉を開ければいい？

「ふむ」

　トマトクンは扉にそっと触ふれて、やはり何も反応がないのを確かめた。見上げてみる。当然のことながら、相変わらず大きい。これだけ大きいとなると、どんな怪かい力りき自じ慢まんでも、押したり引いたりして開けられるものではないだろう。トマトクンが「そうか」と低く呟つぶやいた。

「玄室ってことは、封ふう印いんされちまってる可能性もあるな」

「…………」

　あるいは、りりぃから玄室という言葉を聞いた際に、その可能性を思い浮かべなかったマリアローズが間ま抜ぬけだったのかもしれない。

　そういえば、一いつ般ぱん人の墓でも、富ふ裕ゆう層の少々立派な石室造りだと、巨大な石せき盤ばんで入口を塞ふさいで中に入れないようにすることがままある。王の墓ともなれば、もっと厳重に玄室を封印するケースも稀まれではないし、むしろそれが標準的だ。

　従って、レディ・麟霊の遺体がこの向こうに安置されているのだとしたら、何らかの手段によって内側から封をされていたとしてもおかしくない。また、玄室が完かん璧ぺきに封印されているのであれば、ここまでの警備が甘いのも納得できるような気がする。

　ただ、その場合、玄室の中が副葬品のお宝で溢あふれかえっている可能性も高い。どうにかして中に入りこむことができれば、かなりいい思いができそうだ。

　どちらにしても、中に入れないことにはどうにもならない。まさか、ここまで来て、骨折り損のくたびれもうけで終わってしまうのか。冗じよう談だんはカタリの魚顔くらいで打ち止めにしておいて欲しいものだが、このままだとそうなる──このままであれば。

　幸いといっていいのかどうか、そうはならなかった。

　扉がひとりでに開きはじめたのだ。奇き妙みような開き方だった。中央あたりから割れた扉が、左右の壁かべに少しずつ呑のみこまれてゆく。かなりゆっくりした速度で、開くごとに扉の向こう側から洩もれ出てくるものがあった。

　音だ。

　それは管かん弦げん楽器、打楽器による、鳥とり肌はだが立つほどに美しい旋せん律りつと和音と律動だった。

　音楽に他ほかならなかった。

「……交こう響きよう曲きよく第六百十三番ハ短調、悲命、か」

　トマトクンの独白は、音の洪こう水ずいに半ばかき消された。

　悲命。

　ああ、だが、まさしくそれは悲命と名づけられるに相応ふさわしい、抵てい抗こうと敗北と悲ひ嘆たんと絶望の楽曲だ。その音楽には、何の予備知識も必要とせず、無条件に聴きく者の心を揺ゆさぶる力があった。マリアローズの涙るい腺せんも勝手に緩ゆるんだ。扉の向こうに円を描えがくように広がる薄うす暗ぐらい観客席と、その中央にある照明に照らされた舞ぶ台たいと、そこでそれぞれの楽器を一心不乱に奏かなでる戦慄シバレス・楽団オルケストラの奏者たちの姿が歪ゆがみかけた。

　もし、サフィニアへ向けたトマトクンの怒ど鳴なり声が耳に届かなければ、そのまま泣いてしまっていたかもしれない。

「サフィニア、やれ！　曲が終わったら来るぞ！　その前にやつらを皆みな殺ごろしにしろ！」

「……はい！」

　だが、そう返事をしたサフィニアも、瞬しゅん間かん、交響曲「悲命」に心を奪うばわれていたらしい。扉の前にたどり着くまでは維い持じしていた特殊なチヤネ精神集中リングが、すでに崩くずれていた。

　当然、やり直しだ。サフィニアが呪じゅ文もんの詠えい唱しようを開始するまで、まだしばらくかかるだろう。

　あとどれくらい？

　気が逸はやる。

　扉とびらはもう三分の一くらいまで開いた。

　交響曲「悲命」はいよいよ音量を増しているが、あれはもしかして最後の盛り上がりか。

　舞台の中心あたりに設置された台の上で細い棒を振ふり、奏者どもも全員の指揮を執とっている仰ぎよう仰ぎようしい格好のコンダクターの動きがいっそう激しい。ヴァイオリニストやヴィオリストたちが、左右に体を動かしながら弓で弦つるを擦こすっている。チェリストが多様な音色を、D□B□Vが力強く低音を奏で、金管木管楽器が鳴り渡わたる。打楽器によって刻まれ、高まりゆくリズムがマリアローズを不安にさせた。何だかまるで、追ってくる敵の大軍の地鳴りにも似た足音を聞いているかのようだ。

　もう耳が痛い。何て音量だろう。音に五体が引き裂さかれそうだ。

　マリアローズは耳を塞いでサフィニアを見た。サフィニアはローブの中から何やら触しよく媒ばいを取り出したところだった。よくこんな中で特殊なチヤネ精神集中リングなんてしていられるものだが、そこはさすがに閃せん光こうの魔ま女じよマチルダが才能を見込んだ魔術士だ。「悲命」にめげず、サフィニアの唇くちびるが動き出した。マリアローズには聞きとれないが、呪文の詠唱が始まったのだろう。

　いや、呪文だけではない。手を触れずに水晶様材クリスタリンの杖つえを立てたサフィニアは、両手を駆く使しして印を組んだり、空中に魔ま法ほう円や複雑な紋もん様ようや上ハイ古ロ高メ位オ語ンの文字を描いたりしている。その軌き跡せきが白く浮うかび上

がって消えないのは、サフィニアが指の先につけている白い粉のせいか。

　マリアローズは見たことのない形式の魔術だ。

　交響曲「悲命」は絶頂に至ろうとしているかのようだ。

　扉は半分以上、開いた。

　しかし、ここは何なのだ。造りは第一区にある王立ロイヤル円形アンフイ劇場シアトルに似ているが、観客席のシート以外はだいたいあの透とう明めいなものでできており、何もかもがおぞましくも美び麗れいなクライスト様式で統一されている。

　ここが玄室？　この劇場もしくは音楽堂が？　肝かん心じんのレディ・麟霊はどこにいるのか？　あるいは、彼女の遺体はどこに？

　マリアローズは、聴ちよう力りよくの限界を超こえそうな大音量に顔をしかめながら、玄室の中を見渡した。

　ドーム状の天てん井じようから降り注ぐ光は、舞台だけを照らしていて他はかなり暗い。ざっと見たところ、観客席はがらんとしている。誰だれかが座っている様子はないと思った。

　しかし、目を凝こらすと、舞台を挟はさんで向こう側の観客席は三段になっていた。その最上段の三階席は白鳥の首のように前に張り出していて、いかにも貴き賓ひん席といった風情ふぜいだ。

　貴賓席には御み簾すが下ろされていた。

　その中にかすかな光があり、玉座らしきものと、その左右に控ひかえる何かの影かげが御簾に投とう影えいされている。

「……あそこだ……」

　マリアローズの呟きは、おそらく誰にも聞こえなかっただろう。交響曲「悲命」が断だん末まつ魔まの悲鳴を上げたのはその直後だった。マリアローズは頭の芯しんが痺しびれて平へい衡こう感覚すら失いそうになり、倒たおれそうになったけれども、何とか我が慢まんした。目を見開いた。

　何だ、あれは。

暗かったせいで、うるさかったおかげで、今まで気づかなかったのか。

一、二、いや、三。

何かがゆっくりと飛んでくる。

それは、小型の翼よく竜りゅう、ではない。例の透明なもので翼竜を模して作られた、まるで大きい硝子ガラス細工のようなそれの背に乗っているのは━あのローブ野や郎ろう、か。

ただ、連中は上で出くわしたやつよりもかなり上等な、ローブというよりむしろ女物のドレスめいた衣類を着ていた。ローブ野郎と同じように頭ず巾きんで顔は隠かくしているものの、衣類によって強調された体型も明らかに女性のそれで、別物のようにも思えた。

そうはいっても、たぶん同どう類るい項こうだろう。

なぜなら、連中は魔術の準備動作に入っていたからだ。

これは非常にまずい。

すでに、トマトクンとピンパーネルやユリカも連中に気づいているみたいだが、さしもの彼らも飛んでいる相手には手の出しようがない。カタリはイノイチとロノニーを投げようか迷っているようだけれども、まだ距きょ離りがある。二十メーテル以上も離はなれているのでは、命中するかどうか覚おぼ束つかないだろうし、相手は三体だから、うまくいっても一体余る計算になる。

マリアローズが何とかするしかない。方法はある。籠こ手ての矢では無理だが、ハーレム・ゴードン入りの小こ瓶びんならば届く。爆ばく弾だんをやつらに命中させれば、魔術を妨さまたげることくらいはできるだろう。爆弾は五本残っている。

まずは右手で一本、左手で一本、計二本の爆弾をベルトのホルダーから抜ぬいた。

この投とう擲てきには、いつも以上の精度が求められる。床ゆかや壁にぶつけて、爆発の影えい響きよう範はん囲いに標的が入るようにすればいい、というわけにはゆかない。とはいえ、狙ねらいすぎると変に力んで外しそうだ。マリアローズは頭の中をからっぽにして、無心で体を弓のようにしならせ、右みぎ腕うでを振りかぶっ

た。

　交響曲「悲命」はもう終わったのか。

　それとも、音が聞こえないくらい集中できているのか。

　右手の爆弾を投げた。間を置かずに左手の爆弾を投げたあと、爆発の閃せん光こうを目の端はしにとらえながら、すぐさま両手に爆弾を一本ずつ持った。爆発は二度起こったが、向かって右から飛んでくるやつには命中して、真ん中のやつには当たらなかった。

　次は、真ん中のやつをもう一度と、左から来るやつだ。

　マリアローズは再び投げる態勢に入った。やつらがいきなり速度を上げて、距離をつめてきたのはそのときだった。

「……くっ！」

　しまった。速い。狙いがずれる。何とか調整しないと──色々な感情やら考えやらが交こう錯さくしたぶん、フォームが若じやつ干かん崩れて、二本とも外れた。

　観客席でむなしく爆音と閃光、炎ほのおと煙けむりが発生し、十五メーテルほど離れて停止した二体が、こちらへ向けて両手を広げた。ついでに、爆弾の直ちよく撃げきを食らったもう一体も、衣類を燃え上がらせながら接近してきた。

　頭巾が吹ふき飛ばされていて、その顔が見えた。

　やはり、女だ。

　爆発のせいで傷つき、火傷やけどを負っているのが無残ではあるが、無傷であればたぶんそうとうな美び貌ぼうだろう。黒くろ髪かみと青い瞳ひとみが冷たい印象で、目もつり上がり気味のため、きつい感じはするものの、おそらく東方系の血が混ざっているに違ちがいない。年ねん齢れい不ふ詳しようで、西の人間にとっては神秘的に感じるような種類の美女だ。

　むろん、やつが女だろうと何だろうと、マリアローズたちはこれを撃退しなければならない。それはわかっていたが、突とつ然ぜん、やたらと熱い風のようなものが後ろから吹きつけてきた。マリアローズは思わず振り返ってしまった。愕がく然ぜんとした。

　サフィニアの全身から放たれ、渦うず巻まいて、彼女のローブの裾すそをめくれ上がらせ、銀ぎん髪ぱつをあおっている、青白く輝かがやく、これは。

「──精神攻撃マインドハツク……！」

　そうか。やつらがあそこまで近づいてきたのは、サフィニアを精神攻撃マインドハツクできる距離にとらえるためだったのだ。

　きっと今いま頃ごろ、やつらの攻性スパク意識体チユラが無意識層共有集積領域を通って、サフィニアを攻撃しているに違いない。そのせいで、一点に集中していたサフィニアの魔ま力りよくが拡散し、空転している。このままでは、魔術を完成させるどころではない。攻性スパク意識体チユラ迎げい撃げきのため、防衛フオー意識体デユラを繰くり出したり、心理防ぼう壁へきを閉じるなどといった防戦に専念するのが先決だろう。

　そのはずなのだが、サフィニアはまだ呪文の詠唱をやめていなかった。

「外道無道不道覇道王道Ａｕｘｅ Ｌ□非道求道深道唱道Ｂｅｌｚｅｌ□ＲａＫＭａＫＲｅＫＳｅＫＮｕＫ……」

　しかも、魔力が逆流してサフィニアの中へ戻もどってゆく。

「ＯＸ祝宇祈妻願宇ＩＸ滅撫壊主砕軀ＵＸ□ＧｒａｎｄＢｌｏｗ我力示時ＡＭＶＲＬ」

　精神攻撃マインドハツクをものともせず、サフィニアは魔術を完成させようとしていた。

　交響曲「悲命」の演奏を終えた戦慄シバレス・楽団オルケストラが続々と舞台から降り、こちらへ押しよせてこようとしている、今、このときに。

「□□ＳｅｔｔＭｏｉＦｒｅｅ」

　サフィニアが前方に差し出した右手の人差し指の先に、何か黒い靄もやのかたまりのようなものが生じた。

　よく見ると、その中でいくつかの黄金色に輝く極小の粒つぶが円を描いて運動している。

それが、滑かつ空くうするように音もなく直進していった。トマトクンが「伏ふせろ！」と叫さけんだ。ひどく切せつ迫ぱくした声音だった。マリアローズはただならぬものを感じ、一も二もなく従った。弾はじけるような、消失するような、さして大きくはない、だが、いまだかつて聞いたことのないような音がした。

マリアローズは一いつ瞬しゆん、目を閉じた。

光だ。

光が広がって、膨ふくれ上がり、溢あふれそうになりながらも、玄げん室しつを満たすか満たさないか、つまりマリアローズたちのいる場所の手前、ぎりぎりのところで止まった。

今度は収縮する。

あっという間だった。

マリアローズは、サフィニアの指先から放たれたときと同じくらいの大きさにまで小さくなった光の玉を、玄室の中央に目もく撃げきした。舞ぶ台たいも、観客席の大部分も、何らかの作用によってごっそり削けずりとられたように消失していた。数十体はいた戦慄シバレス・楽団オルケストラも、ドレスみたいなローブを着た女も見あたらなかった。ただ、御簾が下ろされた貴賓席のあったあたりに、黄色く輝く球体らしきものが浮いていたように思う。

それから間もなく、轟ごう音おんとともに形のない衝しよう撃げき波はが襲おそってきて、マリアローズはたまらず床にしがみつこうとした。といっても、滑なめらかな床には指を引っかける出っ張りなどない。吹き飛ばされそうになって泡あわを食っていると、何かが体の上に覆おおいかぶさってきた。トマトクンだ。すぐそばにユリカの息いき遣づかいを感じた。トマトクンは自分の身を盾たてにし、抱だくようにしてマリアローズとユリカを衝撃波から守ってくれたのだ。

「……平気か」

ややあって、そう尋たずねながらトマトクンが体を起こした。

ユリカと顔を見あわせたマリアローズにしてみれば、トマトクンの方こそどうなのかという話だが、どうやら大だい丈じよう夫ぶそうだ。他ほかの面々については、カタリが十メーテルほど向こうで

檻ぼ褸ろ雑ぞう巾きんみたいに転がっていて、ピンパーネルはどうやってしのいだのか不明だが、マリアローズたちのすぐ近くにしゃがんでいる。

　そして、サフィニアはさっきと寸すん分ぶん違たがわぬ場所で、すでに次の魔術を準備していた。

　だが、あれほどの魔術を使ったあとだ。傍はたから見てわかるほど、サフィニアは疲ひ労ろう困こん憊ぱいしている。それでも立てつづけに術を用意せざるをえないのは、まだ敵がいるからに違いない。

　そう、敵はいた。

　クライスト様式の面おも影かげがほとんど残っていないくらいまで破は壊かいされた玄室の中に、それは浮ういていた──いや、彼女といった方がいいか。

　緋ひを基調としたあでやかな丈たけの長い装しよう束ぞくを幾いく枚も重ね着した彼女は、胸の下から臀でん部ぶの上まで覆う幅はばの広いベルトで腰こしの細さを強調していた。そのつややかな黒髪は結い上げられ、額には飾かざり輪を嵌はめている。他にも、きらびやかな宝ほう飾しよく品ひんを数えきれないほど身に着けていたが、何かが目立ちすぎることも、何かが控えめすぎることもない。すべてが調和して、自然の奇き跡せきにより生み出された艶えん美びな大輪の花のごとく、彼女はそこに咲さき誇ほこっていた。

　ただ、その中でも、ある部分にマリアローズの目が釘くぎ付づけになった。

　顔だ。

　瓜うり二ふたつどころではない。彼女は暖色系と寒色系を巧たくみに入れ混ぜたメイクを施ほどこしていて、比ひ較かく対象となる相手はたぶんノーメイクだったが、あの顔立ちは化け粧しようでそこまで化けたりはしない。間ま違ちがいないだろう。

　完全に同じだった。

　彼女はあのドレスみたいなローブを着た女と同じ顔をしていた。

「──どう……いうこと？」

「あれが本命だろうな」

　トマトクンは大たい剣けんを抜きつつ、吐はき捨てるようにマリアローズの疑問に答えた。

「他は失敗作か、余った部品で作ったがらくたか。まあ、あれが完成品とは限らんが」

「……レディ・麟霊」

「ああ。愚おろかな妄もう執しゆうに取り憑つかれた哀あわれな女だ。やつがただ眠ねむるべきときを忘れ、時にしがみつくだけの亡もう者じやと成り果てたのなら、引導を渡わたしてやるのがせめてもの情けだろう」

「情けって──トマトクン……？」

　トマトクンは返事をしなかった。それどころか、マリアローズを見もしなかった。珍めずらしく他者を完全に拒きよ絶ぜつしているかのようなやけに険しい面おも持もちで、これ以上は声をかけるのも躊躇ためらわれるくらいだった。

　しかし、黄昏たそがれの魔ま導どう王の一人、〝死霊女王スペクトラクイーン〟レディ・麟霊。

　歴史上の人物がすぐそこにいるなんて、何だかまだ信じられないが、確かに彼女はいる。浮いている。どうやって？　わからないけれども、彼女が浮いていることも、今の今まで不思議とは思わなかった。彼女の時代を超こえた麗れい人じんぶりには、空中に浮くくらいの離れ業わざは許容してしまうキャパシティがあった。というか、よく似合ってさえいた。

　彼女はこちらを見ているようだが、こちらを見ていないようでもある。

　何度確かく認にんしても間違いなくそこにいるのだが、そこにはいないように思われる。

　もし非現実の世界というものがあれば、彼女はその住人に違いない。

　本当に、理り屈くつ抜ぬきで彼女は美しい。

　サフィニアはそんな魔導王に向かって、もう一発、ぶちかまそうとしていた。

「ＥｎＧｒｕｍ卒Ｄｅｓ卒ＨｏｒｕｍＺｅｍ卒ＲｅＧｒｕｍＥｎ卒ＦｒｕｍＶａｓＺ卒」

　さっきもそうだったが、またしてもマリアローズにとっては耳慣れない呪じゅ文もんだ。

　いったい、サフィニアはどれだけの種類の魔術を持っているのだろう。ただ、戦慄シバレス・楽団オルケストラを丸ごと呑のみこんだあの魔術さえ、レディ・麟霊には通用しなかった。レディ・麟霊はどれほどの魔力を持っているのだろう。

　一いつ般ぱん的に、魔導王時代のあと、一部の例外を除いて魔術は退行したといわれている。

　今、その定説は覆くつがえされるのか。サフィニアは覆すことができるのか。

「ＩｖＮｉｎ昏Ｇｒｕｍ」

　サフィニアは水晶様材クリスタリンの杖つえを両手で持ち、その先せん端たんをレディ・麟霊に差し向けた。

　だが、触しよく媒ばいや秘薬などはまったく用意された形けい跡せきがない。そうしたものを必要としない魔術もあるにはあるが、すぐに違ちがうとわかった。

　そうではなかったのだ。

　次の瞬しゆん間かん、粉微み塵じんに砕くだけ散った杖自体が触媒だった。素材といい、凝こった意い匠しようといい、かなり高く売れそうな杖なのに、何て勿もつ体たいない。

　とはいえ、サフィニアが愛用の杖を触媒にしただけのことはあるようだ。

　透すきとおった無数のかけらが、サフィニアの両手の周りで旋せん回かいしながら、次し第だいにあるものを形作ってゆく。それは巨きよ大だいな槍やりに似ている。騎兵槍ランスに近い。光り輝く騎兵槍ランスだ。

　サフィニアは両手を振ふり上げ、振り下ろして、これを投じた。といっても、実際に投げたわけではなく、その動作をしただけだが、全長十メーテルほどの光り輝く騎兵槍ランスは勢いよく放たれた。

　レディ・麟霊めがけて飛んでゆく。

　それを──

　魔導王の貫かん禄ろくなのか。これが差なのか。

　レディ・麟霊は右手を上げただけだった。触ふれることもなかった。

　止めてみせた。

　その顔に、初めて表情らしきものが浮かんでいる。

　踏ふみ潰つぶした蟻ありを戯たわむれに哀あい惜せきするかのような、残ざん酷こくな微笑ほほえみが。

「妾×楯突×××小賢××」

　レディ・麟霊の声は女性にしては低かったが、独特の澄すんだ響ひびきがあった。何を言ったのかは、上ハイ古ロ高メ位オ語ンに違いないので、マリアローズにはよくわからない。上ハイ古ロ高メ位オ語ンは幾種類もの表意文字と表音文字からなり、地方や階級や用よう途とによって使い分けられつつも、相そう互ごに影えい響きょうしあって変化する十数種の構文様式を持っていて、さらに場合によっては暗号化されたり、極きょく端たんに略されるなど、とてつもなく複雑な言語だ。

　それでも、どうやら嘲あざけっているらしいということはわかったが、やむをえないかもしれない。何せ、サフィニアが渾こん身しんの魔力をこめてぶつけた魔術を、レディ・麟霊は赤子を抱きとめるよりたやすく防いでしまったのだ。

　あまつさえ、その状態を維い持じしたままで何やら唱えている。まさか、呪文か。

「ＳｈｈｈｙｙｙｙｚＳｈｈｈｈｈｙＵｒｙｙｙｙｙｙｙｙＳｈｈｈｈｈｈｈｒｙ」

　マリアローズにはそんなふうにしか聞こえなかったのだが、どうやられっきとした魔術の呪文だったようだ。

　その証しよう拠こに、レディ・麟霊の周囲にいくつもの裂け目が出現した。それはいったいどこに繋つながっているのか。あまり考えたくなかったし、考える必要もさしてなかった。というか、悠ゆう長ちように考え事などしている暇ひまはなかった。

　それぞれの裂け目から、でこぼこしている白っぽい何かのかたまりがぬっと出てきて、今や決して平らとはいえない床ゆかに落ちた。まるで産み落とされたかのように。

　それは手足のようなものを備え、頭らしき部分には目や鼻や口と思おぼしき凹おう凸とつがないこともなく、人間とは言わないまでも、何らかの生き物のようだった。現に、それは動くというより蠢うごめいていたし、やけにつるっとしたその表面は生命の脈動にあやしく波打っていた。

　裂け目が五つで、それも五つ。

「──死霊のスペクト王土ランズの霊れい兵どもか……！」

　トマトクンが舌打ちをした。

「レディ・麟霊が創造した擬ぎ似じ異界の住人だ、やつらはもう一度受肉するぞ！　ユリカはサフィニアを連れて脇わきに避ひ難なんしていろ！　あとは俺に続け！」

　そう命じるなり走りだしたトマトクンを、ピンパーネルがすぐに追い越こしていった。いつの間にか襤褸雑巾状態から復帰していたカタリとマリアローズもただちに従ったが、三十メーテル以上先にいる霊兵どもはすでに受肉とやらを行いつつあった。

　標準的な成人男性の倍ほどの大きさだった彼らが、そのさらに倍くらいまで膨ぼう張ちようし、出っ張ったり引っこんだりしながら形を変えてゆく。

　筋骨逞たくましい、というか、背の高さも横よこ幅はばもあまりに逞しすぎる男女へと。

　しかも、やつらは生まれたままの姿だった。生白い肌はだは彫ちよう刻こくのような質感で、体毛は一切ないけれども、あの部位が

正確に造形されていないのがせめてもの救いだ。そうでなければ、ちょっと正視に耐たえなかっただろう。

いや、それこそ高名な芸術家の手による彫刻のごとく見事な裸ら身しんではあり、顔立ちもそれぞれ美しく整ってはいるのだが。

男×三、女×二。

異様に肌の白い禿とく頭とう裸ら形ぎよう、身長四メーテルになんなんとする巨きよ人じんどもが集つどうさまは、はっきりいって気味が悪い。それだけでなく、かなり厄やつ介かいそうでもある。

さらに、レディ・麟霊がまた何かを短く唱えると、何百枚もの窓まど硝子ガラスがいっぺんに割れるような音がした。サフィニアの光り輝かがやく騎兵槍ランスが、粉々に砕かれてしまったのだ。

羽毛のように舞まい落ちる光り輝く騎兵槍ランスのかけらの中を、いにしえの女王がゆっくりと降下してくる。

まるで、お伽とぎ話ばなしの中から抜ぬき出したように幻げん想そう的な光景だが、その周りを囲んでいるのが白い裸はだかの巨人なのだから、もうわけがわからない。その上、そんなやつらと戦わなければならないなんて、本当に馬ば鹿かげている。かといって、巨人どももこちらへ向かってこようとしているし、今さら引っこみはつかない。

もちろん、マリアローズにしてみれば、不安はあり余るほどある。自分ごときが、あんなでかいやつを相手にいったい何ができる？

が、怖おじ気けづいてもいいことはないとマリアローズは知っていた。だから、とにかく走った。巨人はやはり大きかった。それでも、トマトクンが大剣を一いつ閃せんさせて、巨人の右足をきれいに切断してのけたとき、恐きよう怖ふらしきものは吹ふき飛んだ。しかし、吹き飛びかけた恐怖は、驚おどろきを連れて戻もどってきた。

右足を失った巨人は、バランスを失して横向きに倒たおれたが、当の右足がすぐさま別のものへと変じたからだ。

右足の大きさ相当の人間に。

なおかつ、倒れた巨人も右足分の体積を減じた身の丈たけ三メーテルほどの五体満足な人間になって、起き上がってみせた。

「━何だよこれ！」

マリアローズは、死霊のスペクト王土ランズの霊兵どもが図ずう体たい以上に扱あつかいづらい敵であることを悟さとって、戦せん慄りつした。トマトクンは手当たり次第に巨人を斬きり刻んでいるけれども、そのぶん受肉した霊兵が倍々に増えてゆくわけで、果たしてこれでいいのか。少々疑問ではあったが、小さくなってくれれば、マリアローズでも偽にせ劫ごう火かで戦えないことはない。実際にやってみるまでは、そう思わなくもなかった。

ところが、身長一・二メーテルくらいのミニチュアじみた女の霊兵に斬ざん撃げきを浴びせたマリアローズは、この上なく奇き怪かいな手て応ごたえに顔をしかめずにいられなかった。

偽劫火は、霊兵の首に半ばまで食いこんでいるのだ。

それなのに、筋肉や骨みたいな硬かたさがない。さりとて、やわかいのでもない。血は一ひと滴しずくも出ない。脂し肪ぼうに近いけれども、あの独特のぬめるような感かん触しよくもない。

霊兵は目を細めて青い唇くちびるを笑う形に開いていた。口こう腔こうの中も青く、舌は紫むらさきがかっている。

やつはマリアローズに言っているかのようだ。無む駄だだ、と。そんなことをしても倒せない、そんなことで自分は死なない、無駄だ無意味だ諦あきらめろ、と。

何様のつもりなのだ。

「むかつくんだ、この……！」

マリアローズは偽劫火を引き抜きざま、霊兵の顎あごに思いきり左の掌しよう底ていを叩たたきつけた。瞬間、布ふ団とんを叩いたように力が分散する感じだったが、腰こしと肩かたと肘ひじと手首でひねりを加えたのが功を奏したのか。霊兵は笑った顔のまま床に崩くずれ落ちた。すぐに起き上がってこようとするものの、マリアローズはもう構わなかった。トマトクンの意図がわかったからだ。

要するに、霊兵どものことなんて、トマトクンの眼中になかっ

た。トマトクンは邪じや魔まな障害物を叩き斬っていただけだった。

　最初から、標的はただ一つ。

　誰だれよりも先にその標的を射程に収めたのは、霊兵どもを相手にせず、砂色の風と化してその間をひたすらすり抜けていった元アッサシンだった。

　ピンパーネル。

　その名は、ラハン大陸の言葉で瑠ル璃リ繁縷ハコベを意味するという。鮮せん烈れつな瑠璃色の花弁を持つが、小さいためにあまり目立たない、そんな花の名をなぜ彼は自らに与あたえたのか、あるいは、誰かに名づけられたのか。無口な彼は自分について滅めつ多たに語ろうとしないので、わからない。

　だが、それが彼に似つかわしい名かと問えば、おそらく誰もが否いなと答えるだろう。

　右手に刺し突とつ斬撃両用短たん剣けん、雄おすのグレアデを、左手に斬撃兼けん解体用短剣、雌めすのリレッザを構えた彼はひそやかに獰どう猛もうすぎる。

　従って、危険すぎる。

　そんな彼を、花などと。

　瑠ル璃リ繁縷ハコベだけに限らず、世界中のいかなる花でもありえないピンパーネルは、ごく低い姿勢でレディ・麟霊に迫せまった。いくら魔ま導どう王といえども、身体能力ではピンパーネルに及およぶべくもないのだろう。レディ・麟霊はやすやすとピンパーネルの接近を許したかに見えた。

　事実、そうだったに違ちがいない。表情こそほとんど変えなかったものの、わずかに体をのけ反らせたレディ・麟霊は、我が身を庇かばわんと右手を前に突つき出した。それはたぶん意識した動作ではなかったはずだ。幼児でもとっさに行う種類の本能的な仕草に思えた。

　ただし、彼女は幼児ではなかった。かつて世界を分割統治した黄昏たそがれの魔導王の一人であり、何らかの力によって、魔術的か

つ物理的な障しよう壁へきを即そく座ざに展開することができた。

　ピンパーネルが突き出した雄のグレアデは、その障壁で完全に防がれた。まるで不可視の分厚い壁かべに刃はが弾はじかれてしまったかのようだ。しかし、それでもピンパーネルは諦めなかった。間かん髪はつを入れず、左手の雌のリレッザでレディ・麟霊に斬りつけようとした。結果的にはこれも障壁に阻はばまれたのだが、それだけでは終わらなかった。

　俗ぞくに魔術士マジシヤンズ殺しキラーと呼ばれる武器がある。

　まあ、ある、といっても、世に出回っている魔術士マジシヤンズ殺しキラーは九割九分以上が紛まがい物ものだ。よって、その正体が何なのか、正確なことを知る者は少ない。もしかしたら、カタリあたりは知っているかもしれないが、マリアローズはそれに関する詳しよう細さいな知識を持たない。

　ただ、魔術士マジシヤンズ殺しキラーは魔導王を暗殺するため、作り出された道具なのだという。

　強大な魔力を持つ恐怖のドレッド操り手スターを、凡ぼん人じんが葬ほうむるための刃がそれらしい。

　魔力を中和し、消しよう滅めつさせる封ふう魔まの力がそれには宿るという。

　雌のリレッザは━不可視ゆえにおそらくだが、レディ・麟霊の障壁に食いこんだ。

　ピンパーネルは幾いく度ども障壁に雌のリレッザを見み舞まった。そのたびに、何かが擦こすれあうような甲かん高だかい音がした。レディ・麟霊の腰が明らかに引けてきて、非現実的な端たん麗れいさを誇ほこる顔がかすかに歪ゆがんだ。

「ピンプ！　退け！」

　そのとき、トマトクンがそう叫さけびながらピンパーネルを押しのけるように前へ出たのは、なぜなのか。ピンパーネルがそのまま攻せめつづけていれば、いずれレディ・麟霊の障壁を破ることができたかもしれないのに。

　いや、それは浅はかな考えというものだった。レディ・麟霊は片

手で印を組み、呪じゆ文もんの詠えい唱しようを始めていたのだ。だから、トマトクンはピンパーネルに後退を命じた。ピンパーネルは忠実すぎる猟りよう犬けんの性さがでこれに従ったが、ようやく霊兵の群れを突とつ破ぱしたマリアローズは当然の疑問を抱いだかざるをえなかった。

　ピンパーネルを下がらせ、トマトクンが前に出て、それで？

　トマトクンはどうするのか？

「全員、俺の後ろに……！」

　トマトクンから発せられた命令は、マリアローズの疑問を解決しなかった。けれども、マリアローズはそうしなければならなかった。ピンパーネルも、カタリも、トマトクンの言うとおりにしなければならなかった。問答無用で、今は何も考えず絶対にそうすべきだった。

　ピンパーネルとカタリも、マリアローズと同じように思ったらしい。

「どへぇ！」

　まあ、華か麗れいに飛び退しさってトマトクンの背後に回りこんだピンパーネルや、小動物的な身軽さでその後ろにつけたマリアローズと違い、カタリは変な声を出してぎりぎり頭から滑すべりこんできたのではあったが。

　いずれにせよ、間に合った。そう簡単に言ってしまっていいものかどうか。

　マリアローズのいる位置からは、レディ・麟霊が何をしているのか、もうよく見えなかった。もちろん、横に身を乗り出せば見えないことはないが、そんな野や次じ馬うまみたいな真似まねをするべきではないと思ったし、もっと目を引かれる対象がすぐ近くにあった。

　トマトクンだ。

　正確にいえば、トマトクンが身にまとっている全身鎧よろいだった。

濃のう紺こん色の全身鎧を飾かざっている炎模様ファイヤーパターンが、ぼんやりと光っていた。そういえば、いつかもこんなことがあったような気がする。確か、あのときは気のせいだと思ったが、気のせいでも、目の錯さつ覚かくでもなかったのか。

さらに、鎧の背中の部分が盛り上がって、トマトクンの頭部を覆おおい隠かくした。全体的なフォルムも変わったように思える。どこがどうとはいえないのだが、何となく強そうになった。背や頭に角を生やした角竜りゆうという竜がいるのだけれども、そいつに若じやつ干かん印象が似ていた。

マリアローズは当然、仰ぎよう天てんしたものの、それもすぐに消し飛んだ。

トマトクンの向こうで、何かが起こったからだ。何か？

何かも糞くそもない。レディ・麟霊の魔術が発動したに決まっている。あの冴さえた蒼そう白はくの輝きは、魔術によって生み出されたものに違いない。それがどんどん広がってゆき、冷気が押しよせてくる。吐はく息が白い。寒い。べらぼうに寒い。首都エルデンには雪の降る季節もあるが、その真冬よりもずっと寒い。しかし──

それだけだ。

「……おおおおおおおぉぉぉ！」

たぶん、トマトクンが雄お叫たけびを上げ、マリアローズたちの前に立ってくれているおかげで。

実際、トマトクンは冴えた蒼白の輝きをまともに食らっていた。全身で受け止めて、盾たてになってくれているのだ。身を挺ていしてマリアローズたちを守ってくれている。

だが、そのことで胸を痛めたり、やめてくれとトマトクンに訴うったえたりしてはいけないのだ。トマトクンはこうするのが最善だと判断して、実行に移しただけのことだ。そこには感情を差し挟はさむ余地などない。マリアローズはこの隙すきに次の一手を考えるべきだ。他のことは頭から追い払はらうべきだ。トマトクンは大だい丈じよう夫ぶなのかとか。耐たえきれるものなのかとか。そんなことはどうでもいいのだ。全然どうでもよくなんてないが。



きっと時間はそれほどない。マリアローズはすぐに決断した。

レディ・麟霊の魔術が終わるか、途と切ぎれるかしたら、出る。

ちらりと後ろを見ると、霊れい兵どもは冴えた蒼白の輝かがやきを浴びて凍こおりついていた。連中がもう脅きよう威いにはならな

いと知って、マリアローズはカタリとピンパーネルに「行くよ」と告げた。二人はそれだけでたぶんわかってくれただろう。どうせ細こま々ごまと打ち合わせをする猶ゆう予よはなかった。冴えた蒼白の輝きが弱まり、消え失せる瞬しゅん間かんはすぐに訪おとずれたからだ。

　トマトクンが、がっくりと膝ひざをついた。

「□□ＧＯ！」

　その姿をあえて見ないようにしながら、マリアローズは自分を、そしてカタリとピンパーネルをけしかけるように短く鋭するどく叫んで飛び出した。

　レディ・麟霊はトマトクンに魔術を防がれたことが、よほど腹に据すえかねたのだろう。

「×××××××××！　何故其方×！　×××寄××下衆！」

　眉をつり上げてそんなことを言いつつ、また右手を前に突き出したが、ピンパーネルが雌のリレッザで斬りかかると、意外な結果がもたらされた。

　魔術士マジシヤンズ殺しキラーの働きによって、見えない障壁が音を立てて傷ついただけではない。

　レディ・麟霊の右手が、その指先が。

　乾かわいた土くれでできていたかのように、崩ほう落らくしたのだ。

「……××……！」

　何がどうなっているのか皆かい目もく見当もつかないが、ここに至って、レディ・麟霊は完全に色を失った。後退するために床ゆかを蹴けった右足の爪つま先さきが崩くずれ、左足も崩れ、それでも何とか飛んで後方へ逃のがれたいにしえの女王の姿は、美しいだけにいっそ哀あわれなほどだった。

　そうはいっても、手心を加えてやる理由なんてない。マリアローズはすかさず最後に一本だけ残っていた爆ばく弾だんを投げたが、これでレディ・麟霊を傷つけることはできなかった。そのために投

げたのではないのだから、当たり前だ。

　マリアローズはレディ・麟霊の進路を狙ねらったのだった。

　いや、進路というより、退路か。レディ・麟霊が逃にげるのを妨ぼう害がいしようとしたわけだ。

　これが何と、さっきまでの状じよう況きようを考えると信じがたいが、見事に成功した。

　レディ・麟霊は背後から爆風を受けてよろめき、その間にピンパーネルに追いつかれた。

　それにしても、魔術士マジシヤンズ殺しキラー、雌のリレッザを所有する元アッサシンのピンパーネルは、まさしく魔術士の天敵だ。彼は魔術士を殺すためのあらゆる資質を有していた。魔術から身を守るすべは持たなかったが、トマトクンが補ってくれた。対するレディ・麟霊は、サフィニアの先制攻こう撃げきによって、盾であり矛ほこであったはずの戦慄シバレス・楽団オルケストラを失い、死霊のスペクト王土ランズの霊兵どもではトマトクンをはじめとする突とつ撃げきを制しえなかった。

　それでも、レディ・麟霊が完全であれば、話はまた違っていたかもしれない。

　だが、見てのとおり、彼女の体は崩れはじめていた。

　やはり、彼女は成し遂げていなかったのだ。

　飛びかかってくるピンパーネルを、見えざる障壁で防ごうとした彼女は、もはや時を超こえてまばゆいばかりに気高く麗うるわしいあのレディ・麟霊ではなかった。その顔さえも、出来損そこないの土人形のように端はしの方からひび割れていた。魔力も弱まっているようで、障壁は雌めすのリレッザにやすやすと斬きり裂さかれてしまった。

　これでもう、女王を守るものは何もない。ピンパーネルは機を逃さず、障壁の破れ目に雄おすのグレアデを突き入れた。果たして、このままピンパーネルがおいしいところを全部持って行ってしまうのか。

　マリアローズとしては、むろん、それでも全然構わなかった。と

いうか、是ぜ非ひそうなって欲しかった。雄のグレアデが女王の額あたりに突き刺さり、彼女の息の根を止めることを心の底から期待した。むしろ、間ま違ちがいなくそうなるだろうと思った。

　けれども、レディ・麟霊も土ど壇たん場ばで意地を見せた。

　雄のグレアデを左手で、素す手ででで受け止めたのだ。

　ただ、せっかくそこまでしても、レディ・麟霊の左手はもたなかった。崩れてしまった。加えて、ピンパーネルには雄のグレアデだけでなく、雌のリレッザもある。レディ・麟霊の命運もとうとうつきたか。あるいは、もうとっくにつきていたのに、今まで無理やり引き延ばしていただけだったのか。





　だとしたら、レディ・麟霊の摂せつ理りに対する反はん抗こう心と反逆の力は、馬ば鹿かにならなかった。その点に関しては本当に見上げたもので、彼女はしつこかった。事実、彼女は蛇へびのように素早く首を伸のばし、ピンパーネルの右手に嚙かみついて、肉まで食いちぎってみせたのだ。

　しかも、この思いがけない反はん撃げきによって、彼女はおそらくある触しよく媒ばいをえた。

　血だ。

「汝×血×妾×永久××導×汝妾×死×捧××……Ｕｙｙ Ｓ ｈ ｙｙｙｙｙｙｙｓｈ……！」

　ピンパーネルは即そく座ざに雌のリレッザを繰くり出したのだが、レディ・麟霊の詠唱を止められなかった。当たらなかったわけではない。当たった。雌のリレッザは、身をよじってかわそうとしたレディ・麟霊の左ひだり肩かたを深く抉えぐった。それだけにとどまらず、雄のグレアデがレディ・麟霊のこめかみに致ち命めい的てきな一いち撃げきを与あたえてもいた。

　それなのに、レディ・麟霊は笑っていた。

　いや、笑ったように見えたのは一いつ瞬しゆんで、崩ほう壊かいしかけていたその顔が、内側から醜みにくく膨ふくれ上がって大いに歪んだ。それは顔だけではなかった。全身に及およんだ。緋ひを基調とした装しよう束ぞくがあっという間にちぎれ飛んだのは、それほど彼女の体積が急激に、爆ばく発はつ的に増加したからに違いない。

「──ピンパーネル……！」

　この変化によって一番先に影えい響きようを受けたのは、もちろんピンパーネルだった。影響というより、被ひ害がいといった方がいいだろう。

　ピンパーネルはとらえられた。かつてのレディ・麟霊、今は不定形の醜しゆう悪あくな白っぽい何かのかたまりが、腕うでのような、触しよく手しゆのようなものを伸ばして、ピンパーネルの両りよう腕うでをからめとったのだ。

　ただ、まあ、この程度なら、今までたいした仕事をしていないぶんの埋うめ合わせというわけではないが、マリアローズとカタリがそれぞれ左右から腕だか触手だかを断ち切って終わりだった。ピンパーネルはすぐに自由になった。

　だが、腕だか触手だかは、あとからあとから何本も何本も伸びてくる。今度は当然、ピンパーネルだけではない。マリアローズとカ

タリも標的になっているわけで、おまけに本体の方も前進してくるとなると、これはもう下がるしかない。

　だって、すでに本体は、十メーテルとか十五メーテルとか、そのくらいの大きさはゆうにあるのだ。踏ふみ潰つぶされたら確実にぺしゃんこになる。というより、呑のみこまれて吸収されてしまいそうだ。あの中に取りこまれ、レディ・麟霊の一部に──なんて、冗じよう談だんじゃない！

「に、に、にににに逃げるでぇ！」

「当たり前のこと言うな、腐くされ魚！」

　マリアローズとカタリはともに回れ右をして逃げだそうとしたが、ピンパーネルは腕だか触手だかを斬り払いながら後あと退じさりはしつつも、踵きびすを返そうとする様子がなかった。

「ピンパーネル！　きみも逃げて……！」

　そう叫さけんでも、元アッサシンはこちらを見もしない。仕方なく、マリアローズが足を止めようとしたときだった。

　すぐそばを駆かけ抜ぬけてゆくものがあった。そうか、とマリアローズは思った。だからか。

　忠実な猟りよう犬けんであるピンパーネルが、主人の命令なくして退くはずがない。猟犬は主人を置いて逃とう走そうなどしないのだ。

　その鎧はまだ普ふ段だんと異なる形態のままだった。

　炎模様ファイヤーパターンが本物の炎のごとく輝いていた。

　剣けん身しん波打つ琥こ珀はく色の大剣は、斬り裂き砕くだき滅ほろぼす予感に打ち震ふるえて鈍にぶくきらめいていた。

「──があああああああぁぁっ……！」

　トマトクンは野や獣じゆうのように咆ほう哮こうして跳とび上がり、回転して、その速度と重量のすべてをのせて大剣をぶちこんだ。

かつてレディ・麟霊だったものの本体に。

そのど真ん中に。

破は裂れつするような音がした。

裂け、砕け、弾はじけて、何かが大量に飛び散った。

それは赤黒かったり白かったりした。少し黄みがかった物体も混ざっていた。腕だか触手だかも、本体の前進も、停止した。一瞬、ぴくりと震えたあと、力を失って死んだように動かなくなった。

「……うむ」

トマトクンがゆっくりと立ち上がって大剣を振ふった。そのときなのか、その前からなのかはわからない。いつの間にか、鎧よろいがいつもの形に戻もどっていた。

「まあ、こんなものか……久々にちょっときつかったが」

確かに、きつそうだった。それも、ちょっとどころではない。かなりだ。

トマトクンは息を乱していたし、目や口や耳や鼻から出血していた。見た感じではそうとうな重傷を負っていそうで、よく立っていられるというか、よくもあんな真似ができたものだ。この有様でマリアローズたちを振り返り、ヒヒヒと下げ卑びた笑い方をしてみせるのだから、本当に、筋金入りというか、何というか。

「どうした。鳩はとが豆まめ鉄でつ砲ぽう食らったような顔して」

「……マメデッポウ？」

「何だ。豆鉄砲も知らんのか。といっても、俺も実物を見たことはないが、何でも子供の玩具おもちゃらしいぞ。おそらく、豆を弾だん丸がん代わりに飛ばすんだろう」

「ふうん──って、違ちがうだろ！　そんなことはどうでもよくて」

「大丈夫だぞ、このくらい」

トマトクンは先回りして答え、外がい套とうで顔をぬぐった。だ

が、何度も大剣についた血脂あぶらをふきとっている外套だし、そうでなくても正体不明の様々なもので汚よごれている。どう考えても顔をふくのに適しているとは思えなかったので、マリアローズは背負い袋ぶくろの中から清潔な布を出そうとした。その前に、嫌いやなものを見てしまった。

　気のせいかと思った。そう思いたかったが、鋼鉄のごときマリアローズの理性は、そんなふうにごまかすことを許してくれなかった。

　やむをえず、マリアローズはトマトクンの足あし許もとで泡あわ立だつように蠢うごめいているものを指差した。

「それ……」

「うむ？」

　トマトクンは視線を落とし、うんざりしたように顔をしかめて、それを踏んづけた。

　しかし、蠢いているのはその部分だけではない。というか、一度は息の根を止められたかに見えたレディ・麟霊の残ざん骸がい全体に、痙けい攣れんのような細かい震えがどんどん広まっている。

「わしの気のせいかもしらんけど……何か、やばいんちゃう？」

　マリアローズも半魚人の意見に同意せざるをえなかった。

「ど、どうしようか」

「あー……」

　トマトクンは苛いら々いらしたようにひとしきり頭を掻かいてから、乱暴に大剣を鞘さやに収めた。

「ええい、とりあえず逃げろ！」

「嘘うそ。でも──」

　マリアローズがそう口走ったのは、苦労してわざわざこんな場所までやって来た目的が脳のう裏りをかすめたからだ。

とはいえ、鋼鉄よりは軟なん化かした鉄の理性が、ここはトマトクンの判断を支持すべきだと告げていた。本能も逃げた方がいいとマリアローズの足を動かそうとした。欲望だけが後ろ髪がみを引きまくっていたものの、トマトクンが駆け出した瞬しゅん間かん、レディ・麟霊の残骸からまたぞろあの腕だか触手だかが無数に飛び出すに至って、マリアローズも後退するしかなくなった。

だが、これは永続的な撤てつ退たいではなく、あくまで一時的な転進にすぎない。

そうとでも考えないと、やりきれない。

マリアローズはまだ何も手に入れていないのだ。ここで手に入れられるはずだった。ここにあるという話だった。焼バきーつニくンしグ刺しレイ貫く剣ピア〝劫ごう火か〟。三億ダラー相当。

ところが、この玄げん室しつときたら、劇場とか音楽堂といった造りで、目につく場所に副ふく葬そう品ひんのたぐいはなかった。そう。目につく場所には。では、目につかない場所は？

何しろ、玄室は広い。確か、奥の方には扉とびららしきものもいくつか見えた。あそこを調べたかった。中に入って、何があるかこの目で確かく認にんしたかった。だって、そのために来たのだ。

正直、マリアローズは、ムサドだの戦慄シバレス・楽団オルケストラだのレディ・麟霊だのメリー・ランランだのテリー・ロンロンだの、そんなやつらのことはどうでもよかった。全然、さっぱり興味がなかった。マリアローズの興味の対象は、あくまで魔ま導どう王が残した遺産だった。そのはずだったのに。

今のマリアローズが心血を注いでいるのは、宝物庫に罠わなやら妙みような仕し掛かけやらがないか慎しん重ちように調査しつつ財宝を探す粋ＣＯＯＬな仕事ではなく、ただひたすら足を動かして逃げることだった。

これは堕だ落らくだ。

最低級の堕落としかいいようがない。

超最悪ＳＵＣＫ。畜生シット。やってられるか。でも、やらざるをえない。走るしかない。あまり走りやすいとはいえない、サフィニアの強力な魔ま術じゆつで、しかし、レディ・麟霊には通用しな

かった魔術で削けずられた透とう明めいな材質の床ゆかの上を、とにかく駆けてゆくしかない。

　追ってくるからだ。というか、やつは増えている。馬鹿みたいに見境なく膨ぼう張ちようしつづけている。だから、マリアローズたちは一心不乱に走り、逃げて、玄室の入口まで到とう達たつした。そこで、まだ立つのもやっとのサフィニアを支えてユリカが待っていた。

「ピンプ、サフィニアを！」

　普段ならトマトクン自らサフィニアを抱かかえて運んだろうが、さすがに今の状態では無理らしい。サフィニアにとっては少々残念かもしれないけれども、彼女も贅ぜい沢たくは言っていられない状じよう況きようだと理解しているだろう。そうでなくとも控ひかえめなサフィニアは、おとなしくピンパーネルに抱だきかかえられた。

「よし、急げ……！」

　あとはもう、走るだけだった。

　まだ走らないといけないのだ。しかも、だ。

　今度は階段もある。が、マリアローズは少しだけ期待した。階段までたどり着けばさすがに大だい丈じよう夫ぶなのではないか。もうあの気持ちの悪い、ぶよぶよした、何とも得え体たいの知れない、元レディ・麟霊だとはとうてい思えない物体も、いい加減、膨張と前進をやめるのではないか。

　実は、玄室を出るときにもそんなはかない望みを抱いたのだが、結果的には両方とも裏切られた。

　別にいいのだ。マリアローズは期待して裏切られることには慣れている。いや、よくはない。まったく、これっぽっちもよくなんてない。いいはずがない。思考が錯さく綜そうしているような気もするが、何しろ全力疾しつ走そうだ。酸素が足りない。

　それでも、軽装のマリアローズはいい。サフィニアを抱えているにも拘かかわらず、飛ぶような足どりで階段を上がってゆくピンパーネルも平気そうだ。

　しかし、負傷の影響でトマトクンはつらそうだし、ユリカは体が小さいせいで遅おくれ気味だった。男らしくユリカの後ろについたカタリは、体力的には余よ裕ゆうがありそうだが、精神的にはかなり追いつめられているらしく、物もの凄すごい形相をしていた。

　まあ、カタリの気持ちもわかる。

　階段は全部で百段以上、マリアローズが今、七十段くらい上ったところだ。ピンパーネルはマリアローズの約十段上にいて、最さい後こう尾びのカタリはおよそ十五段ほど下、階段全体の半分あたりにいる。対するレディ・麟霊の残骸は、カタリの七、八段下あたりまで迫せまっていた。すぐそこだ。足でも滑すべらせれば、あっという間に追いつかれてしまう。そんな距きよ離りだった。

　だが、カタリは半魚人のわりには必死でエラ呼吸をして頑がん張ばり、こけたりはしなかった。

　こけたのは、ユリカだった。

「――きゃっ」

「ぬぐおぅ！」

　カタリは階段に蹴け躓つまずいてすっ転んだユリカを踏むまいとジャンプし、体勢を崩くずした。何とか体をねじって受け身をとり、すぐさま起き上がったものの、足をひねったらしいユリカを見捨てて逃げるなどということが、カタリにできるはずはない。ユリカも懸けん命めいに階段を這はい上がろうとしているが、間もなくレディ・麟霊の残骸に呑みこまれてしまうだろう。

　カタリは躊ちゆう躇ちよせずに引き返した。トマトクンも、マリアローズも階段を駆け下りようとした。誰だれも彼かもが無我夢中だった。ピンパーネルの腕うでの中でサフィニアが特殊なチヤネ精神集中リングを行い、なけなしの魔ま力りよくで魔術を使うべく、呪じゆ文もんを詠えい唱しようしていたなんて全然気づかなかった。

「寒磁罪母刹ＲｅｕＬａ外ＮａｕＲａ矛Ｊｕｄａｓ怨氷結酷寒冷獄」

　要素魔術だ。ＬＥＰから呼び出した水霊れいＨｙｄと時霊Ｘｅｏの力を借りて、あわよくば生命活動を停止させて殺害し、悪くても

しばらくの間、運動能力を奪うばう、縛ばく氷ひょう獄ごく。

　ただ、マリアローズが過去、何度か見たサフィニアの縛氷獄と比べると、今回はいかにも威い力りょくが貧弱だった。幅はば十メーテルほどもある階段一いつ杯ぱいに広がった残骸が、縛氷獄の対象としては大きすぎたせいもあっただろう。それ以上に、サフィニアは魔術を使えるような状態ではなかった。何せ、魔術を発動させたあと、失神したのか、ピンパーネルの腕に抱かれたままぐったりしてしまったくらいだ。

　それでも、残骸の一部の表面に霜しもが浮うかび、明らかに動きが鈍った。その間に、カタリがユリカを抱き上げて極限クライマックス九手棍ナインポールを口にくわえたのだが、魚が棒をくわえている図なんて、かなり面おも白しろすぎて見ていられない。

　マリアローズは追いついてきたカタリから極限クライマックス九手棍ナインポールをひったくって左手に持ち、しんがりについて走った。

　駆かけ上った。

　見上げると、すでに階段を上りきったピンパーネルが、砂色の瞳ひとみに珍めずらしい表情をたたえていた。

「急いデ！　早ク！」

　ピンパーネルがそんな切せつ羽ぱ詰つまった声を出すなんて。

　しかも、言わずもがなのことを言うなんて。

「──わかってるっての……！」

　あと一ひと踏ふん張ばりだった。残り十段。九。八。七。カタリは？　隣となりにいる。いや、少し前だ。トマトクンは三段飛ばしで、今、上りきったところだった。トマトクンが振り返った。マリアローズにはもうさすがに後ろを見る余裕はない。前だけを見ている。五段。四段。ふと踵かかとに何かが触ふれて、その何かに足を引っ張られ、おいおい、と思った──何か、レディ・麟霊の残骸のやつ、ここに来てスピードアップしてない？

　やばい。どうしよう。

大いに周章狼ろう狽ばいしているくせに、マリアローズの頭の中にはやけに冷静な部分があって、自分の横を通り抜ぬけてゆく触しよく手しゆを居合いで正確に斬きった。そいつはユリカを抱いたカタリに絡からみつこうとしていたのだった。一方、マリアローズ自身についていえば、すでに足だけでなく、腰こしやら胸やらにもそれが巻きついていた。

つまり、マリアローズは呑のみこまれつつあった。

そいつはやけにあたたかい。やわらかくて、それでいて重い。逃のがれられそうもない。嗅きゆう覚かくを麻ま痺ひさせる薬がようやく切れてきたのか、腐くさった果物みたいな甘くて鬱うつ陶とうしい匂においがする。

そして、それは絶えず叫さけんでいた。

おそらく、音としての声ではないが、マリアローズははっきりと聞いた。

生きる。

「……僕だって」

生きたい。そう思った。

だが、もはや体全部がそいつに覆おおわれていた。何も見えず、何も聞こえなかった。そいつは口の中にまで入ってきて、呼吸ができなくなった。このぶんだと、もうすぐ何もわからなくなるはずだった。マリアローズはむろん、それを受け入れるつもりはなかった。

けれども、打つ手がない。

自分ではどうしようもない。

もがいてみたが、あがいてみたが、どうにもならない。

自分では。

一人では。

自分一人の力だけでは──と。

何かに手首をつかまれた。

強い力で引っ張られ、光の中に引き戻もどされると、くらくらした。

すぐさま大量に吐はいた。

息が。咳せきが。肺が猛もう烈れつに痛くて、むせている間、誰かが背中に手をあててくれていた。

やがて少しずつ楽になってきた。

それでようやく、自分が階段を上って少し行ったあたりにいるということを理解した。

「──し、死ぬかと……思った……」

「まったくだ」

マリアローズを助けてくれたのは、トマトクンだったらしい。体中にあの残骸がこびりついている。まだ顔中が血だらけということもあって、唇くちびるの片かた端はしを歪ゆがめた大おお仰ぎような表情にもやや力がないように見えた。

「そうとう危なかったぞ。さすがに俺もやばいかと思った」

「ごめんなしゃい、わたしが転んでしまったしぇいで……」

ユリカはまだマリアローズの背中に手を置いていた。医術式ではないが、鵺ぬえ流古式戦せん闘とう術に内気功という体の働きを整える技術がある。それを施ほどこしてくれているのだろう。

「慌あわてて二段飛ばししようと思ったのがいけなかったわ。わたしには一段飛ばしが限界だったみたい」

ちょっとピントのずれた反省をしている模様だが。

「せや。二段飛ばしっちゅうのは、簡単そうに思えてこれがなかなかむつかしいからな。わしくらいの玄人くろうとになると、最大四段飛ばしまで可能やけど、ユリカみたいな素人しろうとは一段飛ば

して我が慢まんしとかなあかん」

　いつもユリカに上位に立たれているカタリは、ここぞとばかりに変な偉えらぶり方をしている。ユリカも、半魚人の馬ば鹿か話なんかでしゅんとなる必要はないのに。根が真ま面じ目めなせいだろうが、まあ、実際のところ、マリアローズも二段飛ばしはやめた方がいいと思うので、それについては何も言わないでおいた。

　それにしても、ピンパーネルに介かい抱ほうされているものの、いまだ気を失ったままのサフィニアといい、血ち塗まみれで息を荒あらくしているトマトクンといい、足をくじいたユリカといい、何とか死なずにすんだマリアローズといい、散々だ。

　ユリカがいるから、怪け我がは何とかなるだろうが、魔力は医術式や内気功でどうこうなるものではない。サフィニアは当分、このままだろう。これで地上まで戻るのかと考えると、鬱になる──地上に？

　マリアローズは後ろを振ふり返った。

　階段は、なかった。

　埋うめつくされていた。

　灰色っぽい、あまりやわらかくなさそうな、でこぼこした物体によって、階段は完全に塞ふさがれてしまっていた。

　何だあれは。もしかして、あのレディ・麟霊の残ざん骸がいが固まったものか。確信を持てず、諦あきらめきれないマリアローズは、内気功を施してくれたユリカに軽く礼を言ってから、おそるおそるそれに近づいて偽にせ劫ごう火かの先でつついてみた。

　やはり、硬かたい。見た目を裏切らずに、石くらいの硬さはある。

　全身の力が抜けた。

　マリアローズは虚きょ脱だつ状態に陥おちいって、その場にへたりこんだ。

「……はは……ははは……」

　口から勝手に空虚な笑い声が洩もれる。なぜだか、泣きたくなってきた。後ろから肩かたを叩たたかれたので、ゆっくり振り向くと、カタリが生意気にもしかつめらしい魚顔をしていた。

「これはわしの推測やが──結局、不死性を獲かく得とくすることがでけへんかったレディ・麟霊が、玄げん室しつを封ふう印いんするために用意した最後の手段が、これやったのかもしらんな。これでこの最さい期ごは伝説となり、この場所はレディ・麟霊の墓所となって、永遠に残るやろ。もしかしたら、それこそが女王の夢見た不死、つまり不ふ滅めつの存在としての最後の形だったんかも──」

「黙だまれ！」

「ひぐっ」

　マリアローズは発作的に鶏冠トサカにきて、カタリの向こう脛ずねを籠こ手てで殴なぐった。一度では足りない。矢や継つぎ早ばやに何度も殴った。

「うるさい！　この！　したり顔で！　何が！　不滅だ！　腐れ魚！」

「いだっ、だだっ、だっ、だ、な、何すんねん！」

「何じゃない！　劫火はどうしてくれるんだよ！　三億ダラー！　責任とれ！」

「わ、わしのせいやないやんか！　何でわしが──」

「じゃあ誰が責任とるんだ！　きみしかいない！　だって、きみは半魚人だし！」

「むちゃくちゃやん！」

「きみなんか顔がむちゃくちゃだろ！」

「おお、言うてくれたな！　誰の顔がしっちゃかめっちゃかの人外魔ま境きよう属性やねん！　これでも人間の最低ラインはしっかりキープしとるつもりやで！　って、最低かい！　そこまでひどいんかい！」

「自分でボケて自分でツッコむのが好きなら、一生、一人でやって

ろ、ばか！」

「それはむっちゃ寂さびしいから嫌いやや……」

「だろうね……」

　マリアローズは床ゆかに両手をついた。何だか、とてつもなく疲つかれた。ふと、レディ・麟霊も疲れていたのではないかと思った。

　自分で作った戦慄シバレス・楽団オルケストラと自身の濫らん造ぞう複製品に囲まれて、死なずに、しかし、生きているともいえず、ただつれづれに音楽など聴きいて時を過ごしていた、いにしえの女王。

　トマトクンが言った。だが、永遠に生きてどうする。

　彼女は時に倦うみ、疲れていたのではないか。ピンパーネルの血でもって、おのれを崩ほう壊かいさせる無残で醜しゅう悪あくな最後の魔ま術じゅつを使った彼女は、この幕引きを望んでいたのではないか。

　むろん、真相はわからないが、いつまでもこうしてもいられない。

　マリアローズが一つため息をついて顔を上げると、トマトクンが階段の方へ顔を向けていた。その黄玉色の瞳は静かに凪ないでいる。それでいて、奥底に何かを秘ひめているかのようだ。

　トマトクンは低く呟つぶやくように告げた。

　おそらく、夢を叶かなえることができなかった黄昏たそがれの魔導王に。

「Nite.」

　それは、上ハイ古ロ高メ位オ語ンで「おやすみ」を意味する言葉だった。

『薔薇のマリア　Ⅰ.夢追い女王は永遠とわに眠れ』　了

あとがき

僕は以前、ギターを抱かかえ、夜の街で歌っていました。

夜の路上で、僕はたくさんの人と出会い、彼らと別れ、あるいは失いました。

気がつくと、ギターを弾ひく代わりに、キーボードを打っていました。

最初に書き上げた小説が、本作『薔薇のマリア』の原型となったある物語です。

その物語を書いてから、『純潔ブルースプリング』で第七回角川学園小説大賞特別賞を受賞するまで、約三年。そして、さらに沈ちん黙もくの一年。

僕は四年かけて、原点に回帰したということになります。

果たして僕は進んでいるのか、止まっているのか、戻もどっているのか。

僕にはわかりません。さして興味もありません。ただ力つきて倒たおれるときまで、前を向いてひたすら歩いてゆこうと思います。

いつも僕を支えてくれている相棒、家族、親友、そして猫ねこたちに愛を。

ネットを通して、僕の知らない世界のことを教えてくれた友人たちに感謝を。いつかきっとご馳ち走そうします。

僕が別れ、失った人たちに。僕はあなたたちのことを忘れていません。忘れることもありません。

あの日、一生、歌をうたってゆくと約束した偉い大だいな歌唄うたいに。申し訳ありません。僕はやはり、あなたのようには歌えな

いのです。

　僕に機会を与あたえてくれた方々に。後こう悔かいはさせません。

　ＢＵＮＢＵＮさんに。素す敵てきな絵をありがとう。

　担当編集者に。ご苦労様です。

　僕の本を作ってくれたすべての方々に。あなたたちのおかげです。

　僕の本を手にとってくれた皆みな様さまに。楽しんでいただければ幸いです。

十文字　青

解説

誇ほこり高き仲間たちの物語　～『薔薇のマリア』の世界

スニーカー文庫編集部

『薔薇のマリア』いかがだったでしょうか。

　この作品は、第７回角川学園小説大賞「特別賞」を受賞した十文字青氏（受賞時ペンネーム・十神霙）のデビュー作となります。角川学園小説大賞の中でもこの「特別賞」というのは、文字通り「特別」な意味があり、スニーカーレーベルには収まりきらない方向性の作品や才能に贈おくられるものです。第７回を数える歴史の中で、特別賞を受賞したのは、滝たき本もと竜たつ彦ひこ氏の『ネガティブハッピー・チェーンソーエッヂ』一作品だけというのも、そういった賞の特別な意味があるからです。滝本氏のその後の活かつ躍やくを見ていただければ、この賞の特とく徴ちようが分かっていただけることと思います。

　さて十文字青氏です。実は、受賞した作品は『純潔ブルースプリング』という別の作品でした。現代を舞ぶ台たいにした、憎にくめない不良たちが、爽さわやかに活躍する快作でした。こちらもいずれみなさまに読んでいただける機会がくるはずです。そして、受賞後第一作として準備を進めていたのが本作『薔薇のマリア』です。

　十文字氏が受賞前からあたためていたアイデアをもとに、改かい稿こうを重ねて今回デビューとなりましたが、そこに至るまで時間がかかってしまったことには実は理由があります。ひとことで言えば、その世界観の壮そう大だいさと複雑さでした。膨ぼう大だいかつ複雑な設定のもと考えられた作品なので、どの部分から、どう物語にしていくか……そこを考え、煮に詰つめていくだけでも多大な時間が必要だったのです。本作を読んでいただければ、その架か空くう世界の壮大さや、時間をかけた分熟成した、物語の背後に隠かくれた設定の複雑さの一いつ端たんを、感じとっていただけることと思います。

　今回の物語の舞台は、〝永遠大陸ルミナス・アルファ〟の一角、

サンランド無統治王国首都エルデンです。〝無統治〟というその国名のとおり、エルデンには法がなく、そのかわり何でも許される完全な自由が与あたえられた、欲望と夢の溢あふれる都市です。描えがかれるのは、いわゆる剣けんと魔ま法ほうのファンタジー的な、戦せん闘とうや財宝探しだけではありません。仲間、裏切り、孤こ独どく、葛かつ藤とう、恋こい……といった人間くさい日常もふんだんに描かれます。さらに言えば、英えい雄ゆうが美しい姫ひめと魔術師を相手に世界の運命を変える、そんなストーリーがふさわしい異世界を舞台にしながら、そのノリは学園祭です。

　いわば『指輪物語』の重厚な世界で始まるアマチュア・ロックバンドの物語。このズレた感じは、学園小説大賞受賞作以来、十文字氏の独特な持ち味となっています。

　そんな不思議な日常に翻ほん弄ろうされて、マリアたちが感じる喜き怒ど哀あい楽らくに、賛同するも良し、反発するも良し、どうぞ壮大な架空世界の奇き妙みような生活をお楽しみください。

　ちなみに、「ザ・スニーカー」では、本作のプレストーリーを連れん載さい中です（２００４年12月現在）。過去のトラウマから仲間を信じられなくなったマリアが、「仲間っていいかも」と思えるようになるまでの物語です。併あわせて読んでいただければ、より『薔薇のマリア』の世界を身近に感じていただけると思います。ぜひ、そちらも。

　マリアと、そしてＺＯＯの仲間たちの物語は始まったばかりです。

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔薇ばらのマリア

Ｉ．夢ゆめ追おい女じよ王おうは永遠とわに眠ねむれ

十じゆう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア　Ｉ．夢追い女王は永遠に眠れ』
平成16年12月1日初版発行

平成21年3月1日15版発行

BOOK☆WALKER